五所川原市埋蔵文化財調査報告書　第34集

五月女萢遺跡
そ　と　め　やち

（第２分冊　本文編２）

２０１７年３月

五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財調査報告書　第 34 集

五月女萢遺跡（そとめやち）

（第２分冊　本文編 2）

2017 年 3 月

五所川原市教育委員会

本文目次

（第２分冊　本文編２）

第３章　調査の成果

第３節　遺物集中区と出土遺物・・1

1. 第１遺物集中区・・17

2. 第２遺物集中区・・84

3. 第３遺物集中区・・・125

4. 第４遺物集中区・・・140

5. 第５遺物集中区・・・172

6. 第６遺物集中区・・・180

第４節　遺構外出土遺物

1. 土器・・・217

2. 石器・・・245

3. 土製品・・287

4. 土偶・・・303

5. 石製品・・312

6. 土製玉類・・326

7. 石製玉類・・332

8. その他・・346

9. 五月女萢遺跡のアスファルトの分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・356

第５節　弥生・古代・中世の検出遺構と出土遺物

1. 竪穴住居跡・・・358

2. 柱穴跡・・361

3. 畝状遺構（畠跡）・・364

4. 遺構外の出土遺物と分布・・366

第４章　考　察

第１節　土坑墓の分布と変遷について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・373

第２節　五月女萢遺跡出土縄文土器の編年と組成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・380

第３節　土偶と土面の分析について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・420

第４節　動物遺存体と骨角器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・427

第５章　自然科学の分析

第１節　五月女萢遺跡出土の縄文晩期土器の胎土分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・463

第２節　漆器の保存処理と自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・470

第３節　五月女萢遺跡の花粉分析とプラント・オパール分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・476

第４節　青森県五所川原市 五月女萢遺跡出土縄文時代人骨の人類学的研究・・・・・・・・・・・・・483

第５節　五月女萢遺跡出土人骨の炭素・窒素同位体分析と放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・498

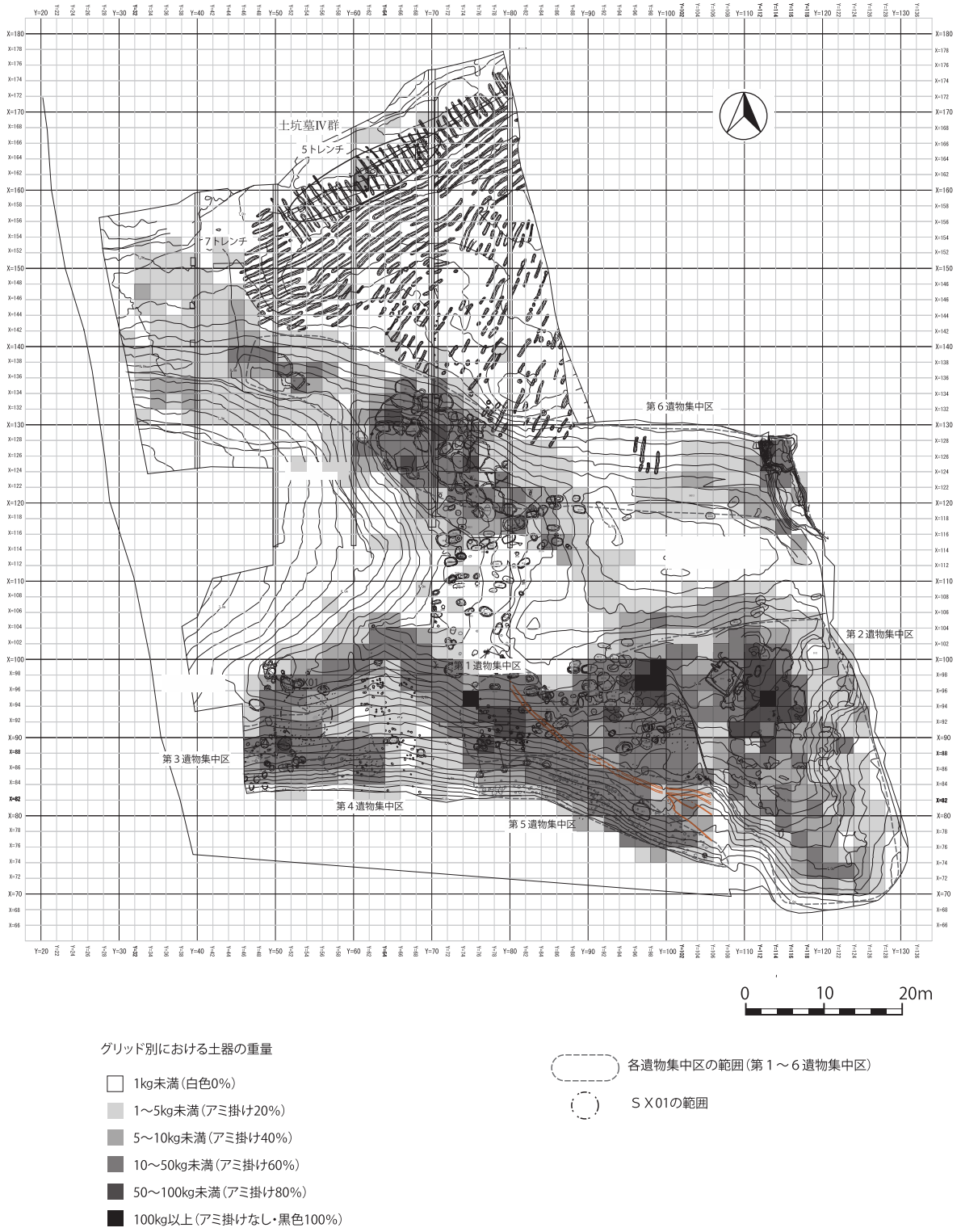
第 6 節　土器内面付着物の材質分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・505
第 7 節　五月女萢遺跡出土黒曜石製石器の産地推定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・509
第 8 節　五月女萢遺跡から出土した炭化種実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・512
第 9 節　五月女萢遺跡出土炭化材の樹種同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・517
第 10 節　五月女萢遺跡出土の火山灰について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・525
第 11 節　放射性炭素年代測定の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・530
第 12 節　砂丘砂構成層の植物珪酸体分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・533
第 6 章　総　括・・537
報告書抄録

第３節　遺物集中区と出土遺物

はじめに

五月女萢遺跡では地点毎に黒色土層を伴う遺物の廃棄単位が確認され、これを遺物集中区と呼ぶことにした。全体で６箇所、９地点の集中区が確認され、それぞれ、第1･2･3･4･5･6遺物集中区とし、広範囲に及ぶものに関しては、第２東・第２西といった具合に東西で区分した（図Ⅲ-3-1）。その集中区の中で、土器の出土量を調べた結果図Ⅲ-3-2のとおりとなった。そこで遺構等によるカクラン

図Ⅲ-3-1　各遺物集中区の名称及び分析グリッドの位置



図Ⅲ-3-2　土器のグリッド別重量分布状況

をあまり受けておらず、かつ遺物の出土量が多いグリッドを抽出し、全ての遺物の口縁部破片をカウントし、その中から、完形品、時期が明確な個体及び異系統の個体を抽出して図化した。

また、土器の属性を取る際は、弘前大学で発掘調査が実施され、報告書が刊行されている不備無遺跡（関根 2012）及び後期に関しては中山遺跡（上條 2015）の属性によった。以下各群ごとに遺物

の分類方法を述べる。

分類基準として、器種は以下のとおり分類した。

深鉢　口径に対する器高の比率が 1 以上のもの。

鉢　　口径に対する器高の比率が 0.5 以上 1 未満のもの。

浅鉢　口径に対する器高の比率が 0.3 以上 0.5 未満のもの。

皿　　口径に対する器高の比率が 0.3 未満のもの。

壺　　体部が球胴状を呈し、細い頸部を有するもの。

注口土器　注口部を有するもの。

香炉形土器　頂部を有し、透かしあるいは解放部を持ち、現在の香炉に器形が類似するもの。

（1）2a 群土器の分類基準

2a 群はその出土量が多くはなく、個々にその特徴を留めることとした。

（2）2b・2c 群土器の分類基準

1）2b・2c 群土器の器形分類

鉢・浅鉢の器形

Ａ．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

Ｂ．口縁部が内湾するもの。

壺および注口

Ａ．口縁部が外反するもの。

１．体部が球状のもの。

２．体部が球状ではないもの。

2）口縁部形態、部位ごとの施文方法・文様、底部・台部形態の分類

【2b・2c 群土器　口縁部形態】

Ⅰ．平縁のもの。

Ⅱ．波状口縁のもの。

Ⅲ．突起が施されるもの。

ｂ．山形突起

②ゆるやかな三角形を成すもの。

ⅰ．単独で配置されるもの。ⅱ．連続して配置されるもの。

③頂部が凹むもの。

【2b・2c 群土器　口唇部施文】

Ⅰ．沈線が施されるもの。

ａ．口唇直上に直線を巡らすもの。

【2b・2c 群土器　口縁上部施文】

Ⅰ．沈線が施されるもの。

ｄ．間に貼瘤を有するもの。

Ⅱ．刻目もしくは列点文が施されるもの。

ａ．沈線間を沈線で連続的に区画するもの。いわゆる刻目文。

ｂ．沈線間を連続的に刺突するもの。いわゆる列点文。

Ⅳ．貼瘤が施されるもの。

【2b・2c 群土器　口頸部施文】

Ⅰ．沈線が施されるもの

ｄ．間に貼瘤を有するもの。

【2b・2c 群土器　体部文様】

Ⅰ．沈線が施されるもの。

ｄ．間に貼瘤を有するもの。

ⅩⅢ．入組帯縄文

(3) 3・4・5 群土器の分類基準

1）3・4・5 群土器の器形分類

深鉢の器形

A. 口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

B. 口縁部が内湾するもの。

C. 肩部が張り出し、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

D. ゆるやかに立ち上がった後、口縁部が外側に屈曲するもの。

E. 肩部が張り出し、口縁部が短く直立するもの。

鉢の器形

A. 口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

B. 口縁部が内湾するもの。

C. ゆるやかに立ち上がった後、口縁部が外側に屈曲するもの。

D. 肩部が屈折し、口縁部が短く直立気味に立ち上がるもの。

E. 体部が直線的で、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

F1. 口縁部が外側に直線的に開くもののうち、体部に屈曲がないもの。

F2. 口縁部が外側に直線的に開くもののうち、体部に屈曲があるもの。

G1. 口縁部が外反し、体部が潰れて浅鉢に近い器形になるもの。

G2. 口縁部が外反し、体部が膨らむもの。

浅鉢の器形

A. 口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

B. 口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずに直線的に立ち上がるもの。

C. 口縁部が内湾し、体部が丸みを帯びるもの。

D. 口縁部が短く外側に屈曲し、体部が丸みを帯びるもの。

皿の器形

A1. 口縁部から底部までゆるやかに立ち上がるもののうち、非常に浅いもの。

A2. 口縁部から底部までゆるやかに立ち上がるもののうち、やや深みのあるもの。

B. 口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずに直線的に立ち上がるもの。

壺の器形

全体のプロポーションによりＡ類～Ｆ類に大別したのち、Ａ・Ｂ・Ｄ類については口頸部の形状により１～３に細別した。

A. なで肩のもの。　B. 肩部が張り出すもの。　C. 小型のもの。

D. 徳利形のもの。E. 口頸部が長く外反し、潰れた体部を有するもの。

１．口縁部が受け皿状を呈するもの。　２．口頸部が外傾、あるいは外反しているもの。

３．口頸部が直立気味のもの。

E1. 口縁部が受け皿状を呈するもの。

E2. 口頸部が外傾、あるいは外反しているもの。

F. 無頸のもの。

注口土器の器形

口縁部の傘部の有無、体部上半と下半の比率で分類した。その中で頸部の位置により細分した。

A. 傘のつくタイプ。

B. 傘のつかないタイプ。

1. 体部上半と下半の比率が 1:3 以上のもの。

2. 体部上半と下半の比率が 1:3 未満のもの。

a. ２のうち、肩部が頸部より張り出すもの。b. ２のうち、肩部が頸部より張り出さないもの。

2）口縁部形態、部位ごとの施文方法・文様・底部・台部形態の分類

【3・4・5 群土器　口縁部形態】

Ⅰ. 平坦口縁のもの。

Ⅱ. 波状口縁のもの。

Ⅲ. 突起が施されるもの。

ａ. B 突起

①中間に刻みが入るもの。

ⅰ. 単独で配置されるもの。

ⅱ. 連続して配置されるもの。

②中間をならしているもの。

ⅰ. 単独で配置されるもの。

ⅱ. 連続して配置されるもの。

③突起の付け根や突起の間に三叉状の彫去が施され、それらで突起を区画するもの。

ⅰ. 単独で配置されるもの。

ⅱ. 連続して配置されるもの。

⑤楕円状の粘土粒のみが施され、沈線で突起を区画しないもの。

ｂ. 山形突起

②ゆるやかな三角形を成すもの。

ⅰ. 単独で配置されるもの。

ⅱ. 連続して配置されるもの。

③頂部が凹むもの。

ⅰ. 単独で配置されるもの。

ⅱ. 連続して配置されるもの。

④. 頂部に刻みが入るもの。

d．装飾的な突起

⑥．丸い粘土粒が連なるもの。

e．三つ山状の突起

【3・4・5群土器　口唇部施文・整形】

Ⅰ．沈線が施されるもの。

a．口唇直上に直線をめぐらすもの。b．口唇直上に一定間隔で区切れた直線がめぐるもの。

Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。

a．口唇直上に施されるもの。

①口唇を上から見て、縦に施されるもの。

②口唇を上から見て、右斜に施されるもの。

③口唇を上から見て、左斜に施されるもの。

Ⅲ．列点文が施されるもの。

a．口唇直上に施されるもの。b．口唇直下の外面に施されるもの。

Ⅳ。装飾的なもの。

c．口唇直上に直線がめぐり、その隣に列点文が施されるもの。

施文無し

無丸．断面形が丸みを帯びているもの。　　無角．断面形が角ばるもの。

【3・4・5群土器　口縁上部施文】

Ⅰ．沈線が施されるもの。

a．突起に沿うもの。

Ⅱ．刻目もしくは列点文が施されるもの。

Ⅲ．弧線が施されるもの。

a．突起の下を縁取るもの。

①１単位を縁取るもの。

i．一重のもの。ii．二重のもの。

②複数単位を縁取る弧線が連続するもの。

③弧線の間に円文が施されるもの。

④弧線の間に山形文が施されるもの。

⑤弧線の間に三角文が施され、菱形状を呈するもの。

b．突起の下を縁取る弧線の下にさらに弧線が施されるもの。

①ノの字状文が連続するもの。

②複数単位を縁取る弧線が連続するもの。

c．突起にたすき状にかかるもの。

①たすき状の弧線の下にノの字状文が連続するもの。

②たすき状の弧線の下にさらに弧線が連続するもの。

d．二重の弧線が連続するもの。

①単純に二重の弧線が連続するもの。

②複数単位を縁取る二重の弧線が連続するもの。

②’二重の弧線のうち、上の弧線がふたつのＢ突起の中間にかかるもの。

③②に加え、弧線の間に円文が施されるもの。

ｅ．ひとつの突起に複数の弧線が集中し、Ⅲｂの崩れた様相を見せるもの。

ｆ．ノの字状文が連続するもの。

①単位がなく、単純に連続するもの。

①’．①のうち、先端に小さいノの字が施されるもの。

②突起と連動し、単位がとらえられるもの。

②’．②のうち、先端に小さいノの字が施されるもの。

③向かい合って連続するもの。

④列点文を有するもの。

ｇ．Ｓ字状文が連続するもの。

①１単位が短いもの。②１単位が長いもの。

ｈ．入組むように向かい合った弧線が連続するもの。

Ｊ．無文帯を成すもの。

a．段を形成し、口縁直下を無文帯にしているもの。b．口縁直下を縄文帯にしているもの。

【3・4・5群土器　口縁部内面沈線】

口縁部内面の沈線が複数めぐるものに関しては、ローマ数字の後に算用数字でその数を表記することとする。

Ⅰ．沈線が明確に施されているもの。

Ⅱ．沈線の上端が曖昧に処理され、段差状になっているもの。

Ⅲ．沈線の下端が盛り上がるもの。

【3・4・5群土器　口頸部文様】

Ⅰ．横沈線が施されるもの。

a．沈線のみが施されるもの。b．沈線間あるいは沈線直下にＢ突起が配置されるもの。

Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。または、列点文が施されるもの。

a．沈線間を沈線で連続的に区画するもの。いわゆる刻目文。

b．沈線間を連続的に刺突するもの。いわゆる列点文。ｃ．横長の列点文のもの。

Ⅲ．三叉文が施されるもの。

a．魚眼状三叉文のもの。b．入組三叉文のもの。ｃ．山形三叉文が横に連続するもの。

Ⅳ．枝分かれする入組三叉文が施されるもの。

Ⅴ．羊歯状文が施されるもの。

a．ノーマルな羊歯状文。b．簡略化された羊歯状文。

Ⅵ．菱形を形成する入組文が施されるもの。

a．入り組む部分が渦巻状を呈するもの。b．入り組み部が連結し、円形を呈するもの。

ｃ．入り組む部分がＪ字状を呈するもの。

Ⅶ．Ｊ字文、渦巻文、Ｃ字文（小林 2005）（Ｘ字状文）

Ⅷ．横Ｓ字文が施されるもの。

Ⅸ．雲形文が施されるもの。

Ⅺ．半円文が施されるもの。
Ⅻ．菱形文と弧線文が組み合わされたもの。
ⅩⅢ．入組帯縄文が施されるもの。
【3・4・5 群土器　体部文様】
Ⅰ．横沈線が施されるもの。
ａ．沈線のみが施されるもの。ｂ．沈線間に B 突起が配置されるもの。
Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。または、列点文が施されるもの。
ａ．沈線間を沈線で連続的に区画するもの。いわゆる刻目文。ｂ．沈線間を連続的に刺突するもの。いわゆる列点文。ｃ．横長の列点文のもの。
Ⅲ．三叉文が施されるもの。
ａ．魚眼状三叉文のもの。ｂ．入組三叉文のもの。ｃ．山形三叉文が横に連続するもの。
Ⅳ．枝分かれする入組三叉文が施されるもの。
Ⅴ．羊歯状文が施されるもの。
ａ．ノーマルな羊歯状文。ｂ．簡略化された羊歯状文。
Ⅵ．菱形を形成する入組文が施されるもの。
ａ．入り組む部分が渦巻状を呈するもの。ｂ．入り組み部が連結し、円形を呈するもの。
ｃ．入り組む部分が J 字状を呈するもの。
Ⅶ．J 字文、渦巻文、C 字文（小林 2005）（X 字状文）
Ⅷ．横 S 字文が施されるもの。
Ⅸ．雲形文が施されるもの。
Ⅺ．半円文が施されるもの。
Ⅻ．菱形文と弧線文が組み合わされたもの。
ⅩⅢ．入組帯縄文が施されるもの。
【3・4・5 群土器　底部形態】
Ⅰ．平底のもの。
ａ．内部の中心が盛り上がらないもの。ｂ．内部の中心が盛り上がるもの。
Ⅱ．上げ底のもの。
Ⅲ．丸底のもの。
【3・4・5 群土器　底部直上の文様】
Ⅰ．横沈線が施されるもの。
Ⅳ．羊歯状文が施されるもの。
【3・4・5 群土器　台部形態】
Ⅰ．末広がりのもの。
ａ．高いもの（底径÷台高が 3.2 以下目安）。
ｂ．低いもの（底径÷台高が 4.5 以下目安）。
Ⅱ．上部が膨らむもの。
【3・4・5 群土器　台部文様】
Ⅰ．横沈線が施されるもの。

a．1本の沈線、または、2本の平行沈線のもの。b．3本以上の平行沈線のもの。

c．沈線間にB突起が施されるもの。

Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。または、列点文が施されるもの。

a．沈線間を沈線で連続的に区画するもの。いわゆる刻目文。

b．沈線間を連続的に刺突するもの。いわゆる列点文。

Ⅲ．ノの字状文が連続して施されるもの。

Ⅳ．透かしのあるもの。

Ⅴ．三叉文または入組文が施されるもの。

J．下端のみ縄文を施しているもの。

(4) 6・7群土器の分類基準

1）6・7群土器の器形分類

深鉢の器形

A．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

B．口縁部が内湾するもの。

C．肩部が張り出し、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

D．ゆるやかに立ち上がった後、口縁部が外側に屈曲するもの。

E．肩部が張り出し、口縁部がかるく外反するもの。

F．肩部が屈折し、口縁部が外側に屈曲するもの。

鉢の器形

A．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

B．口縁部が内湾するもの。

C．ゆるやかに立ち上がった後、口縁部が外側に屈曲するもの。

D．肩部がくの字状に屈折するもの。口頸部の違いによって4つに細分した。

D 1．口頸部が短く外反。　D 2．口頸部が短く直立気味。

D 3．口頸部が長く外反。　D 4．3のうち、口頸部上部が直立するもの。

E．肩部がS字状に曲がるもの。口頸部の違いによって3つに細分した。

E 1．口頸部が短く外反。　E 2．口頸部が短く直立気味。

E 3．口頸部が長く外反。

F．体部が直線的で口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

G．体部が内湾し、口縁部が外反するもの。

浅鉢の器形

A 1．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

A 2．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもののうち、浅めのもの。

B．肩部が張り出し、口頸部が短く直立するもの。

皿の器形

A 1．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

A 2．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもののうち、浅めのもの。

B 1．体部が直線的なもの。

Ｂ２．体部が直線的なもののうち、浅めのもの。

Ｃ．体部が屈曲して段状になり、口縁部が直線的に開くもの。

壺の器形

全体のプロポーションによりＡ類～Ｄ類に大別したのち、Ａ・Ｂ・Ｄ類については口頸部の形状により１～３類に細分した。

Ａ．なで肩のもの。　Ｂ．肩部が張り出すもの。　Ｃ．小型のもの。　Ｄ．徳利形のもの。

１．口縁部が受け皿状を呈するもの。　２．口頸部が外傾、あるいは外反しているもの。

３．口頸部が直立気味のもの。

注口土器の器形

体部上半と下半の比率がほぼ１：１であり、肩部が頸部より張り出すため、口縁部形態で分類した。

Ａ．口縁部が内湾するもの。

Ｂ１．外側に屈曲するもの。

Ｂ２．１のうち上部が直立するもの。

2）口縁部形態、部位ごとの施文方法・文様・底部・台部形態の分類

【6・7群土器　口縁部形態】

Ⅰ．平縁のもの。

Ⅱ．波状口縁のもの。

Ⅲ．突起が施されるもの。

ａ．Ｂ突起

①中間に刻みが入るもの。

ⅰ．単独で配置されるもの。ⅱ．連続して配置されるもの。

②中間をならしているもの。

ⅰ．単独で配置されるもの。ⅱ．連続して配置されるもの。

③突起の付け根や突起の間に三叉状の彫去が施され、それらで突起を区画するもの。

ⅰ．単独で配置されるもの。ⅱ．連続して配置されるもの。

④．③の内突起が口唇の外側へ張り出すもの。

ｂ．山形突起

②ゆるやかな三角形を成すもの。

ⅰ．単独で配置されるもの。ⅱ．連続して配置されるもの。

③頂部が凹むもの。

ⅰ．単独で配置されるもの。ⅱ．連続して配置されるもの。

④．頂部に刻みが入るもの。

ⅰ．単独で配置されるもの。ⅱ．連続して配置されるもの。

ｃ．突き出るような突起

②頂部が口唇の内側に張り出し、二股になるもの。

ｄ．装飾的な突起

③Ｂ突起とそれに付する突起が口唇の内外にひとつずつ張り出し、連続して配置されるもの。

④．ふたつの突起が並び、ひとつの突起になっているもの。

⑤．半円状の透かしが入り、アーチ状になるもの。

Ⅳ．平縁を整形して区画するもの。

【6・7群土器　口唇部施文・整形】

Ⅰ．沈線が施されるもの。

ａ．口唇直上に直線をめぐらすもの。

Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。

ａ．口唇直上に施されるもの。

①口唇を上から見て、縦に施されるもの。

②口唇を上から見て、右斜に施されるもの。

③口唇を上から見て、左斜に施されるもの。

④口唇を上から見て、右斜と左斜の刻目が交互に施されるもの。

ｂ．口唇直下の外面に施されるもの。

②口唇を正面から見て、右斜に施されるもの。

Ⅲ．列点文が施されるもの。

ａ．口唇直上に施されるもの。

ｂ．口唇直下の外面に施されるもの。

Ⅳ．装飾的なもの。

ａ．突起を区画する沈線が施されるもの。

ｂ．突起を区画する沈線に加え、口唇直上に刻目が施されるもの。

ｃ．口唇直上に直線がめぐり、その隣に列点文が施されるもの。

施文無し

無丸．断面形が丸みを帯びているもの。　　無角．断面形が角ばるもの。

【6・7群土器　口縁上部施文】

Ⅰ．沈線が施されるもの。

ａ．突起に沿うもの。

ｂ．突起でハの字状に切れるもの。

ｃ．沈線間にＢ突起が配置されるもの。

Ⅲ．弧線が施されるもの。

ａ．突起の下を縁取るもの。

①１単位を縁取るもの。

②複数単位を縁取る弧線が連続するもの。

③弧線の間に円文が施されるもの。

④．弧線の間に山形文が施されるもの。

ｂ．突起の下を縁取る弧線の下にさらに弧線が施されるもの。

②複数単位を縁取る弧線が連続するもの。

ｃ．突起にたすき状にかかるもの。

②たすき状の弧線の下にさらに弧線が連続するもの。

ｆ．ノの字状文が連続するもの。

①単位がなく、単純に連続するもの。

②突起と連動し、単位がとらえられるもの。

Ｊ．無文帯を成すもの。

ａ．段を形成し、口縁直下を無文帯にしているもの。ｂ．口縁直下を縄文帯にしているもの。

ｃ．口唇直上に直線がめぐり、その隣に列点文が施されるもの。

【6・7群土器　口縁部内面沈線】

6・7群の口縁部内面沈線の分類基準と表記方法は、先述した4・5群と同様であるため、そちらの項を参照されたい。

【6・7群土器　口頸部文様】

3・4・5群と同様であるので、そちらを参照されたい。

【6・7群土器　体部文様】

Ⅰ．横沈線が施されるもの。

ａ．沈線のみが施されるもの。ｂ．沈線間にＢ突起が配置されるもの。ｃ．沈線間（下）に大型突起が配置されるもの。

Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。または、列点文が施されるもの。

ａ．沈線間を沈線で連続的に区画するもの。いわゆる刻目文。ｂ．沈線間を連続的に刺突するもの。いわゆる列点文。ｃ．横長の列点文のもの。

Ⅷ．横Ｓ字文が施されるもの

ａ．横Ｓ字文のみのもの。

Ⅸ．雲形文が施されるもの。

文様の構成を理解するために、区画文・配置文という考え方（藤沼 1983・1989）を用いた。

①２本の弧線の一端をかみ合わせ、点対称的な構図を基本とし、端部に鰭部を有するもののうち、弧線の軸部両端がさらに小さく内湾するもの。区画文Ａ３（藤沼 1989）に相当するもの。

②区画文Ａの中心部が離れ、弧線が接続する。区画文Ｃ（藤沼 1989）に相当するもの。

③Ｃ字文の一端が文様帯の上端あるいは下端の線に接する。配置文Ｂ（藤沼 1989）に相当するもの。

④Ｃ字文を基調とし、それが文様帯のなかに完全に入り込んだものである。配置文Ｃ（藤沼 1989）に相当するもの。

⑤上向きと下向きの２個のＣ字文が横に接合して１個の文様となったもの。小型のノの字文などが付加されている。配置文Ｄ（藤沼 1989）に相当するもの。

⑥配置文Ａ（藤沼 1989）に相当するもの。

Ⅺ．半円文が施されるもの。

ａ．上下端に同方向の半円文が連続するもの。

ＸⅣ．連繋入組文が施されるもの。

【6・7群土器　底部形態】

底部のうち、脚の付くものに関してはⅠ群と同様に、各分類に割り当てられた記号の後に「'」を表記する。また、比較的長い脚をもつ場合は「長」、短い脚をもつ場合は「短」を「'」の後に表記することとする。

Ⅰ．平底のもの。

ａ．内部の中心が盛り上がらないもの。ｂ．内部の中心が盛り上がるもの。

Ⅱ．上げ底のもの。

Ⅲ．丸底のもの。

【6・7群土器　底部直上の文様】

Ⅰ．横沈線が施されるもの。

Ⅱ．刻目とノの字状文が連続して施されるもの。

Ⅵ．帯状に磨消が施されるもの。

Ⅶ．底面に雲形文が施されるもの。

【6・7群土器　台部形態・文様】

6・7群の台部形態・文様については3・4・5群のそれと同様であるので、そちらを参照されたい。

(5) 8群土器の分類基準

1）8群土器の器形分類

深鉢の器形

Ａ．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

Ｂ．口縁部が内湾するもの。

Ｃ．肩部が張り出し、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

Ｄ．ゆるやかに立ち上がった後、口縁部が外側に屈曲するもの。

Ｅ．肩部が張り出し、口縁部がかるく外反するもの。

鉢の器形

Ａ．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

Ｂ．ゆるやかに立ち上がった後、口縁部が外反するもの。

Ｃ．肩部に屈曲点を有し、口縁部がかるく外反するもの。

Ｄ．肩部上半が内湾し、口縁部が外側に屈曲するもの。

Ｅ．肩部上半が内湾し、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

Ｆ．口縁部が内湾するもの。

浅鉢の器形

Ａ．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

Ｂ．口縁部が内湾気味に立ち上がるもの。

Ｃ．屈曲点を有し、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

壺の器形

全体のプロポーションによりＡ類～Ｃ類に大別したのち、口頸部の形状 により１～３類に細分した。

Ａ．なで肩のもの。　Ｂ．肩部が張り出すもの。　Ｃ．小型のもの。

１．口縁部が受け皿状を呈するもの。２．口頸部が外傾、あるいは外反しているもの。

３．口頸部が直立しているもの。

2）口縁部形態、部位ごとの施文方法・文様、底部・台部形態の分類

【Ⅰ群土器　口縁部形態】

Ⅰ．平縁のもの。
Ⅱ．波状口縁のもの。
Ⅲ．突起が施されるもの。
ａ．Ｂ突起状
①中間に刻みが入るもの。②中間をならしているもの。
ｂ．山形突起
①頂部が尖るもの。②ゆるやかな三角形を成すもの。③頂部が凹むもの。
④頂部に刻みが入るもの。⑤複数の刻みが入るもの。⑥頂部がカルデラ状に凹むもの。
⑦台形状になるもの。

【8 群土器　口唇部施文・整形】
Ⅰ．沈線が施されるもの。
ａ．口唇直上に直線をめぐらすもの。
Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。
ａ．口唇直上に施されるもの。
①口唇を上から見て、縦に施されるもの。
②口唇を上から見て、右斜に施されるもの。
③口唇を上から見て、左斜に施されるもの。
ｂ．口唇直下に施されるもの。
①口唇を正面から見て、縦に施されるもの。②口唇を正面から見て、右斜に施されるもの。
Ⅲ．列点文が施されるもの。
ｂ．口唇部直下の外面に施されるもの。
施文無し
無丸．断面形が丸味を帯びるもの。　　無角．断面形が角ばるもの。

【8 群土器　口縁上部施文】
口唇部直下に口縁に沿って施される文様である。
Ⅰ．沈線が施されるもの。
ａ．突起に沿うもの　ｃ．沈線間に突起が配置されるもの。
Ⅱ．突起下に山形三叉状の彫去が施されているもの。
Ｊ．無文帯を成すもの。
ａ．段を形成し、口縁直下を無文帯にしているもの。ｂ．口縁直下を無文帯にしているもの。

【8 群土器　口縁部内面沈線】
８群の口縁部内面沈線の分類基準と表記方法は、先述した４・５群と同様であるため、そちらの項を参照されたい。

【8 群土器　口頸部文様】
Ⅰ．横沈線が施されるもの。
ａ．１本の沈線、または、２本の平行沈線のもの。ｂ．３本以上の平行沈線のもの
Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。または、列点文が施されるもの。
ａ．沈線間を沈線で連続的に区画するもの。いわゆる刻目文。ｂ．沈線間を連続的に刺突するも

の。いわゆる列点文。

Ⅲ．平行沈線内に結節があるもの。

ａ．ふたつで１単位の結節が単独で施されるもの。

①沈線で区切るもの。②粘土粒で区切るもの。

ａ'．２段の結節が上下交互に連続するもの。ｂ．結節が横一列に連続するもの。ｃ．眼鏡状隆帯のもの。

Ⅴ．流水状工字文が施されるもの。

ａ．ネガ文様で流水状になっているもの。ａ'．ポジ文様で流水状になっているもの。

ｂ．凸字状になっているもの。

Ⅷ．矢羽状文が施されるもの。

ａ．典型的なもの。

【8 群土器　体部文様】

8 群の体部文様の分類基準と表記方法は先述した 8 群の口頸部文様と同様であるため、そちらの項を参照されたい。

【8 群土器　底部形態】

底部のうち、脚の付くものに関しては、各分類に割り当てられた記号の後に「'」を表記する。また、比較的長い脚をもつ場合は「長」、短い脚をもつ場合は「短」を「'」の後に表記することとする。

Ⅰ．平底のもの。

ａ．内部の中心が盛り上がらないもの。ｂ．内部の中心が盛り上がるもの。

Ⅱ．上げ底のもの

【8 群土器　底部直上の文様】

Ⅰ．平行沈線が施されるもの。

Ⅲ．結節があるもの。

【8 群土器　台部形態】

台部のうち、接地面が波状をなすものに関しては、各分類に割り当てられた記号の後に「'」を表記することとする。

Ⅰ．末広がりのもの。

ａ．高いもの（底径÷台高の値が 3.4 以下目安）ｂ．低いもの（底径÷台高の値が 3.9 以下目安）

【8 群土器　台部文様】

Ⅰ．横沈線が施されるもの。

ａ．１本の沈線、または、２本の沈線が施されるもの。ｂ．３本以上の平行沈線のもの。

Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。または、列点文が施されるもの。

ａ．沈線間を沈線で連続的に区画するもの。いわゆる刻目文。ｂ．沈線間を連続的に刺突するもの。いわゆる列点文。

Ⅲ．結節があるもの。

Ⅳ．流水状工字文が施されるもの。

Ⅴ．透かしのあるもの。

Ｊ．下端に縄文を残しているもの。

(6) ９ａ・９ｂ群土器の分類基準

1) ９ａ・９ｂ群土器の器形分類

深鉢・鉢・浅鉢の器形

Ａ．口縁部から底部まで顕著な屈曲をもたずにゆるやかに立ち上がるもの。

Ｂ．口縁部が内湾するもの。

Ｃ．体部が直線的なもの。

壺の器形

Ａ．なで肩のもの。

【9a・9b 群土器　口縁部形態】

Ⅰ．平縁のもの。

Ⅱ．波状口縁のもの。

Ⅲ．突起が施されるもの。

ｂ．山形突起

②ゆるやかな三角形を成すもの。

ｉ．単独で配置されるもの。ii．連続して配置されるもの。

③頂部が凹むもの。

【9a・9b 群土器　口唇部施文・整形】

Ⅱ．刻目が連続して施されるもの。

ａ②口唇直上に施されるもの。

【9a・9b 群土器　口縁部施文】

Ⅰ．沈線が施されるもの。

ａ．突起に沿うもの。ｅ．格子状を呈するもの。

Ⅲ．弧線が施されるもの。

ｄ．二重の弧線が連続するもの。

①．単純に二重の弧線が連続するもの。④．弧線の間に刻目が充填されるもの。

ｆ．ノの字状文が連続するもの。

①単位が無く、単純に連続するもの。

ｇ．不規則な弧線が連続するもの。

ｈ．半円状の弧線が向き合って連続するもの。

Ⅳ．突瘤が施されるもの。

Ⅴ．刻目もしくは列点文が施されるもの。

ｂ．沈線間を連続的に刺突するもの。いわゆる列点文。ｄ．単純に連続するもの。

ｅ．ｄのうち、多段状になるもの。

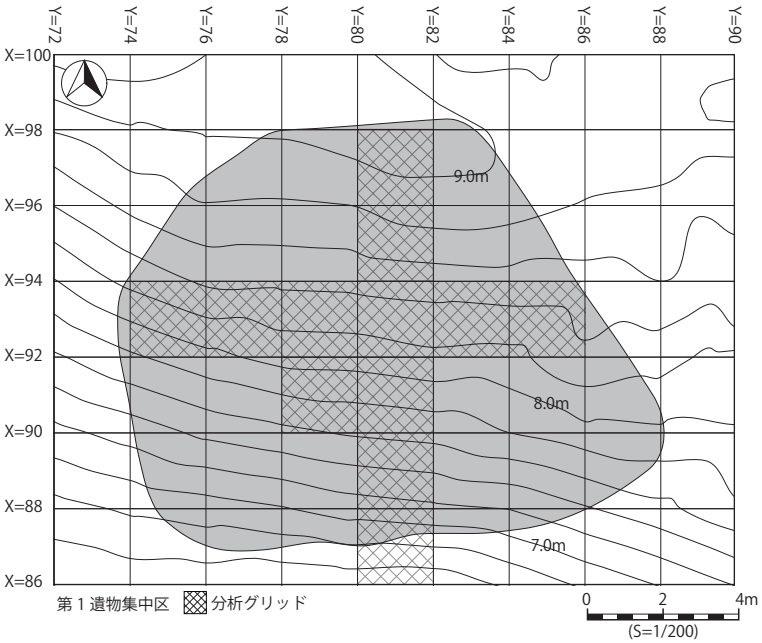
ｆ．爪形状の刺突が連続するもの。ｆ①．多段状になるもの。

【9a・9b 群土器　底部形態・文様、台部形態・文様】

９ａ・９ｂ群の底部形態・文様、台部形態・文様の分類基準と表記方法は、先述した３・４・５群と同様であるため、そちらの項を参照されたい。

1. 第 1 遺物集中区

【位置・確認】遺跡の南（グリッド X=90 ～ 98, Y =76 ～ 88）標高約 7 ～ 9 mに位置する（図Ⅲ-3-1-1）。その内 X=94, Y =76 ～ 86、X=88 ～ 98, Y =82、X=80, Y =100 の計 12 グリッドを分析グリッドとして設定した。検出面はⅡ a 層である。【規模・形状】南北 8 m、東西 12 mの台形状を呈し、層厚は最大で 75cm を測る。区内では、土坑や南東へのびる道路状遺構が確認された。【出土遺物】土器、土製品、石器・石製品が出土した。土器では、第 2a 群～第 9b 群土器が出土し、口縁部カウント数は 2,755 点である。土製品では、土偶、耳飾、土錘、土製管玉、土製垂飾、土製勾玉、土製丸玉、棒状土製品、ボタン状土製品、イモガイ形土製品、円錐状土製品、環状土製品、球状土製品、ミニチュア土器などが出土している。石器・石製品では、尖頭器・石鏃 (異形含む)・石錐・石箆・石匙・スクレイパー・異形石器・微細剥離のある剥片、磨製石斧、磨石・敲石類（凹 + 敲 + 磨・敲石）、石皿・台石類（石皿・台石・砥石・玉砥石）、擦切具、石核、石剣、石棒、石冠、岩版、ボタン状石製品、有孔石製品、有孔石、勾玉、異形礫が出土している。【時期】下限を示す時期の土器は第 8 群土器である。



図Ⅲ-3-1-1　第 1 遺物集中区分析グリッド位置図

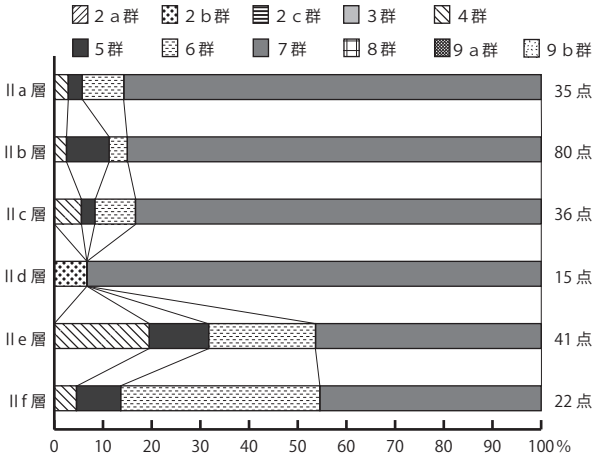
A. 土器

第 1 遺物集中区では、同一層位として取り上げたと考えられた遺物が、グリッド間で異なる様相を呈しているため、各グリッドで層位ごとの土器の特徴を記載する。また、各群の層位ごとの出土割合をグラフで示す。

(1) 分析グリッド

①グリッド X=90, Y =82（図Ⅲ -3-1-2・4）

・Ⅱ f 層　4 群の深鉢 1 点、5 群の鉢 2 点、6 群の深鉢 2 点、鉢 6 点、浅鉢・皿 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 3 点、7 群の深鉢 5 点、鉢 1 点（赤彩資料）、浅鉢・皿 1 点、壺 3 点、3 ～ 8 群の



図Ⅲ-3-1-2　第 1 遺物集中区　X=90, Y=82
各群の層位別出土割合グラフ

鉢１点の計 26 点出土した。その内図化したのは１点である。1 は７群の浅鉢であり、体部に雲形文が展開する。

・Ⅱｅ層　４群の深鉢３点、鉢５点、５群の鉢５点、６群の深鉢２点、鉢７点、３～６群の鉢１点、壺１点、７群の深鉢９点、鉢４点、浅鉢・皿１点、壺４点、３～８群の深鉢５点、鉢１点、浅鉢・皿３点の計 52 点出土した。その内図化したのは１点である。2 は３～８群の無文の鉢である。

・Ⅱｄ層　2b 群の注口土器１点、３～６群の深鉢５点、鉢１点、７群の深鉢５点、鉢８点、浅鉢・皿１点、３～８群の鉢１点の計 21 点出土した。その内図化したのは３点である。3 は７群の鉢であり、体部上半に大型の突起を有する。4 は７群の皿・浅鉢であり、体部には雲形文が展開する。5 は 2b 群の注口土器であり、貼瘤間に多重沈線が巡る。

・Ⅱｃ層　４群の鉢２点、５群の深鉢１点、６群の深鉢１点、鉢２点、浅鉢・皿１点、３～６群の深鉢６点、７群の深鉢 13 点、鉢 14 点、浅鉢・皿１点、壺２点、３～８群の鉢１点、壺１点、香炉形土器１点の計 46 点出土した。その内図化したのは３点である。6 は７群の鉢であり、口頸部に横位沈線が巡り体部には羽状縄文が施される。7 は６群の深鉢であり、口縁に横位沈線が巡る。8 は３～８群の香炉形土器であり、頂部のみ出土した。角状の突起を２つ有する。

・Ⅱｂ層　４群の深鉢１点、鉢１点、５群の鉢７点、６群の鉢３点、３～６群の深鉢７点、７群の深鉢 30 点、鉢 25 点、浅鉢・皿５点、壺７点、注口土器１点、３～８群の浅鉢・皿１点の計 88 点出土した。その内図化したのは１点である。10 は７群の壺であり、口縁部の突起間に横位沈線が巡る。

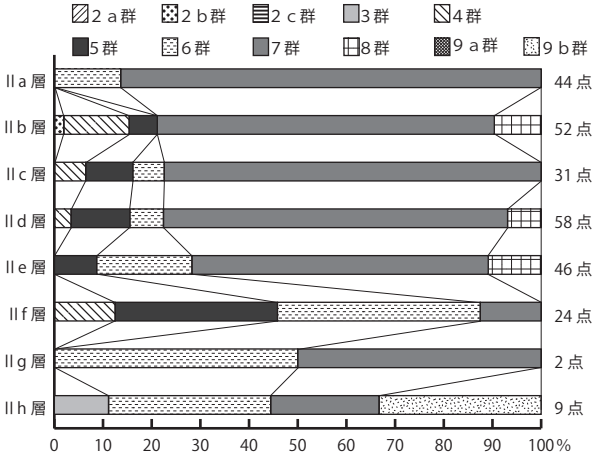
・Ⅱａ層　４群の注口土器１点、５群の鉢１点、６群の鉢１点、浅鉢・皿２点、３～６群の深鉢３点、７群の深鉢９点、鉢 19 点、浅鉢・皿２点、３～８群の壺２点の計 40 点出土した。

その他層位不明の深鉢を１点図化した。9 は３群の深鉢であり、口唇部に山形突起を有し、口縁上部に横Ｓ字文と横長の列点文が施される。

②グリッド X=92、Ｙ =80（図Ⅲ -3-3・５～９）

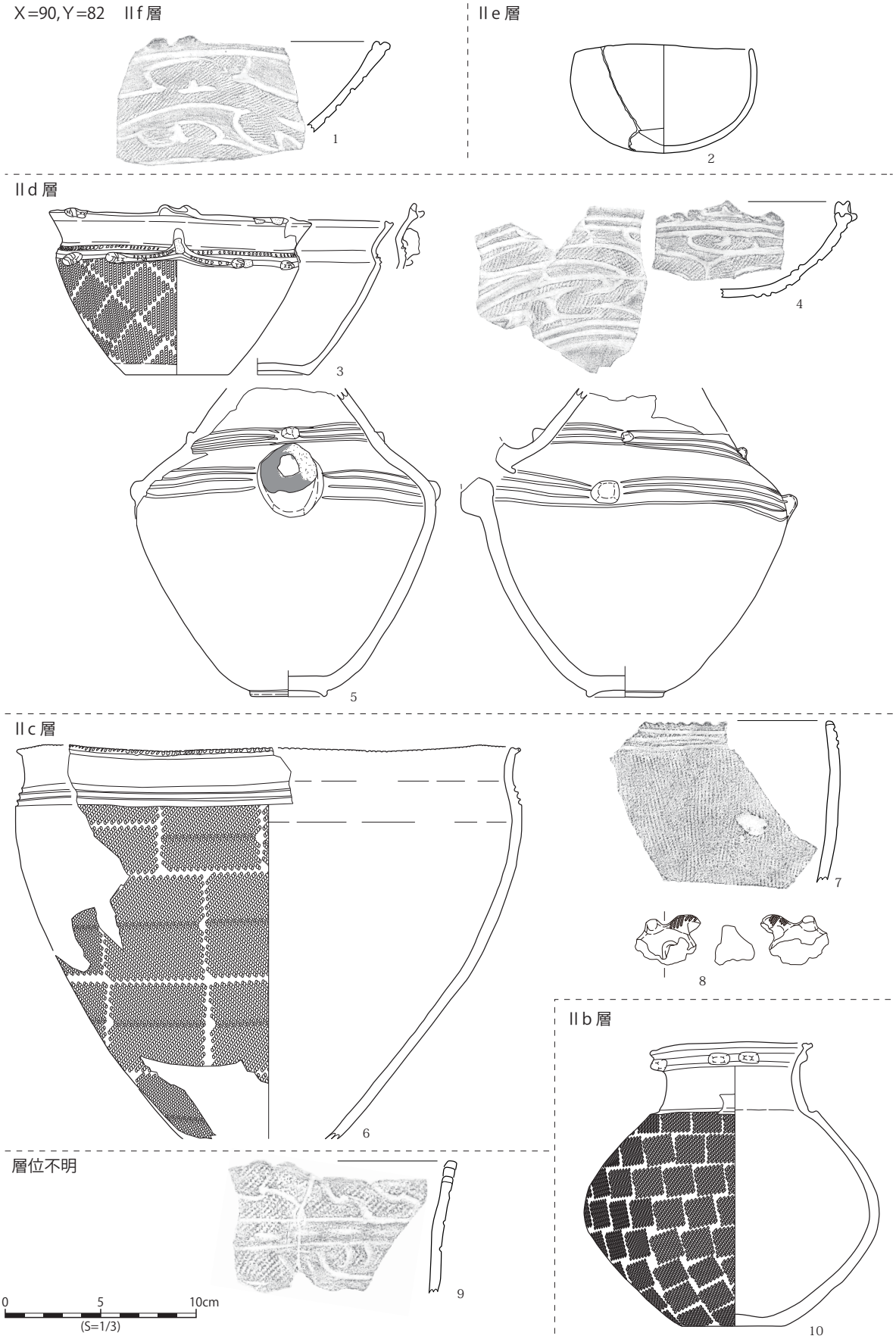
・Ⅱｈ層　３群の深鉢１点、６群の鉢３点、３～６群の深鉢３点、７群の深鉢２点、9b 群の鉢３点の計 12 点出土した。その内図化したのは１点である。11 は 9b 群の鉢であり、口頸部に横位沈線と刻目文が施される。

・Ⅱｇ層　６群の浅鉢・皿１点、７群の鉢１点の計２点出土した。全て図化した。12 は７群の鉢であり、外面にベンガラが塗布されている。口唇部に装飾的な突起が連続して施され、体部は雲形文が展開する。13 は６群の浅鉢であり、内・外面にベンガラが塗布されている。口縁上部に１条の横位沈線が巡り、体部は雲形文が展開する。



図Ⅲ-3-1-3　第１遺物集中区　Ｘ92：Ｙ80、各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱｆ層　４群の深鉢３点、5 群の深鉢１点、鉢７点、6 群の深鉢１点、鉢９点、3 ～６群の深鉢 22 点、7 群の深鉢３点、３～８群の深鉢６点、鉢３点、壺７点の計 62 点出土した。その内図化したのは５点である。14 は５群の鉢であり、口縁上部に列点文が施されたノの字状の沈線が連続し、その下部に簡略化された羊歯状文が巡る。15 は５群の鉢であり、口頸部に列点文が施された横位沈線が２条



図Ⅲ-3-1-4　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（1）

巡り、体部は入組状の沈線が展開する。16 は 6 群の台付鉢であり、口頸部に簡略された羊歯状文が巡る。台部は末広がりの形態であり、上下に横位沈線が巡り、台部文様は透かしのある三叉文が展開する。17 は 6 群の壺であり、口頸上部に横方向に突き出る単独の突起を有する。18 は 3 ～ 8 群の深鉢であり、口唇部に山形突起を有する。

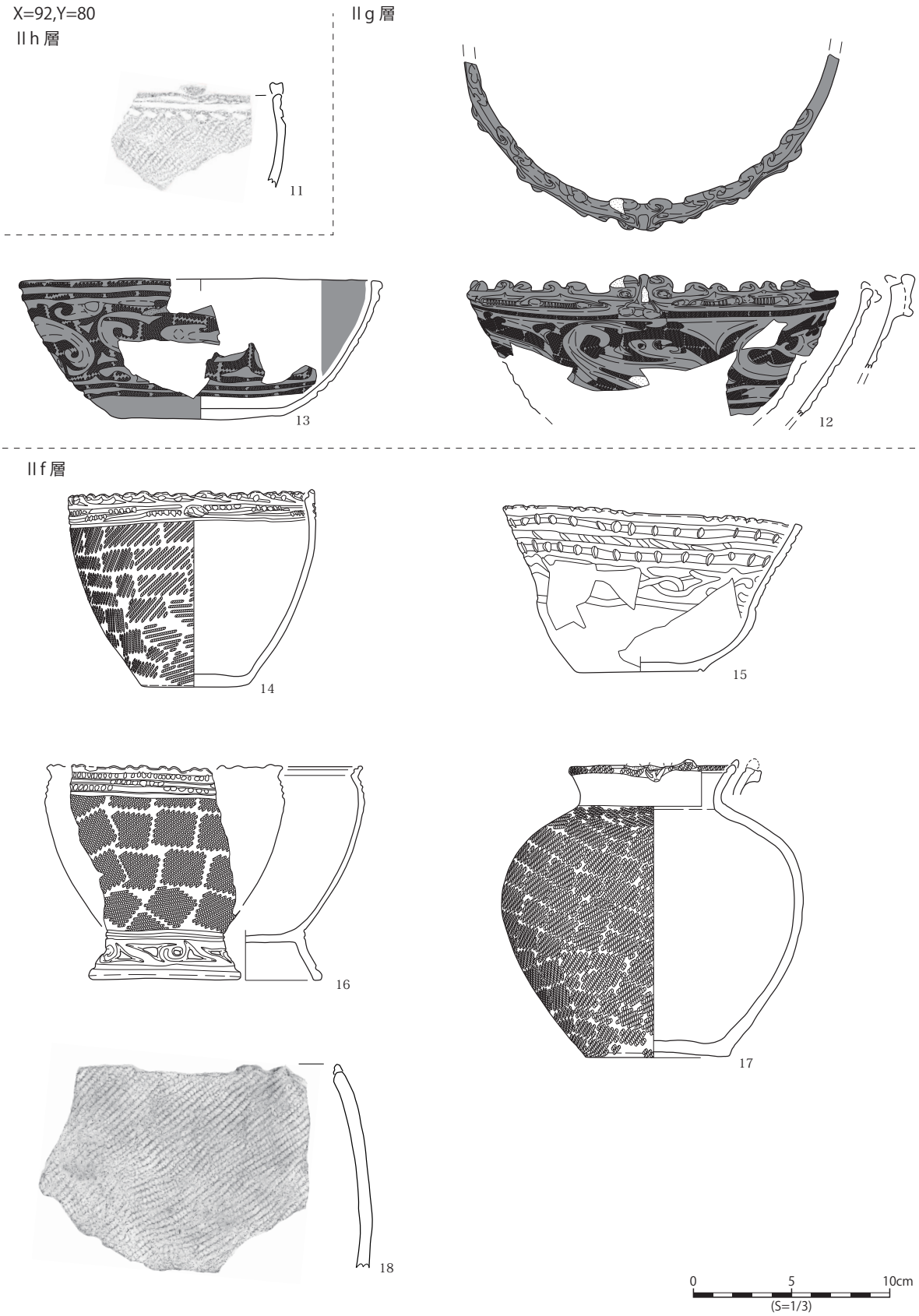
・Ⅱｅ層　5 群の鉢 4 点、6 群の鉢 9 点、3 ～ 6 群の深鉢 10 点、鉢 1 点、浅鉢･皿 1 点、注口 1 点、7 群の深鉢 10 点、鉢 8 点、浅鉢・皿 2 点、壺 8 点、3 ～ 8 群の深鉢 1 点、鉢 3 点、壺 1 点の計 59 点出土した。その内図化したのは 5 点である。19 は 7 群の深鉢であり、口縁部に 4 条の横位沈線が巡る。20 は 7 群の鉢であり、小波状口縁下に 2 条の横位沈線が巡る。21 は 7 群の浅鉢であり、体部に雲形文が展開する。22 は 3 ～ 8 群の深鉢であり、口唇部に山形突起を有し、体部には縦方向の条痕文が施される。23 は 3 ～ 8 群の深鉢あり、口縁端面形が角状を呈する。

・Ⅱｄ層　4 群の深鉢 2 点、5 群の深鉢 4 点、鉢 2 点、浅鉢・皿 1 点、6 群の深鉢 1 点、鉢 2 点、壺 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 7 点、鉢 2 点、7 群の深鉢 11 点、鉢 19 点、浅鉢・皿 1 点、壺 10 点、8 群の深鉢 3 点、鉢 1 点、3 ～ 8 群の深鉢 2 点、鉢 1 点の計 70 点出土した。その内図化したのは 11 点である。24・25 は 7 群の深鉢である。24 は口唇部に山形突起を有する。25 は口縁部に 3 条の横位沈線が巡り、口縁部内側に 1 段の段差を有する。26 は 8 群の深鉢であり、口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。27 は 7 群の鉢であり、口唇部に刻目が施され、口頸部に列点文と横位沈線が 2 条ずつ巡り、体部には渦巻文が展開する。28 は 7 群の鉢であり、体部上半に大型の突起を有し、体部に雲形文が展開する。29 ～ 33 は 7 群の壺である。29 は体部に雲形文が展開する。30 は口縁部に 1 条の、体部との屈折部に 1 条の横位沈線が巡る。31 は口唇部に三叉状の彫去が施された山形突起と、両脇に B 突起を有する。32 は口唇部に 2 箇所の山形突起が施され、その直下に突起を有する沈線が巡る。33 は口頸部と体部の境目に B 突起を有する横位沈線が巡る。34 は 3 ～ 8 群の深鉢であり、口縁端面形が角状を呈する。

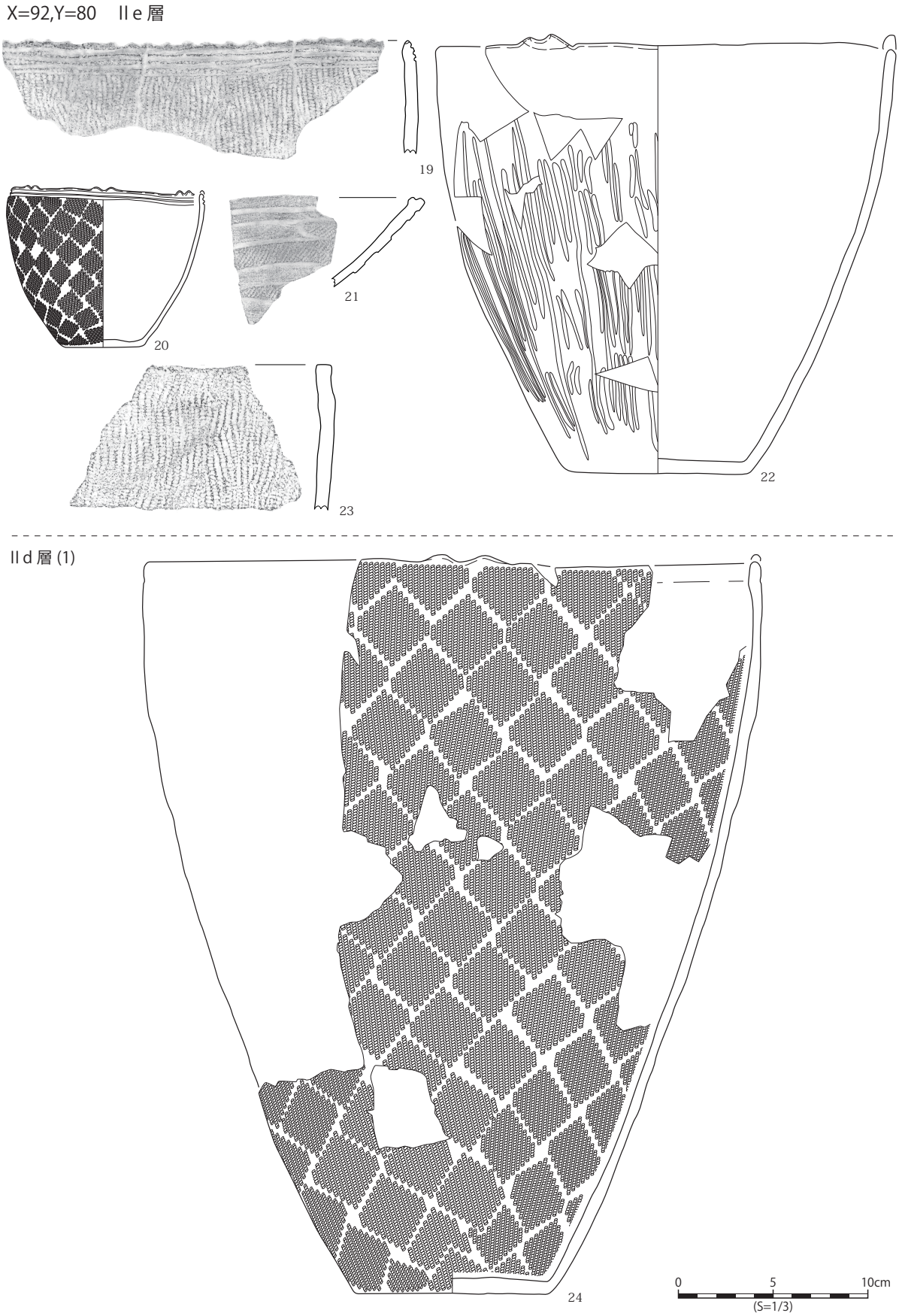
・Ⅱｃ層　4 群の深鉢 1 点、鉢 1 点、5 群の鉢 2 点、壺 1 点、6 群の鉢 2 点、3 ～ 6 群の深鉢 2 点、7 群の深鉢 14 点、鉢 7 点　浅鉢・皿 1 点（赤彩資料）、壺 2 点の計 33 点出土した。その内図化したのは 3 点である。35 は 4 群の台付鉢であり、体部上半に横長の列点文が巡り、入組文が展開する。36 は 7 群の鉢であり、体部上半に数条の横位沈線が巡る。37 は 7 群の壺形土器であり、口唇部および口縁上部に三叉状の彫去が施された突起が 4 単位配置されている。

・Ⅱｂ層　2b 群の香炉形土器 1 点、4 群の深鉢 5 点、注口土器 2 点、5 群の深鉢 1 点、鉢 2 点、3 ～ 6 群の深鉢 2 点、鉢 1 点、7 群の深鉢 17 点、鉢 11 点、浅鉢･皿 1 点、壺 7 点、8 群の深鉢 3 点、鉢 1 点、浅鉢・皿 1 点（赤彩資料）、3 ～ 8 群の鉢 1 点の計 56 点出土した。その内図化したのは 6 点である。38・39 は 8 群の深鉢であり、口縁部に 3 条の横位沈線が巡り、口縁部内側に 1 段の段差を有する。40・41 は、7 群の鉢である。40 は口唇直下の外側に刻目が施され、口頸部に 2 条の横位沈線が巡る。41 は口唇部に大ぶりな突起を有し、体部上半に横位沈線と列点文が巡る。42・43 は 7 群の壺である。42 は外面にベンガラが塗布されている。口唇部に三叉状の彫去が施された山形突起と、口唇直下の外面と口頸上部の突起が連続して配置される。43 は口唇部及び口唇直下に B 突起を有する。

・Ⅱａ層　6 群の鉢 5 点、浅鉢･皿 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 8 点、7 群の深鉢 15 点、鉢 18 点、浅鉢･皿 3 点、壺 2 点の計 52 点出土した。その内図化したのは 2 点である。44 は 7 群新段階の鉢であり、

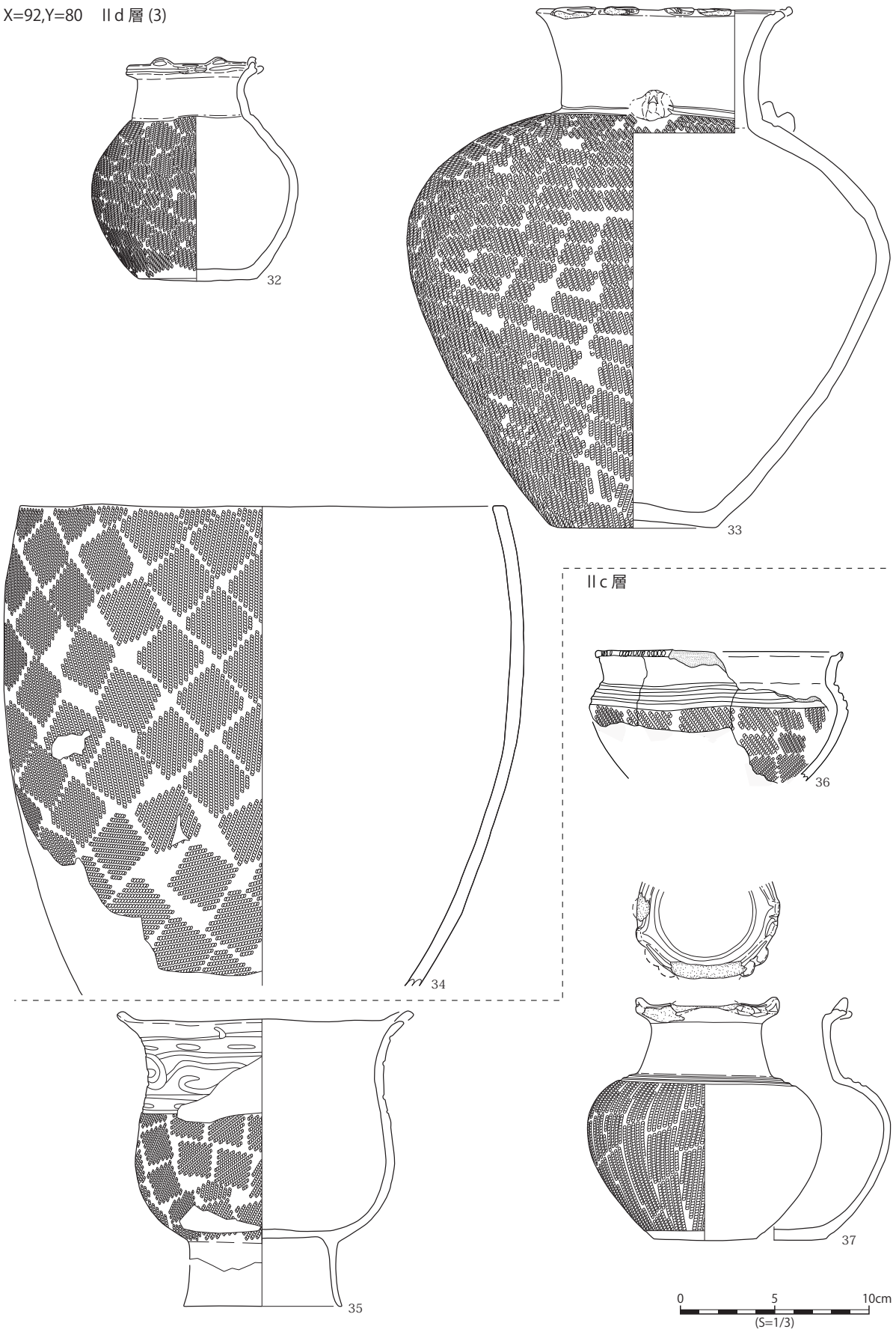


図Ⅲ-3-1-5　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（2）

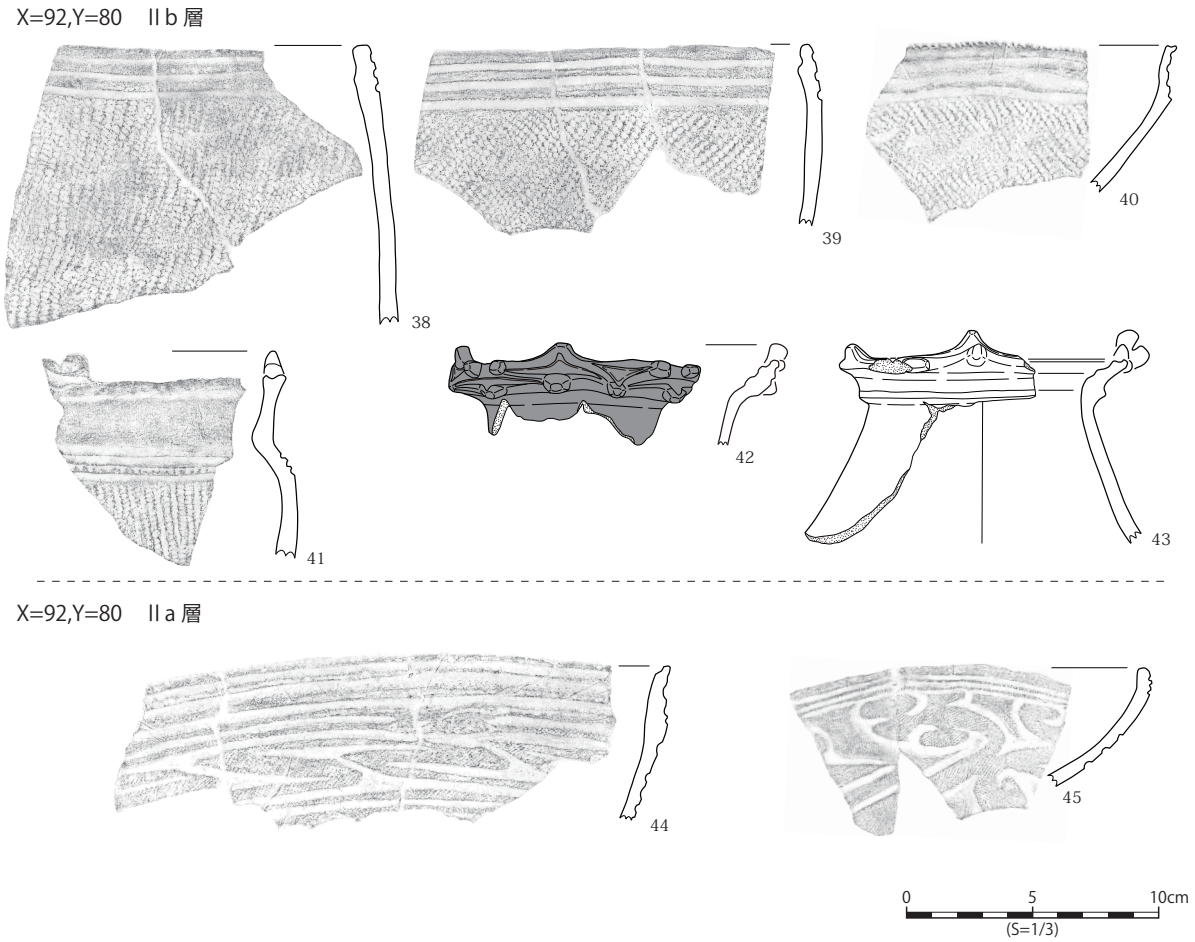


図Ⅲ-3-1-6　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（3）

図Ⅲ-3-1-7　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（4）



図Ⅲ-3-1-8　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（5）



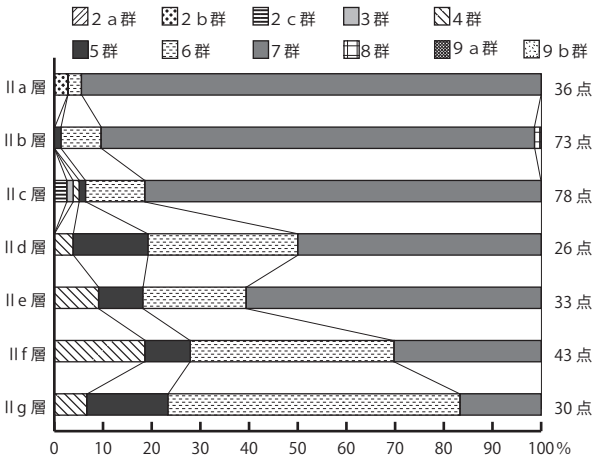
図Ⅲ-3-1-9　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（6）

口縁部に沈線が巡り、体部には連携入組文が展開する。45 は 6 群の浅鉢形土器であり、口縁部に沈線が巡り、体部は雲形文が展開する。

③グリッド X=92、Y =82（図Ⅲ -3-1-10 ～ 13）

・Ⅱｇ層　4 群の注口土器 2 点､5 群の鉢 4 点、注口土器 1 点、6 群の鉢 18 点、3 ～ 6 群の深鉢 9 点､ 7 群の深鉢 1 点、鉢 1 点、浅鉢･皿 3 点、3 ～ 8 群の壺 1 点の計 40 点出土した。

・Ⅱｆ層　4 群の深鉢 8 点、5 群の深鉢 1 点、鉢 1 点､注口土器 2 点､6 群の深鉢 2 点､鉢 13 点、浅鉢・皿 3 点、3 ～ 6 の深鉢 18 点、鉢 1 点、7 群の深鉢 2 点、鉢 8 点、壺 3 点、3 ～ 8 群の鉢 4 点、壺 4 点の計 70 点出土した。その内図化したのは 2 点である。46 は 6 群の深鉢であり、口頸部に列点文と数条の沈線が巡り、体部上半に大型の突起を有する。47 は 5 群の鉢であり、口唇直下にノの字上の沈線が連続して施され、口頸部は沈線間を区画する刻目文が 3 条巡る。



図Ⅲ-3-1-10　第 1 遺物集中区　X =92, Y =82、各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱｅ層　４群の深鉢２点、鉢１点、５群の深鉢１点、鉢２点、６群の深鉢 1.5 点、鉢５点、壺 0.5 点、３～６群の深鉢 10 点、７群の深鉢 6.5 点、鉢 10 点、浅鉢・皿３点、壺 0.5 点、３～８群の鉢２点、浅鉢・皿１点、壺８点の計 54 点出土した。その内図化したのは４点である。48 は６群の深鉢であり、口縁部に横位沈線が巡る。49・50 は６群の鉢であり、口頸部に列点文と沈線が巡る。51 は６群の壺であり、体部に斜位回転の縄文が施される。

・Ⅱｄ層　４群の深鉢１点、５群の深鉢２点、鉢１点、注口土器１点、６群の深鉢１点、鉢７点、３～６群の深鉢２点、壺１点、７群の深鉢５点、鉢６点、浅鉢１点、壺１点、３～８群の浅鉢・皿１点の計 30 点出土した。その内図化したのは３点である。52 は７群の鉢であり、体部上半に雲形文が展開する。53 は、７群の浅鉢であり、体部に雲形文が展開する。54 は、７群の鉢であり、口頸部に列点文と横位沈線が巡る。体部上半に大型の突起を有する。

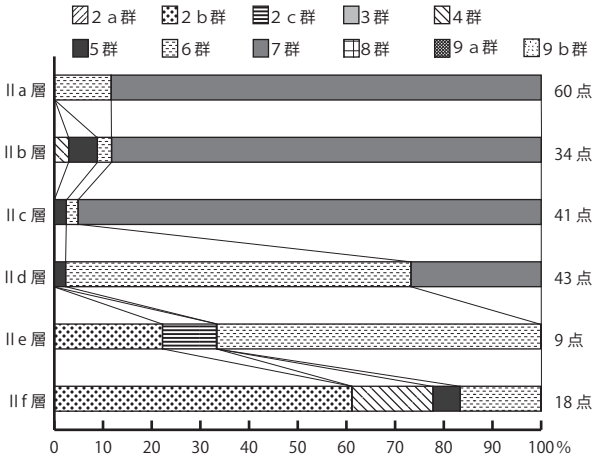
・Ⅱｃ層　２ｃ群の深鉢２点、３群の鉢１点、４群の深鉢１点、５群の深鉢１点、６群の深鉢１点、鉢 8.5 点、３～６群の深鉢 19 点、７群の深鉢 27 点、鉢 33.5 点、壺２点、注口土器１点、３～８群の鉢１点、壺１点の計 99 点出土した。その内図化したのは 15 点である。55 は７群の深鉢であり、口縁部に３条の横位沈線が巡る。56 ～ 61 は７群の鉢である。56 は口頸部に横位沈線が巡る。57 は、口唇直下には連続する弧線文の中に刻みが施され、体部上半には列点文が巡る。58・59 は、口縁部に数条の横位沈線が巡る。60 は体部に雲形文が展開する。61 は口頸部に横位沈線が巡り、体部上半にＢ突起を有し、体部には雲形文が展開する。62 は３～８群の鉢であり、口縁部に横位沈線が巡る。63 は３～８群の鉢であり、口縁部には横位沈線が施され、体部は無文である。64 は３群の浅鉢・皿であり、体部に入組三叉文が展開する。65 は７群の壺であり、口唇部および口唇直下に突起を有する。66 は、３～６群の深鉢であり、体部に縄文の横位回転が施される。

・Ⅱｂ層　５群の深鉢１点、６群の深鉢２点、鉢１点、浅鉢・皿３点、３～６群の深鉢６点、７群の深鉢 47 点、鉢 16 点、浅鉢・皿１点、壺１点、８群の深鉢１点、３～８群の深鉢１点、鉢３点の計 83 点出土した。その内図化したのは２点である。67 は８群の深鉢であり、口縁部に３条の沈線が巡る。68 は７群の壺であり、体部に雲形文が展開する。

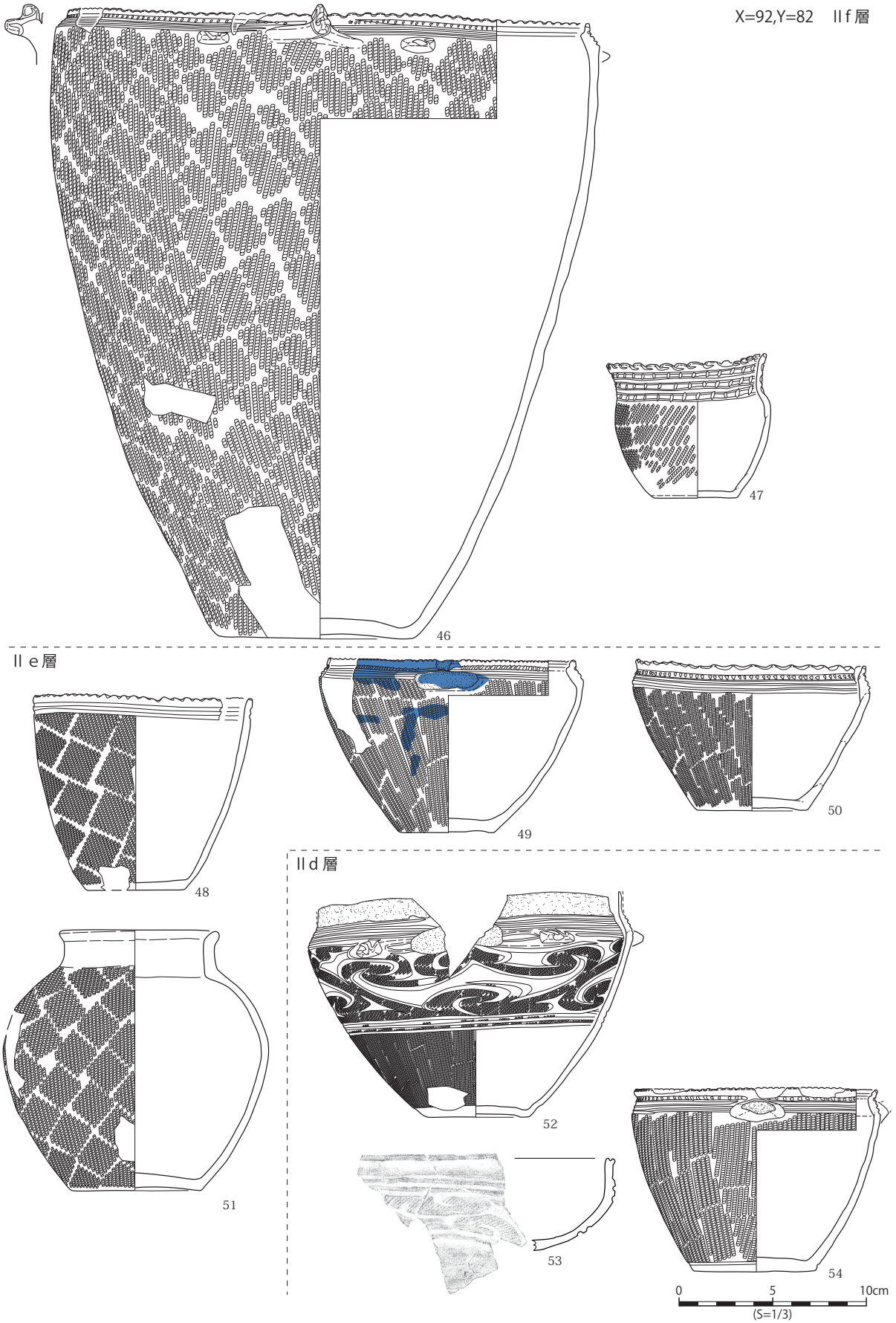
・Ⅱａ層　2b 群の深鉢１点、６群の鉢１点、３～６群の深鉢２点、７群の深鉢 19 点、鉢 13 点、浅鉢・皿２点の計 38 点出土した。

④グリッド X=94、Ｙ =76（図Ⅲ 3-1-14 ～ 17）

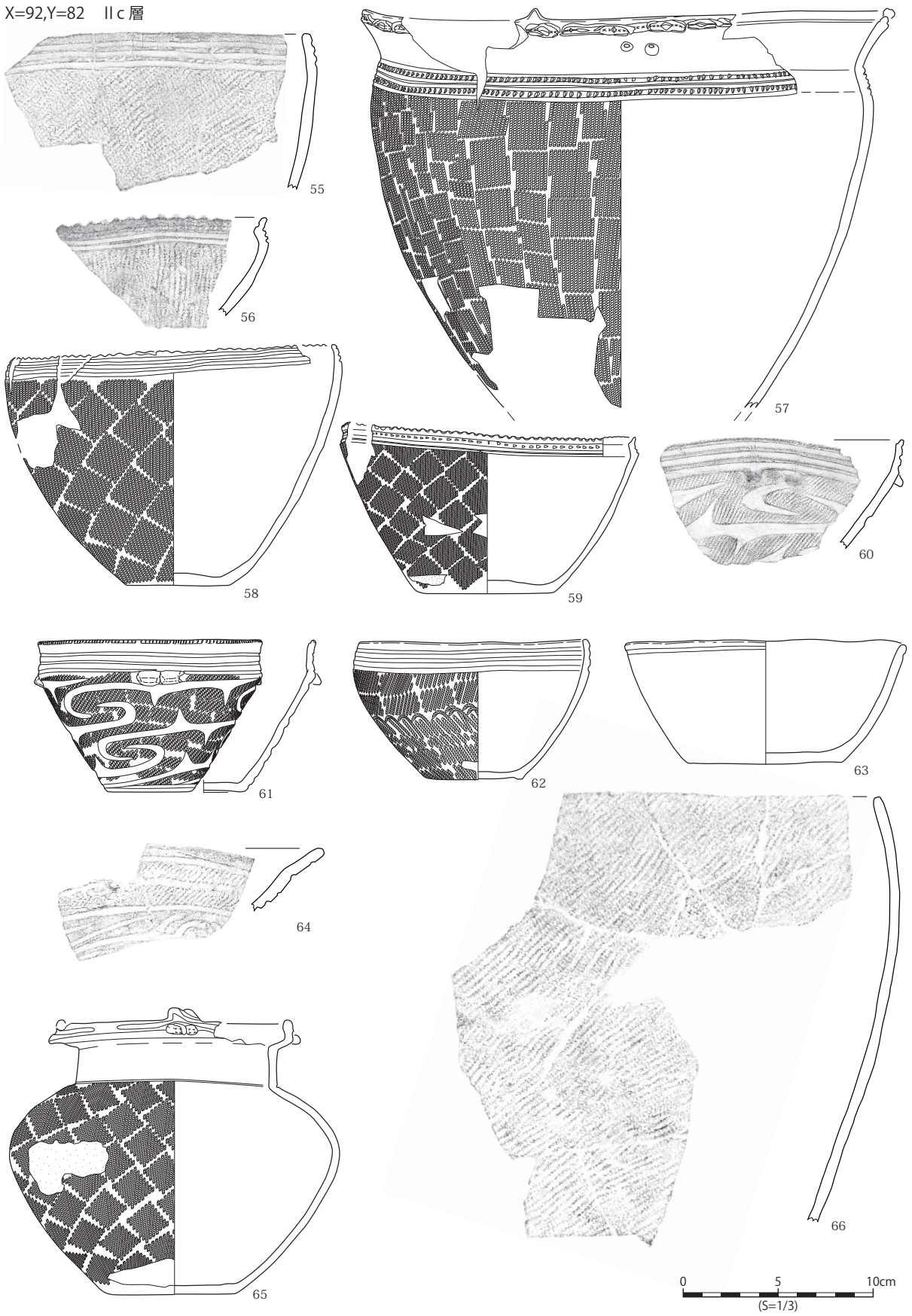
・Ⅱｆ層　2b 群の深鉢６点、鉢１点、浅鉢・皿１点、壺１点、注口土器２点、４群の深鉢３点、５群の深鉢１点、６群の鉢３点、３～６群の深鉢 14 点、３～８群の深鉢１点、鉢３点、壺５点の計 41 点出土した。その内図化したのは７点である。69 は 2b 群の深鉢の波状口縁部であり、口縁に沿った沈線が施される。70 は 2b 群の鉢であり、弧状の隆帯が施される。71 は 2b 群の深鉢であり、体部に横位沈線が巡る。72 は 2b 群の浅鉢である。73 は 2b 群の壺か注口土器であり、口縁上部に横位沈線が巡る。74



図Ⅲ-3-1-14　第１遺物集中区　X=94,Y=76
各群の層位別出土割合グラフ

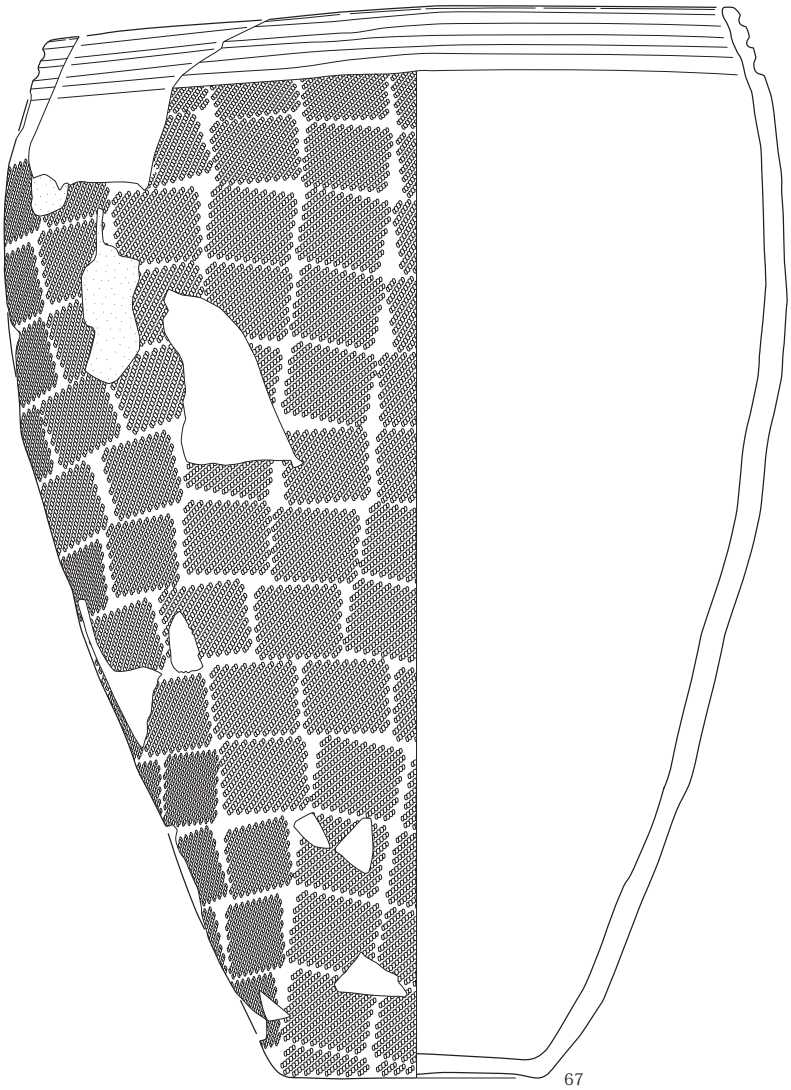


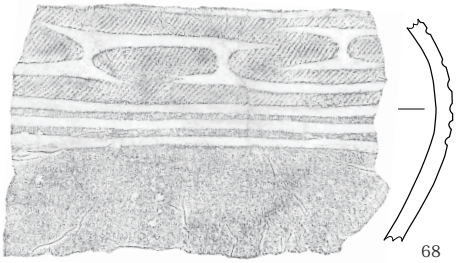
図Ⅲ-3-1-11　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（7）



図Ⅲ-3-1-12　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（8）

X=92,Y=82　Ⅱb 層





0　5　10cm
(S=1/3)

図Ⅲ-3-1-13　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（9）

は 2b 群の注口土器であり、体部に貼瘤が施され、その間に多条沈線が展開する。75 は 2b 群の注口土器であり、口唇直下に中間に刻みのある大型の貼瘤を有し、口頸部から体部には貼瘤間に幅広の沈線が巡る。

・Ⅱｅ層　2b 群の注口土器２点、２ｃ群の深鉢１点、６群の深鉢１点、鉢４点、浅鉢・皿１点、３～６群の深鉢 20 点､３～８群の鉢１点の計 30 点出土した。その内図化したのは２点である。76 は、６群の鉢であり、口唇直下にノの字状の沈線が連続して施され、口頸部は簡略化された羊歯状文が巡る。77 は、2b 群の壺か注口土器であり、貼瘤と二条の沈線がみられる。

・Ⅱｄ層　５群の深鉢１点、６群の深鉢 1.5 点、鉢 25 点、浅鉢･皿４点、７群の深鉢 6.5 点、鉢５点、３～８群の深鉢４点、壺２点の計 49 点出土した。その内図化したのは４点である。78 は７群の深鉢であり、口唇部に山形突起と口唇直下に中間をならしたＢ突起が連続している。口頸部は列点文が巡る。79 は６群の浅鉢であり、体部に雲形文が展開する。80・81 は７群の粗製深鉢である。

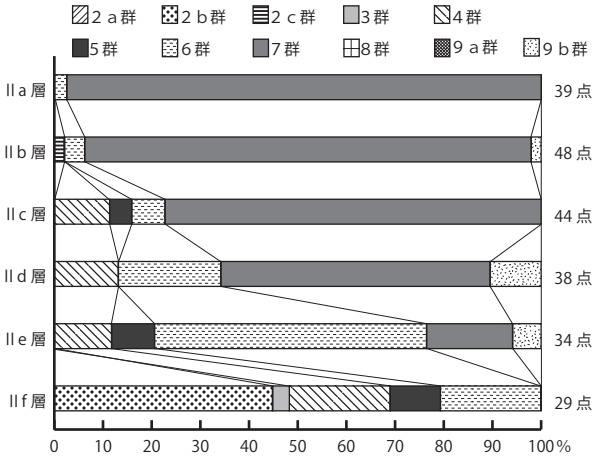
・Ⅱｃ層　５群の深鉢１点、６群の浅鉢･皿１点、３～６群の深鉢２点、７群の深鉢 23 点、鉢 12 点、浅鉢･皿３点､壺１点の計 43 点出土した。その内図化したのは４点である。82･83 は７群の鉢である。82 は体部上半に列点文が巡る。83 は口唇直下にＢ突起を有する。84･85 は､7 群の粗製深鉢である。

・Ⅱｂ層　４群の浅鉢･皿１点、５群の鉢１点、注口土器１点、６群の深鉢１点、７群の深鉢８点、鉢 17 点、浅鉢・皿３点、壺２点、３～８群の壺６点（赤彩資料１点含む）の計 40 点出土した。その内図化したのは４点である。86 は７群の深鉢であり、口縁部に横位沈線が巡る。87 は７群の鉢であり、口唇部に山形突起と口唇直下に中間をならしたＢ突起を有する。88 は７群の鉢であり、口縁部に横位沈線が巡る。89 は７群の粗製深鉢である。

・Ⅱａ層　６群の深鉢３点、鉢１点、浅鉢・皿３点、７群の深鉢 15 点、鉢 34 点、壺４点の計 60 点出土した。その内図化したのは４点である。90･91 は７群の鉢であり、口唇直下に刻目が施され、口頸部に横位沈線が巡る。92 は６群の鉢であり、口縁部に多条の横位沈線が施される。93 は、７群の粗製深鉢である。

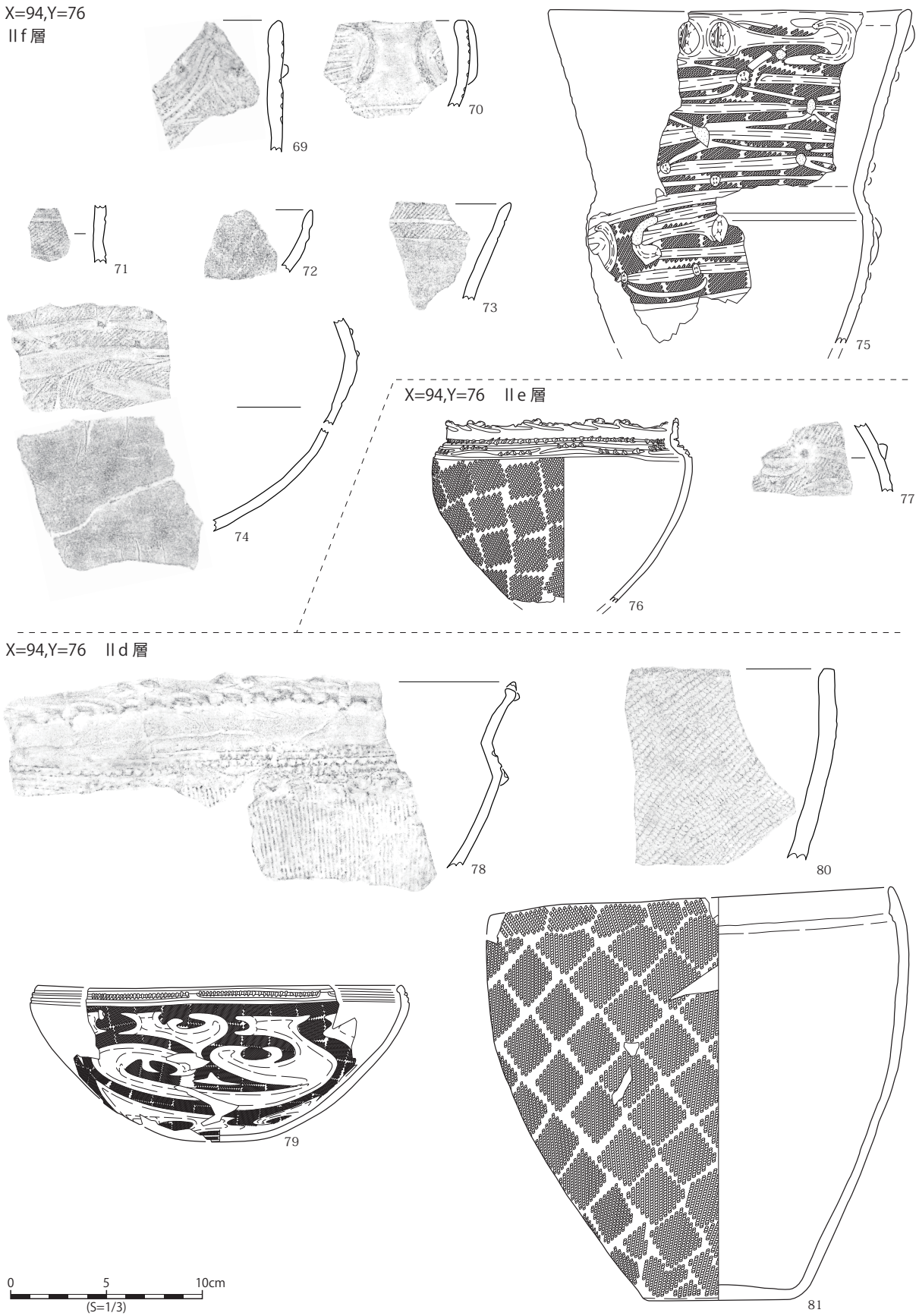
⑤グリッド X=94、Ｙ =78（図Ⅲ -3-18 ～ 24）

・Ⅱｆ層　2b 群の深鉢 11 点、壺１点、注口土器１点、３群の深鉢１点、４群の深鉢５点、鉢１点、５群の鉢３点、６群の深鉢１点、鉢３点、浅鉢・皿１点、注口土器１点、３～６群の深鉢 20 点、３～８群の鉢５点の計 54 点出土した。その内図化したのは６点である。94 は、３群の深鉢であり、体部には入組帯状文が展開する。95 は、６群の鉢であり、口唇部にやや短い間隔でＢ突起が連続し、口頸部には簡略化された羊歯状文が巡る。体部上半には列点文が巡る。96 は 2b 群の壺か注口土器であり、貼瘤間に帯状文が施される。97 は３～８群の香炉形土器の頂部であり、動物的意匠が施されている。98 は３～６群の粗製深鉢である。99 は６群の粗製深鉢である。



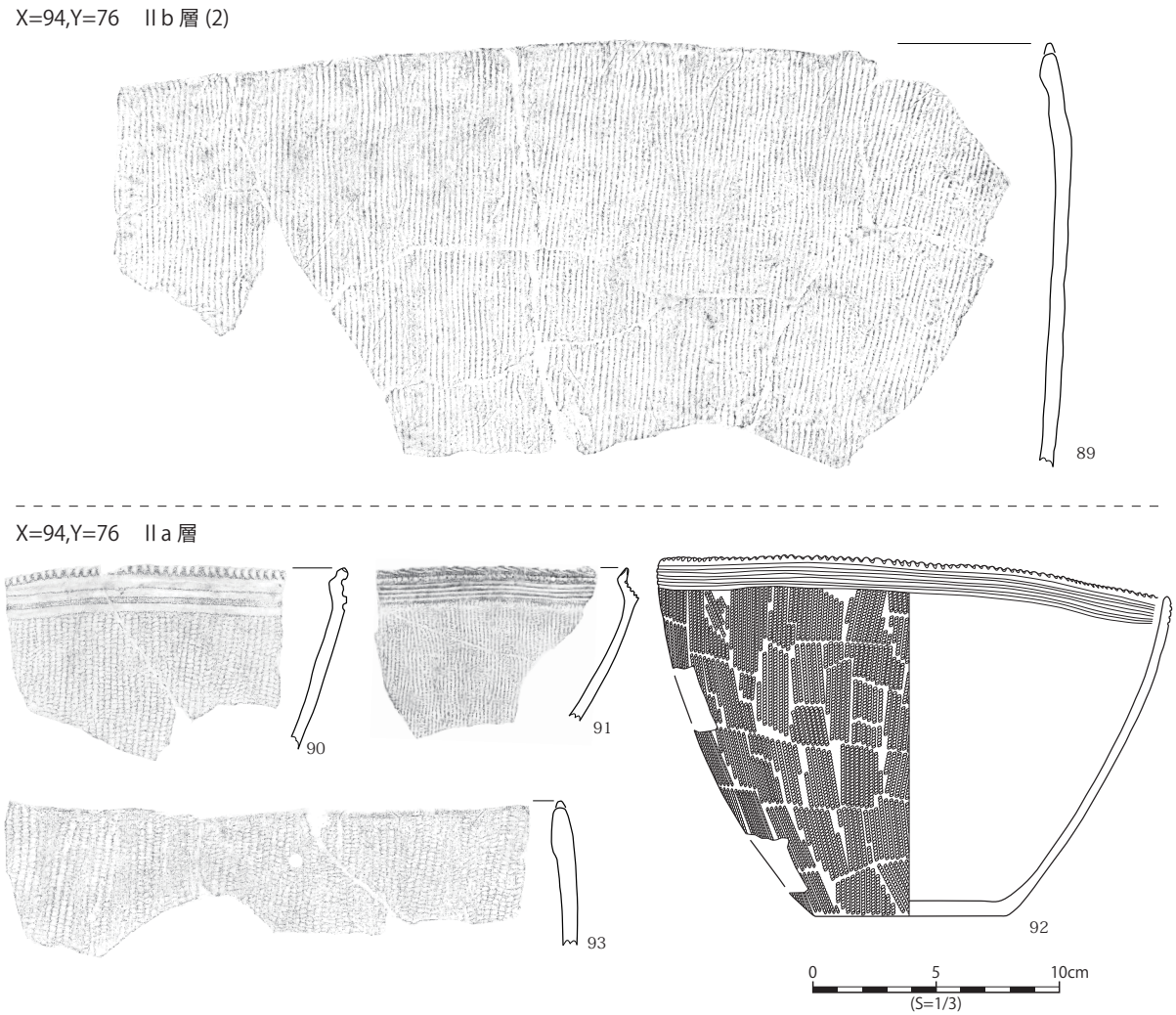
図Ⅲ-3-1-18　第１遺物集中区　Ｘ=94,Ｙ=78
各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱｅ層　４群の深鉢３点、鉢１点、５群の深鉢３点、６群の深鉢２点、鉢 15 点、浅鉢・



図Ⅲ-3-1-15　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（10）

図Ⅲ-3-1-16　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（11）

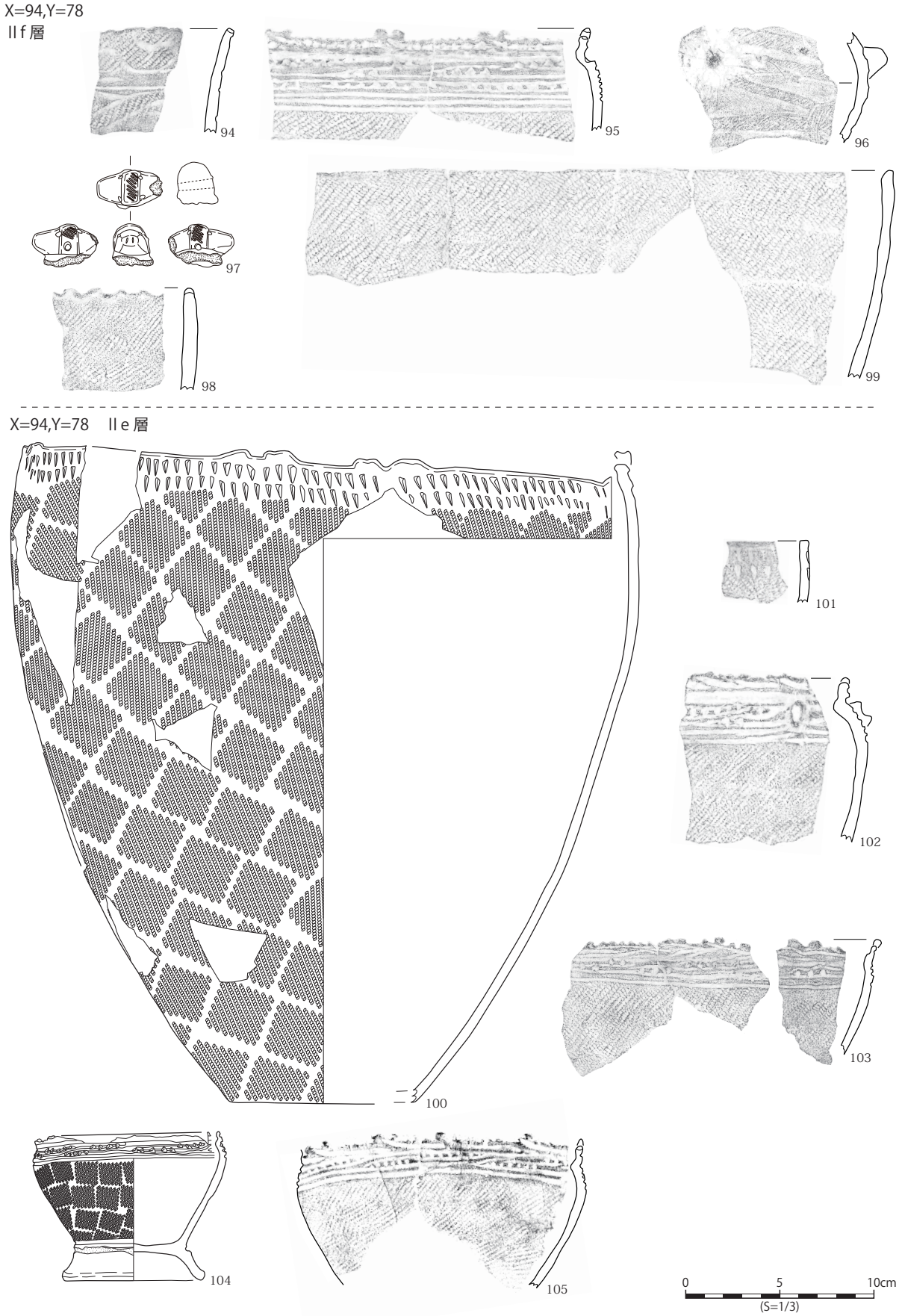


図Ⅲ-3-1-17　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（12）

皿 2 点、3 ～ 6 群の深鉢 18 点、7 群の深鉢 3 点、鉢 3 点、3 ～ 8 群の鉢 2 点、浅鉢・皿 1 点、壺 10 点、9b 群の深鉢 2 点の 65 点出土した。その内図化したのは 6 点である。100・101 は 9b 群の深鉢である。100 は口唇部に 2 つ連続する山形突起がやや広い間隔で配置される。口縁部は刺突文が 2 条巡る。101 は口縁部に刺突文が 2 条巡る。102・103・105 は 6 群の鉢である。102 は口頸部に羊歯状文と中間に刻みを施した B 突起を有する。103・105 は口唇部に B 突起を有し、口頸部に簡略化された羊歯状文が巡る。104 は 6 群の台付鉢であり、口頸部に簡略された羊歯状文が巡る。台部は末広がりの形態で無文である。

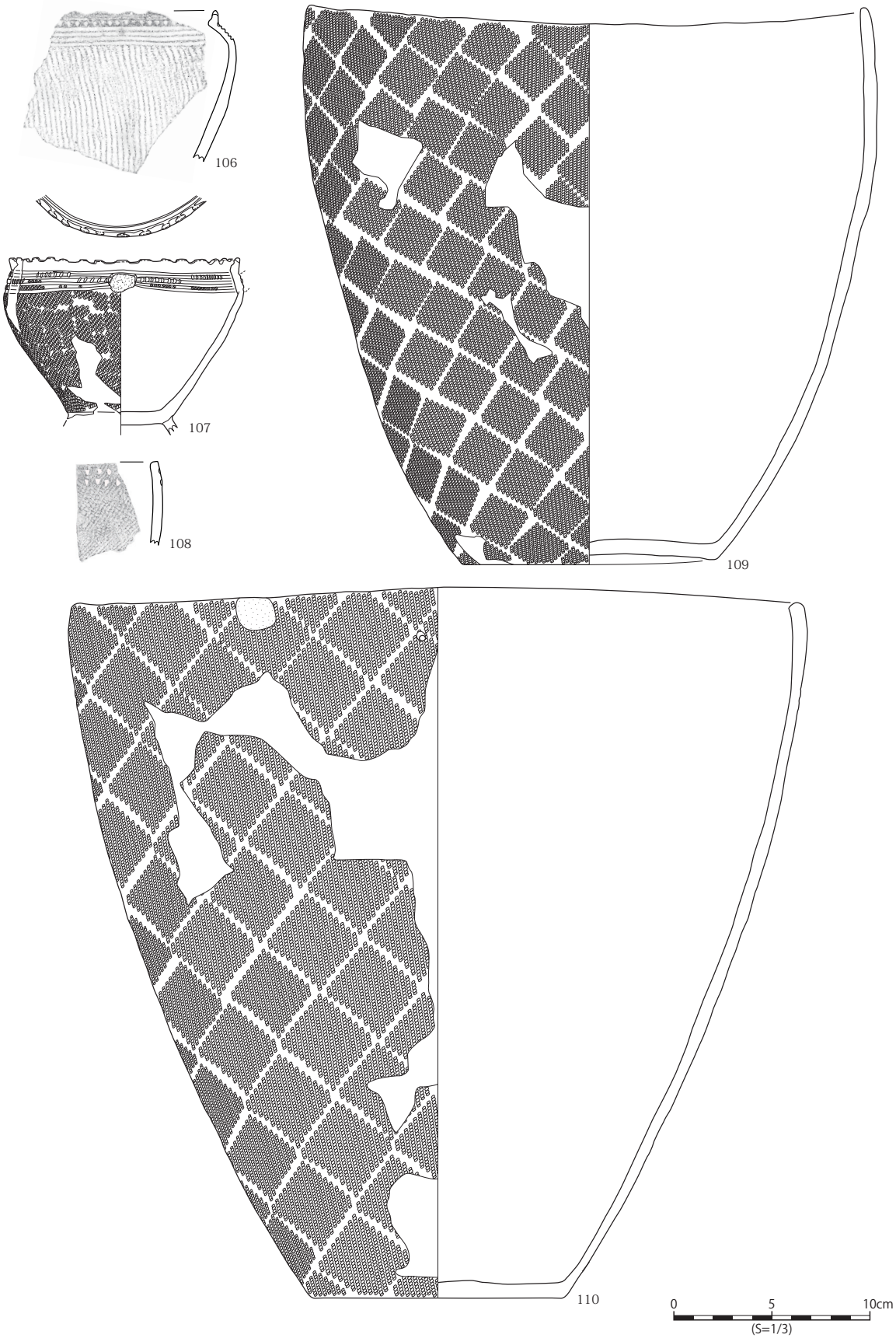
・Ⅱd 層　4 群の深鉢 3 点、注口土器 2 点、6 群の深鉢 3 点、鉢 3 点、浅鉢・皿 2 点、3 ～ 6 群の深鉢 8 点、7 群の深鉢 13 点、鉢 7 点、浅鉢・皿 1 点、3 ～ 8 群の深鉢 2 点、壺 5 点、9b 群の深鉢 4 点の計 53 点出土した。その内図化したのは 5 点である。106 は 6 群の鉢であり、口頸部に列点文と横位沈線が巡る。107 は 6 群の台付鉢であり、口頸部に簡略化された羊歯状文が施され、沈線間に突起を有する。108 は 9b 群の深鉢であり、口縁部に刺突文が 2 条巡る。109・110 は 3 ～ 8 群の粗製深鉢であり、110 は補修孔を有する。

・Ⅱc 層　4 群の深鉢 4 点、鉢 1 点、5 群の深鉢 2 点、6 群の深鉢 1 点、鉢 2 点、3 ～ 6 群の深鉢 6 点、



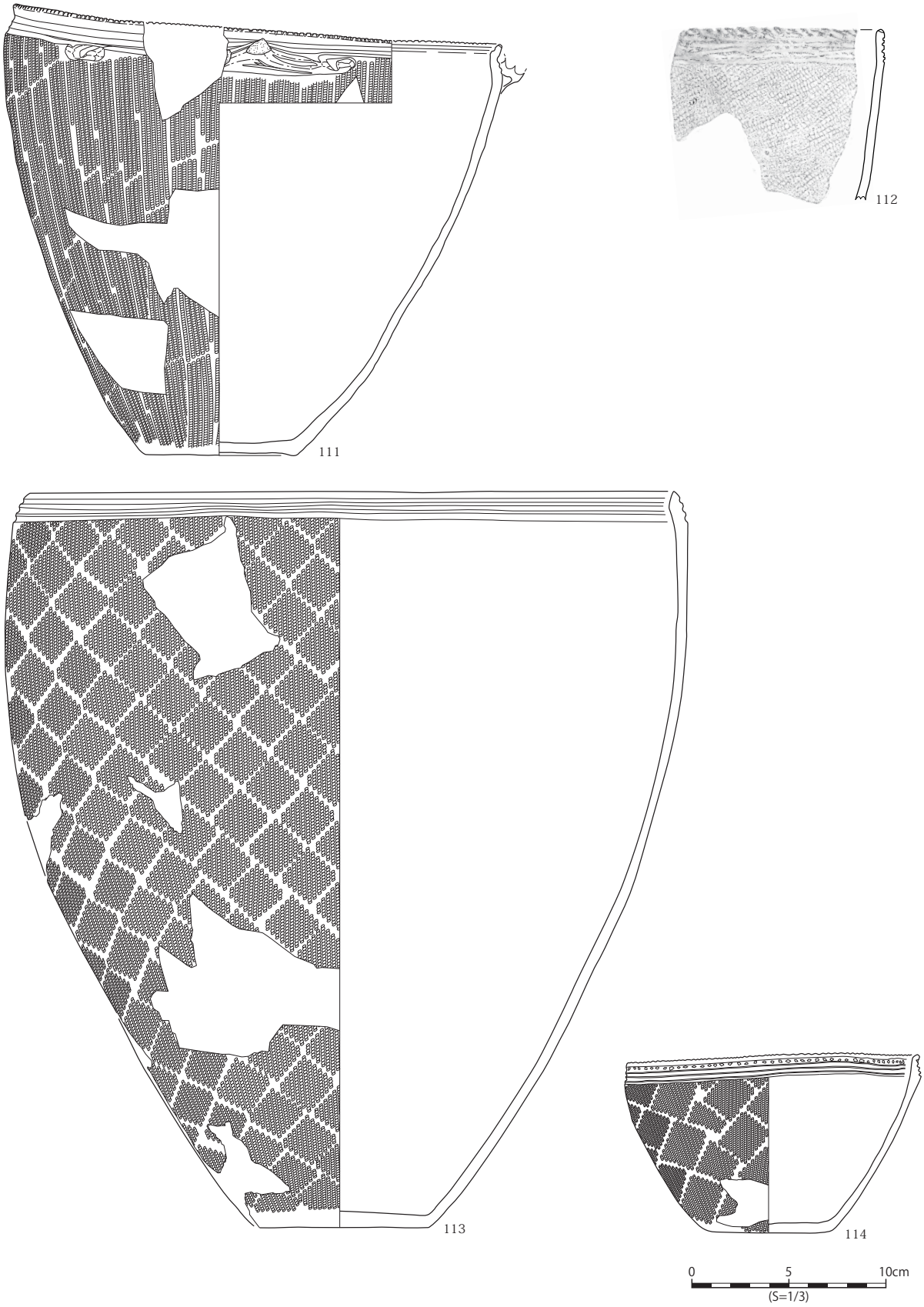
図Ⅲ-3-1-19　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（13）

X=94,Y=78　Ⅱd 層



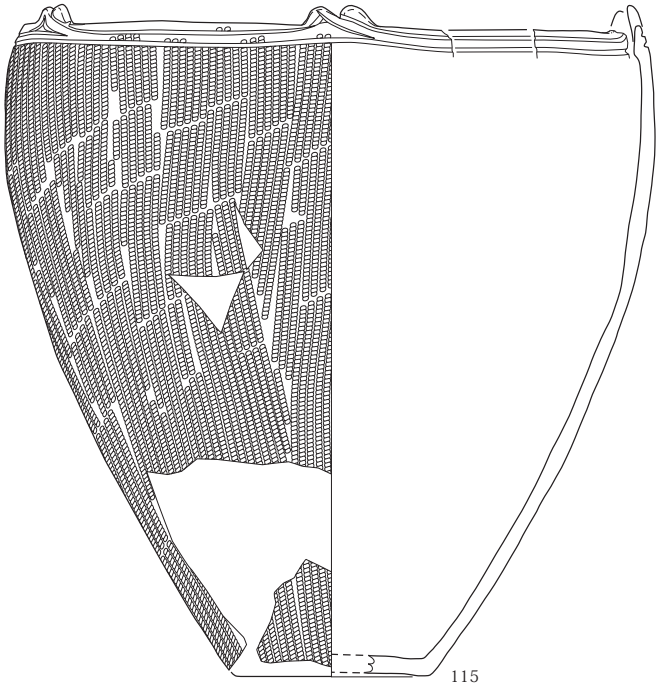
図Ⅲ-3-1-20　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（14）

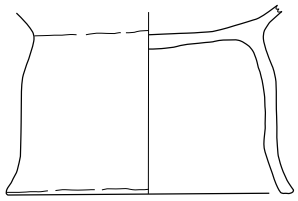
X=94,Y=78　Ⅱc 層

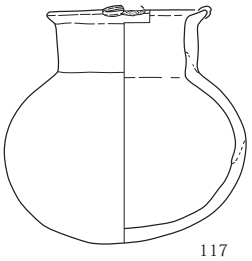


図Ⅲ-3-1-21　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（15）

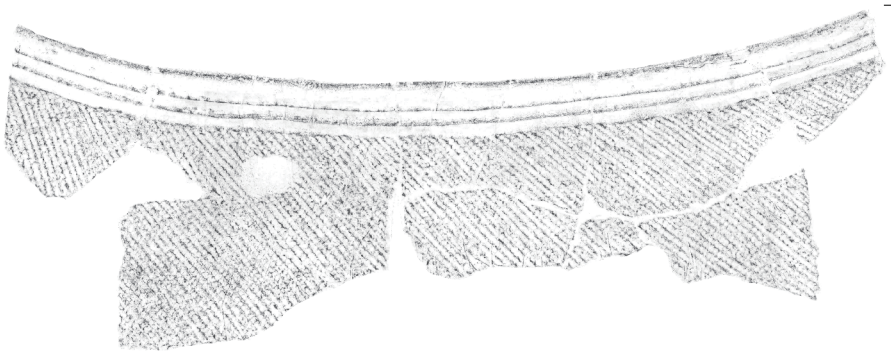
X=94,Y=78　Ⅱc 層

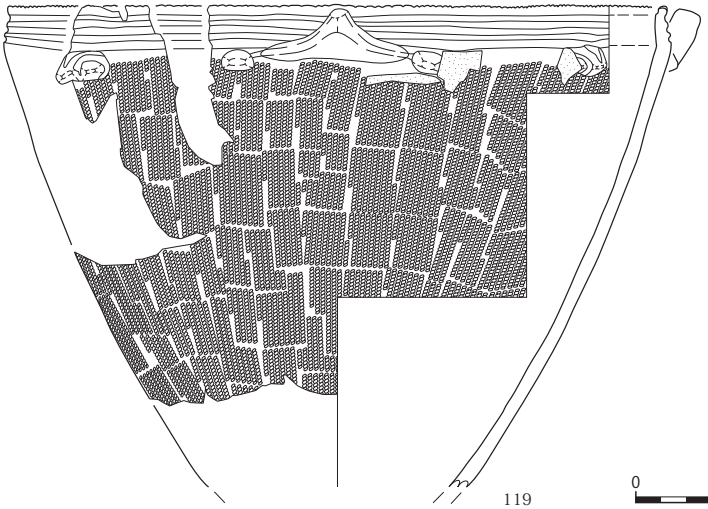






X=94,Y=78　Ⅱb 層

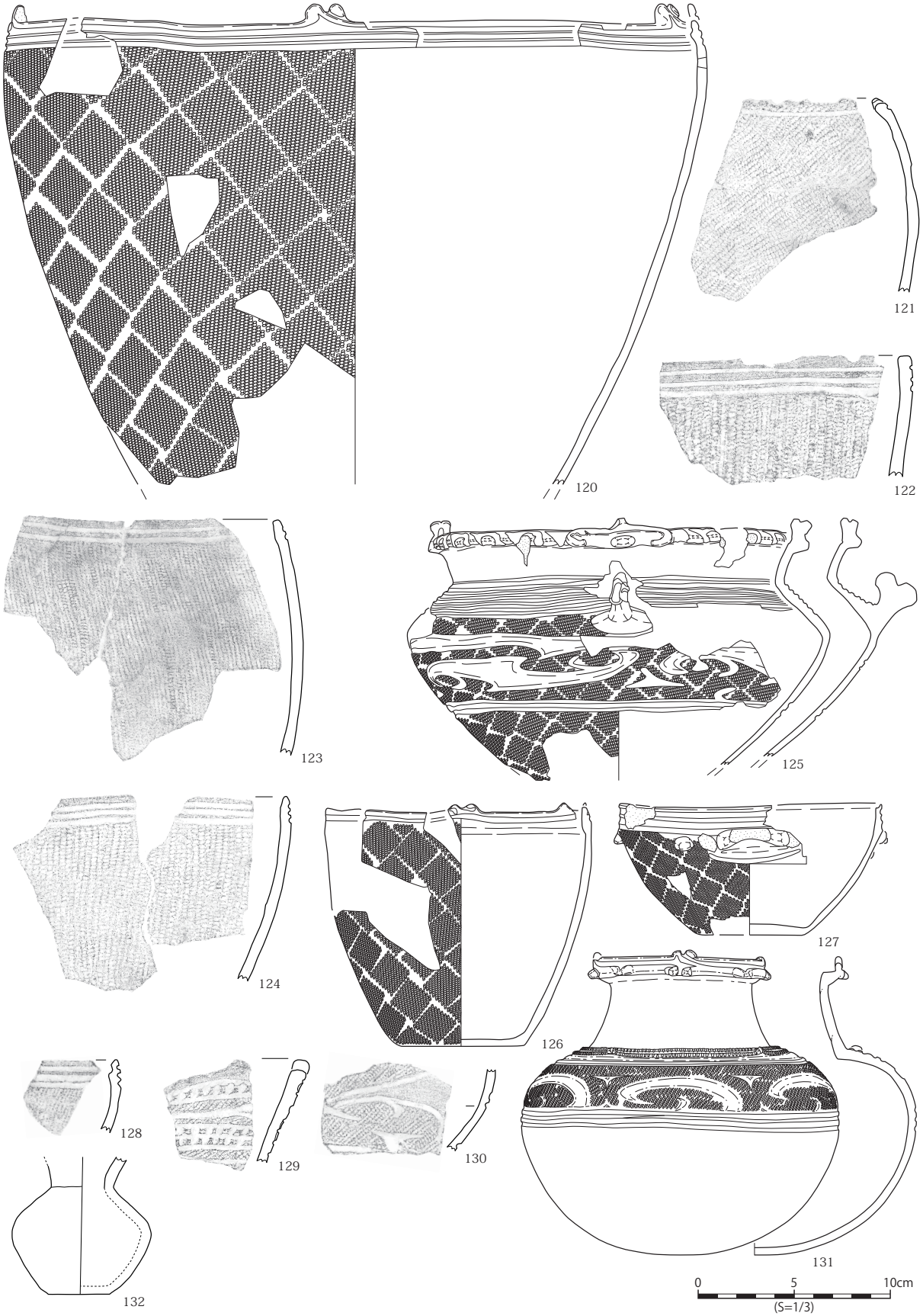




0　5　10cm
(S=1/3)

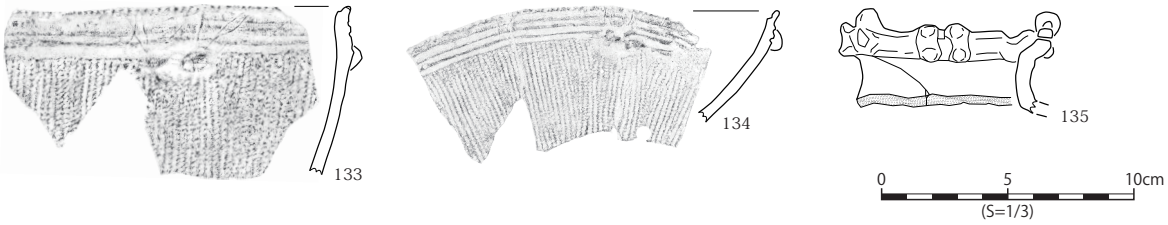
図Ⅲ-3-1-22　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（16）

X=94,Y=78　Ⅱb 層



図Ⅲ-3-1-23　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（17）

X=94,Y=78　Ⅱa 層

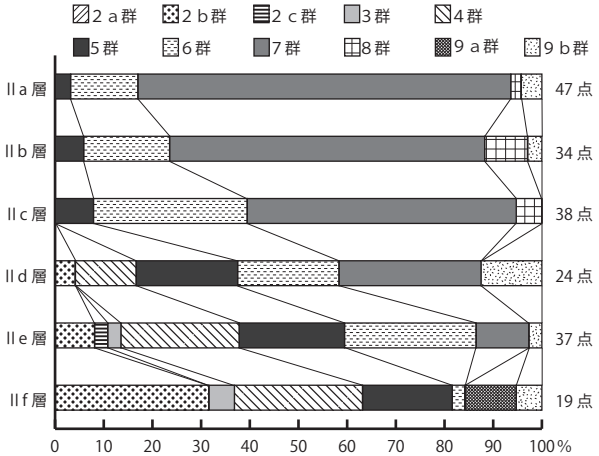


図Ⅲ-3-1-24　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（18）

7 群の深鉢 10 点、鉢 27 点、壺 1 点、3 ～ 8 群の鉢 1 点、浅鉢･皿 1 点、壺 1 点の計 57 点出土した。その内図化したのは 7 点である。111 は 7 群の深鉢であり、口唇部に刻みが施され、体部上半に大型の突起を有する。112 は 6 群の深鉢であり、口縁部に簡略化された羊歯状文が巡る。113 は 7 群の深鉢であり、口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。114・115 は 7 群の鉢であり、114 は口頸部に列点文と横位沈線が巡る。115 は口唇部に中間に刻みのある突起がやや広い間隔で配置される。116 は、7 群の台付鉢であり、無文である。117 は 7 群の無文の壺である

・Ⅱｂ層　2 ｃ群の鉢 1 点、6 群の深鉢 1 点、鉢 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 6 点、7 群の深鉢 32 点、鉢 12 点、3 ～ 8 群の鉢 2 点、壺 3 点、9b 群の深鉢 1 点の計 59 点出土した。その内図化したのは 15 点である。118 は 7 群の深鉢であり、口頸部に横位沈線が巡る。119 は 7 群の鉢であり、口頸部に横位沈線が巡り、体部上半に大型の突起を有する。120 は 7 群の深鉢であり、口唇部に頂部が凹む山形突起が 4 単位配置されている。121 は 6 群の深鉢であり、口縁部に横位沈線が巡る。122 ～ 124 は 8 群の深鉢である。122・124 は口縁部に 3 条の、123 は口縁部に 2 条の横位沈線が巡る。125 ～ 128 は 7 群の鉢である。125 は口唇部および口唇直下に装飾的な突起が施される。口頸部は多条の横位沈線が巡る。体部上半に大型の突起を有する。126 は口唇部に中間を沈線で区画した山形突起を有する。127 は体部上半に大型の突起を有する。128 は口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。129 は 2 ｃ群の鉢であり、刻目の入った刻み目文が展開する。130・131 は 7 群の壺であり、体部に雲形文が展開する。131 は口唇部および口唇直下に B 突起が 4 単位配置される。132 は 3 ～ 8 群の無文の壺である。

・Ⅱａ層　6 群の深鉢 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 2 点、7 群の深鉢 24 点、鉢 11 点、浅鉢・皿 2 点、壺 1 点の計 41 点出土した。その内図化したのは 3 点である。133 は 7 群の深鉢であり、体部上半に突起を有する。134 は 7 群の鉢であり、体部上半に突起を有する。135 は 7 群の壺であり、口唇部および口唇直下に突起を有する。



図Ⅲ-3-1-25　第 1 遺物集中区　X=94, Y=80
各群の層位別出土割合グラフ

⑥グリッド X=94、Y =80

（図Ⅲ -3-1-25 ～ 29）

・Ⅱｆ層　2b 群の深鉢 6 点、3 群の深鉢 1 点、4 群の深鉢 2 点、鉢 2 点、注口土器 1 点、5 群の深鉢 3.5 点、6 群の深鉢 0.5 点、3 ～ 6 群の深鉢 24 点、3 ～ 8 群の鉢 2 点、壺 6 点、9a 群の深鉢 2 点、9b 群の深鉢 1 点、時期不明の鉢

1 点の計 52 点出土した。その内図化したのは 5 点である。136 は 2b 群の深鉢であり、体部は貼瘤と入組帯縄文が展開する。137 は、3 群の深鉢であり、体部に入組帯状文が展開する。138 は、5 群の深鉢であり、口縁上部に S 字状の沈線が連続して巡る。139 は、9a 群の深鉢であり、2 条の横位沈線の間に突瘤が施される。140 は、9b 群の鉢であり、口縁部に斜方向の格子状の沈線が巡る。

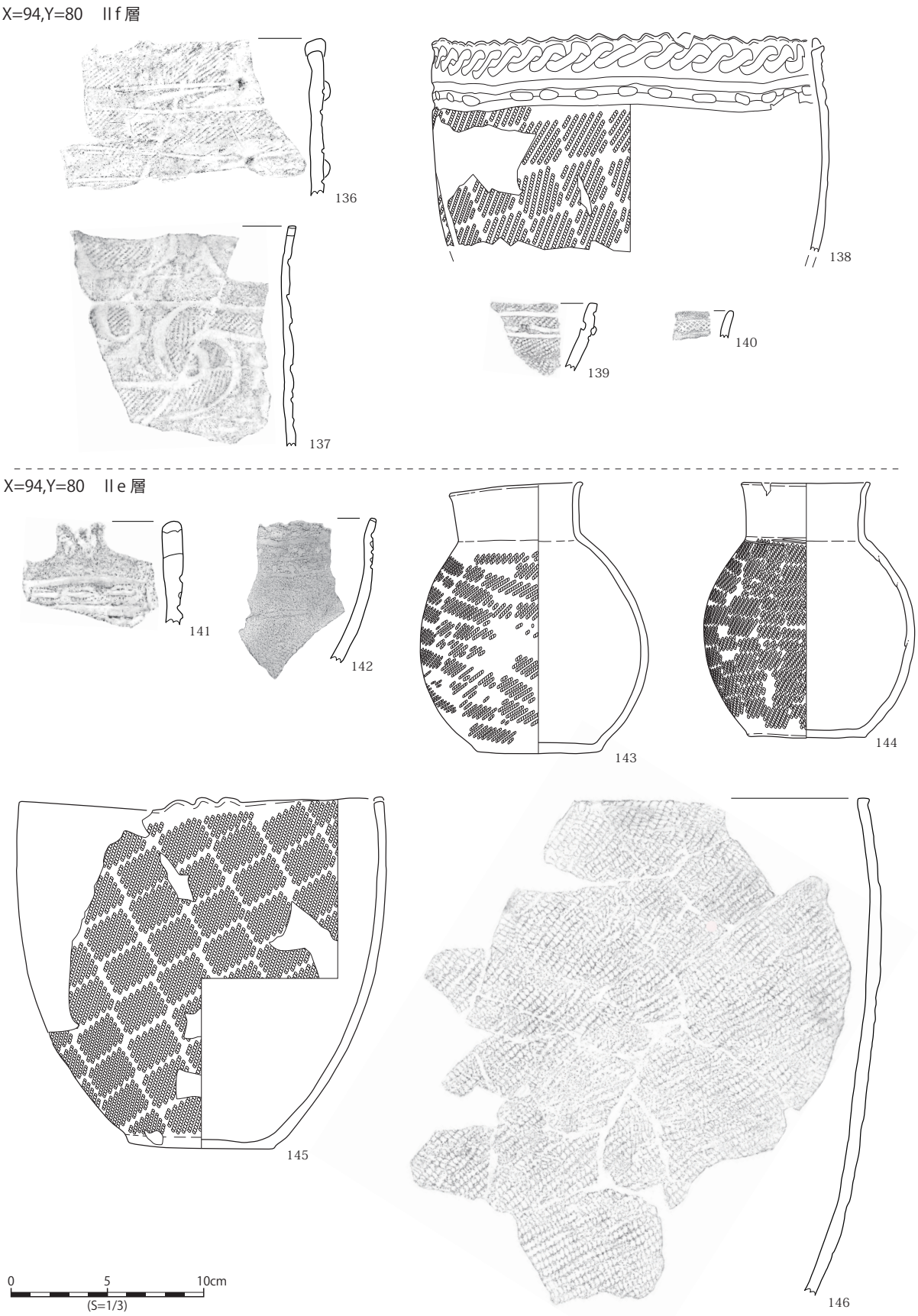
・Ⅱｅ層　2b 群の深鉢 3 点、2 ｃ群の深鉢 1 点、3 群の注口土器 1 点、4 群の深鉢 8 点、鉢 1 点、5 群の深鉢 8 点、6 群の深鉢 7 点、鉢 3 点、3 ～ 6 群の深鉢 21 点、鉢 1 点、7 群の鉢 3 点、浅鉢・皿 1 点、3 ～ 8 群の鉢 3 点、壺 13 点、9b 群の鉢 1 点の計 75 点が出土した。その内図化したのは 6 点である。141 は 2 ｃ群の深鉢であり、中間に刻みが入る大型の山形突起を有し、体部は横長の列点文が巡る。142 は 6 群の鉢であり、刺突文が 2 条巡る。143・144 は 3 ～ 8 群の粗製壺である。145 は 3 ～ 6 群の深鉢であり、口唇部に 1 箇所山形突起を有する。146 は 3 ～ 6 群の粗製深鉢である。

・Ⅱｄ層　2b 群の深鉢 1 点、4 群の深鉢 1 点、注口土器 2 点、5 群の深鉢 2 点、鉢 3 点、6 群の鉢 3 点、浅鉢・皿 2 点、3 ～ 6 群の深鉢 21 点、浅鉢・皿 1 点、7 群の深鉢 2 点、鉢 2 点、浅鉢・皿 1 点、壺 2 点、3 ～ 8 群の鉢 2 点、浅鉢・皿 1 点、壺 2 点、9b 群の深鉢 3 点の計 51 点出土した。その内図化したのは 9 点である。147 は、5 群の深鉢であり、口縁部に羊歯状文が巡る。148 は 7 群の深鉢であり、口縁部に 2 条の横位沈線が巡る。149 は 9b 群の深鉢であり、2 条の横位沈線間に波状沈線が不規則に連続する。150 は 6 群の台付鉢であり、口頸部に数条の横位沈線が巡り、その中の 1 条に列点文が巡る。151 は 5 群の鉢であり、体部上半に簡略化された羊歯状文が巡る。152 は 3 ～ 6 群の浅鉢・皿であり、内・外面にベンガラが塗布される。口唇部に山形突起を有し、口縁部に 2 条の沈線が巡る。153・154 は 3 ～ 8 群の粗製壺である。155 は 4 群の注口土器であり、注口下部に玉抱三叉文が施される。

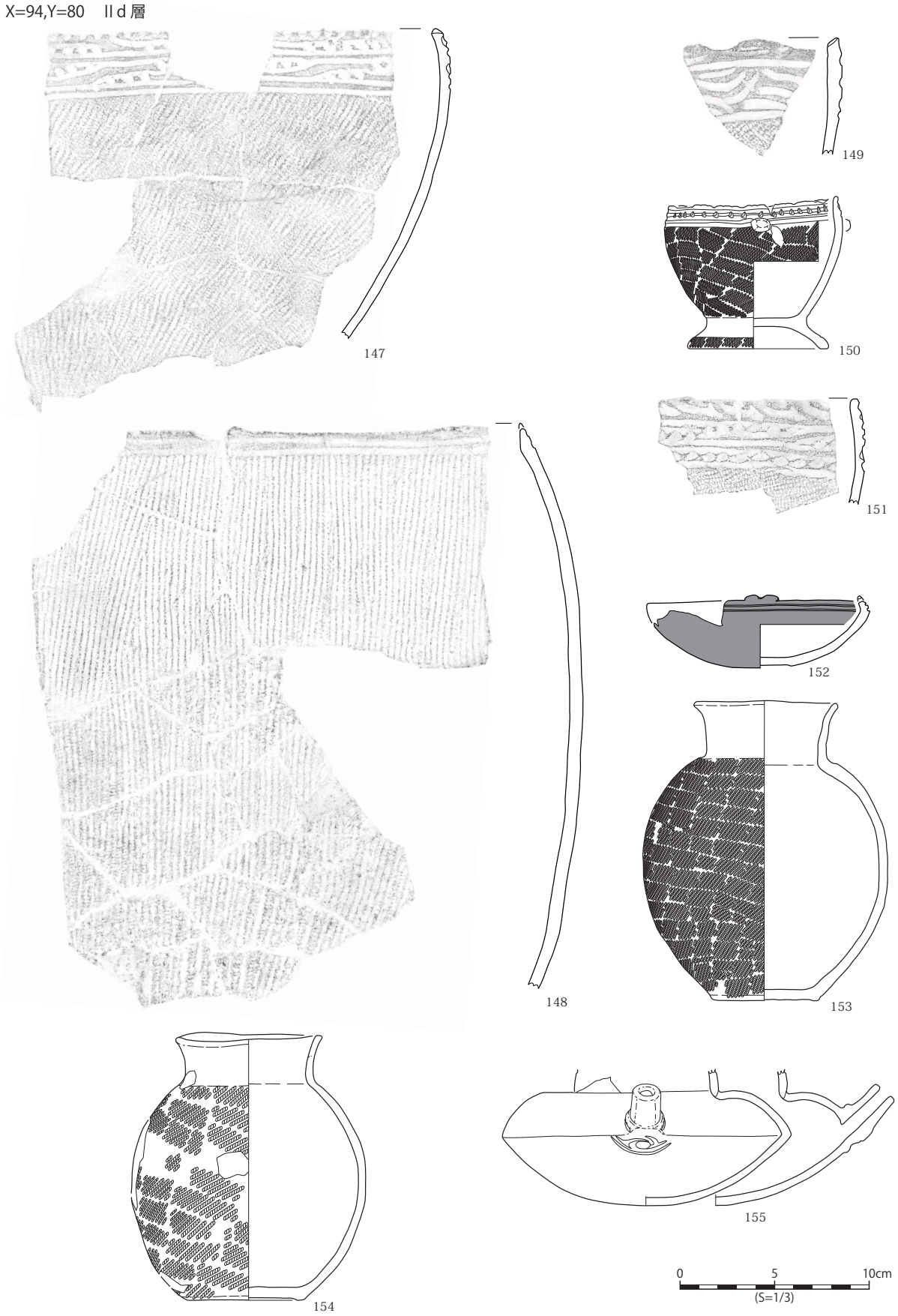
・Ⅱｃ層　4 群の深鉢 3 点、6 群の深鉢 2 点、鉢 7 点、浅鉢・皿 3 点、3 ～ 6 群の深鉢 17 点、壺 1 点、7 群の深鉢 8 点、鉢 4 点、浅鉢・皿 6 点（赤彩資料 1 点含む）、壺 3 点、8 群の深鉢 2 点、3 ～ 8 群の鉢 1 点、浅鉢・皿 3 点（赤彩資料 1 点含む）、壺 2 点の計 62 点出土した。その内図化したのは 3 点である。156・157 は 6 群の鉢であり、口頸部に簡略化された羊歯状文が巡る。157 の口唇直下には突起に沿う沈線が巡る。158 は 7 群の壺であり、口縁部に広めの横位沈線が巡る。

・Ⅱｂ層　5 群の深鉢 1 点、注口土器 1 点、6 群の鉢 5 点、壺 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 4 点、壺 1 点、7 群の深鉢 7 点、鉢 14 点、壺 1 点、8 群の深鉢 2 点、浅鉢・皿 1 点（赤彩資料）、3 ～ 8 群の浅鉢・皿 1 点、壺 2 点、9b 群の深鉢 1 点の計 42 点出土した。その内図化したのは 4 点である。159 は 7 群の深鉢であり、口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。160 は 9b 群の深鉢であり、体部には弧線文間に列点文が施される。161 は 7 群の壺であり、口唇部に中間に刻みのある大型の突起を有し、口唇直下に B 突起を有する。162 は 3 ～ 8 群の粗製壺である。

・Ⅱａ層　5 群の深鉢 1.5 点、6 群の深鉢 3.5 点、鉢 3 点、3 ～ 6 群の深鉢 7 点、7 群の深鉢 17 点、鉢 16 点、浅鉢・皿 1 点、壺 2 点、3 ～ 8 群の浅鉢・皿 3 点（赤彩資料 1 点含む）、壺 3 点、9b 群の深鉢 2 点の計 59 点出土した。その内図化したのは 5 点である。163 は 8 群の深鉢であり、口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。164 は 9b 群の深鉢であり、口唇直下にノの字状の沈線が巡り、体部上半に刺突文が 2 条巡る。165 ～ 167 は 7 群の鉢である。165・166 は口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。167 は口唇直下に刻目があり、その下に 2 条の横位沈線が巡り沈線間に B 突起を有する。頸部は無文であり、体部上半に数条の横位沈線が巡る。

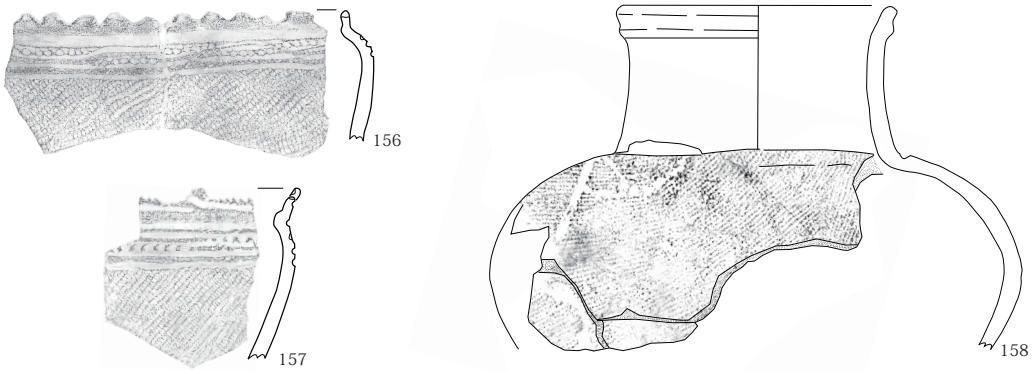


図Ⅲ-3-1-26　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（19）

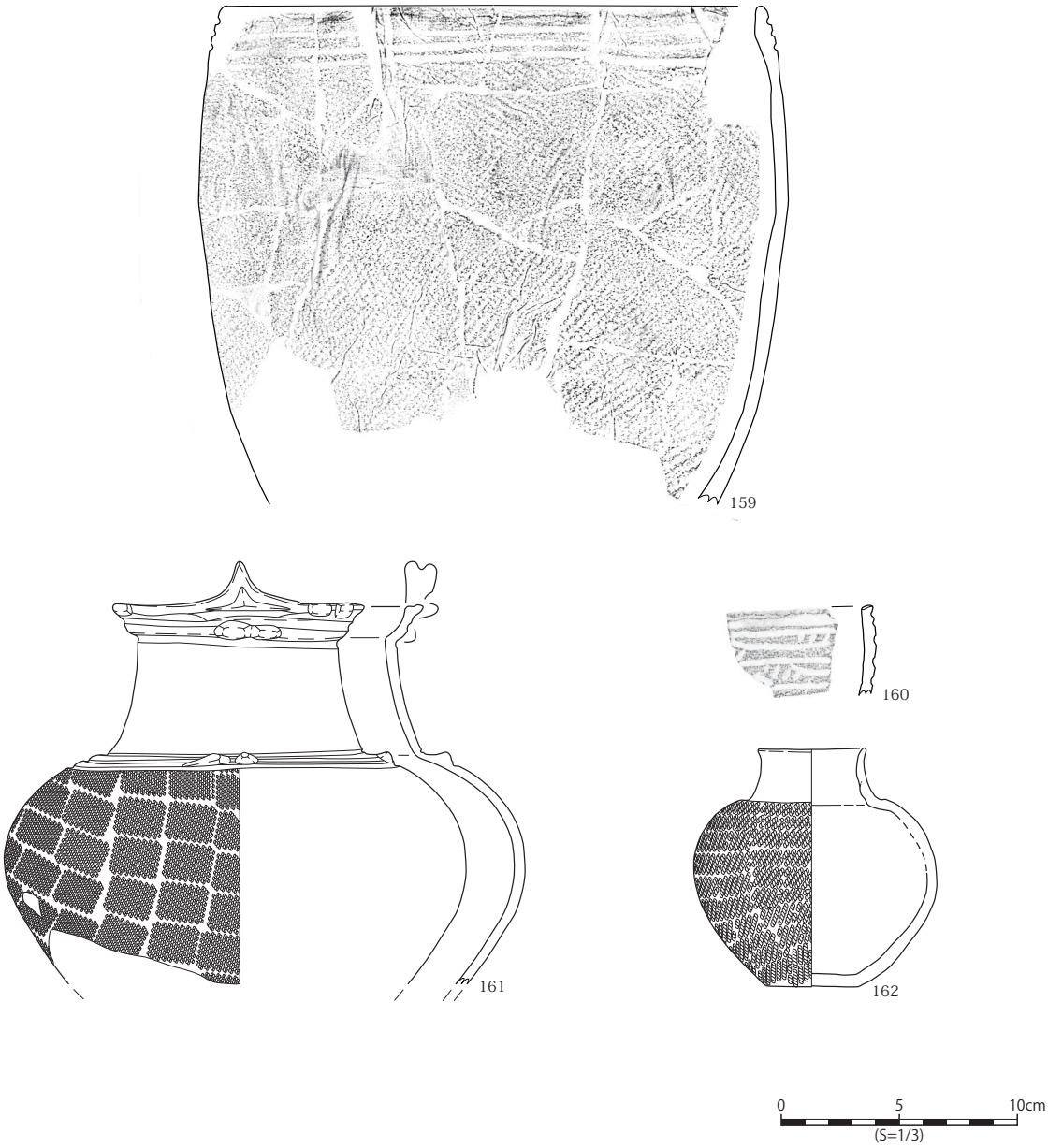


図Ⅲ-3-1-27　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（20）

X=94,Y=80　Ⅱc 層

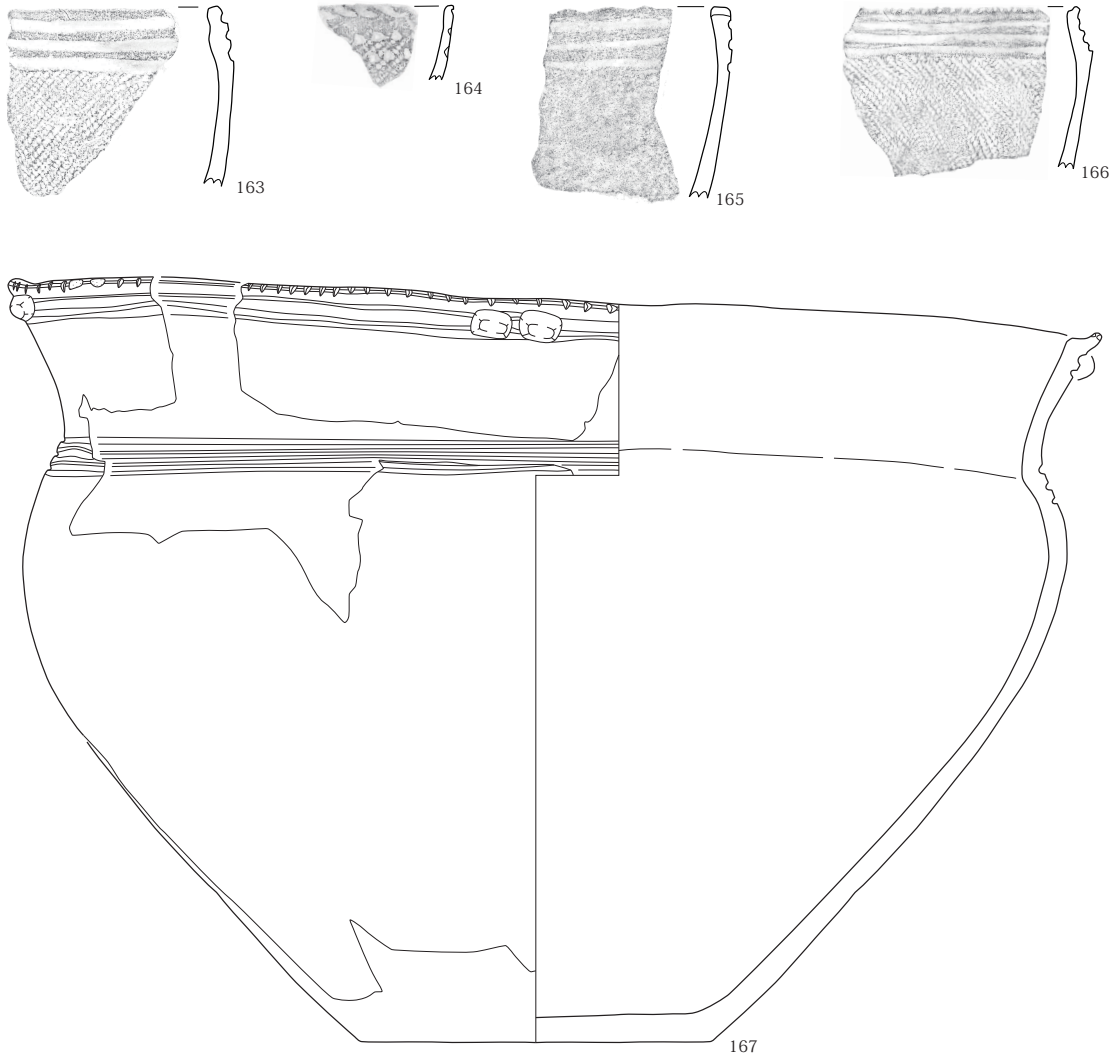


Ⅱb 層

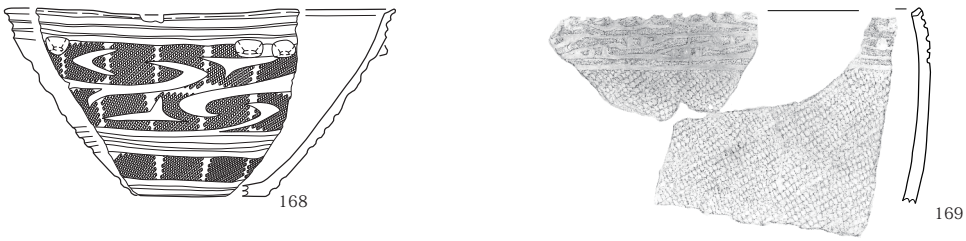


図Ⅲ-3-1-28　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（21）

X=94,Y=80　Ⅱa 層



X=94,Y=80　層位不明・カクラン



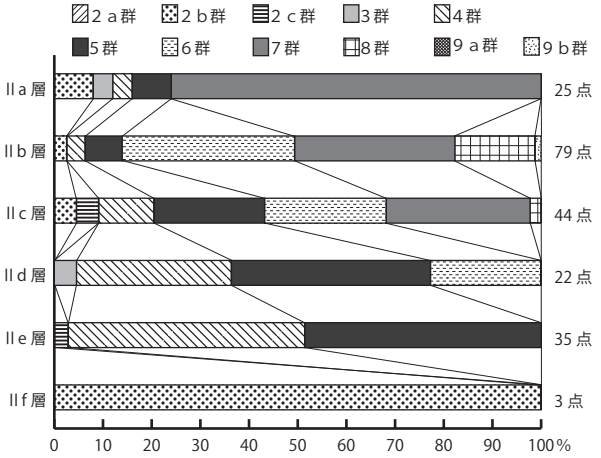
0　5　10cm
(S=1/3)

図Ⅲ-3-1-29　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（22）

その他層位不明・カクラン出土の深鉢１点、鉢１点の計２点を図化した。168 は７群の鉢であり、体部に雲形文が展開する。169 は５群の鉢であり、口縁部に羊歯状文が巡る。

⑦グリッド X=94、Y =82（図Ⅲ -3-30 ～ 33）

・Ⅱｆ層　2b 群の深鉢２点、注口土器１点、３～８群の壺２点の計５点出土した。その内図化したのは２点である。170 は４群の深鉢であり、口縁部に横Ｓ地文が巡り、その下の２条の沈線間に横長の列点文が巡る。171 は３～８群の壺であり、口頸上部に横位沈線が巡る。



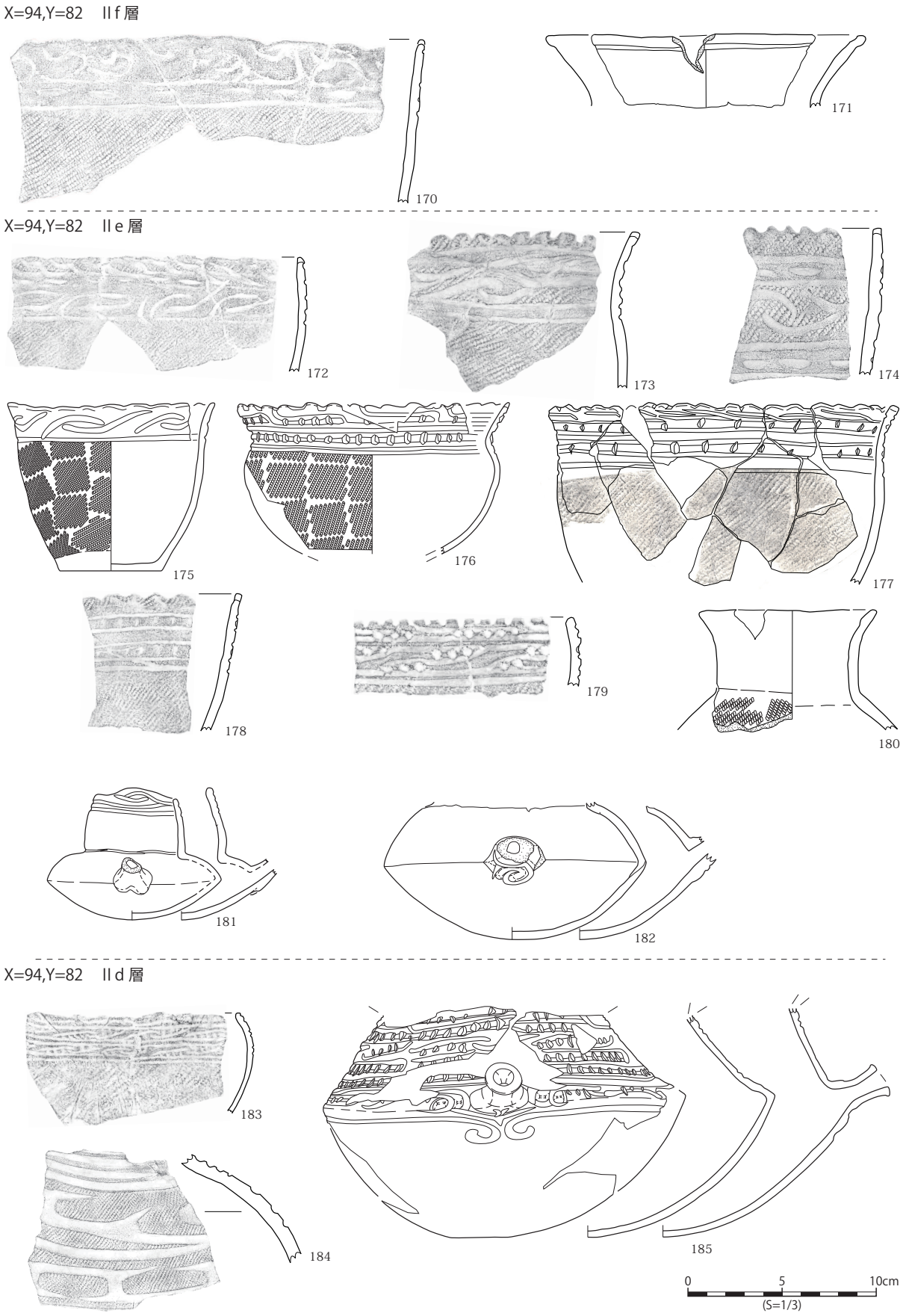
図Ⅲ-3-1-30　第１遺物集中区　X=94,Y=82
各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱｅ層　２ｃ群の深鉢１点､4 群の深鉢 14 点、鉢２点、注口土器１点、５群の鉢 17 点、３～６群の深鉢 10 点、３～８群の壺 11 点の計 56 点出土した。その内図化したのは 11 点である。172 ～ 174 は４群の深鉢であり、172 は口縁上部に横Ｓ字文が巡り、その下に横長の列点が巡る。体部上半は入組文が展開する。173 は口頸部に入組文が展開する。174 は体部に入組三叉文が展開し、上下に２条の横位沈線間に横長の列点文が巡る。175 は４群の鉢であり、口頸部に入組文が展開する。176 ～ 179 は５群の鉢である。176 は口頸部に横位沈線と列点文が展開する。177・178 は口頸部に横位沈線および列点文が巡る。179 は口縁部に羊歯状文が巡る。180 は３～８群の粗製壺である。181・182 は４群の注口土器であり、181 は口縁部に入組文が巡る。182 は注口下部に渦巻文が施される。

・Ⅱｄ層　３群の注口土器１点、４群の深鉢５点、鉢１点、注口土器１点、５群の深鉢２点、鉢１点、浅鉢･皿４点、注口土器２点、６群の深鉢２点、鉢２点、浅鉢･皿１点、３～８群の深鉢 10 点、浅鉢･皿３点、壺３点の計 38 点出土した。その内図化したのは３点である。183 は５群の鉢であり、口縁部に羊歯状文が巡る。184 は７群の壺であり、体部に雲形文が展開する。185 は５群の注口土器であり、体部上半に横位沈線と列点文が多段に巡る。

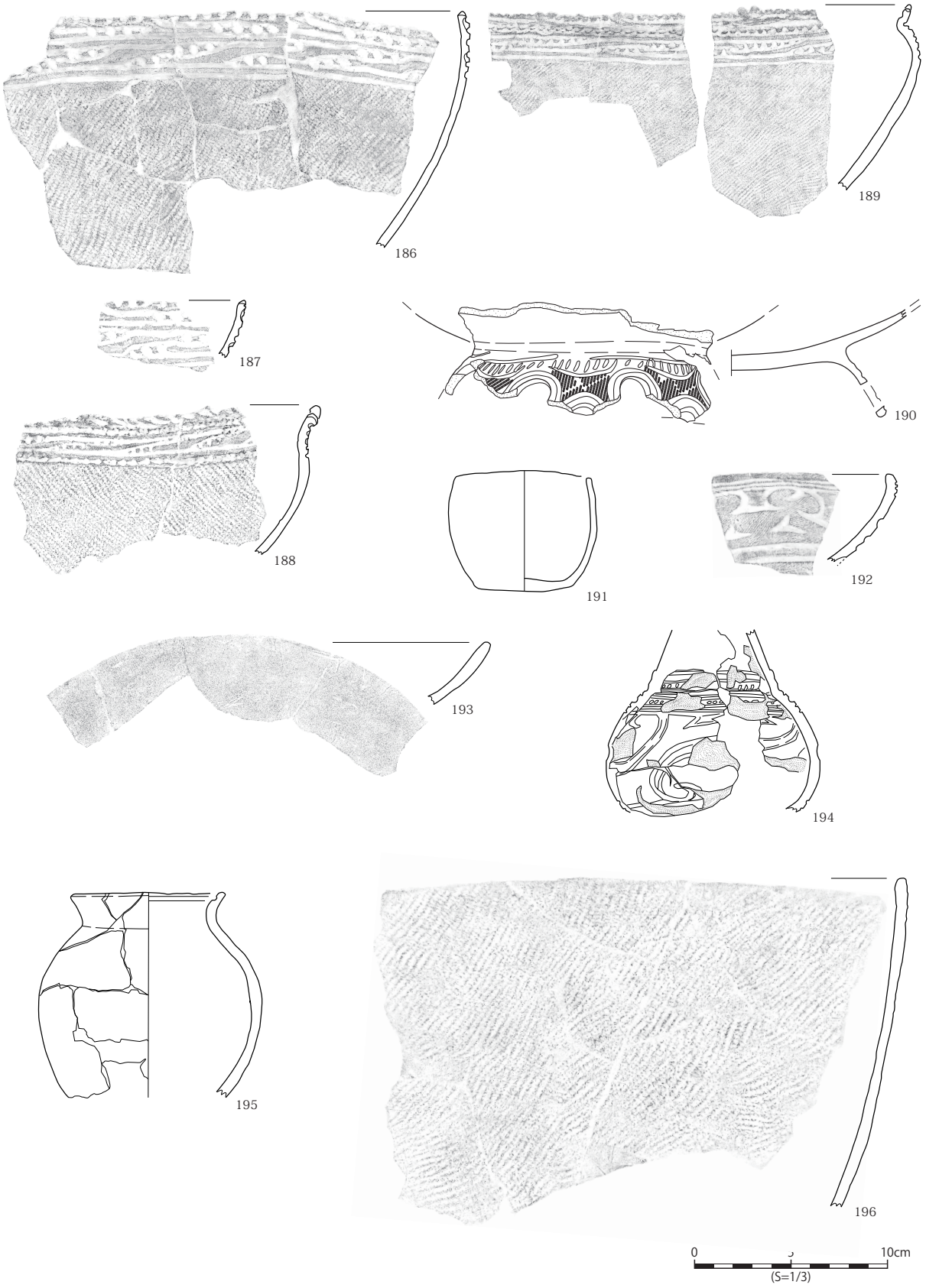
・Ⅱｃ層　2b 群の深鉢２点、２ｃ群の深鉢２点、４群の深鉢４点、鉢１点、５群の深鉢３点、鉢７点、６群の深鉢２点、鉢８点、浅鉢・皿１点、３～６群の深鉢１点、鉢１点、浅鉢・皿１点、壺１点、７群の深鉢４点、鉢８点、壺１点、８群の浅鉢・皿１点、３～８群の深鉢 16 点、壺４点の計 68 点出土した。その内図化したのは 11 点である。186 は５群の深鉢であり、口縁部に羊歯状文が巡る。187・188 は５群の鉢であり、口縁部に羊歯状文が巡る。189 は６群の鉢であり、口頸部に簡略化された羊歯状文が巡る。190 は 9b 群の台付鉢であり､台部は横位沈線と刺突文が断続的に巡り、円形の透かしが施される。191 は３～６群の無文の鉢である。192 は６群の浅鉢であり、体部に雲形文が展開する。193 は３～６群の無文の浅鉢・皿である。194 は５群の壺であり、内・外面にベンガラが塗布される。体部上半に横位沈線と列点文が数条巡る。体部には横位のＳ字状文が施される。195 は３～６群の無文の壺である。196 は３～６群の粗製深鉢である。

・Ⅱｂ層　2b 群の深鉢２点、４群の深鉢１点、注口土器２点、５群の深鉢１点、鉢２点、浅鉢・皿３点、６群の深鉢１点、鉢 26 点、壺１点（赤彩資料）、３～６群の壺２点、７群の深鉢２点、鉢 18 点、浅鉢・皿４点、壺２点（赤彩資料１点含む）、８群の深鉢 12 点、浅鉢・皿１点（赤彩資料）、



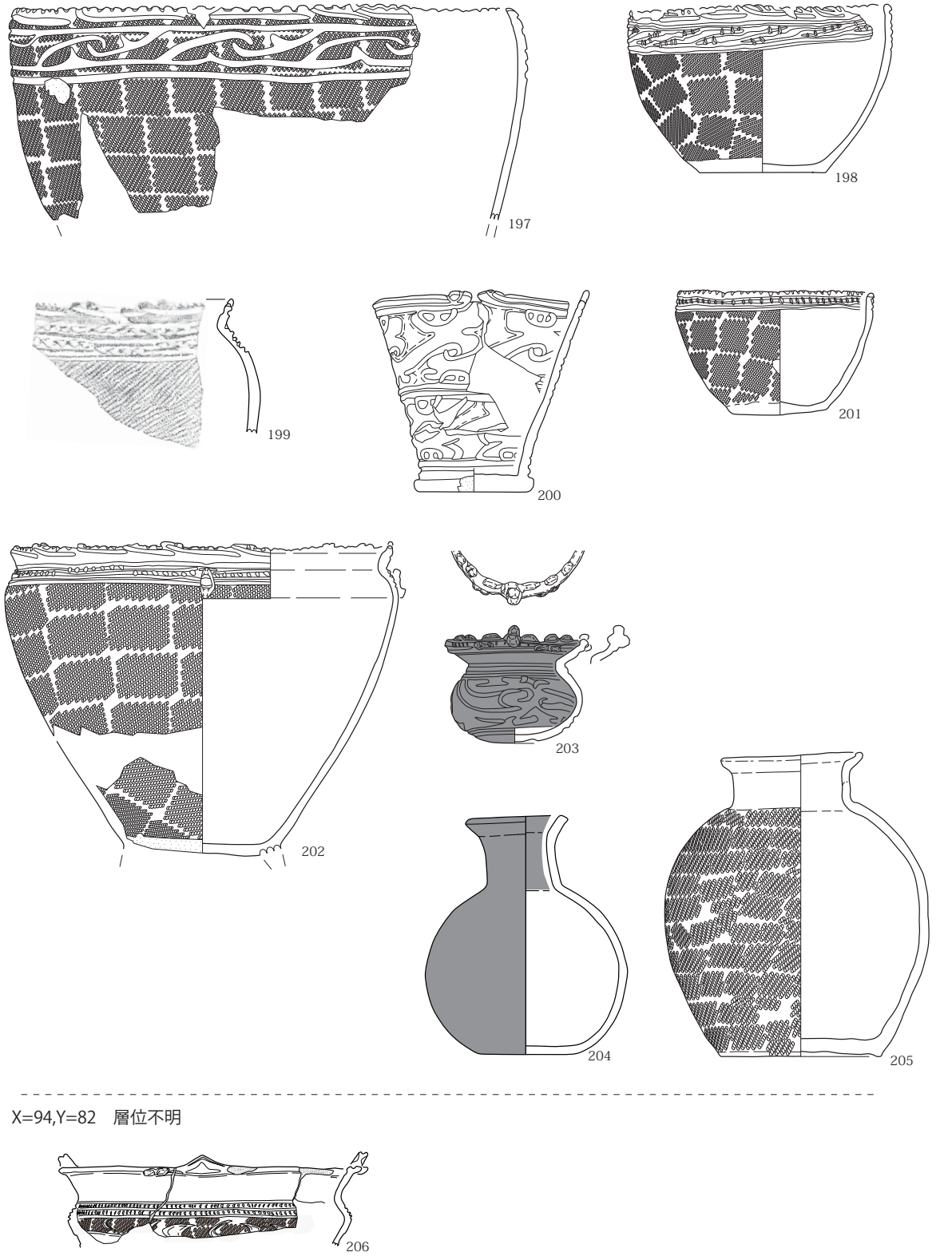
図Ⅲ-3-1-31　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（23）

X=94,Y=82　Ⅱc 層



図Ⅲ3-1-32　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（24）

X=94,Y=82　Ⅱb 層



図Ⅲ-3-1-33　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（25）

3 ～ 8 群の深鉢 17 点、鉢 2 点、壺 5 点、9b 群の鉢 1 点の計 105 点出土した。その内図化したのは 9 点である。197 は 5 群の深鉢であり、口縁部に枝分かれする入組文が巡る。198 は 5 群の鉢であり、口縁部に羊歯状文が巡る。199 ～ 201 は 6 群の鉢である。199 は口唇部に B 突起を有し、口頸部に簡略化された羊歯状文が巡る。200 は体部中央に横位沈線が巡り、上半下半それぞれに雲形文が展開する。201 は口縁部に横位沈線および列点文が巡る。202 は 6 群の台付鉢であり、口唇直下に突起に沿うノの字状の沈線が巡る。口頸部は簡略化された羊歯状文が巡り、体部上半に B 突起を有する。203 は 6 群の壺であり、外面にベンガラが塗布される。口唇部および口唇直下に装飾的な突起を有し、体部は雲形文が展開する。204 は 3 ～ 6 群の無文の壺であり、内・外面にベンガラが塗布される。205 は 3 ～ 8 群の粗製の壺である。

・Ⅱａ層　2b 群の深鉢 2 点、3 群の注口土器 1 点、4 群の深鉢 1 点、5 群の深鉢 2 点、7 群の深鉢 7 点、鉢 9 点、浅鉢・皿 1 点、壺 2 点、3 ～ 8 群の鉢 2 点の計 27 点出土した。

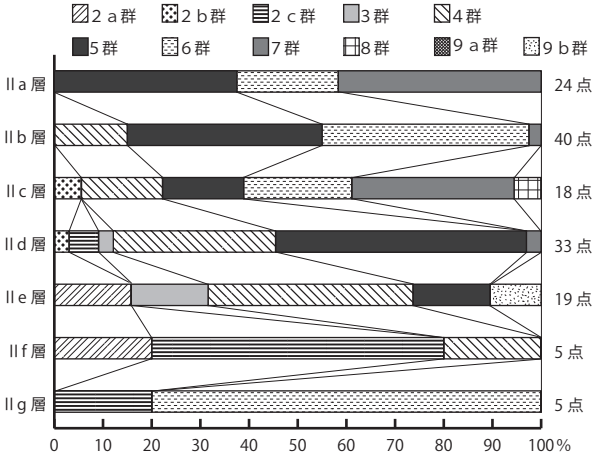
その他層位不明の鉢 1 点を図化した。206 は 7 群の鉢であり、口唇部に中間に刻みのある山形突起と両脇の口唇直下に B 突起を有する。体部は雲形文が展開する。

⑧グリッド X=94、Y =84（図Ⅲ -3-1-34 ～ 36）

・Ⅱｇ層　2 ｃ群の注口土器 1 点、6 群の鉢 4 点、3 ～ 6 群の深鉢 4 点の計 9 点出土した。

・Ⅱｆ層　2a 群の鉢 1 点、2 ｃ群の深鉢 2 点、香炉 1 点、4 群深鉢 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 6 点の計 11 点出土した。

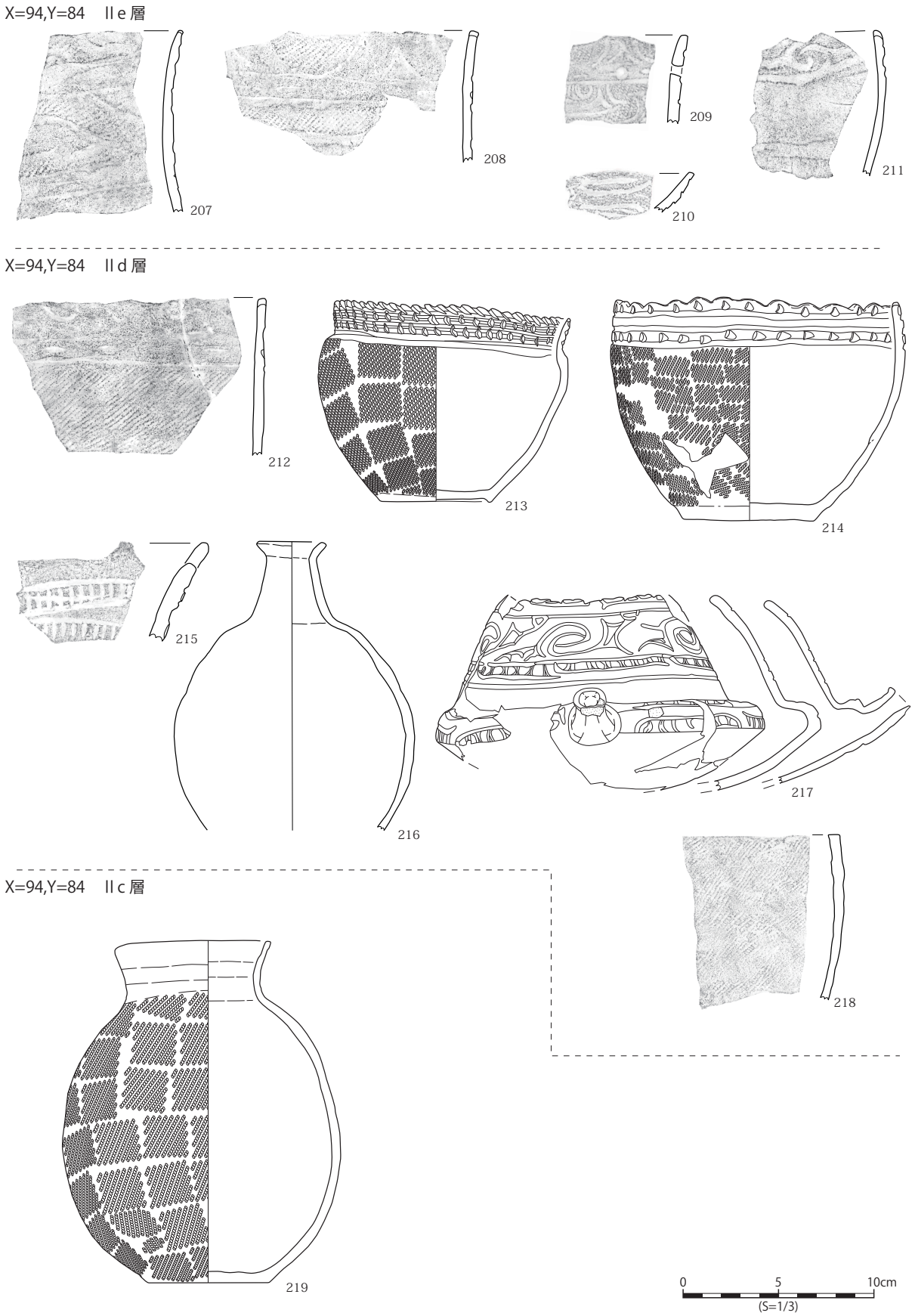
・Ⅱｅ層　2a 群の鉢 3 点、3 群の深鉢 3 点、4 群の深鉢 7 点、注口土器 1 点、5 群の深鉢 2 点、鉢 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 9 点、9b 群の鉢 2 点の計 28 点出土した。その内図化したのは 5 点である。207 ～ 209 は 3 群の深鉢であり、体部に入組帯状文が展開する。209 は口縁部に穿孔痕を有する。210 は 9b 群の鉢であり、口縁部および体部に弧状沈線が巡る。211 は 4 群の注口土器であり、口縁部に入組三叉文が施される。



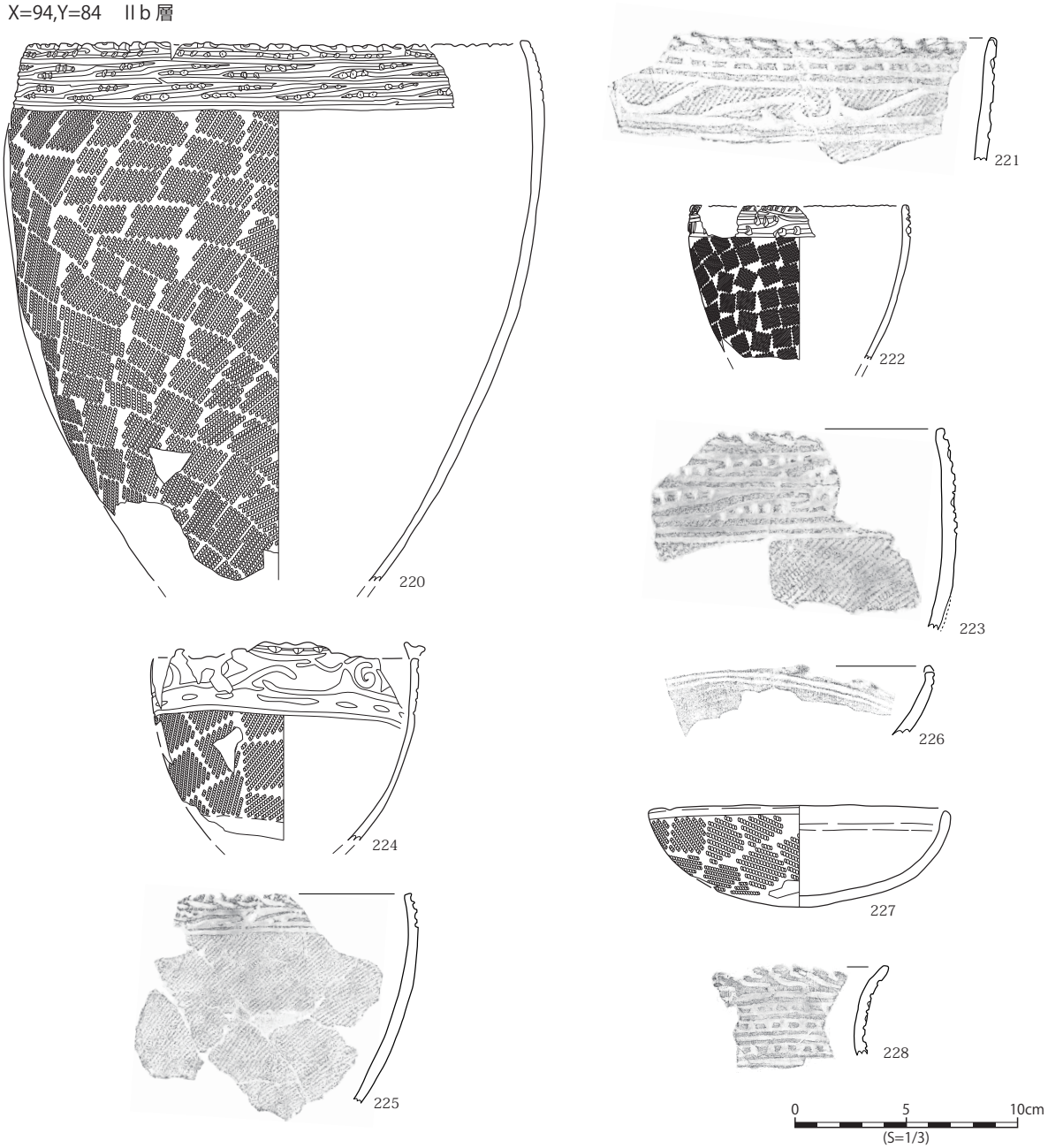
図Ⅲ-3-1-34　第 1 遺物集中区　X=94, Y=84
各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱｄ層　2b 群の深鉢 1 点、2 ｃ群の深鉢 1 点、鉢 1 点、3 群の深鉢 1 点、4 群の深鉢 11 点、5 群の深鉢 12 点、鉢 4 点、注口土器 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 13 点、鉢 2 点、壺 2 点、7 群の鉢 1 点、3 ～ 8 群の鉢 3 点の計 53 点出土した。その内図化したのは 7 点である。212 は 4 群の深鉢であり、口縁部に半円状の沈線が巡り、体部上半に 2 条の横位沈線間に横長の列点文が巡る。213 は 5 群の鉢であり、口唇直下にノの字状の沈線が巡り、口頸部に列点文が施された横位沈線が 2 条巡る。214 は 5 群の鉢であり、口縁部に列点文が施された横位沈線が巡る。215 は 2 ｃ群の鉢であり、体部は刻目の帯状文が展開する。216 は 3 ～ 6 群の無文の壺である。217 は 5 群の注口土器であり、体部上半に菱形を形成する入組文が展開し、その下と体部下半には羊歯状文が施される。218 は 3 ～ 6 群の粗製深鉢である。

・Ⅱｃ層　2b 群の注口土器 1 点、4 群の深鉢 3 点、5 群の鉢 1 点、壺 2 点、6 群の深鉢 4 点、3 ～ 6 群の深鉢 12 点、壺 1 点、7 群の浅鉢・皿 6 点、8 群の深鉢 1 点の計 31 点出土した。その内図



図Ⅲ-3-1-35　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（26）



図Ⅲ-3-1-36　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（27）

化したのは 1 点である。219 は 3 ～ 6 群の粗製壺である。

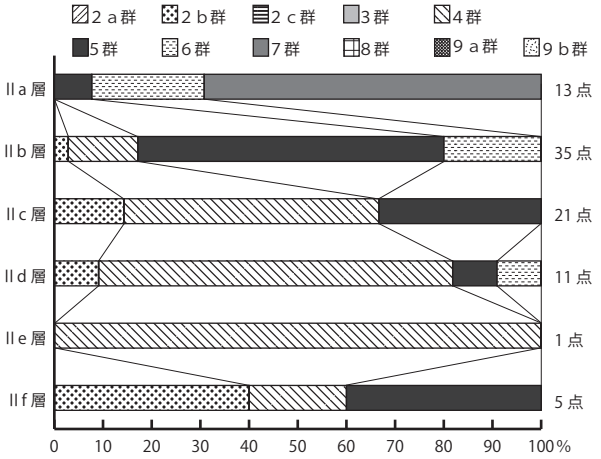
・Ⅱb 層　4 群の深鉢 6 点、5 群の深鉢 5 点、鉢 9 点、浅鉢・皿 1 点、壺 1 点、6 群の深鉢 5 点、鉢 12 点、3 ～ 6 群の深鉢 14 点、7 群の浅鉢・皿 1 点、3 ～ 8 群の鉢 2 点、浅鉢・皿 1 点、壺 4 点の計 61 点出土した。その内図化したのは 9 点である。220・221 は 5 群の深鉢であり、220 は口縁部に羊歯状文が巡る。221 は口縁部は沈線間を区画する刻目文が巡り、体部は入組三叉文が展開する。222・223・225・228 は 5 群の鉢である。222・223・225 は口縁部に羊歯状文が巡る。228 は口唇直下に突起に沿うノの字状の沈線が巡り、口頸部は沈線を区画する刻目文が 3 段巡る。

224 は 4 群の深鉢であり、口縁部に入組三叉文および横長の列点文が巡る。226 は 5 群の浅鉢・皿であり、口縁部に 2 条の横位沈線が巡る。227 は 3 ～ 8 群の粗製皿である。

・Ⅱａ層　５群の深鉢４点、鉢５点、６群の鉢５点、３～６群の深鉢３点、７群の深鉢２点、鉢５点、浅鉢・皿２点、壺１点、３～８群の鉢１点、壺１点の計 29 点出土した。

⑨グリッド X=94、Ｙ =86（図Ⅲ -3-1-37 ～ 39）

・Ⅱｆ層　2b 群の壺 0.5 点、注口土器 1.5 点、4 群の注口土器１点、５群の鉢２点、３～６群の深鉢２点、壺１点の計８点出土した。その内図化したのは２点である。229 は 2b 群の壺か注口土器であり、横位の条痕文が３条巡る。230 は 2b 群の注口土器であり、口縁部から体部にかけて貼瘤間を結ぶ多条沈線が菱形状に巡る。



図Ⅲ-3-1-37　第１遺物集中区　Ｘ94：Ｙ86、各群の層位別出土割合グラフ

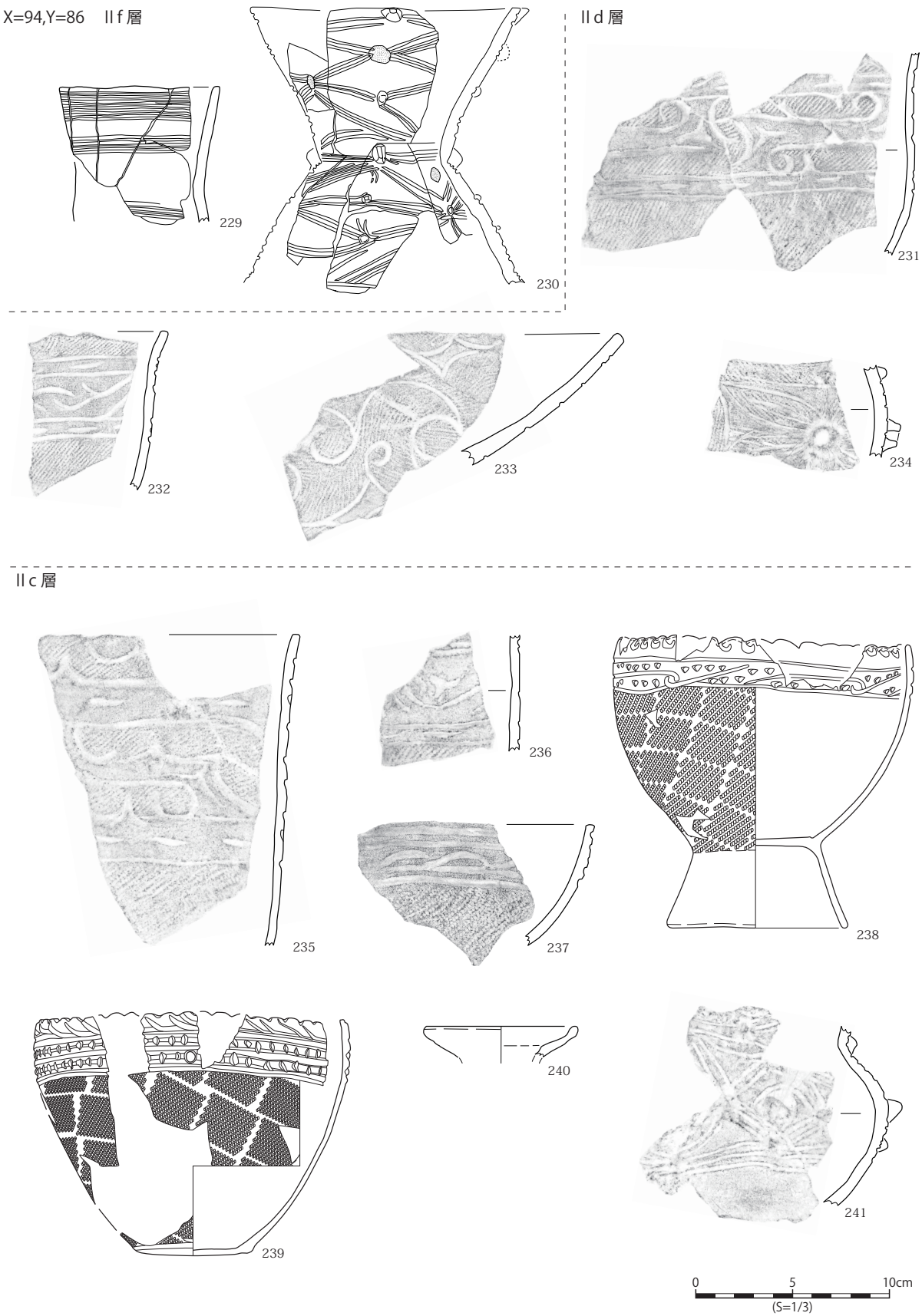
・Ⅱｅ層　４群の深鉢１点、３～６群の深鉢５点、壺１点の計７点出土した。

・Ⅱｄ層　2b 群の浅鉢・皿１点、４群の深鉢６点、鉢１点、注口土器１点、５群の壺１点、６群の鉢１点、３～６群の深鉢８点、壺１点、３～８群の壺２点の計 22 点出土した。その内図化したのは４点である。231 は３群の深鉢であり、体部に入組帯状文が展開する。232 は４群の深鉢であり、口唇部に山形突起を有し、体部上半には入組三叉文が巡り、その上下には横長の列点文が施された横位沈線により区画されている。233 は３群の浅鉢であり、体部は菱形を形成する入組文が展開する。234 は 2b 群の壺か注口土器であり、体部には帯状文が展開する。

・Ⅱｃ層　2b 群の深鉢２点、壺１点、４群の深鉢 10 点、鉢１点、５群の深鉢５点、鉢２点、３～６群の深鉢７点、注口土器１点、３～８群の壺２点の計 31 点出土した。その内図化したのは７点である。235 は４群の深鉢であり、体部に入組帯状文が展開する。236 は４群の深鉢であり、体部に入組文が巡る。237 は４群の鉢であり、口縁部に横位沈線が巡り、間隔が広い沈線間に半円状の沈線が連続する。238 は５群の台付鉢であり、口縁部に簡略化された羊歯状文が巡る。239 は５群の鉢であり、口唇直下に下部が繋がるノの字状沈線が巡り、口縁部に横位沈線および列点文が巡る。240 は３～８群の無文の壺である。241 は 2b 群の注口土器であり、貼瘤間に多条沈線が巡る。

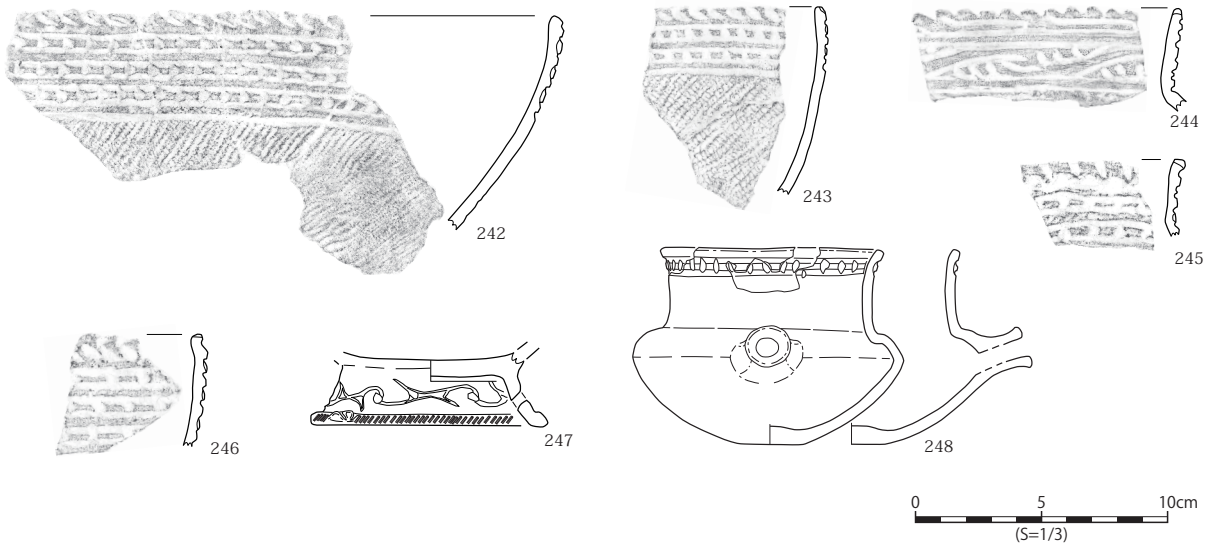
・Ⅱｂ層　2b 群の香炉形土器１点、４群の深鉢５点、５群の深鉢３点、鉢 18 点、注口土器１点、６群の鉢５点、浅鉢･皿２点、３～６群の深鉢６点、鉢２点、３～８群の壺３点の計 46 点出土した。その内図化したのは７点である。242 ～ 246 は５群の鉢である。242・243・245・246 は口唇直下にノの字状の沈線が巡り、口縁部には間に列点文が施された横位沈線が数段巡る。244 は口頸部に羊歯状文が巡る。247 は５群の台付鉢であり、台部は菱形を形成する入組文が巡り、入組文が連結する箇所に円状の透かしと下端に縄文が施される。248 は５群の注口土器であり、口縁部に横位沈線および列点文が巡る。

・Ⅱａ層　５群の鉢１点、６群の鉢２点、浅鉢･皿１点、３～６群の壺１点、７群の深鉢４点、鉢、３点、浅鉢・皿２点の計 14 点出土した。



図Ⅲ-3-1-38　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（28）

X=94,Y=86　Ⅱb 層



図Ⅲ-3-1-39　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（29）

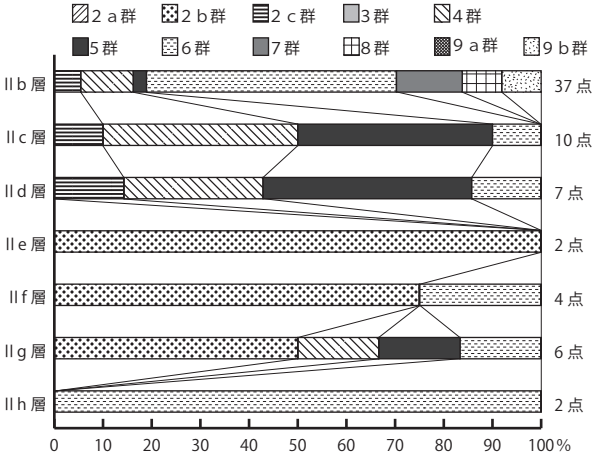
⑩グリッド X=96、Y =82（図Ⅲ -3-1-40・41・43）

・Ⅱｇ層　2b 群の深鉢３点、４群の鉢１点、５群の深鉢１点､6 群の鉢１点の計６点出土した。

・Ⅱｆ層　2b 群の深鉢３点、６群の浅鉢・皿１点、３～６群の鉢１点の計５点出土した。

・Ⅱｅ層　2b 群の深鉢１点、鉢１点、４群の注口土器１点の計３点出土した。その内図化したのは１点である。249 は４群の注口土器であり、体部上半に弧状の沈線が施される。

・Ⅱｄ層　２ｃ群の深鉢１点､4 群の深鉢１点、鉢１点、５群の深鉢１点、浅鉢・皿１点、注口土器１点、６群の鉢１点、３～８群の深鉢６点の計 13 点出土した。その内図化したのは２点である。250 は５群の注口土器であり、頸部には多条の横位沈線および列点文が巡り、体部上半に三叉文が巡る。251 は３～８群の粗製深鉢である。

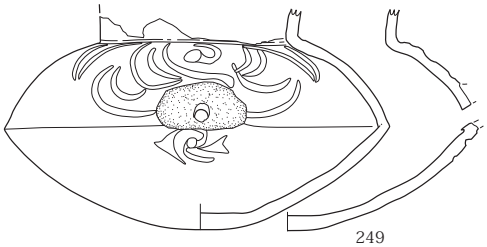


図Ⅲ-3-1-40　第１遺物集中区　X=96,Y=82
各群の層位別出土割合グラフ

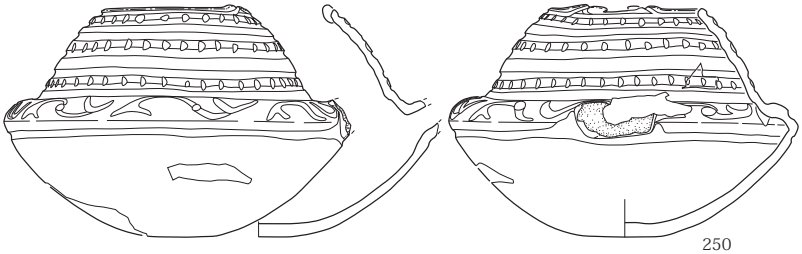
・Ⅱｃ層　２ｃ群の鉢１点、４群の鉢４点、５群の深鉢４点、６群の浅鉢・皿１点、３～８群の深鉢８点、鉢１点の計 19 点出土した。その内図化したのは３点である。252 は４群の台付鉢であり、口唇部に山形突起が断続的に配置され、口頸部は入組文と上下に２条の横位沈線が巡る。253 は５群の鉢であり、口縁部に横位沈線および列点文が巡る。254 は４群の浅鉢であり、体部には不規則な弧状沈線が巡る。

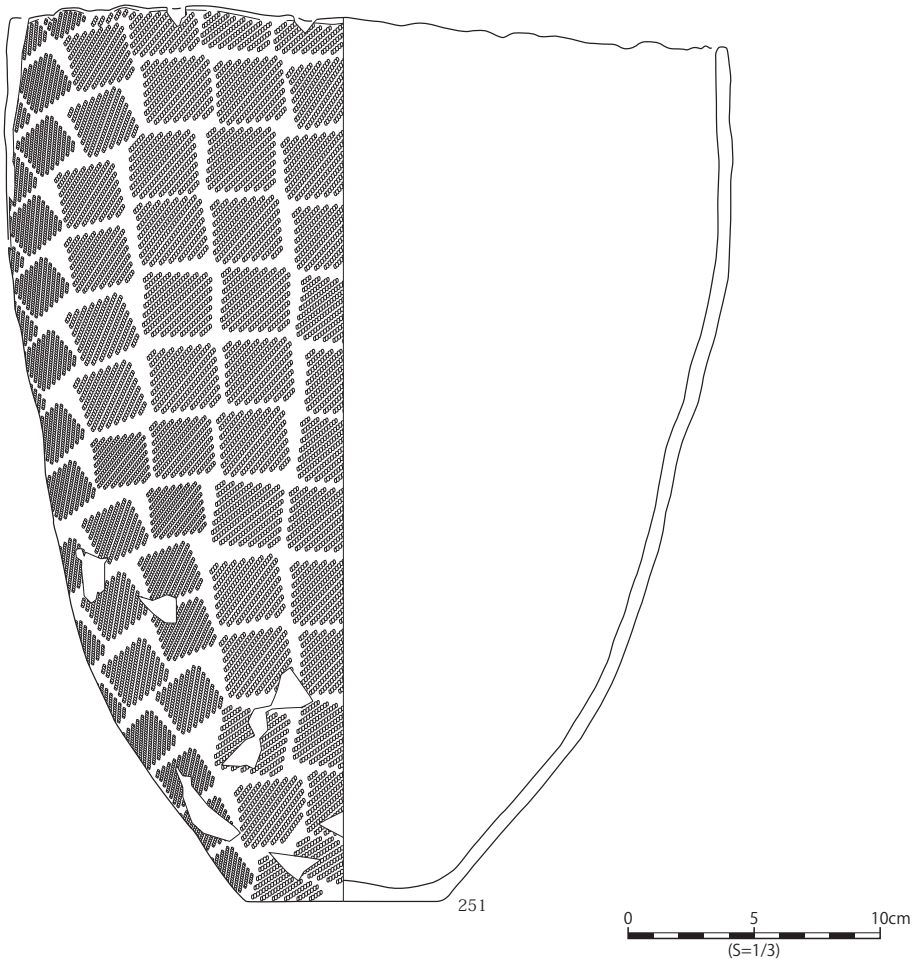
・Ⅱｂ層　２ｃ群の鉢１点、注口土器１点、４群の深鉢２点、鉢１点、浅鉢･皿１点、５群の鉢１点、６群の鉢 13 点、浅鉢・皿６点、７群の鉢２点、浅鉢・皿１点、壺２点、８群の浅鉢・皿３点（赤彩資料２点含む)、３～８群の深鉢 11 点、9b 群の深鉢２点、鉢１点の計 48 点出土した。その内図化したのは３点である。255 は 9b 群の深鉢であり、口唇直下と体部上半下部を刺突文と横位沈線で区

X=96,Y=82　Ⅱe 層



Ⅱd 層





図Ⅲ-3-1-41　第 1 遺物集中区・分析グリッド出土土器（30）

画し、間を２条連なった弧状沈線が巡る。256 は６群の浅鉢であり、体部は雲形文が展開する。257 は、9b 群の浅鉢・皿であり、口唇直下に刻目が施され、口縁部は細い横位沈線が巡る。

⑪グリッド X=98、Y =82（図Ⅲ -3-1-42・43）

・Ⅱｈ層　６群の深鉢が２点出土した。

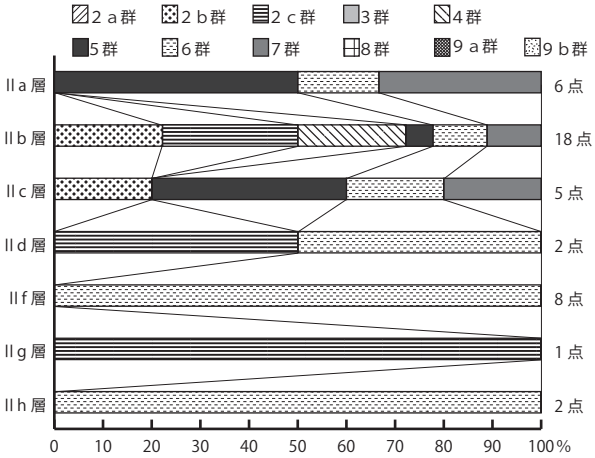
・Ⅱｇ層　２ｃ群の深鉢が１点出土した。

・Ⅱｆ層　６群の深鉢３点、鉢５点の計８点出土した。

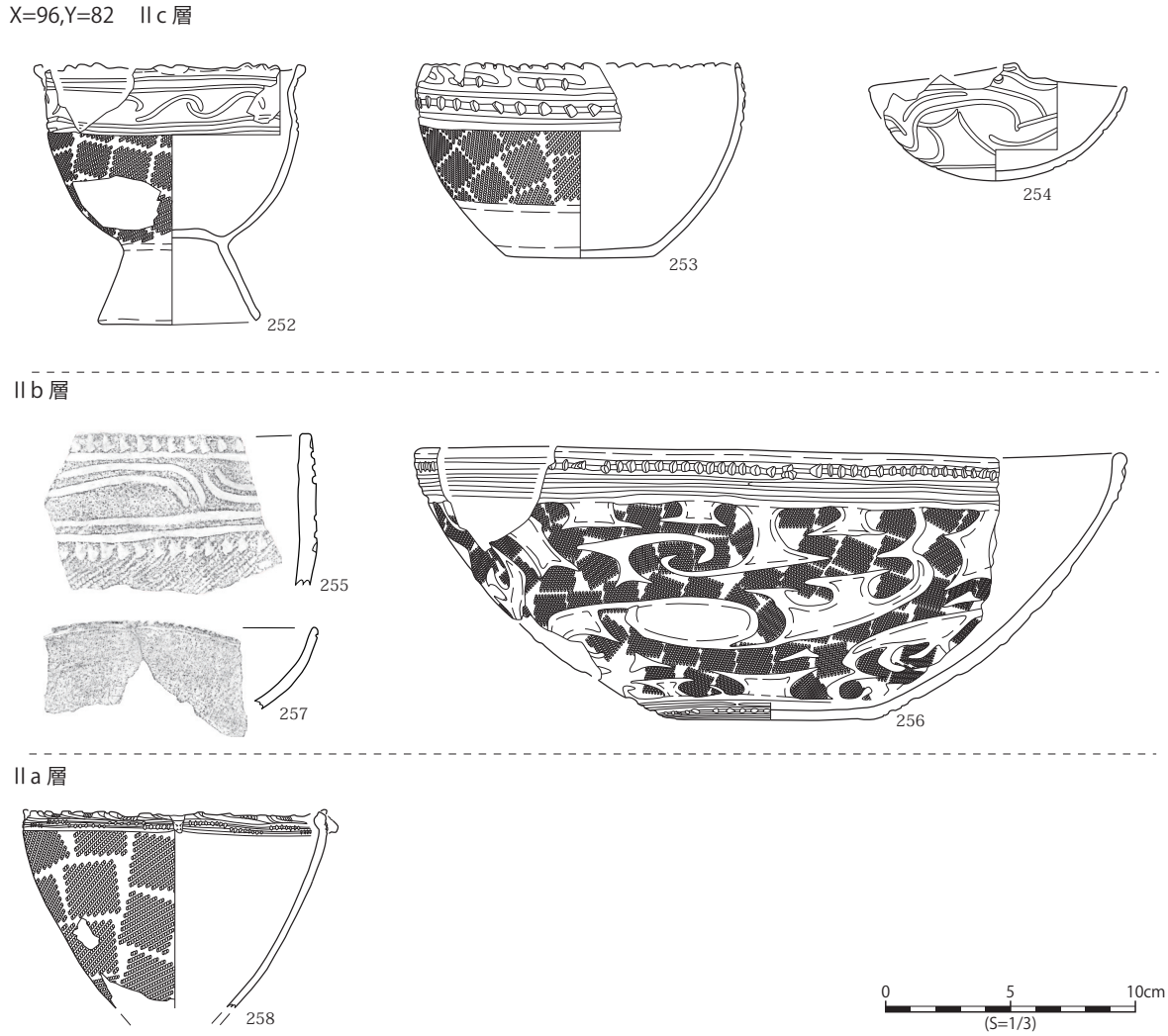
・Ⅱｄ層　２ｃ群の深鉢１点、６群の鉢１点の計２点出土した。

・Ⅱｃ層　2b 群の深鉢１点、５群の鉢２点、６群の鉢１点、７群の深鉢１点、３～８群の深鉢３点の計８点出土した。

・Ⅱｂ群　2b 群の壺１点、香炉３点、２ｃ群の深鉢５点、４群の深鉢４点、５群の鉢１点、



図Ⅲ-3-1-42　第１遺物集中区　X=98,Y=82
各群の層位別出土割合グラフ



図Ⅲ-3-1-43　第１遺物集中区・分析グリッド出土土器（31）

6 群の浅鉢・皿 2 点、7 群の深鉢 2 点、3 ～ 8 群の鉢 1 点、壺 1 点の計 20 点出土した。

・Ⅱａ層　5 群の鉢 2 点、注口土器 1 点、6 群の鉢 1 点、浅鉢・皿 1 点、7 群の鉢 2 点の計 7 点出土した。その内図化したのは 1 点である。258 は 6 群の鉢であり、口唇直下に突起に沿うノの字状の沈線が巡り、口頸部は簡略化された羊歯状文が巡る。

(2) 分析グリッド外

⑫グリッド X=90、Y =76（図Ⅲ -3-1-44）

・Ⅱｅ層　259 は 3 ～ 8 群の無文の壺である。

・Ⅱｄ層　260 は 7 群の鉢であり、口頸部と体部上半に B 突起を有する。

⑬グリッド X=90、Y =78（図Ⅲ -3-1-44）

・Ⅱｆ層　261 は 2b 群の深鉢の波状口縁部である。

⑭グリッド X=90、Y =80（図Ⅲ -2-7-1-44）

・Ⅱｄ層　262 は 1 群の深鉢の口縁部である。隆帯を伴う M 字状の大型突起で、隆帯に沿って押圧縄文を施し、その間に馬蹄形の押圧縄文を充填している。263 は 7 群の鉢であり、体部上半には 2 条の横位沈線間に B 突起が施され、その下に雲形文が展開される。264 は、7 群の台付鉢であり、口唇部に中間を沈線で区画した山形突起と両脇の口唇直下に B 突起を有する。体部上半は大型の突起を有する。

⑮グリッド X=90、Y =84（図Ⅲ -3-1-44）

・Ⅱｅ層　265 は 3 ～ 8 群の壺である。体部は横位回転の斜縄文が施される。

・Ⅱｂ層　266・267 は 3 ～ 8 群の粗製深鉢である。

⑯グリッド X=90、Y =86（図Ⅲ -3-1-45）

・Ⅱｅ層　268 は 9b 群の深鉢であり、口縁部に大きめの列点文が 2 条巡る。

・Ⅱｃ層　269 は 2a 群の鉢であり、口唇直下に列点文が巡る。

・Ⅱｂ層　270 は 6 群の台付鉢であり、口頸部に簡略化された羊歯状文が巡る。271 は、4 群の注口土器であり、頸部と体部上半に菱形を形成する入組文が巡る。

・Ⅱａ層　272 は 3 ～ 8 群の香炉形土器であり、装飾的な突起および沈線が施される。

⑰グリッド X=90、Y =88（図Ⅲ -3-1-45）

・Ⅱｂ層　273 は 4 群の香炉形土器であり、体部は J 字文および三叉文が施される。

⑱グリッド X=92、Y =76（図Ⅲ -3-1-45）

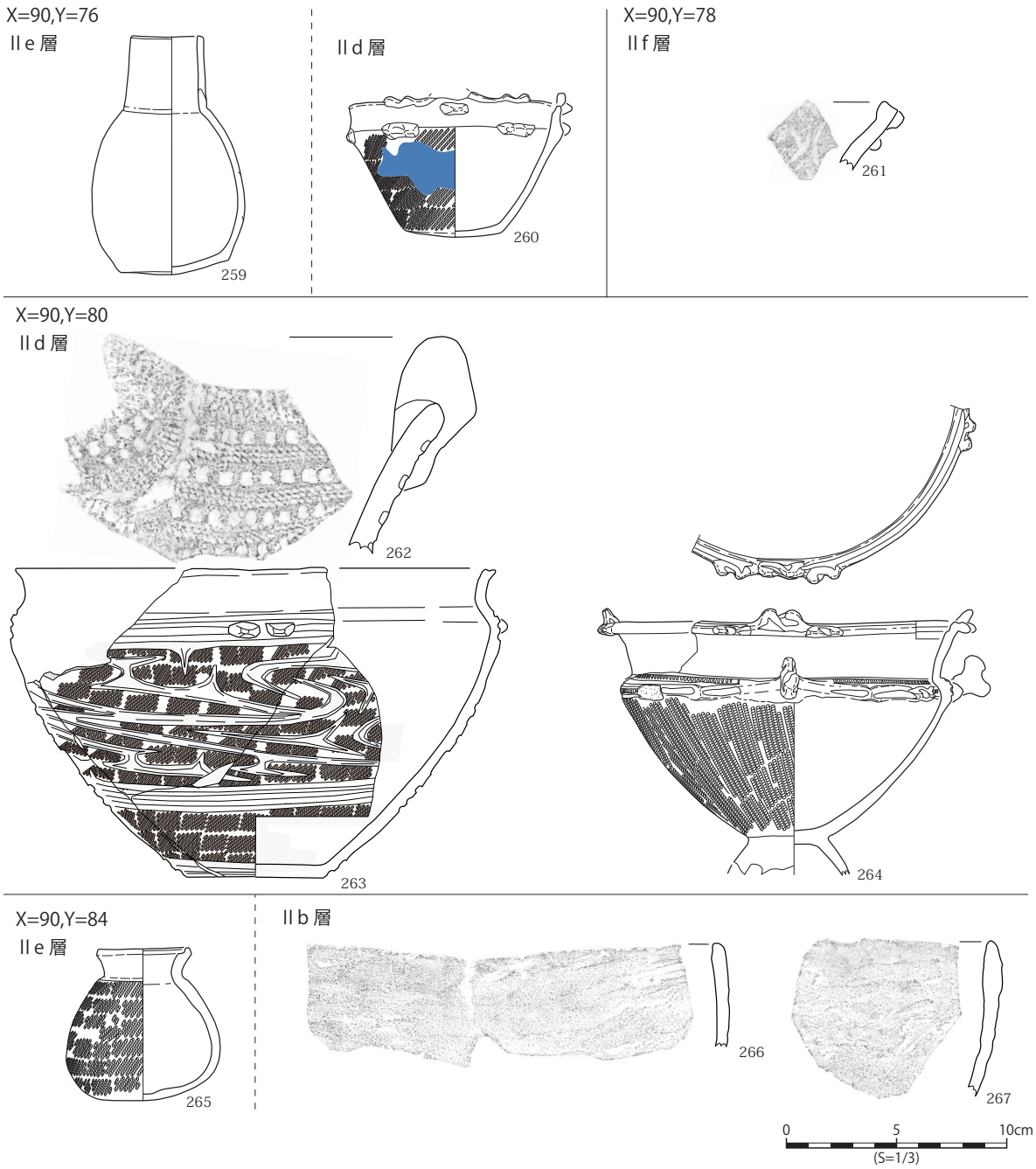
・Ⅱｃ層　274 は 3 ～ 8 群の壺であり、口唇直下に中間を沈線で区画された突起を有する。

・Ⅱｂ層　275 は 7 群の鉢であり、口唇部および口唇直下に突起を有し、体部上半は横位沈線間に中間をならした突起が配置される。276 は、3 ～ 8 群の鉢であり、口縁部に横位沈線が巡り、体部上半に B 突起が 4 単位配置される。

⑲グリッド X=92、Y =78（図Ⅲ -3-45）

・Ⅱｅ層　277 は、6 群の鉢形土器であり、体部に雲形文が展開する。

・Ⅱｄ層　278 は、7 群の鉢であり、把手状の大型の突起が外側斜方向に突き出る。突起の先端部は B 突起が 3 方向に接合したような装飾的なものであり、付根の中央部には三角形の透かしが施される。279 は、7 群の皿であり、口唇部に山形突起および内・外側に列点文が巡り、体部は雲形文が展開する。



図Ⅲ-3-1-44　第１遺物集中区・分析グリッド外出土土器（1）

・Ⅱｃ層　280 は、9b 群の鉢であり、口縁部に刺突文が３条巡る。

・Ⅱｂ層　281 は、７群の鉢であり、口頸部に横位沈線が巡る。

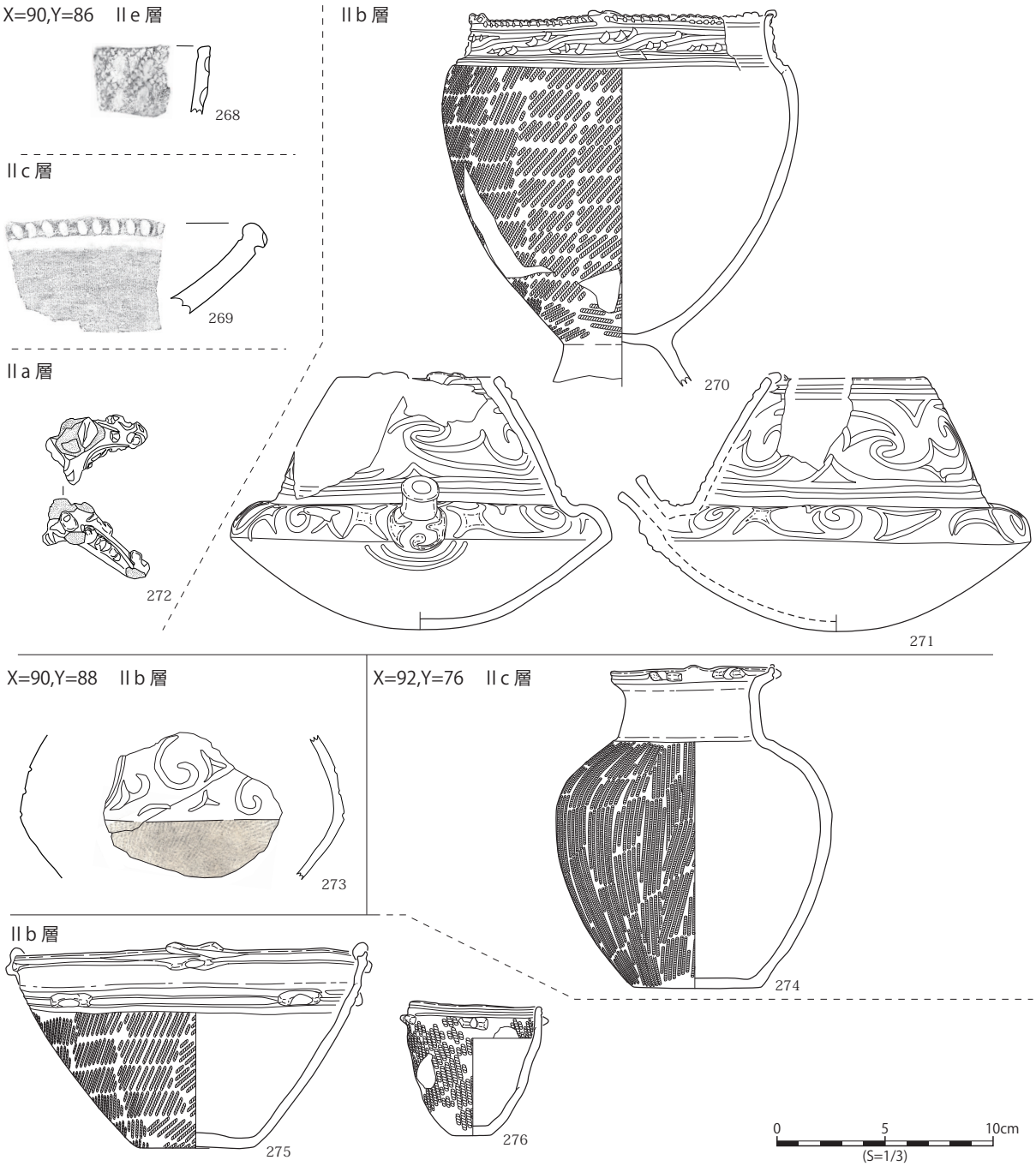
⑳グリッド X=92，Ｙ =84（図Ⅲ -3-1-46）

・Ⅱｇ層　282 は 2a 群の深鉢の団扇状突起である。

・Ⅱｆ層　283 は 2a 群の深鉢の円錐形の大型突起であり、外面に弧状の隆帯が施される。284 は 2a 群の浅鉢・皿であり、口唇直下に列点文と横位沈線が巡り、体部は羽状縄文が施される。

・Ⅱｄ層　285 は、３～８群の無文の鉢である。

・Ⅱｃ層　286 は、７群の鉢であり、口唇部は山形突起が４単位配置され、体部上半は大型の突起を有する。



図Ⅲ-3-1-45　第 1 遺物集中区・分析グリッド外出土土器（2）

㉑グリッド X=92，Y =86（図Ⅲ -3-1-47）

・Ⅱ e 層　287 は 9b 群の浅鉢であり、口縁部から体部にかけ細い多条沈線が巡る。288・289 は 2b 群の注口土器の注口部であり、288 は上面に貼瘤が施され、付根および中央部に沈線が巡る。289 は下面および側面に貼瘤が施され、貼瘤間に沈線が巡る。

・Ⅱ d 層　290 は 4 群の注口土器であり、口縁部に S 字文を囲うように三叉文が巡る。

・Ⅱ c 層　291 は 5 群の台付鉢であり、口頸部および体部と台部の境目に羊歯状文が巡る。台部下端は横位沈線および横位回転の斜縄文が施される。292 は 4 群の注口土器であり、口縁部に弧状沈線が施され、注口部付根の下面は B 突起を有する。

・Ⅱｂ層　293 は 2a 群の深鉢の華燭部である。294 は、３～８群の鉢の突起部である。

㉒グリッド X=92，Ｙ =88（図Ⅲ -3-1-48）

・Ⅱｃ層　295 は３～８群の壺であり、口唇部に B 突起を有し、口頸部に 1 条の横位沈線が巡る。

・Ⅱｂ層　296 は 5 群の鉢であり、口唇直下にノの字状の沈線が連続し、口頸部は横位沈線と列点文が 2 条巡る。297 は３～８群の壺であり、口唇部に B 突起を有し、口唇直下に横位回転の斜縄文が施される。

㉓グリッド X=94，Ｙ =88（図Ⅲ -3-1-48）

・Ⅱｂ層　298 は、３～８群の壺である。299 は、2b 群の注口土器であり、体部には貼瘤間に多条沈線が巡る。

㉔グリッド X=96，Ｙ =76（図Ⅲ -3-1-48）

・Ⅱｄ層　300 は 6 群の壺であり、外面にベンガラが塗布される。口唇部は中間を沈線で区画した B 突起が連続し、口頸部から体部上半にかけて雲形文が展開する。

㉕グリッド X=96，Ｙ =78（図Ⅲ -3-1-48）

・Ⅱｂ層　301 は 6 群の台付鉢であり、口縁部は横位沈線が巡り、列点文が断続的に施される。体部は雲形文が展開する。体部と台部の境目および台部下端には三叉文が施され、台部は三叉状の透かしが上下向き合ったものと、円形の透かしが交互に配置される。302 は３～８群の粗製鉢である。303 は 6 群の台付浅鉢であり、口唇部は中間を沈線で区画した突起が連続する。口縁部は 2 条の横位沈線が巡る。体部は無文である。304 は 6 群の浅鉢であり、体部に雲形文が展開する。

・Ⅱａ層　305 は、9b 群の鉢形土器であり、口唇部に突起を有し、口縁部は 2 条の刺突文が巡る。

㉖グリッド X=96，Ｙ =80（図Ⅲ -3-1-49）

・Ⅱｂ層　306 は 6 群の台付鉢であり、口頸部に簡略化された羊歯状文が巡る。台部下端は縄文が施される。307 は 6 群の台付鉢であり、口唇部は B 突起がやや狭い間隔で配置される。口頸部は簡略化された羊歯状文が巡る。台部は無文である。

㉗グリッド X=96，Ｙ =84（図Ⅲ -3-1-49）

・Ⅱｆ層　308 は 9b 群の深鉢であり、体部は細い斜位沈線が施される。

・Ⅱｄ層　309 は 9b 群の台付鉢であり、台部のみ出土した。横位沈線および波状沈線が施される。310 は 2b 群の注口土器であり、口頸部および体部に刻目の多段入組帯状文が貼瘤間に巡る。

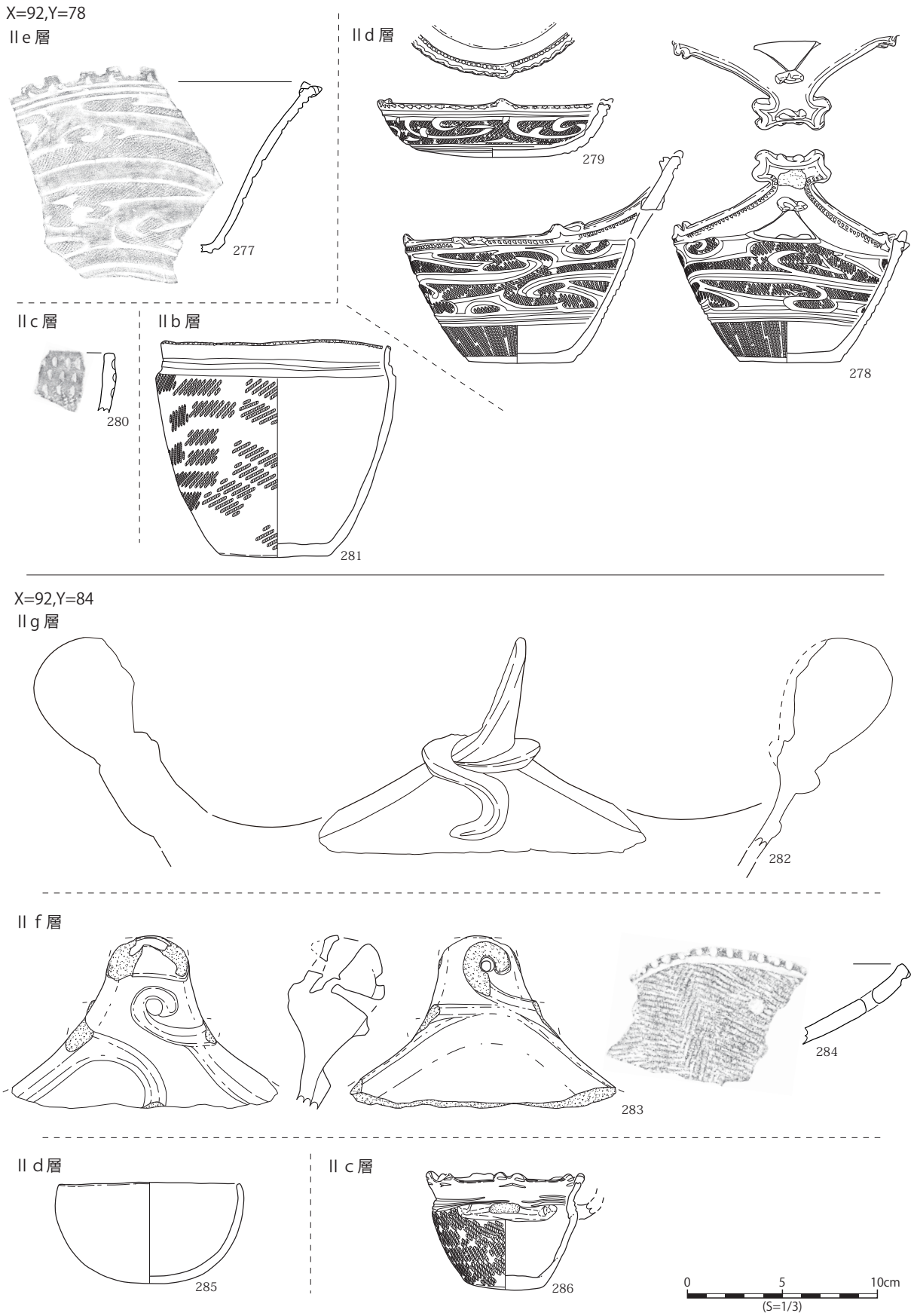
・Ⅱｂ層　311 は 9b 群の鉢であり、口唇部に鋸歯状に沈線が巡る。312 は３～８群の壺であり、口縁上部に横位回転の斜縄文と 1 条の横位沈線が巡る。

㉘グリッド X=96，Ｙ =86（図Ⅲ -3-1-49）

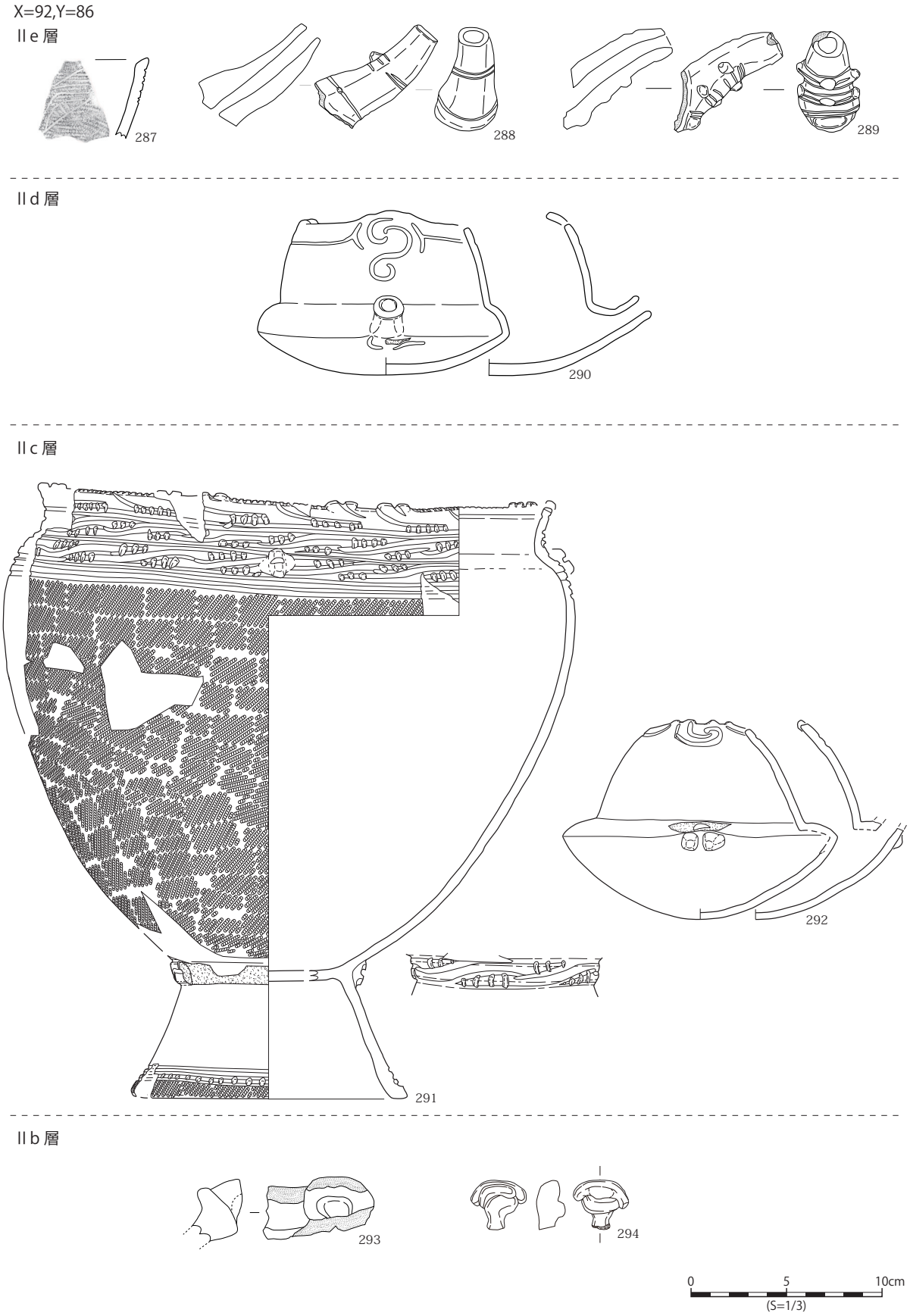
・Ⅱｄ層　313 は 9a 群の鉢であり、口縁部に突瘤が施され、周囲に弧状沈線が巡る。

・Ⅱｃ層　314 は３～８群の粗製壺である。

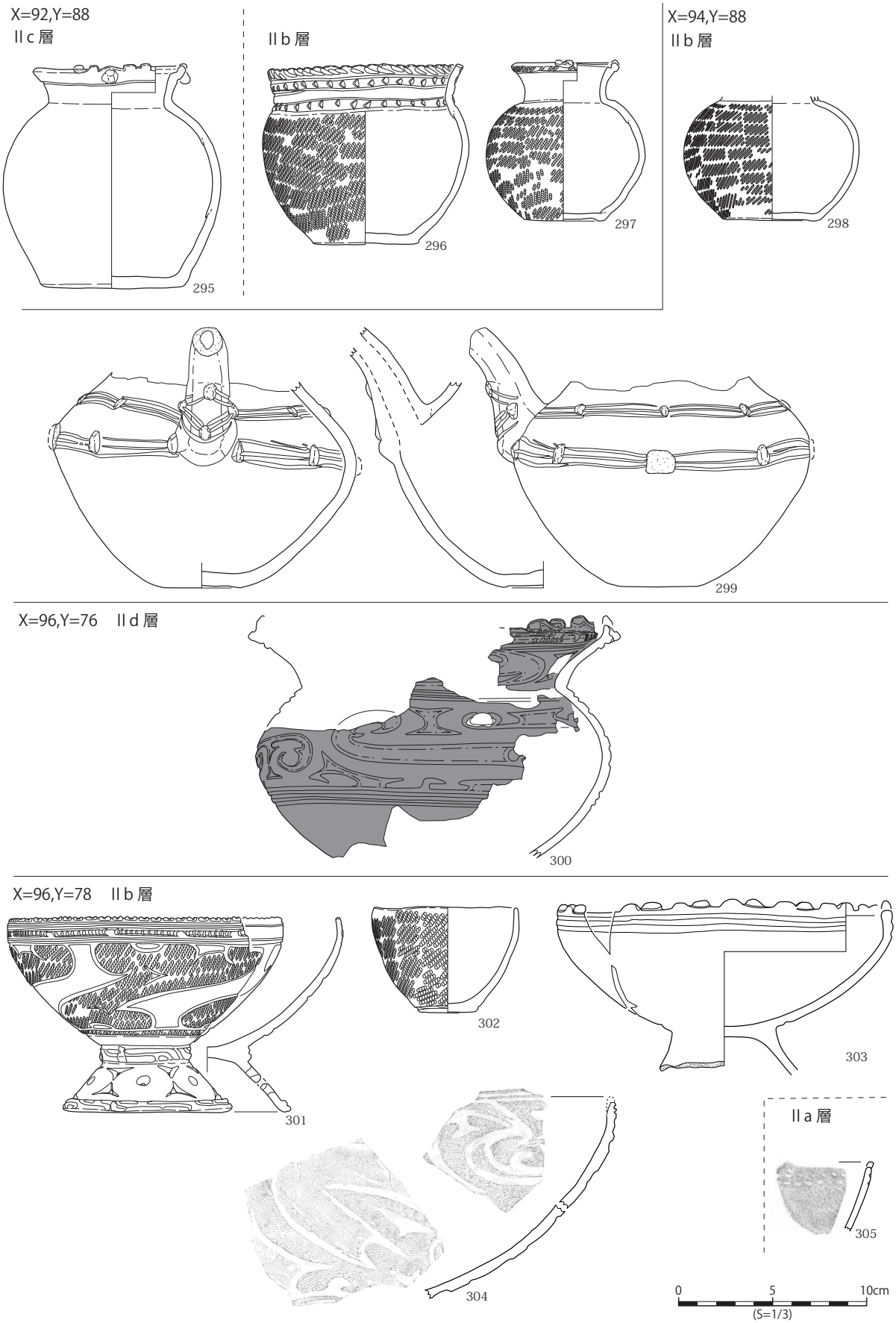
（江戸）



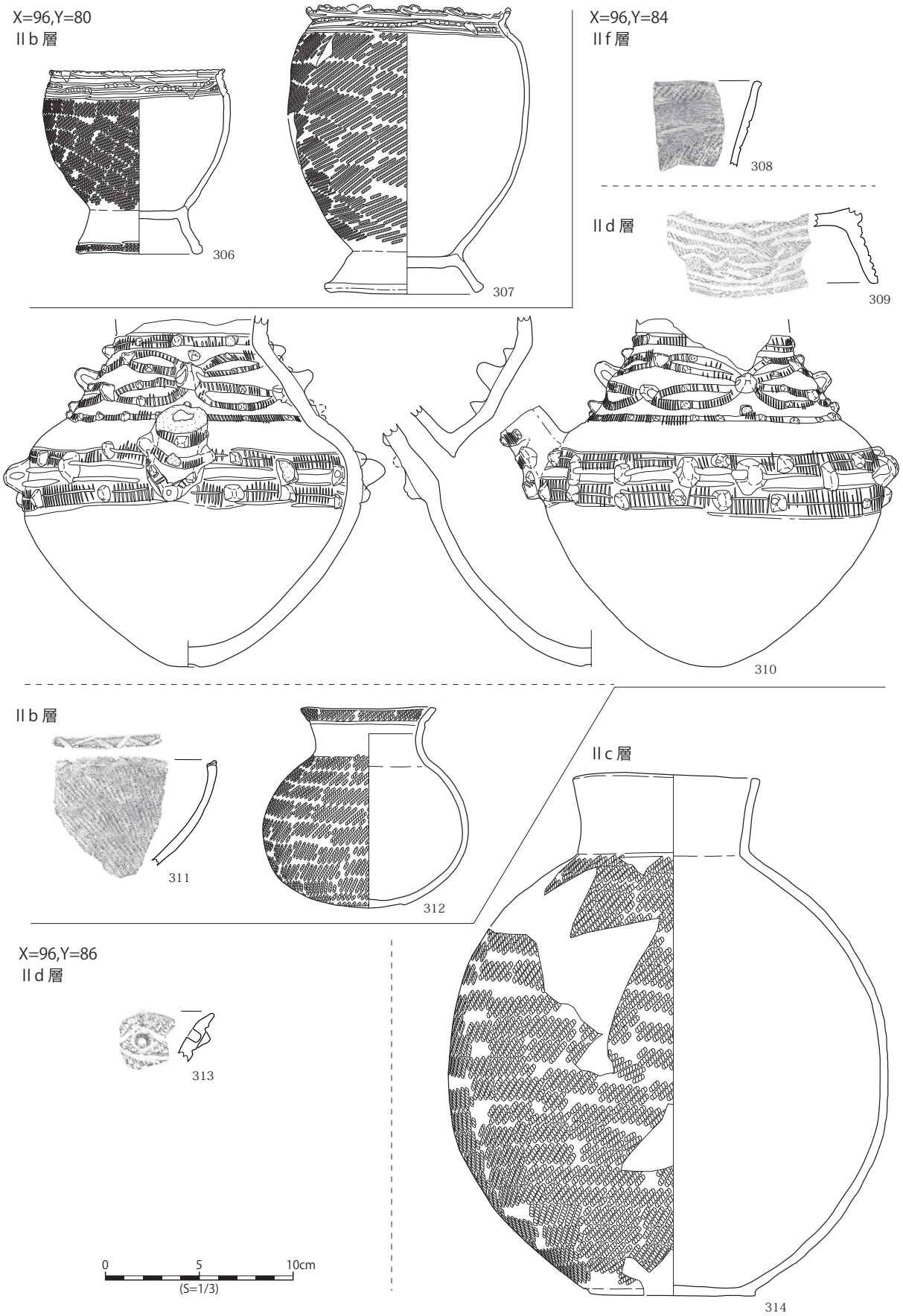
図Ⅲ-3-1-46　第１遺物集中区・分析グリッド外出土土器（3）



図Ⅲ-3-1-47　第１遺物集中区・分析グリッド外出土土器（4）



図Ⅲ-3-1-48　第 1 遺物集中区・分析グリッド外出土土器（5）



図Ⅲ-3-1-49　第１遺物集中区・分析グリッド外出土土器（6）

B. 石器・礫（表Ⅲ -3-1-1、図Ⅲ -3-1-50 ～ 60）

25,932 点 680.5kg の石器を検出した。数量は剥片・砕片 12,187 点、搬入礫 10,387 点が多くを占め、他の集中区に比べ微細剥離のある剥片が 1,456 点と多い。生業にかかわる石器は、3,199 点で全体の 12% と他の集中区に比べやや高い。このうち、剥片石器は尖頭器、石鏃、石錐、石匙、石箆といった定型石器 915 点、小型石錐、スクレイパーなどの不定形石器 1,802 点がある。また、石皿・台石類などの礫石器は 448 点ある。

剥片定型石器は尖頭器 50 点、石鏃 18 点、石錐 138 点、石匙 62 点、石箆 56 点で、石鏃が 67% を占める。剥片不定形石器はスクレイパー 67 点、微細剥離のある剥片 1,456 点、メノウ製を主とする小型石錐 110 点、小型スクレイパー 169 点である。礫石器は磨石・敲石類 388 点、石皿・台石類 42 点、砥石 18 点である。磨石・敲石類は側面に敲打痕のある板状敲石（敲板類）が 211 点と他に比べて多い。

石器製作に関わる石核・剥片・砕片は、12,344 点で点数全体の 48% を占める。これら石核・剥片・砕片にしめる石核の割合は 1.2% でやや高い。

異形礫は少ない。

搬入礫は 10,387 点で点数全体の 40% をしめる。ほとんどは硬質の安山岩、頁岩であり、石器の素材あるいはハンマーとして搬入されたとみられる。

層位ごとにみると、上層のⅡａ層から下層のⅡｇ層にかけて数が少なくなる。下層ほど割合が高くなる石器は石鏃、石錐、石匙、石箆、剥片がある。一方、下層にかけて低下する石器は小型石錐、微細剥離のある剥片、小型スクレイパー、小型柱状剥片、メノウを主とする小型石錐や小型スクレイパーである。中間層のⅡｃ～Ⅱｆでは、磨石・敲石類と搬入礫の割合が高い。

石器の機能をふまえると、下層では狩猟や採取活動に伴う定型石器が多いのに対し、上層ではスクレイパー類などの便宜的石器が多くなる。

表Ⅲ -3-1-1　第 1 遺物集中区出土石器の層位・器種別出土数

	Ⅱａ	Ⅱｂ	Ⅱｃ	Ⅱｄ	Ⅱｅ	Ⅱｆ	Ⅱｇ	その他	計
尖頭器	15	10	10	3	6	6			50
石鏃	176	83	96	84	73	87	8	11	618
石錐	56	18	19	14	15	12	2	2	138
小型石錐	75	10	6	8	7	2	1	1	110
石匙	18	7	10	11	7	8		1	62
石箆	13	7	15	10	8	2		1	56
スクレイパー	31	8	4	7	10	1	1	5	67
微細剥離のある剥片	742	231	139	118	136	68	11	11	1,456
小型スクレイパー	112	20	9	14	7	6		1	169
磨石・敲石類	128	74	62	46	31	25	1	21	388
石皿・台石類	10	6	3	7	8	4	1	3	42
砥石	6	5	2	2	2	1			18
石錘									
磨製石斧	3	2	5	2		5	1		18
その他（扁平石器）	1	1				1	1		4
石核	72	25	9	16	13	9	3	7	154
メノウ石核	3								3
剥片	253	184	131	183	73	100	36	109	1,069
小型柱状剥片	19	13	5	10	6				53
砕片	3,074	1,631	1,209	1,709	1,218	957	325	942	11,065
異形礫	1	2	2						5
搬入礫	3,405	1,623	1,415	1,406	948	1,232	180	178	10,387
計	8,213	3,960	3,151	3,650	2,568	2,526	571	1,293	25,932

図Ⅲ -3-1-50-1 ～ 11 は尖頭器である（以下Ⅲ -3-1-50 は省略）。50 点中 11 点図化した。分類別の内訳は木葉形が 32 点（1 ～ 6）、菱形が 4 点（図 50-7･8）、山形が 8 点（9）、半月形が 5 点（10）、平基有茎が 1 点（11）である。

12 ～ 47 は石鏃である。618 点中 36 点図化した。石材は、618 点中頁岩 499 点、メノウ 103 点、黒曜石 11 点、赤チャート 4 点、不明 1 点である。アスファルト付着が 43 点ある。

12・13 は円基鏃である。8 点中 2 点を図示した。石材はメノウ製が多い。

14･15､18 ～ 20 は凸有 a 類である。29 点中 5 点図化した。16･17､21 ～ 35 は凸有 b 類である。393 点中 17 点図化した。アスファルト付着が 19 点ある（16、23・27 ～ 29・31・32）。全て基部に付着する。36 ～ 38 は凸有 c 類である。23 点出土した。39 ～ 42 は凸有 d 類である。31 点出土した。43・44 は凸有 f 類である。34 点中 2 点を図示した。両側の刃縁が先端から基部にかけてなだらかに裾広がりになる。

45 ～ 47 は基部が凹む凹基無茎鏃である。5 点中 3 点を図示した。メノウ製が多い。

48 ～ 55 は石錐である。48 は粗く整形された頭部がある。49･50 は楕円状に整形された頭部がある。49 には頭部と錐部の間に黒色物が付着しており、頭部が何かで固定されていたと推測される。51 ～ 53 は上下端に錐部がある。54 は錐部が断面方形の棒状石錐である。55 ～ 74 は小型石錐である。粗いつまみ部のあるもの（56･57・59 ～ 61・67･69・71）と錐部のみの棒状のもの（58･62 ～ 66・68･70・72 ～ 74）がある。ほとんどがメノウ製である。

75 ～ 83 は石匙である。75 ～ 78 は縦型、79･83 は斜形、80 ～ 82 は横型である。うち 76 ～ 78 は刃部先端が三角形となる縦突形である。75･80 には刃部に光沢（トーン部分）がある。

84 ～ 91 は石箆である。88 ～ 90 は上辺左右端に突起が伴う。86 は大型品である。87 は下部が扇形に広がる斧形である。89 ～ 91 は逆 T 字形に広がる。

92 ～ 95 はスクレイパーである。92 は縦型剥片の片側縁に刃部を作成する。93 ～ 95 は横型剥片の下辺に刃部を作成する。

96 ～ 100 は微細剥離のある剥片で、不定形剥片の一部に微細剥離がある。

101 ～ 110 はメノウ製の小型スクレイパーである。縦長剥片の側縁に微細剥離や磨耗痕が観察される。

101 ～ 107 は長楕円形で両側縁に微細剥離が観察される。108・110 は短冊形である。111 は頁岩の石核で、打面は一方向である。

112 ～ 122 は磨製石斧である。112 ～ 114・118・121 は頭部のみ、116・117・119・122 は下半部あるいは刃部のみである。115 は刃部欠損後にハンマーに再利用される。全て定角式で側面に擦切の際の研磨痕を残す。

123 ～ 130 は磨石・敲石類である。123 は板状の敲石で、上下面に長軸に対し斜め方向の敲打面がある。124 は磨類で表裏面に磨耗面がある。125・127・128・130 は表裏面に凹痕と磨耗痕、上下側面に敲打面があり、隅丸長方形を呈すものが多い。それぞれの使用痕は発達する。凹痕は径 2cm ほどの円形で断面がレンズ状をなす。磨耗面は長軸に対し 45 ～ 90 度の線状痕が確認でき、磨石を斜めあるいは横向きに保持していたことが分かる。125 には赤色顔料が付着しており、その精製に使用されたことが分かる。126・129 は敲類で、上下面に敲打痕と剥落がみられ、石材などの硬物質のハンマーに用いられたとみられる。

131 は台石で、板状礫の表裏面に弱い磨耗面があるほか、細かな敲打痕が観察できる。132 は破損した磨製石斧を再利用した敲石である。

133・134 は擦切具である。側辺が磨耗し、いずれも薄い板状で緻密・硬質な安山岩が用いられる。135・139 は安山岩の石皿・台石類である。135 は多孔質安山岩製の平面長楕円形で凹部が作り出される。139 は板状節理のある硬質な安山岩で、全面が磨滅する。136 ～ 138・140 は砥石である。石材は砂岩もしくは凝灰岩である。うち 136 ～ 138 は玉砥石で幅 1 ～ 2㎝の溝状の研ぎ面が複数みられる。140 は幅 4 ～ 5㎝の帯状の研ぎ面が複数重なり合っており、石斧の刃部幅に合うことから磨製石斧用の砥石と推定される。

C. 石製品・石製玉類（図Ⅲ -3-1-61・62）

石製品は異形石器、異形石鏃、石棒、石剣、石冠、ボタン状石製品、有孔石製品、玉類がある。

1 ～ 6 は異形石器である。1・2 は複数に抉られ、二又、三又状になる。3 は H 形、4・5 は人形、6 は三日月形である。7・8 は異形石鏃である。

9 ～ 12・14・16 は石棒である。9 は柱状節理を利用した粗製石棒である。14 は破片をスクレイパーに再利用される。16 は本調査で最大かつ完形の石棒である。両頭で頭部の下にリング状の突起かあり、頭部には沈刻線で鋸歯文を施す。13 は石剣である。15 は石冠で、自然礫に頸部に沈線を巡らした簡単なつくりである。

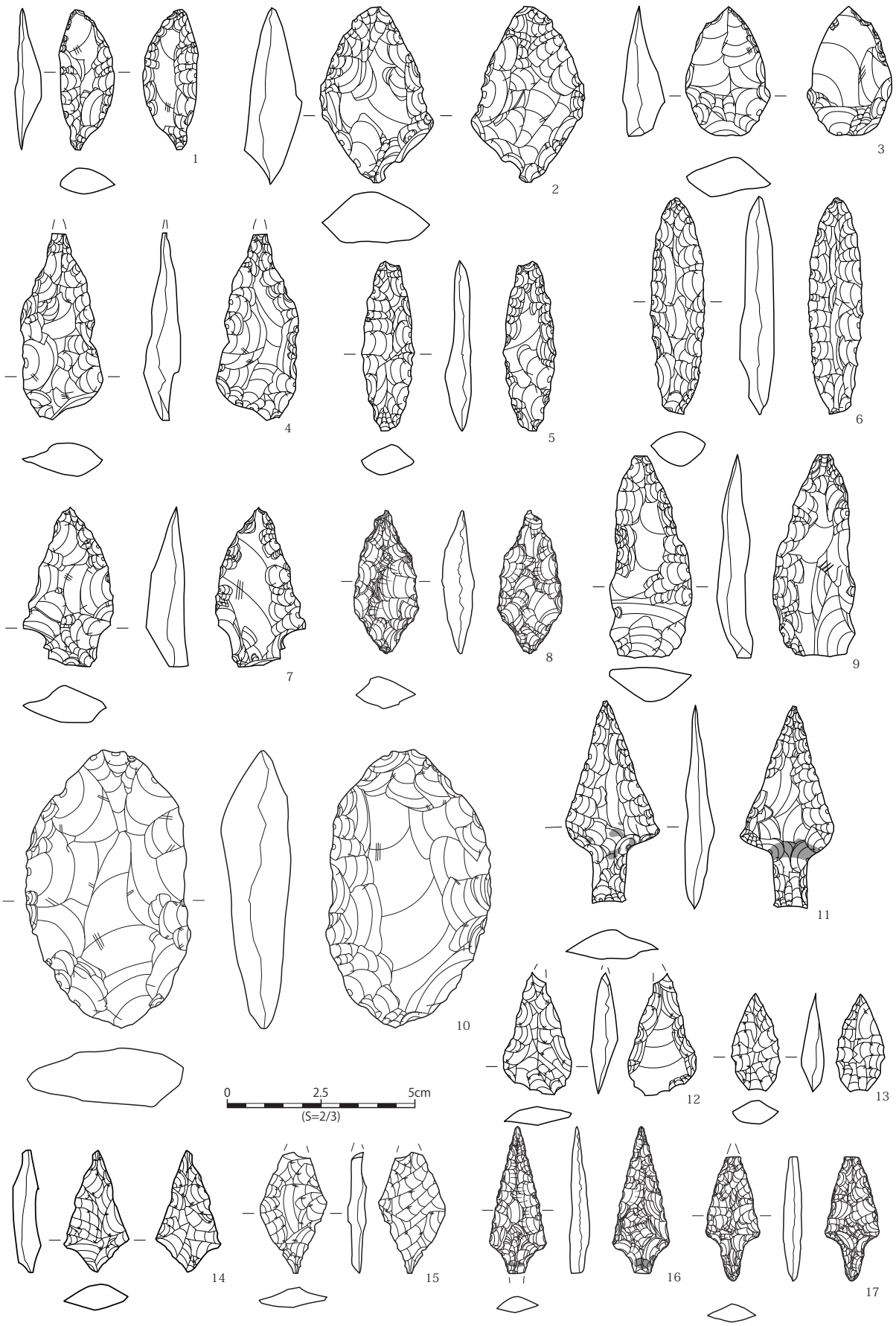
17・18 はボタン状石製品で、椀形の自然礫の左右に 2 つの穿孔がある。17 は全面が研磨された丁寧なつくりで、18 には二孔間に溝を入れる。19 ～ 22 は自然礫に穴を開けた有孔石製品である。19・20 もボタン状石製品に類似し、2 つの穿孔がある。21・22 は礫中央に穿孔がある。23・24 は緑色凝灰岩製の丸玉である。23 は研磨段階の未成品である。26 は緑色凝灰岩製の丸玉である。25 はヒスイ製の勾玉である。26 は有孔礫である。27 は岩版である。板状礫を研磨し、複数の点文の周りに渦巻文が巡る。

D. 土製品・土製玉類（図Ⅲ -3-1-63・64）

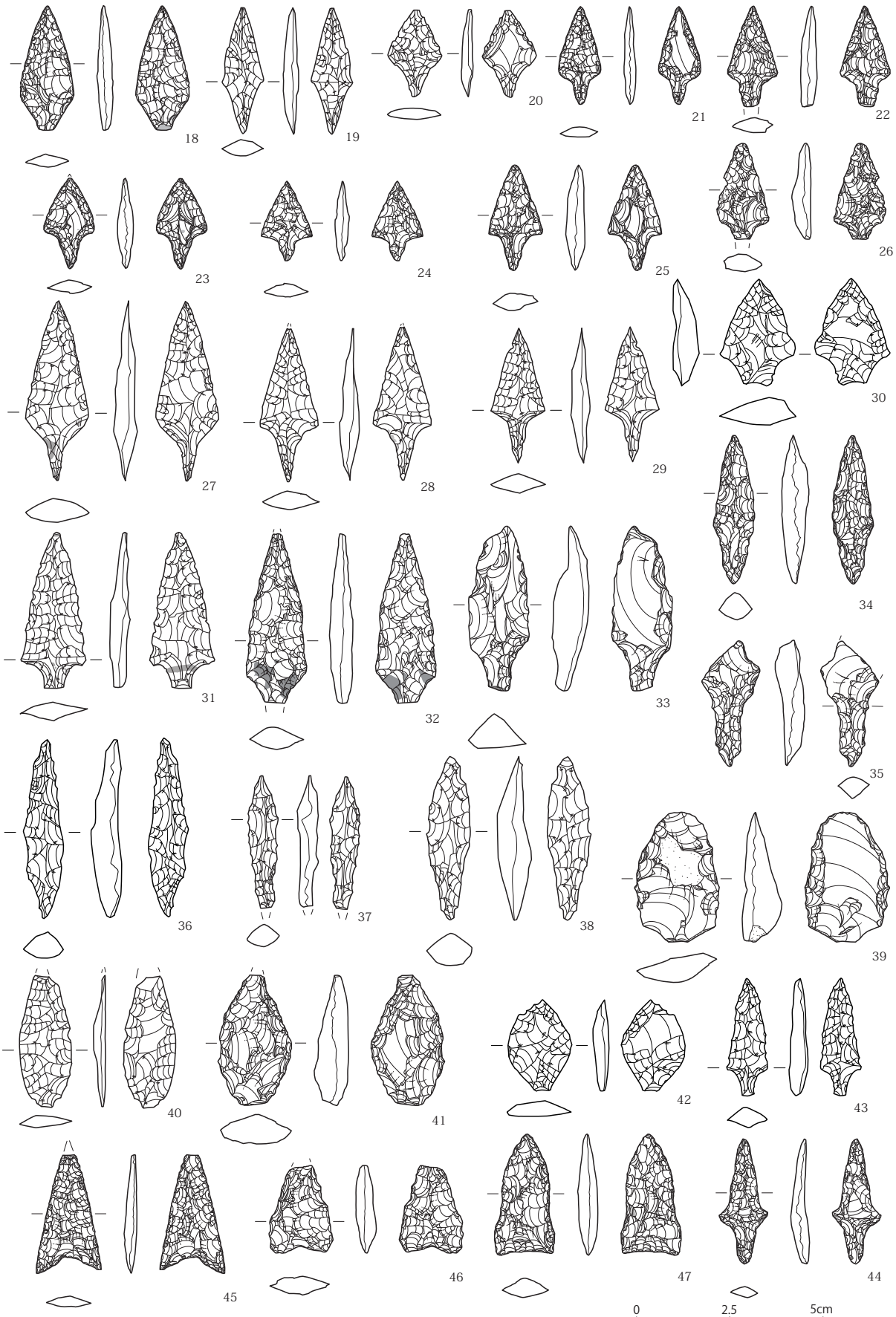
土製品はミニチュア土器、円板状土製品、土製耳飾、土製丸玉（土玉）、土製管玉、土製勾玉、棒状土製品、土錘、ボタン状土製品、土製垂飾、イモガイ形土製品、環状土製品、球状土製品、円錐形土製品と 14 種にわたる。土製耳飾、土製管玉が比較的多い。

1 ～ 5 はミニチュア土器である。1 は鉢形、2・3 は浅鉢形、4･5 は壺形で、5 は大洞 C 式に特徴的な頸部をもつ。6 ～ 13 は円板状土製品である。全て鉢もしくは壺の胴部片を利用する。10・11 以外は穿孔される。14 ～ 19 は土製耳飾である。全て貫通孔があり、径 1㎝ほどの小型品には赤色顔料が付着する。20 ～ 31 は土製玉類である。20 ～ 23 は径 1㎝ほどの丸玉である。24 ～ 30 は管玉である。24 以外は長 1.5㎝を超える。31 は土製勾玉である。32 は棒状土製品である。33 は土錘で、重さ 10g の小型品で長軸方向に沈線を巡らせる。

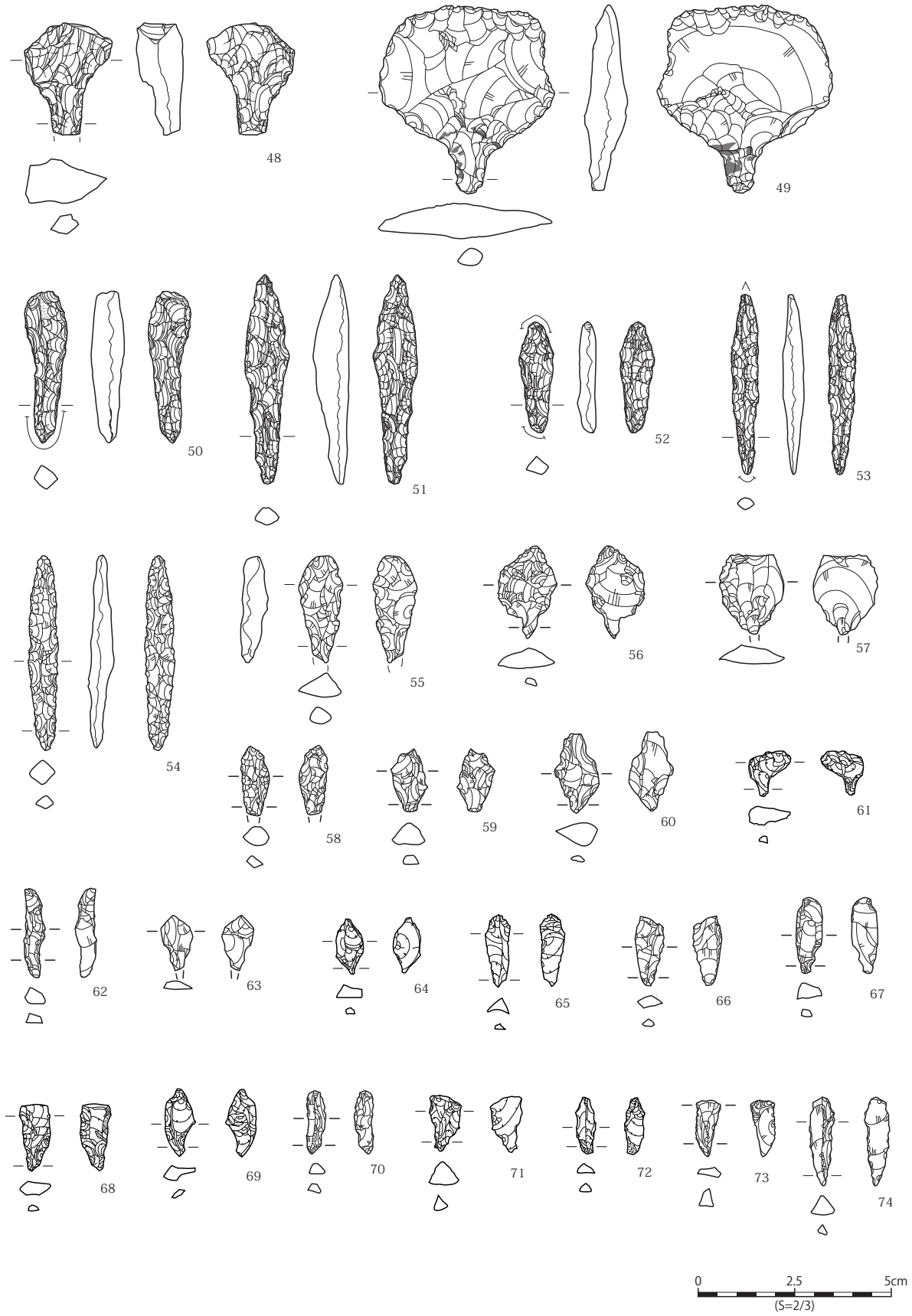
34 はボタン状土製品で外面に三叉文、内面に渦巻文を施す。35 は土製垂飾である。円形で外縁に列点文を巡らせる。36 はイモガイ形土製品である。計 5㎝ほどが残存し、中央に貫通孔がある。37・38 は環状土製品である。39・40 は土製耳飾もしくは環状土製品の一部とみられる。41 は球状土製品で沈線が巡る。42 は円錐形の土製品で耳飾の可能性がある。



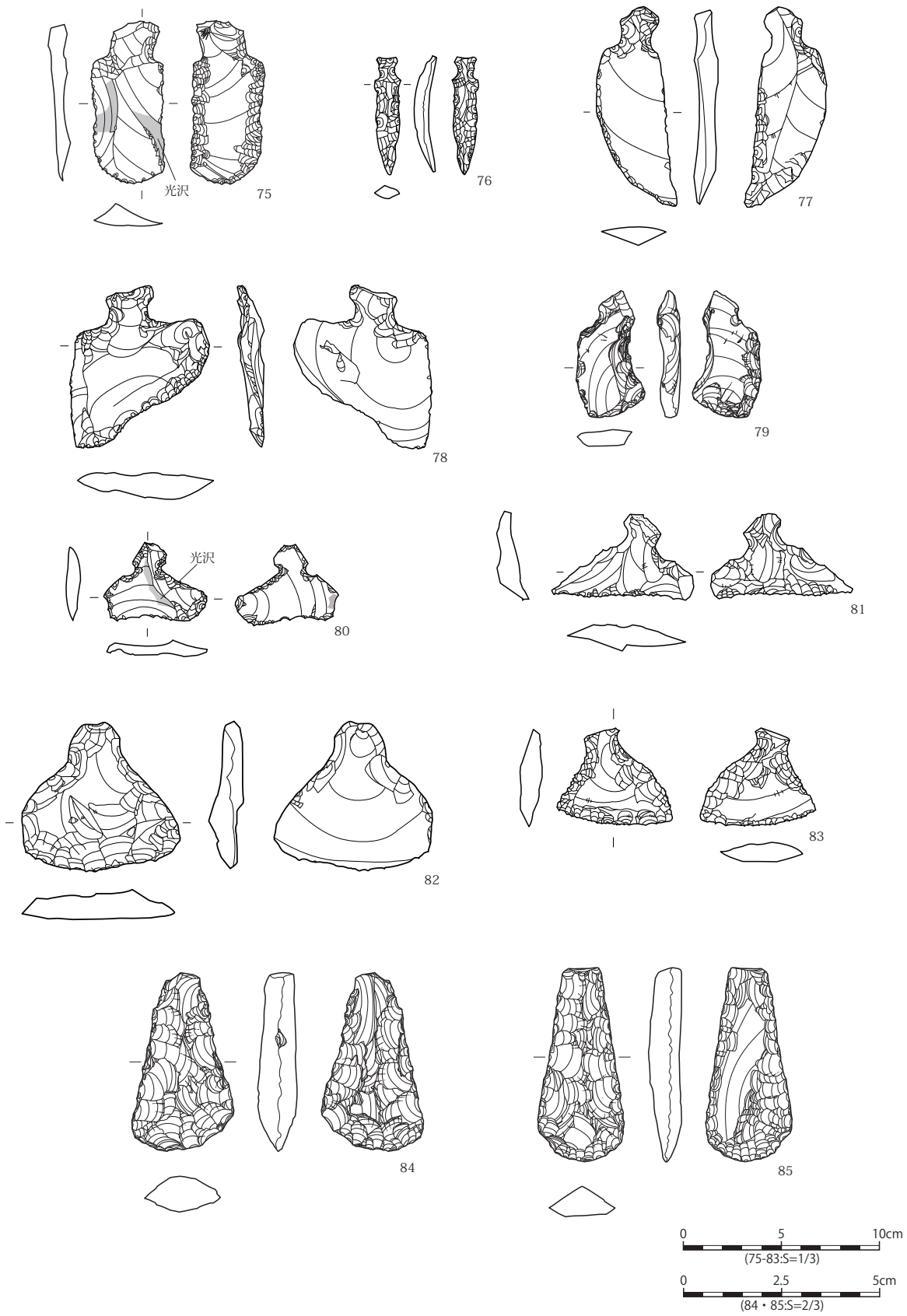
図Ⅲ-3-1-50　第1遺物集中区出土石器（1）



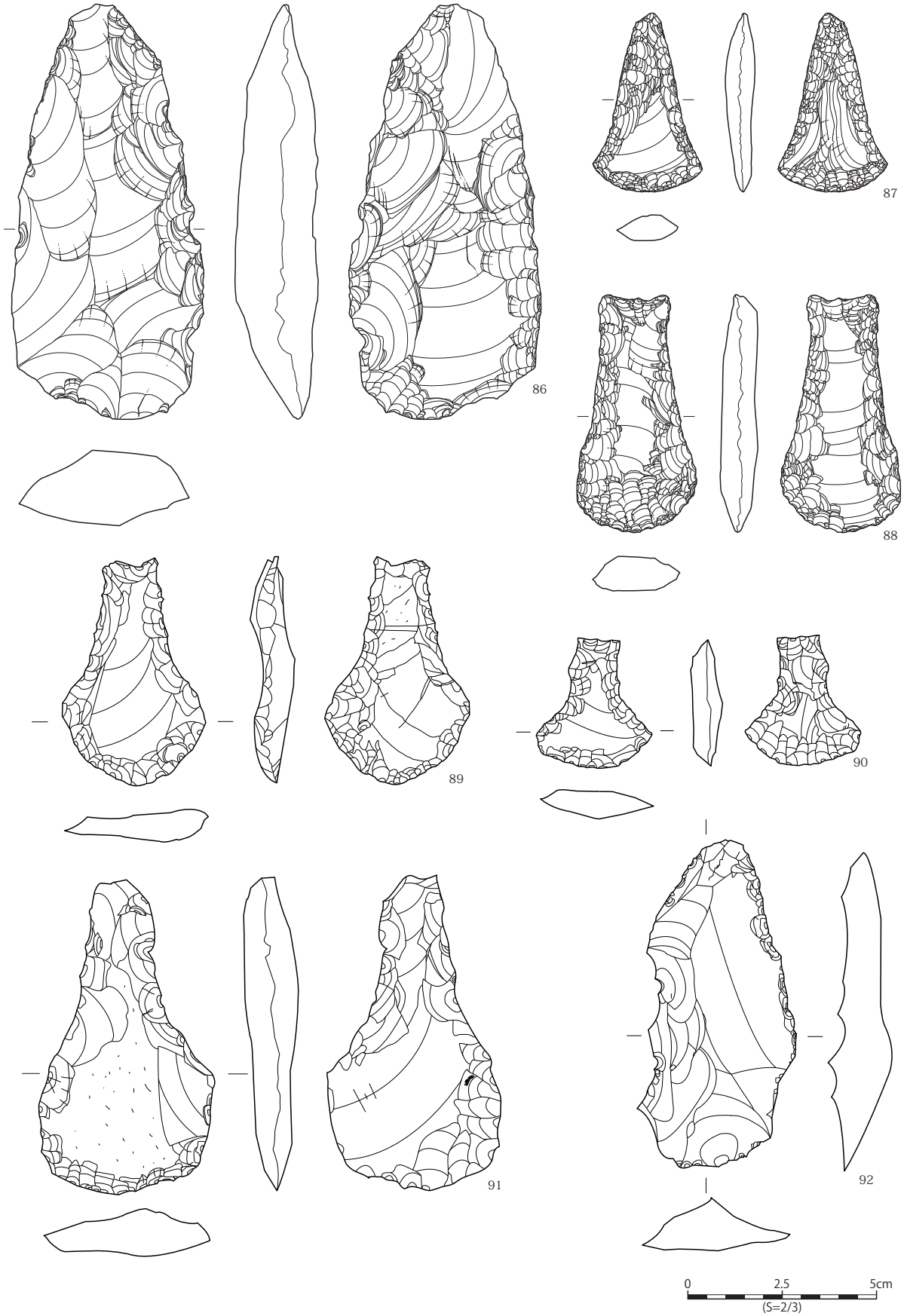
図Ⅲ-3-1-51　第1遺物集中区出土石器(2)



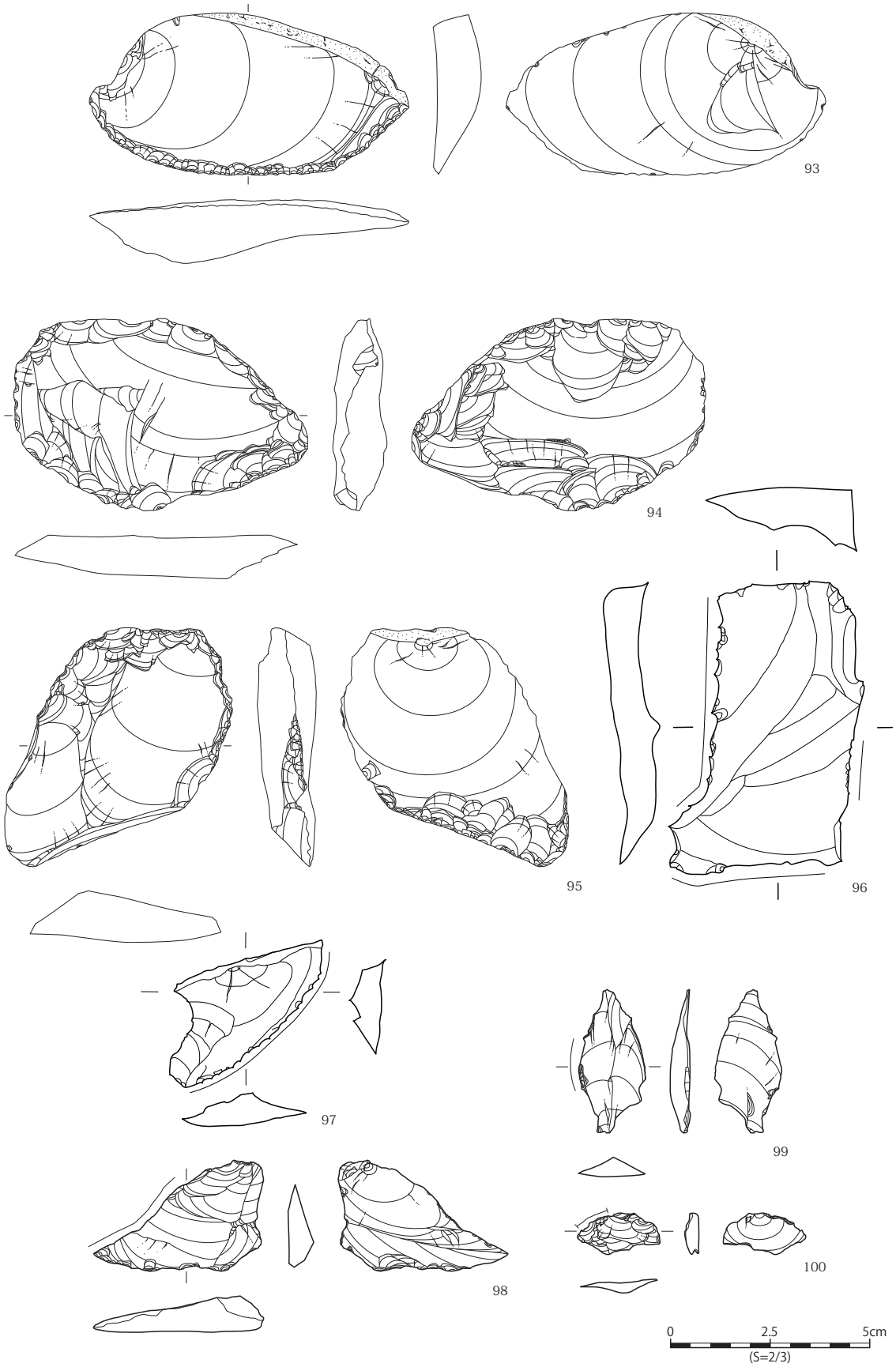
図Ⅲ-3-1-52　第1遺物集中区出土石器(3)



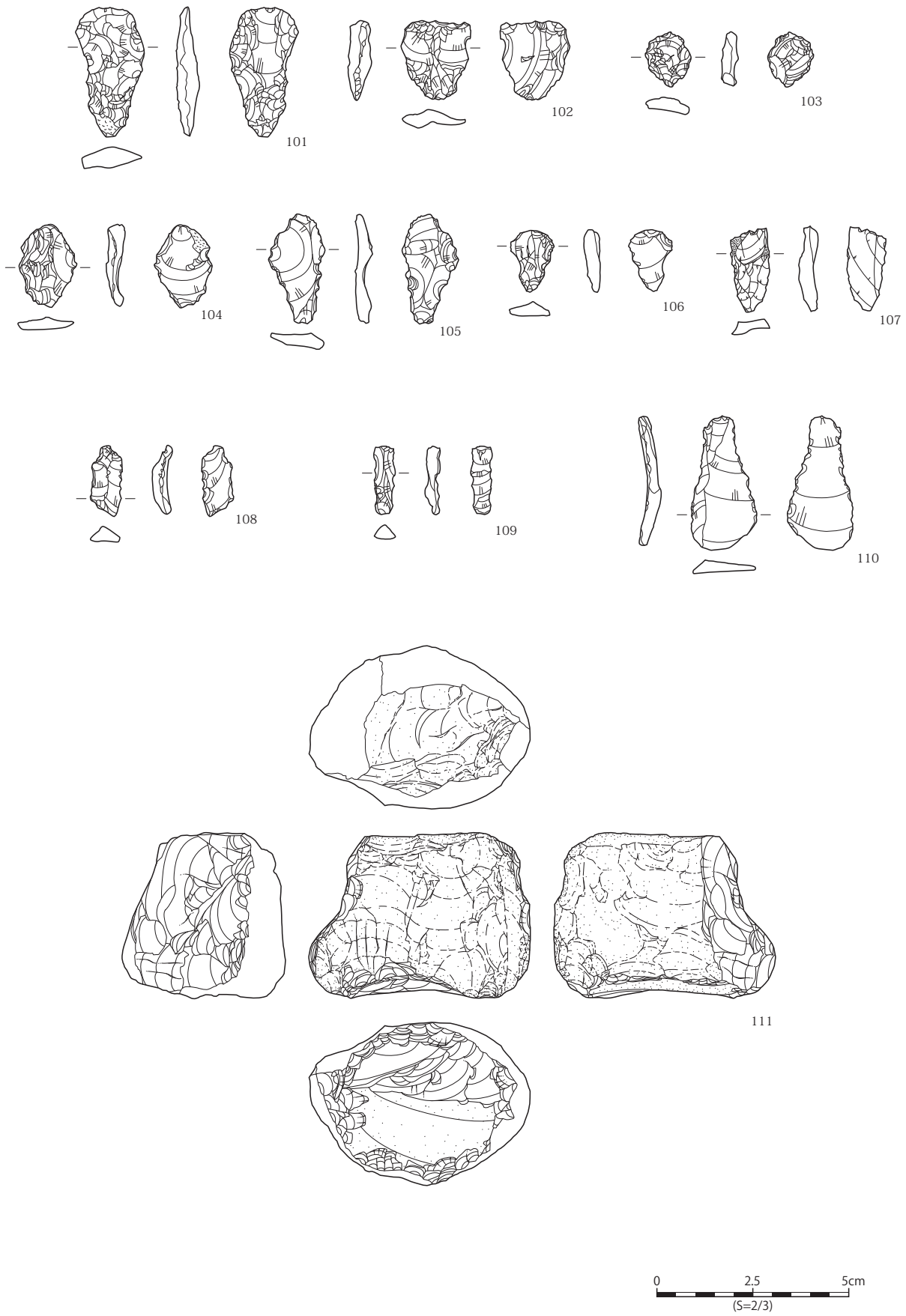
図Ⅲ-3-1-53　第1遺物集中区出土石器(4)



図Ⅲ-3-1-54　第1遺物集中区出土石器（5）

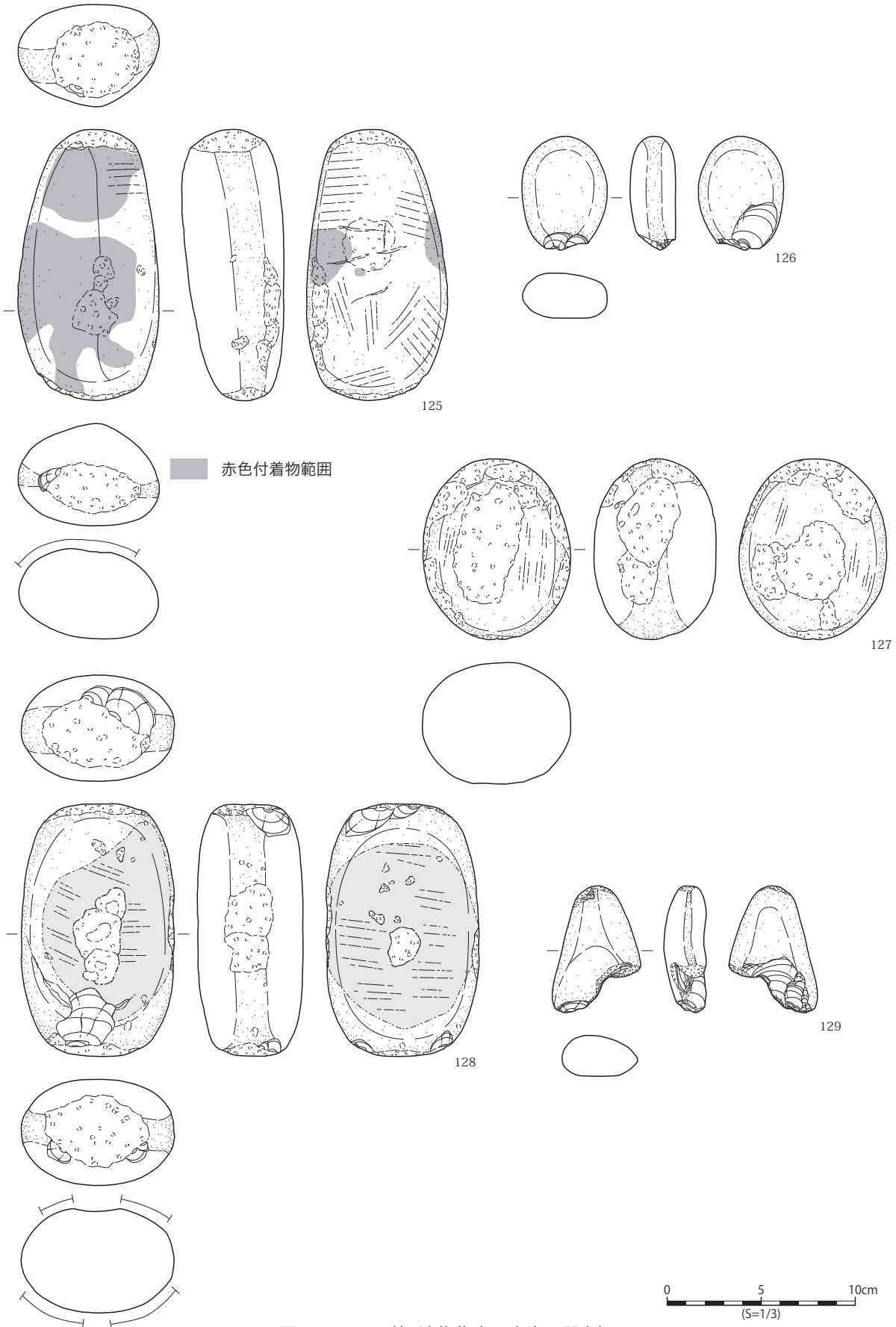


図Ⅲ-3-1-55　第1遺物集中区出土石器(6)

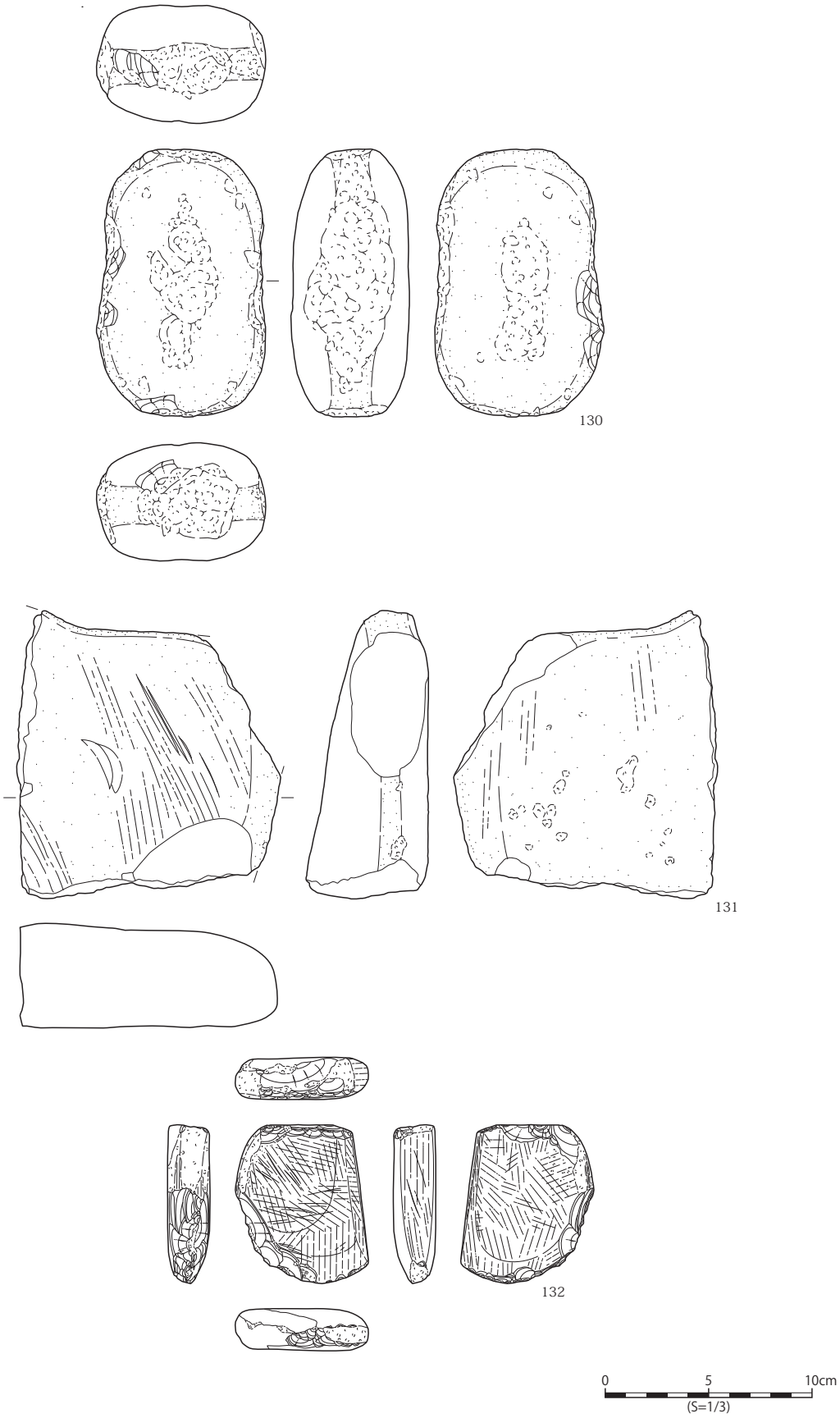


図Ⅲ-3-1-56　第1遺物集中区出土石器(7)

図Ⅲ-3-1-57　第1遺物集中区出土石器(8)

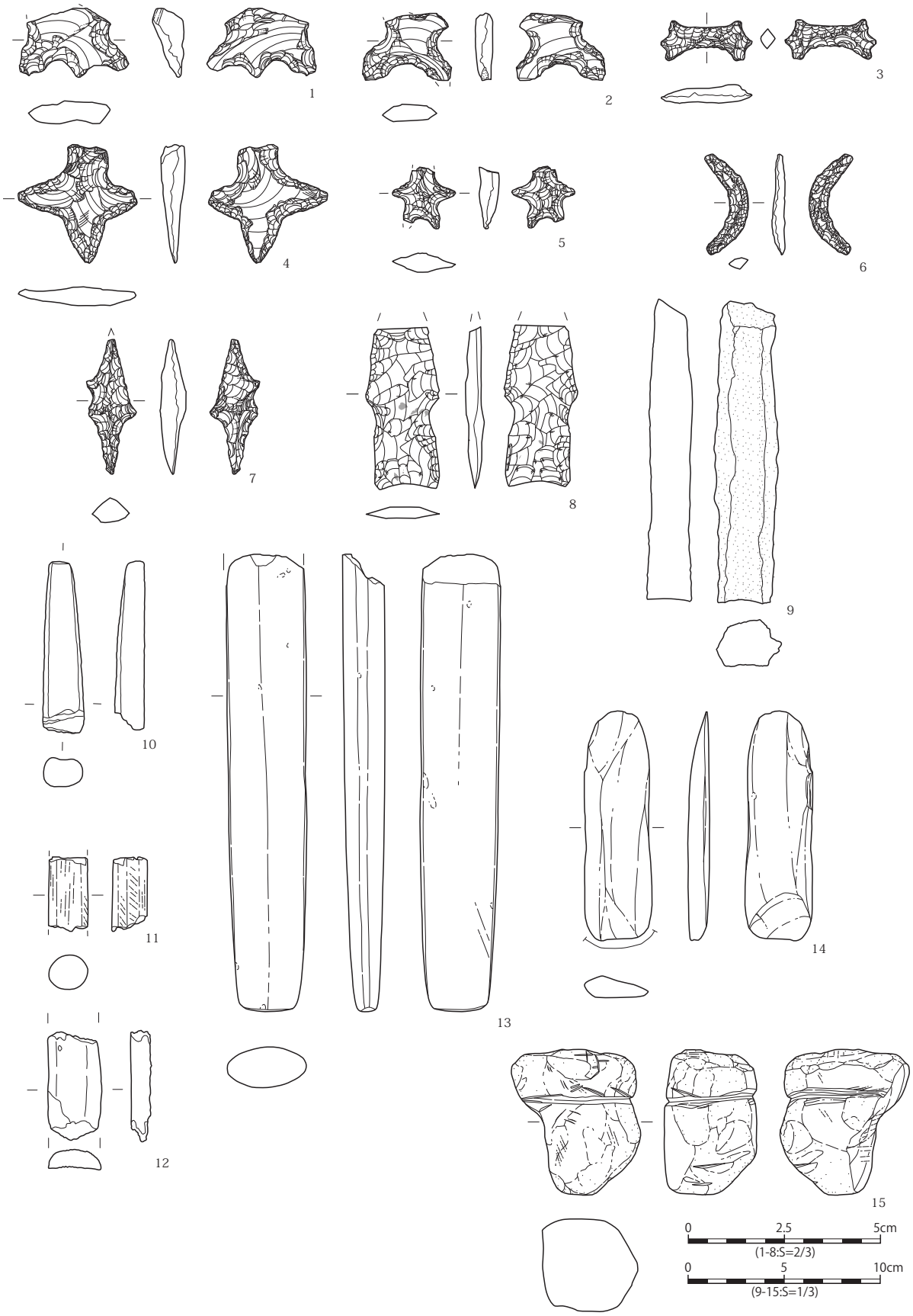


図Ⅲ-3-1-58　第1遺物集中区出土石器(9)

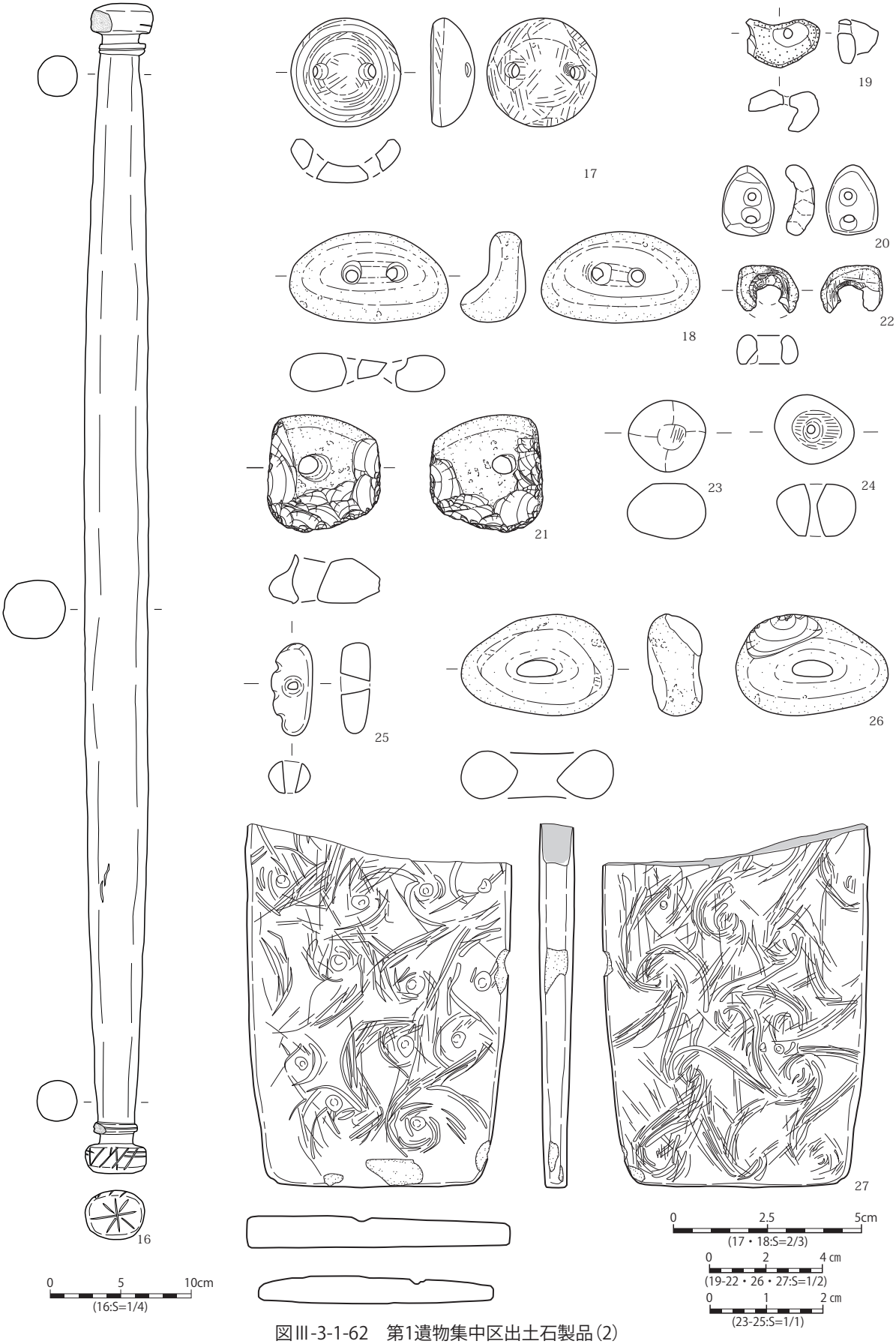


図Ⅲ-3-1-59　第1遺物集中区出土石器(10)

図Ⅲ-3-1-60　第1遺物集中区出土石器（11）

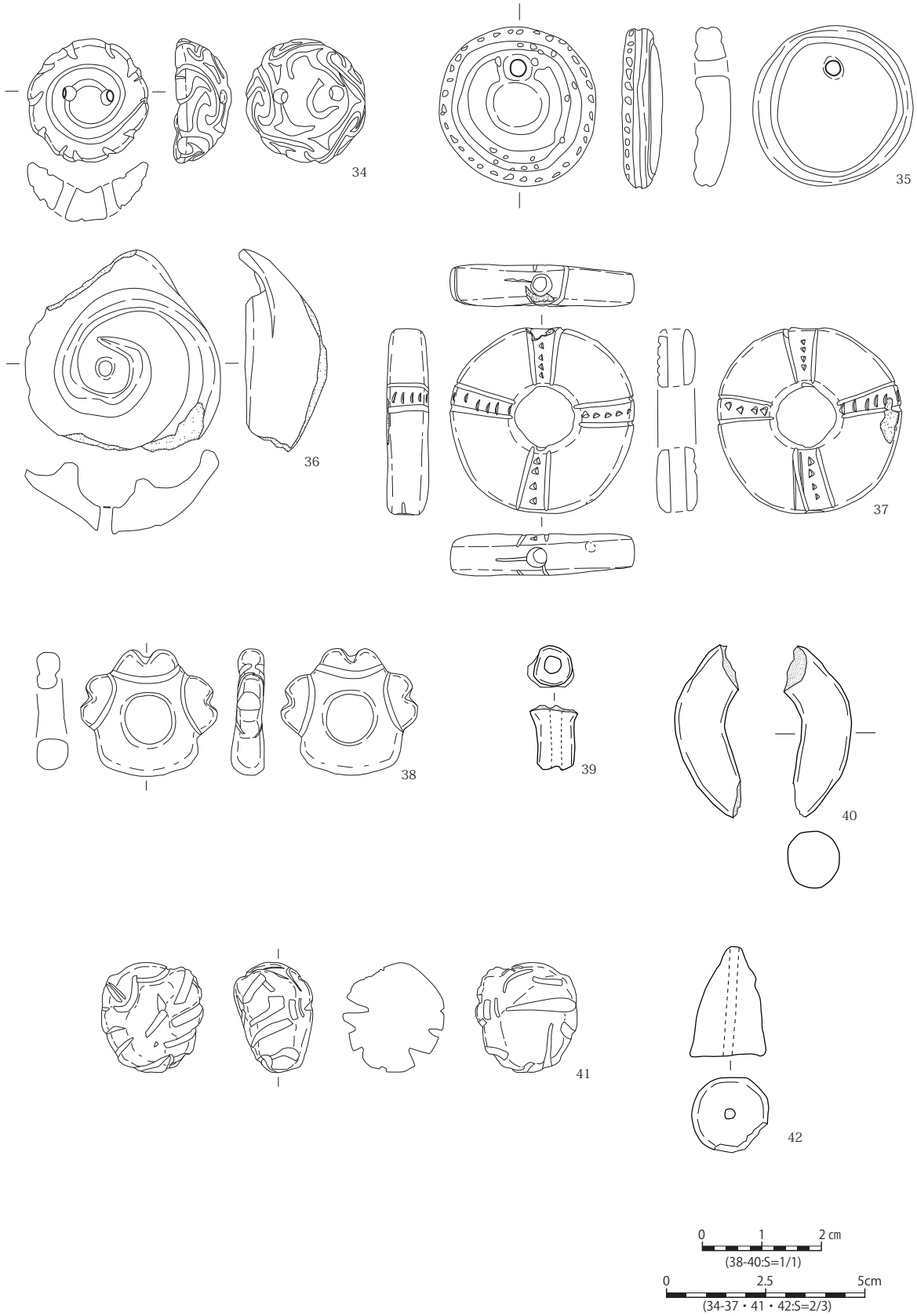


図Ⅲ-3-1-61　第1遺物集中区出土石製品（1）

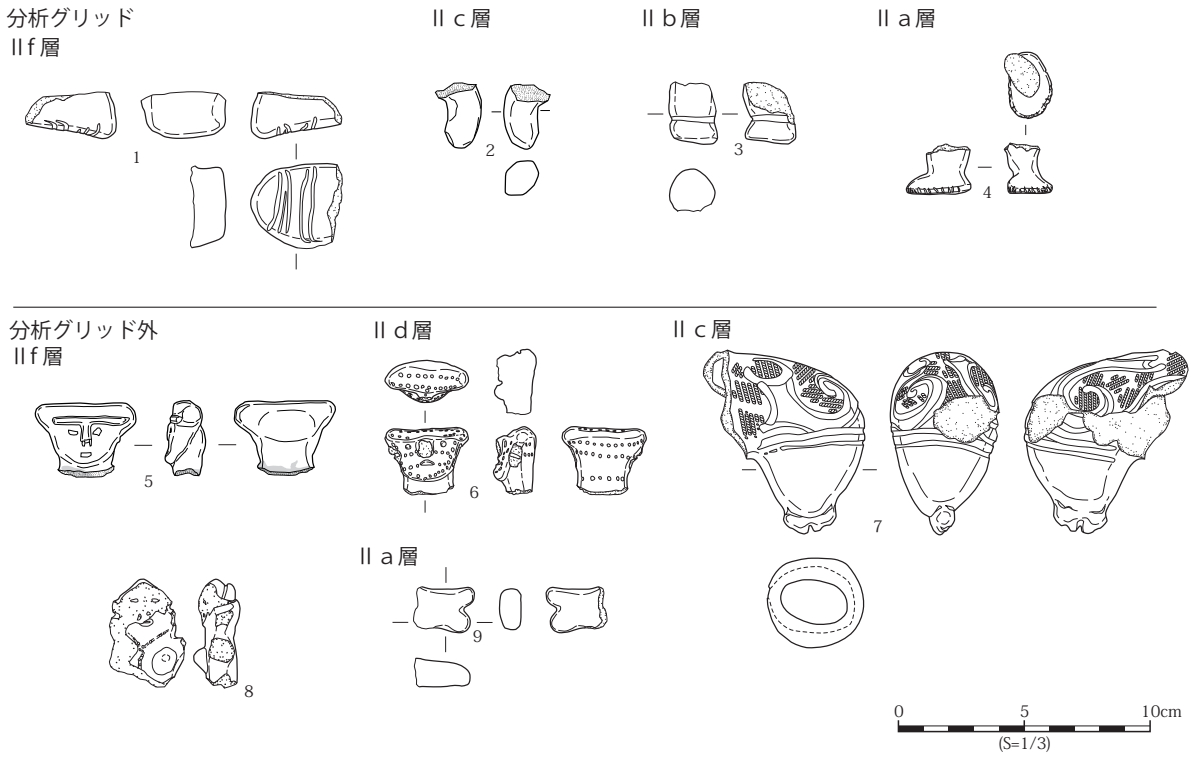


図Ⅲ-3-1-62　第1遺物集中区出土石製品（2）

図Ⅲ-3-1-63　第1遺物集中区出土土製品（1）



図Ⅲ-3-1-64　第1遺物集中区出土土製品(2)



図Ⅲ-3-1-65　第1遺物集中区出土土偶

E. 土偶（図Ⅲ -3-1-65）

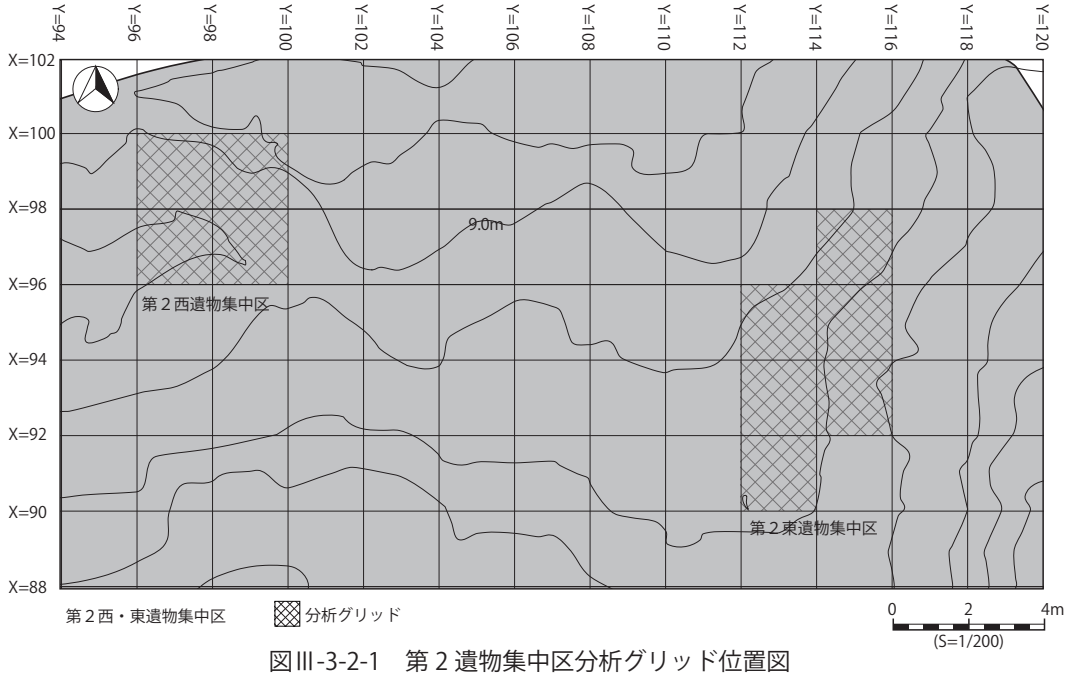
1は土偶の脚部で、足裏に沈線文を施す。中実土偶である。2は土偶の腕部で、肘部分が屈折する中実土偶である。3は土偶の脚部で、足首を沈線で表現している。4は土偶の左側脚部で、全体に磨滅している。足指を多数の沈線による刻み目で表現している。中実土偶である。5は土偶の頭部で、割れ口にアスファルトが付着している。目・鼻の穴・口が刺突文、眉毛・鼻は隆帯によって表現されている。頭部は2つの角状にのびる突起が付く。6は土偶の頭部で、顔や後頭部・頭頂部には刺突文を列状に施す。目・口を刺突文、鼻は貼瘤で表現している。頭部は2つの角状にのびる突起が付く。7は遮光器土偶の左腕とみられる。中空土偶である。肩部の雲形文は入組文化している。8は土偶の頭・胴部で、顔面が大きく剥落する。目・鼻は刺突、耳に貫通孔を施す。9は土偶の腕部で直線的に伸び、端部が二股に分かれている。

（榊原）

2. 第２遺物集中区

概　要

【位置・確認】遺跡の南東（グリッド X=70 ～ 106,Y=92 ～ 130）に位置する。検出面はⅡｂ層である。【規模・形状】南北 26 m、東西 30 mの隅丸三角形状を呈する。西側に土坑群および中央西寄りに SI01 が確認された。また東側はカクランが確認された（図Ⅲ -3-2-1）。



図Ⅲ-3-2-1　第２遺物集中区分析グリッド位置図

(1) 第２西遺物集中区

【位置・確認】遺物掲載グリッドは、第２遺物集中区の西側（グリッド X=98 ～ 100,Y=98 ～ 100）標高約８～９ mに位置する（図Ⅲ -3-2-1）。検出面はⅡｂ層である。

【出土遺物】土器、土製品、石器・石製品が出土した。土器では、第３群・第５群～第 9b 群土器が出土した。土製品では、土偶、耳飾、土製管玉、土製垂飾、土製勾玉、土製丸玉、イモガイ形土製品、環状土製品、蓋形土製品が出土している。石器・石製品では、剥片石器（尖頭器・石鏃（異形含む）・石錐・石箆・石匙・スクレイパー・ＲＦ・刃器・小型石錐）、磨製石斧、磨石・敲石類、石皿・台石類、砥石、管玉、垂飾、有孔石製品、石核、異形礫が出土している。

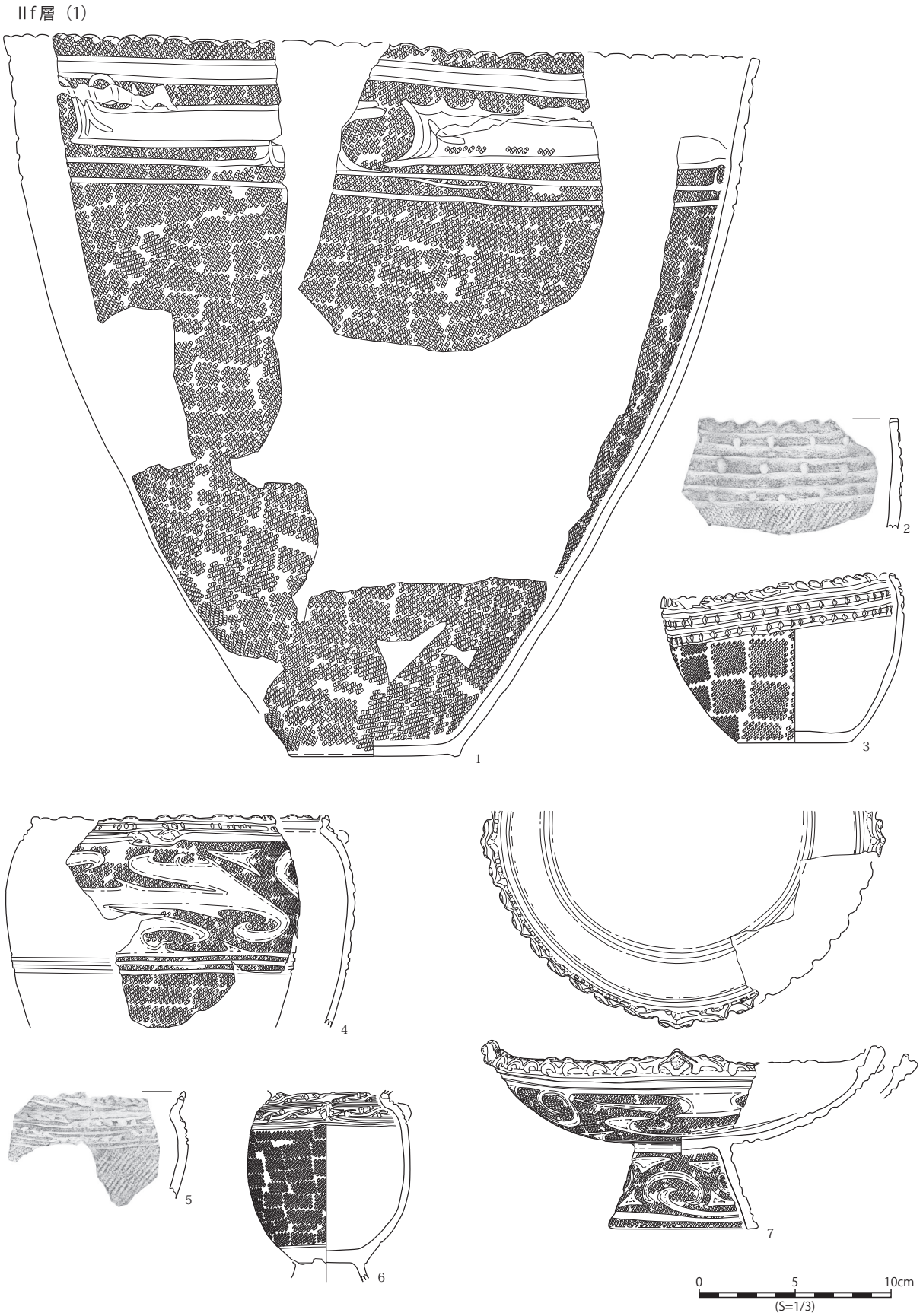
【時期】下限を示す時期の土器は第８群土器である。

A. 土器

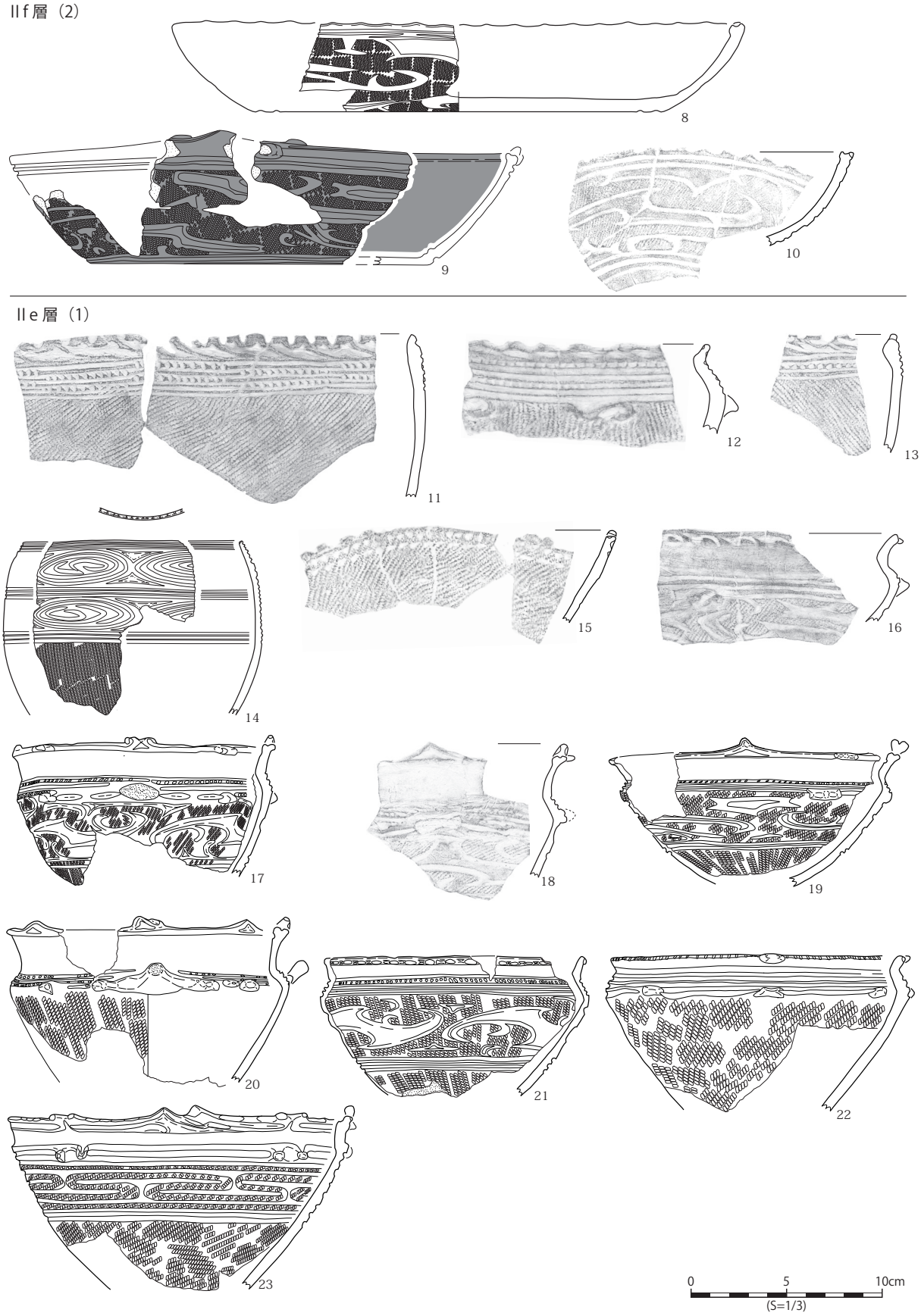
第２西遺物集中区は、カクランの影響を受けているため土器のカウント作業は行わなかったが、出土層位が明確な 77 個体を図化した。以下各層ごとに土器の特徴を記載する

①Ⅱｆ層（図Ⅲ -3-2-2・3）

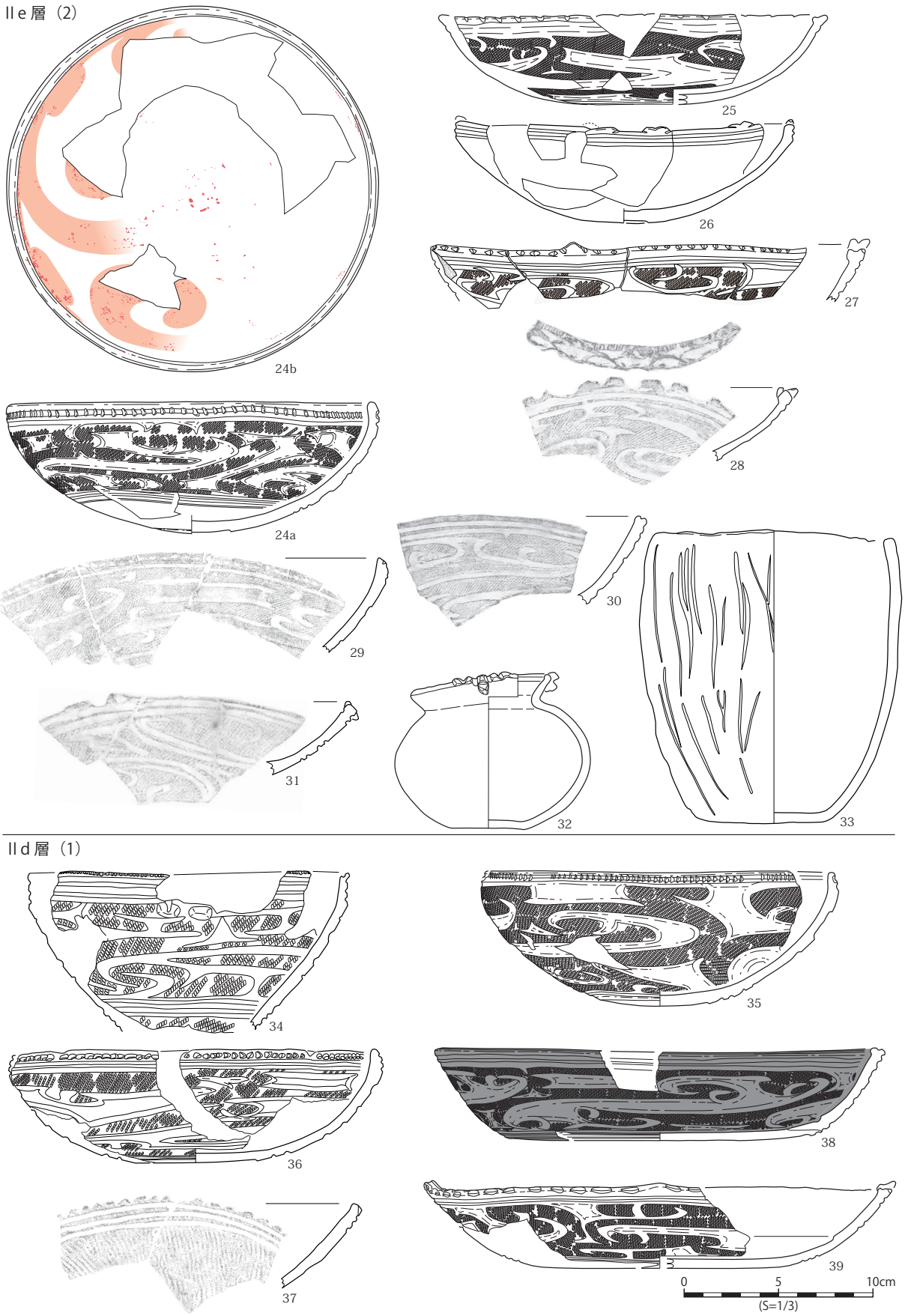
1 は３群の深鉢であり、口縁部に入組帯状文が展開する。2 は５群の深鉢であり、口縁部に間に列点文が施された２条の横位沈線が３段巡る。3 は５群の鉢であり、口唇直下にノの字状の沈線が巡る。口縁部は間に列点文が施された２条の横位沈線が２段巡る。4 は７群の鉢であり、口頸部に中間を沈線で区画された突起を有する。体部は雲形文が展開する。5 は５群の鉢であり、口頸部に羊歯状文



図Ⅲ-3-2-2　第 2 西遺物集中区出土土器（1）



図Ⅲ-3-2-3　第２西遺物集中区出土土器（2）



図Ⅲ-3-2-4　第 2 西遺物集中区出土土器（3）

が巡る。6 は 5 群の台付鉢であり、口頸部および体部上半に羊歯状文が 2 段巡る。7 は 7 群の台付浅鉢であり、口唇部は間に刻みのある山形突起が四方に配置され、沈線に区画された突起が連続する。体部および台部は雲形文が展開する。8・9 は 7 群の皿であり、体部に雲形文が展開する。9 は口唇部に山形突起を有し、内・外面にベンガラが塗布される。10 は 7 群の浅鉢・皿であり、体部に雲形文が展開する。

②Ⅱｅ層（図Ⅲ -3-2-3・4）

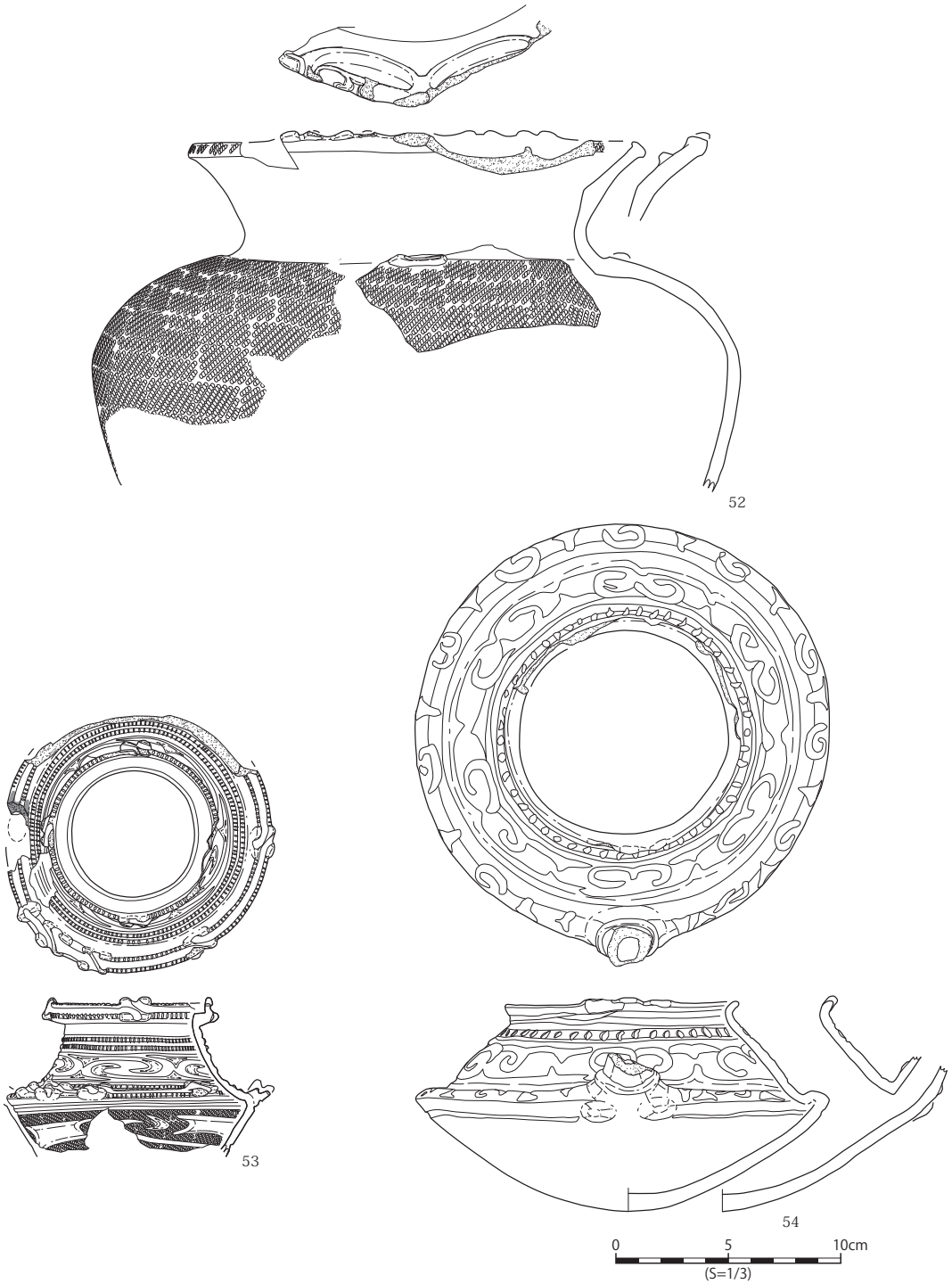
11 は 5 群の深鉢であり、口唇直下の外側に列点文とその下にノの字状の沈線が連続して巡る。口縁部は簡略化された羊歯状文が巡る。12 は 7 群の深鉢であり、口唇直下に横長の列点文が巡る。口頸部は列点文 1 条横位沈線 2 条の単位が 2 段巡る。13・14・16 ～ 22 は 7 群の鉢である。13 は口唇直下にノの字状の沈線が巡り、口頸部に列点文および横位沈線が巡る。14 は体部上半に横方向に連続する渦巻文が 2 段巡る。16 ～ 19・21 の体部には雲形文が展開する。16 は口唇直下に中間をならした突起が連続する。17 は口唇部に中間をならした B 突起を有し、口唇直下に突起に沿う沈線が巡る。18・19 は口唇部に中間に刻みのある山形突起を有する。20 は口唇部に等間隔の山形突起が配置され、体部上半は大型の突起および両脇に B 突起を有する。21 は口唇直下に列点文が巡る。22 は口頸部に数条の横位沈線が巡る。23 は 8 群の鉢であり、口唇部に頂部が凹む山形突起を有し、口頸部は粘土粒に区切られた結節が巡る。体部は流水状工字文のポジ文様が展開する。15 は 9b 群の鉢であり、口唇部に 2 つ並んだ B 突起が間隔を空けて配置され、口縁部は 2 条の刺突文が巡る。24 は 7 群の浅鉢であり、内・外面にベンガラが塗布される。内面は彩文が施される。口縁部に列点文が巡り、体部は雲形文が展開される。25 は 7 群の皿であり、体部は雲形文が展開される。26 は 7 群の浅鉢であり、口唇部に中間がくぼむ山形突起を有する。口縁部は 2 条の横位沈線が巡り、体部は無文である。27 ～ 31 は 7 群の浅鉢・皿であり、体部は雲形文が展開する。27 は口唇部に中間に刻みのある山形突起を有する。28 は口唇部に装飾的な突起が連続する。29 は内・外面にベンガラが塗布される。口唇直下に列点文が巡り、体部は雲形文が展開する。30 は、7 群の皿であり、内・外面にベンガラが塗布される。31 は内・外面にベンガラが塗布される。口唇部に中間が凹む山形突起を有する。32 は 6 群の壺であり、口唇直下に中間に刻みのある突起および両脇に B 突起を有する。33 は 3 ～ 8 群の深鉢であり、体部に縦位の条痕文が施される。

③Ⅱｄ層（図Ⅲ -3-2-4 ～ 6）

34 は 7 群の鉢であり、体部上半に B 突起を有し、体部は雲形文が展開する。35 は 6 群の浅鉢であり、口縁部は列点文が断続的に巡り、体部は雲形文が展開する。36 は 6 群の皿であり、口縁部に列点文が巡り、体部は雲形文が展開する。37・44 は 7 群の浅鉢、38 ～ 43・45 ～ 51 は 7 群の皿である。37 は口唇直下に刺突により形成した突起が連続し、口縁部は 3 条の横位沈線が巡る。38 ～ 51 は体部に雲形門が展開する。38 は外面に赤彩が施される。39 は口唇部に中間に沈線が施された山形突起が 4 単位配置される。口唇直下はやや横長の列点文が巡る。40 は内・外面にベンガラが塗布される。口唇部に山形突起を有し、口唇直下に粘土粒の突起が等間隔で配置される。42 は口唇部に中間に刻みのある突起が 4 単位配置される。43 は内・外面にベンガラが塗布される。波状口縁を呈し、底部外面にも雲形文が展開する。44 は口唇部に中間に刻みのある山形突起を有し、口縁直下は列点文が巡る。45 は底部外面にも雲形文が展開する。46 は口唇部に刻みが 2 つ入った山形突起を有し、やや長い斜方向の沈線が巡る。体部に補修孔が数箇所みられる。47 は口縁部に列点文が巡る。48 は口

図Ⅲ-3-2-5　第 2 西遺物集中区出土土器（4）

Ⅱｄ層（3）



図Ⅲ-3-2-6　第２西遺物集中区出土土器（5）

唇部にやや狭い間隔で突起が配置され、突起を区画する沈線が巡る。50 は口唇部は内側に向いたノの字沈線が巡る。51 は口唇部に山形突起を有する。52 は 7 群の壺であり、口唇部に B 突起を有し、口縁内側は半円状の隆帯が施される。体部上半に B 突起を有する。53 は 7 群の注口土器であり、口唇部は沈線に区画された突起を有し、刻目文が巡る。体部上半は 2 条の刻目文の下に雲形文が展開し、体部の屈曲部に B 突起が不規則に配置される。体部下半は雲形文が展開する。54 は 5 群の注口土器であり、口唇部には山形突起を有し、体部上半には列点文が巡り、その下に弧状沈線が展開する。注

口下部には２つの突起を有する。

④Ⅱｃ層（図Ⅲ -3-2-7）

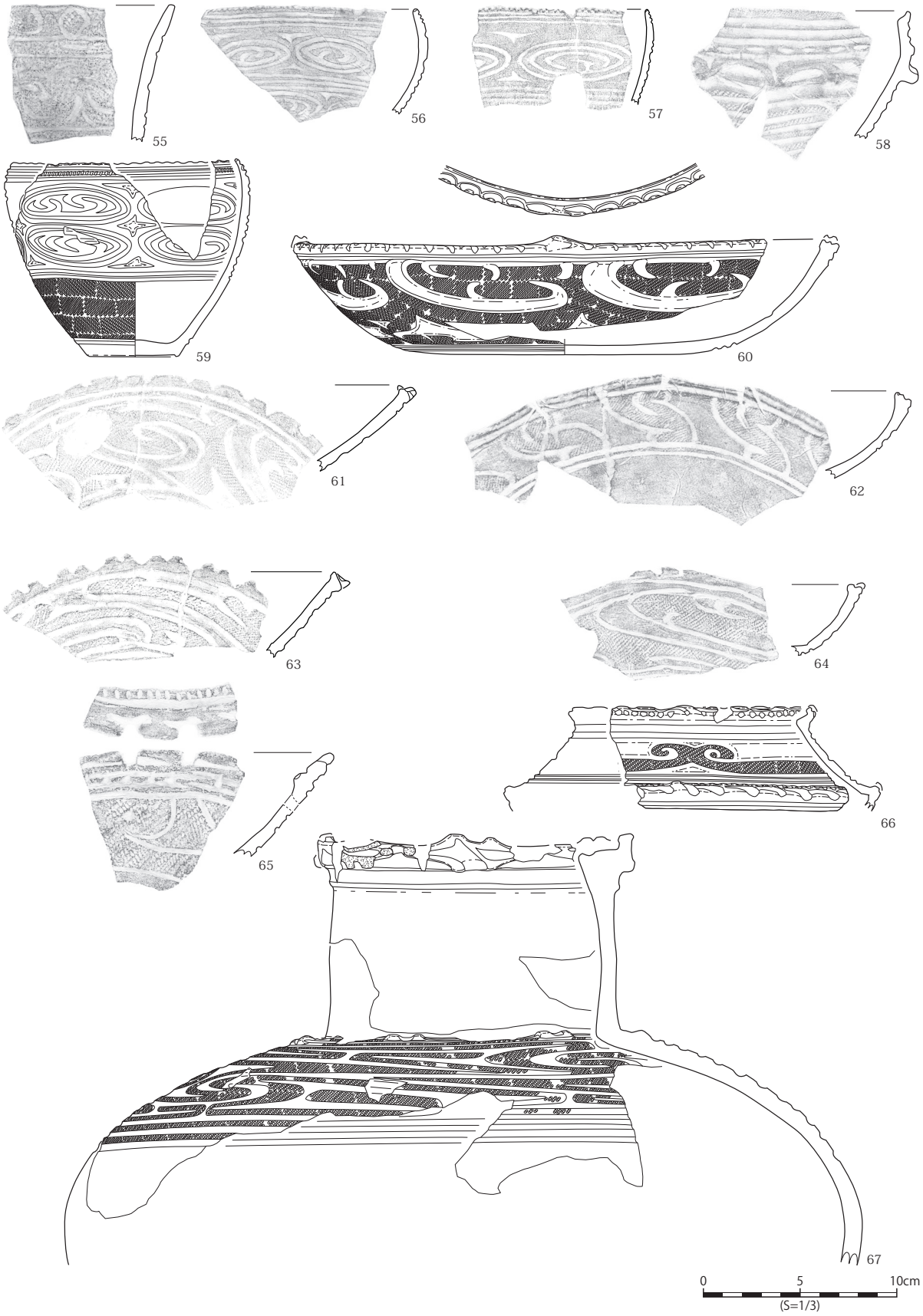
55 は３群の深鉢であり、体部には入組帯状文が展開する。56 ～ 59 は７群の鉢である。56・57 は３条の横位沈線と渦巻文が２段巡る。58 は口頸部に横位沈線と横長の列点文が巡り、体部上半には上面に三叉状の窪みが入り、突起間に沈線が施されたやや大型の突起が配置される。体部は雲形文が展開する。59 は口頸部に横位沈線が巡り、体部上半は２段の渦巻文が展開する。61 は６群の皿であり、口唇直下に平縁を区画した突起が連続して巡る。体部は雲形文が展開する。60・62・64 は７群の皿であり、体部に雲形文が展開する。60 は口唇部に山形突起を有し、外側に向かう半円状の沈線が連続して巡る。64 は口唇部に間を三叉状に彫去された突起を有する。63・65 は、７群の浅鉢であり、体部に雲形文が展開する。63 は口唇部に装飾的な突起が施される。65 は口唇部に平縁を区画し内側に三叉状の彫去が施された突起を有する。口縁部には列点文が断続的に巡る。66 は、７群の注口土器であり、口唇部に沈線で区画された突起、頸部に横位沈線、体部には連繋入組文が巡る。体部上半には間がならされたＢ突起が連続する。67 は７群の壺であり、口唇部には沈線で彫去された突起が装飾的に巡る。体部上半にはＢ突起が等間隔で配置され、その下には雲形文が展開する。

⑤Ⅱｂ層（図Ⅲ -3-2-8）

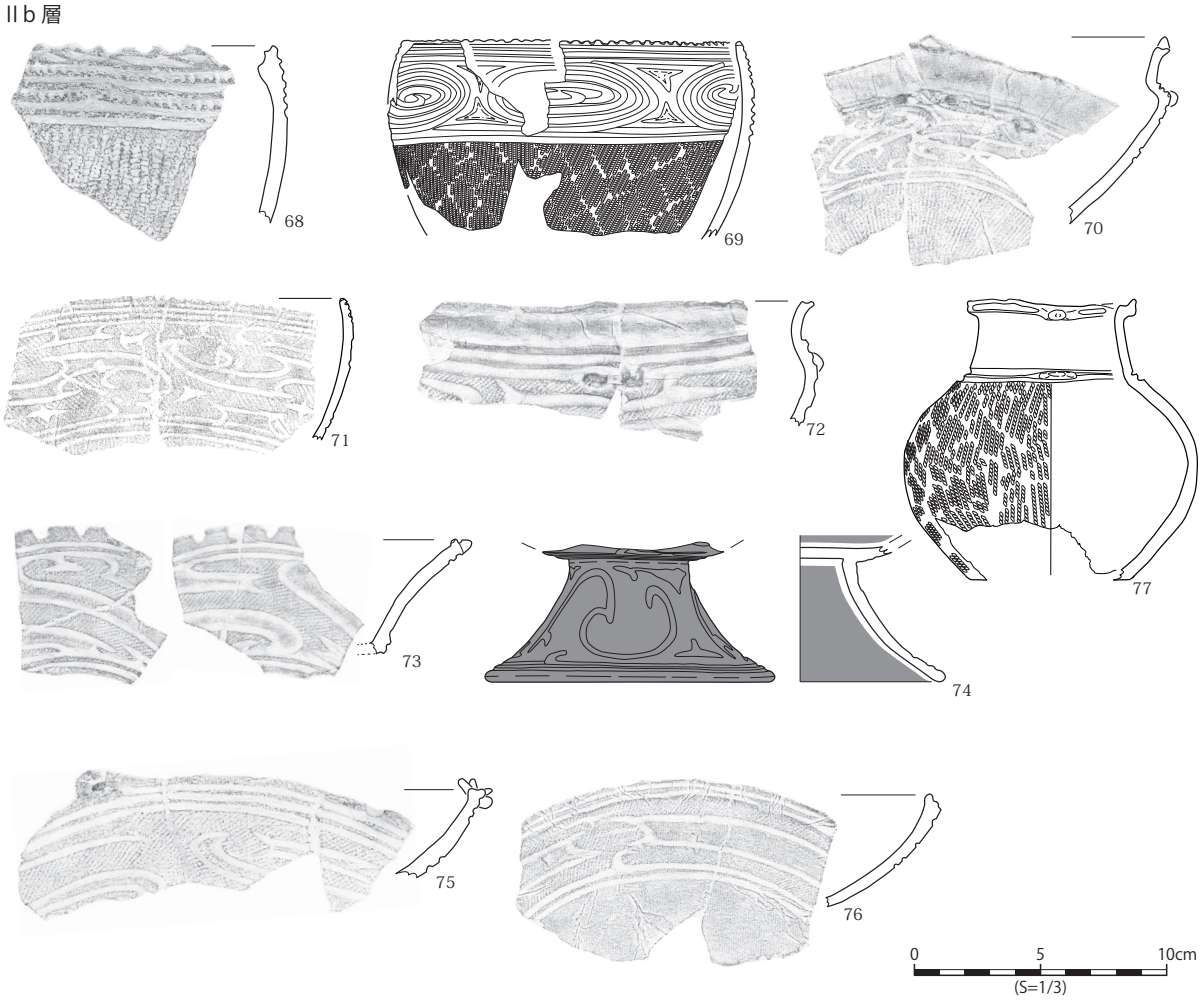
68 は６群の深鉢であり、口頸部に簡略化した羊歯状文が巡る。69 ～ 72 は７群の鉢である。69 は体部上半に渦巻文が展開する。70 ～ 72 は体部に雲形文を展開する。70 は口唇部に山形突起を有する。72 は体部上半にＢ突起を有する。73 は７群の浅鉢であり、口唇直下に平縁を区画した突起が連続する。体部には雲形文が展開する。74 は７群の台付浅鉢であり、台部のみ出土した。内・外面にベンガラが塗布される。台部には弧状沈線および三叉文が巡る。75・76 は７群の皿であり、体部に雲形文が展開する。75 は外面にベンガラが塗布される。口唇部に山形突起を有する。77 は７群の壺であり、口唇直下および体部上半に間に突起を有する横位沈線が巡る。

（江戸）

Ⅱc 層



図Ⅲ-3-2-7　第２西遺物集中区出土土器（6）



図Ⅲ-3-2-8　第２西遺物集中区出土土器（7）

B. 石器・礫（表Ⅲ -3-2-1、図Ⅲ -3-2-9 ～ 15）

7,654 点、91.0kg の石器・礫を検出した。数量は剥片・砕片 5,545 点、搬入礫 1,755 点が目立つものの、他の集中区に比べ、微細剥離のある剥片が少なく、石鏃、スクレイパー、小型スクレイパーが多い特徴がある。剥片石器は尖頭器、石鏃などの定型石器 184 点、スクレイパーなどの不定形石器 117 点がある。また、石皿・台石類などの礫石器は 35 点ある。

定型の剥片石器の内訳は尖頭器 8 点、石鏃 158 点、石錐 5 点、石匙 18 点、石箆 4 点で、石鏃が 81％を占める。不定形の剥片石器はスクレイパー 51 点、微細剥離のある剥片 1 点、メノウ製を主とする小型石錐 23 点、小型スクレイパー 42 点である。礫石器は磨石・敲石類 29 点、石皿・台石類 5 点、砥石 1 点である。不定形の剥片石器を除いた、定型石器と礫石器にしめる割合をみると石鏃が約 68% と他に比べて高い。

石器製作に関わる石核・剥片・砕片は、5,552 点で点数全体の 72% を占める。

異形礫はほとんどなく、搬入礫は 1,755 点と点数全体の約 20% と他の集中区に比べ低い。

層位別の割合をみると、上層のⅡａ層から下層のⅡｇ層にかけて、石鏃が高くなる。一方下層にかけて小型石錐、微細剥離のある剥片、小型スクレイパーが低下する。中層のⅡｃ層～Ⅱｄ層では尖頭器、石匙、石箆、石皿・台石類、磨石・敲石類の割合が高くなる（表Ⅲ -3-2-1）。

表Ⅲ -3-2-1　第 2 西遺物集中区出土石器・礫の層位別・種別出土数

	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅱ c	Ⅱ d	Ⅱ e	Ⅱ f	その他	計
尖頭器	1	2		1	4			8
石鏃	22	17	9	17	39	23	31	158
石錐	2			1	1	1		5
小型石錐	20				2	1		23
石匙	1	1	4	6	2	2	2	18
石箆		2		1		1		4
スクレイパー	19	3	1		11	13	4	51
微細剥離のある剥片			1					1
小型スクレイパー	37	1			2	2		42
磨石・敲石類	2	4	4	5	9	4	1	29
石皿・台石類		2	2	1				5
砥石		1						1
石錘								0
磨製石斧		1					1	2
その他（擦切・扁平石器）								0
石核	1	1	1	1		1	2	7
メノウ石核								0
剥片	69	66	45	56	75	104	23	438
小型柱状剥片	1	1			2		3	7
砕片	1,226	611	359	749	1,053	845	257	5,100
異形礫								0
搬入礫	402	215	168	263	311	335	61	1,755
計	1,803	928	594	1,101	1,511	1,332	385	7,654

図Ⅲ -3-2-9（以下Ⅲ -3-2-9 は省略）-1 ～ 6 は尖頭器である。8 点出土した。分類別の内訳は木葉形が 3 点（1 ～ 3）、菱形が 2 点（4・5）、山形が 2 点、卜形が 1 点（6）である。

7 ～ 47 は石鏃である。158 点中、内訳は凸有 a 類 19 点（12％）、凸有 b 類 106 点（67％）、凸有 c 類 5 点、凸有 d 類 4 点、凸有 f 類 7 点、凸有 e 類、凹基無茎、凹基有茎、平基有茎、異形鏃各 1 点である。石材別では、158 点中 128 点が頁岩で、メノウ 23 点、黒曜石 7 点である。アスファルト付着が 35 点ある。

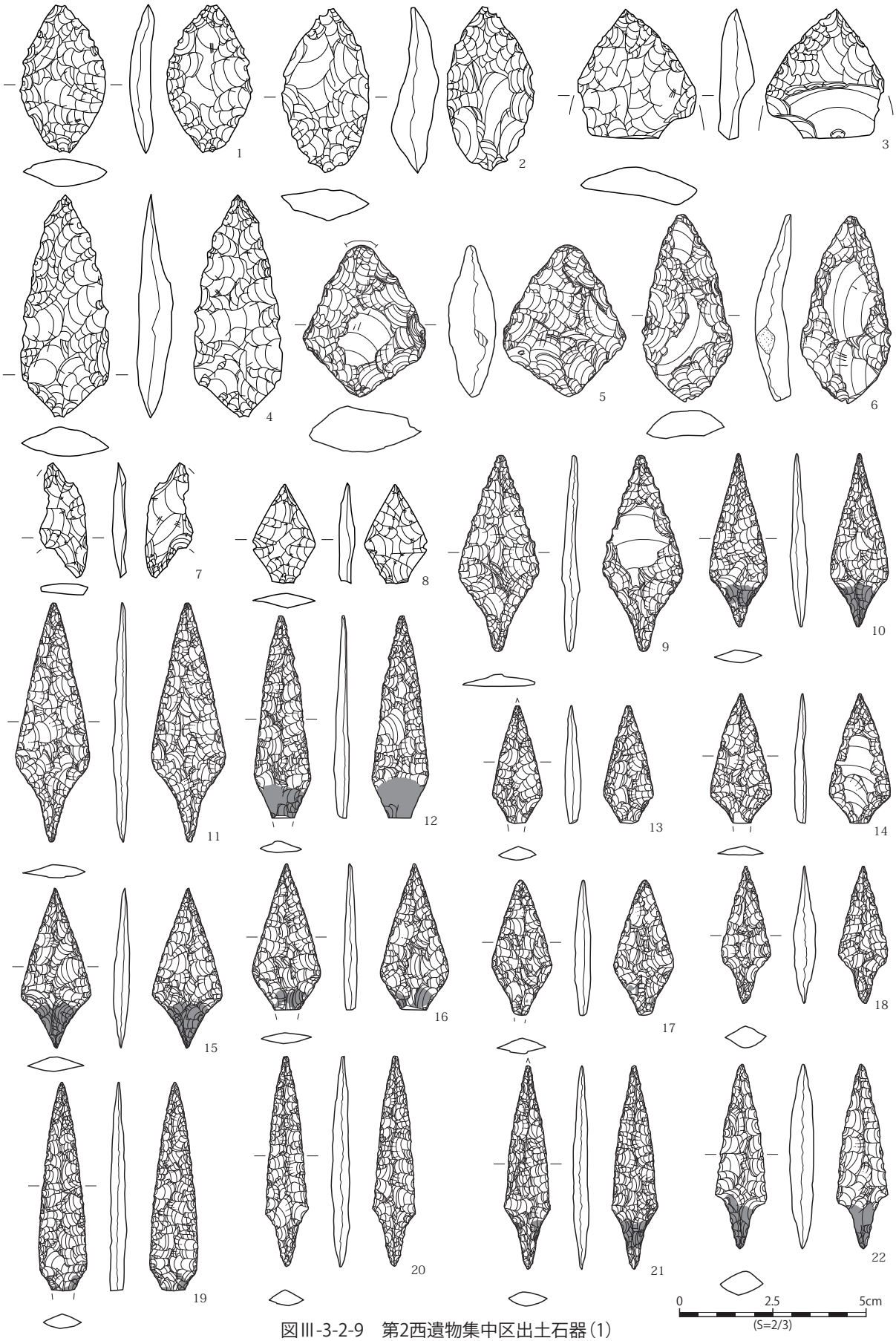
凸有 a 類は 10 点図示した（8 ～ 17）。うち 10・12・15 ～ 17 の 5 点にアスファルトが付着する。12 は機能部が長く、アスファルトが基部周辺に多量に付着している。凸有 b 類は 20 点を図示した（18 ～ 37）。アスファルト付着資料が 20 点中 10 点ある（19・21・22・23 ～ 28・36）。アスファルトの付着位置は、ほとんどが基部か基部周辺である。凸有 c 類は 5 点出土した。石材は頁岩である。凸有 d 類は 4 点ある（38・39）。38 は楕円形に近いが、先端部がややすぼまる。39 の右側辺に、一箇所抉りがある。凸有 e 類は 1 点ある（40）。基部の縁辺部に少量のアスファルトが付着する。凸有 f 類は 5 点図示した（41 ～ 45）。凹基有茎鏃は 1 点図示した（46）。

47 は異形石鏃である。両側刃部が内湾し、上下で丸みを帯びる。基部はゆるやかに弧を描く。

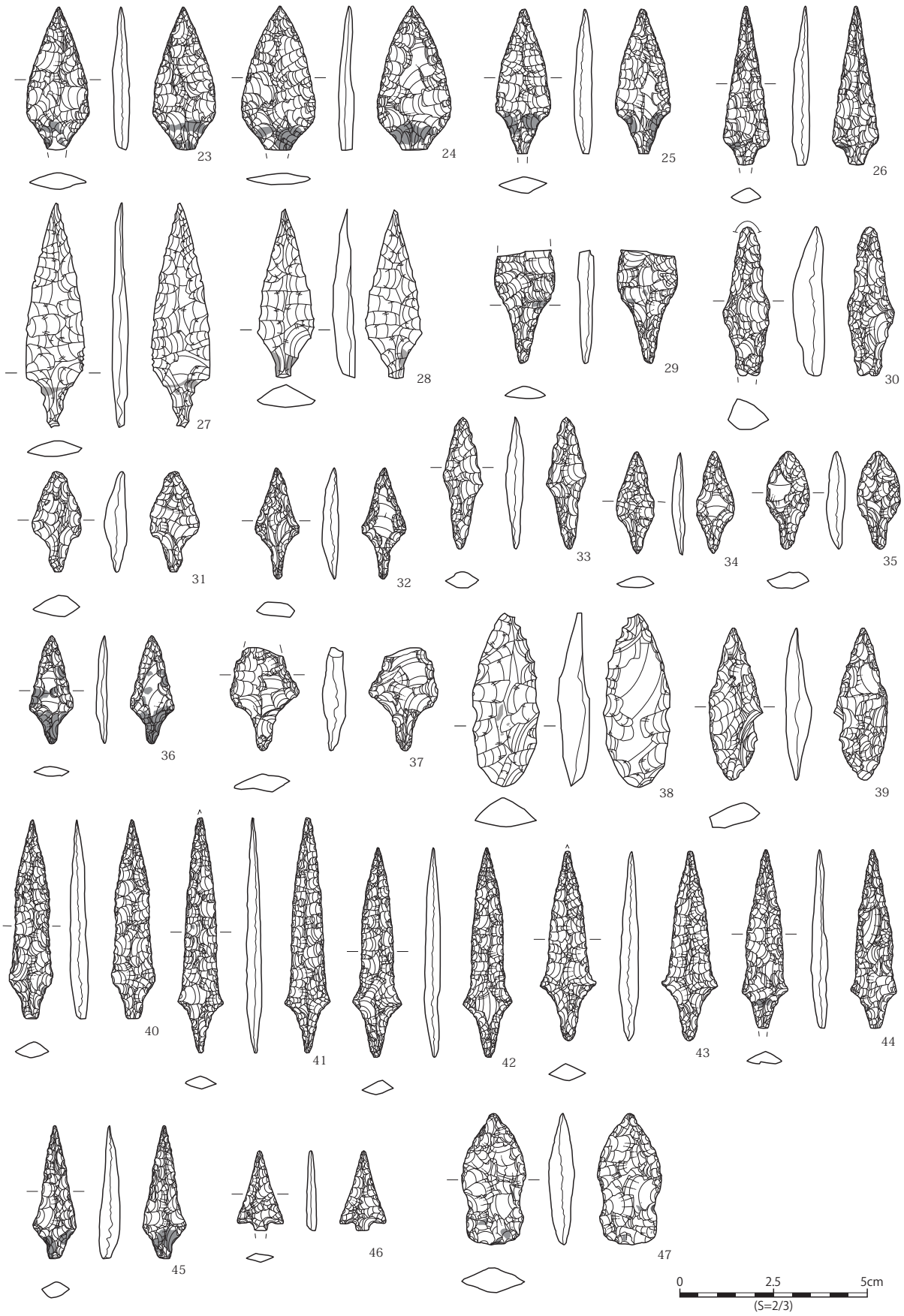
48 は頁岩製の石錐で上下端に錐部がある。49 ～ 55 はメノウ製小型石錐である。49・50 はつまみ部があり、51 ～ 55 は棒状で錐部断面が菱形になる。56 ～ 66 は石匙である。56 ～ 64 が縦型、65・66 が横型である。うち 60 ～ 64 の先端が尖る。斜型はほとんどない。67 は台形の石箆である。両側縁に弱い抉りが入る。

68 ～ 72 はスクレイパーである。68 ～ 70 は側面に刃部を作り出す。71･72 は横型剥片の下辺に刃部を作り出す。

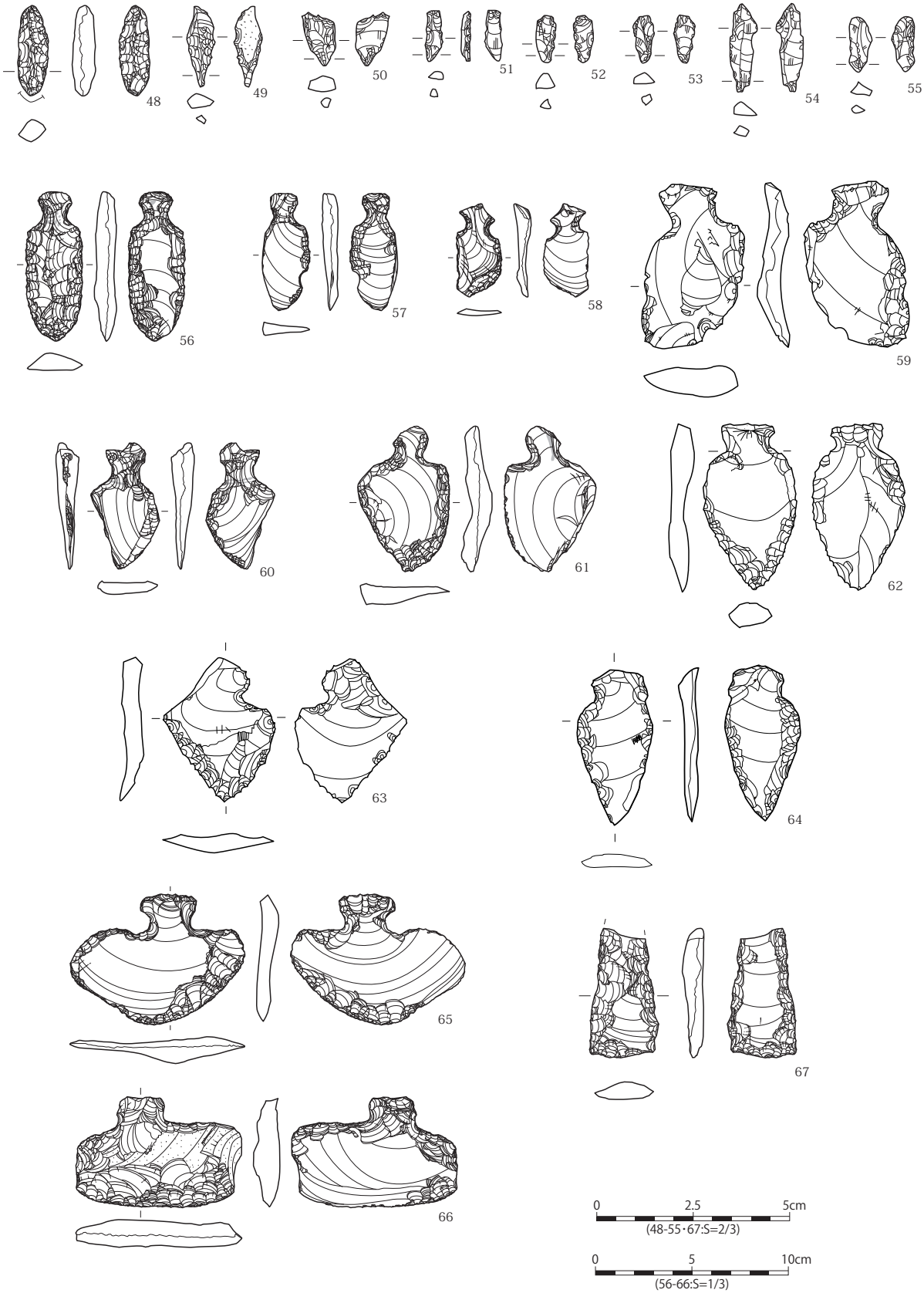
73 ～ 78 は微細剥離のある剥片である。74･75 は縦型剥片の側縁、76 ～ 78 は横型剥片の側縁に微細剥離が観察される。73･74･76 には光沢が確認できる箇所がある。79 ～ 82 はメノウ製の小型スクレイパーである。短冊形の縦長剥片の両側縁に刃部を作り出す。



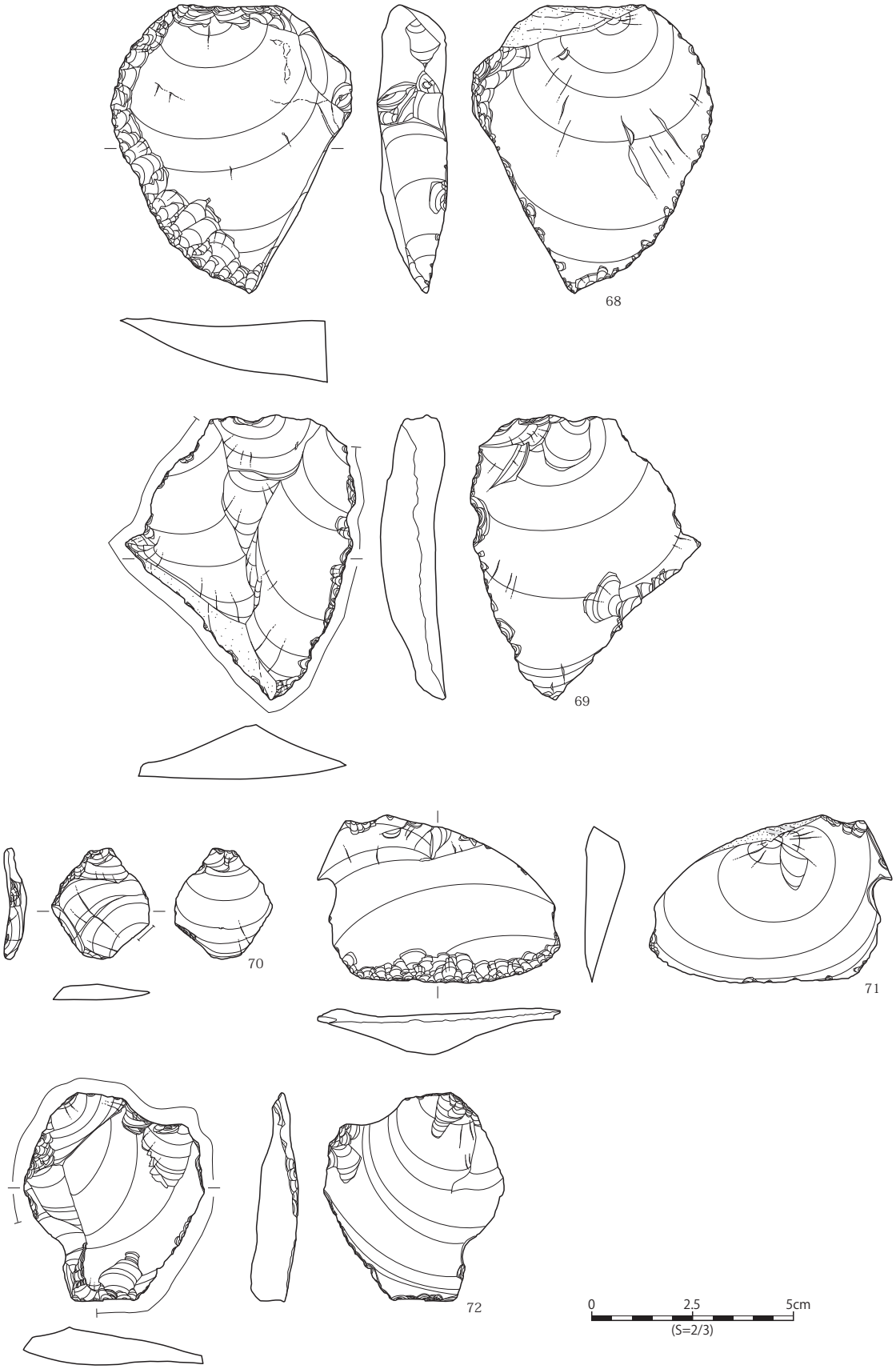
図Ⅲ-3-2-9　第2西遺物集中区出土石器（1）



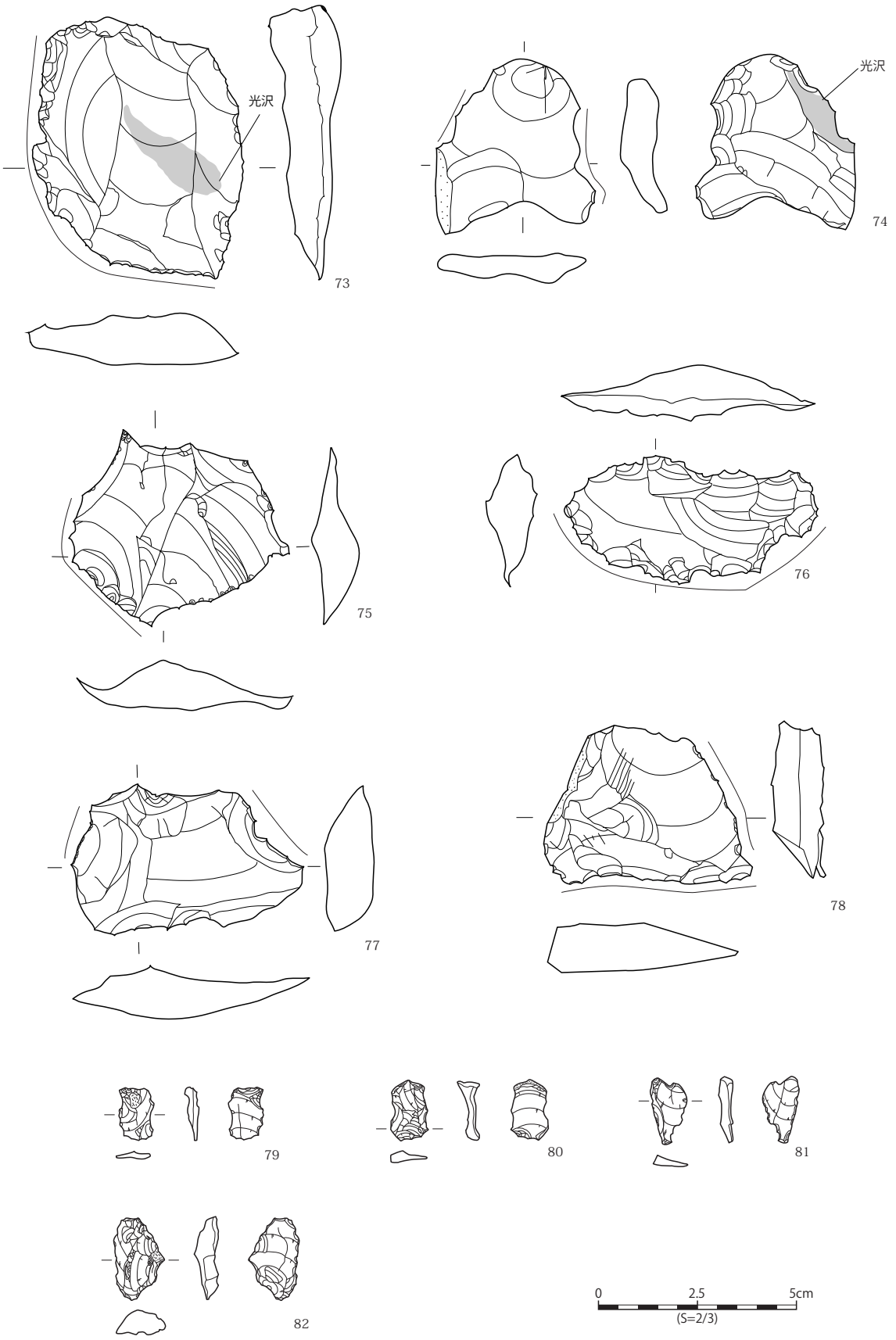
図Ⅲ-3-2-10　第2西遺物集中区出土石器（2）



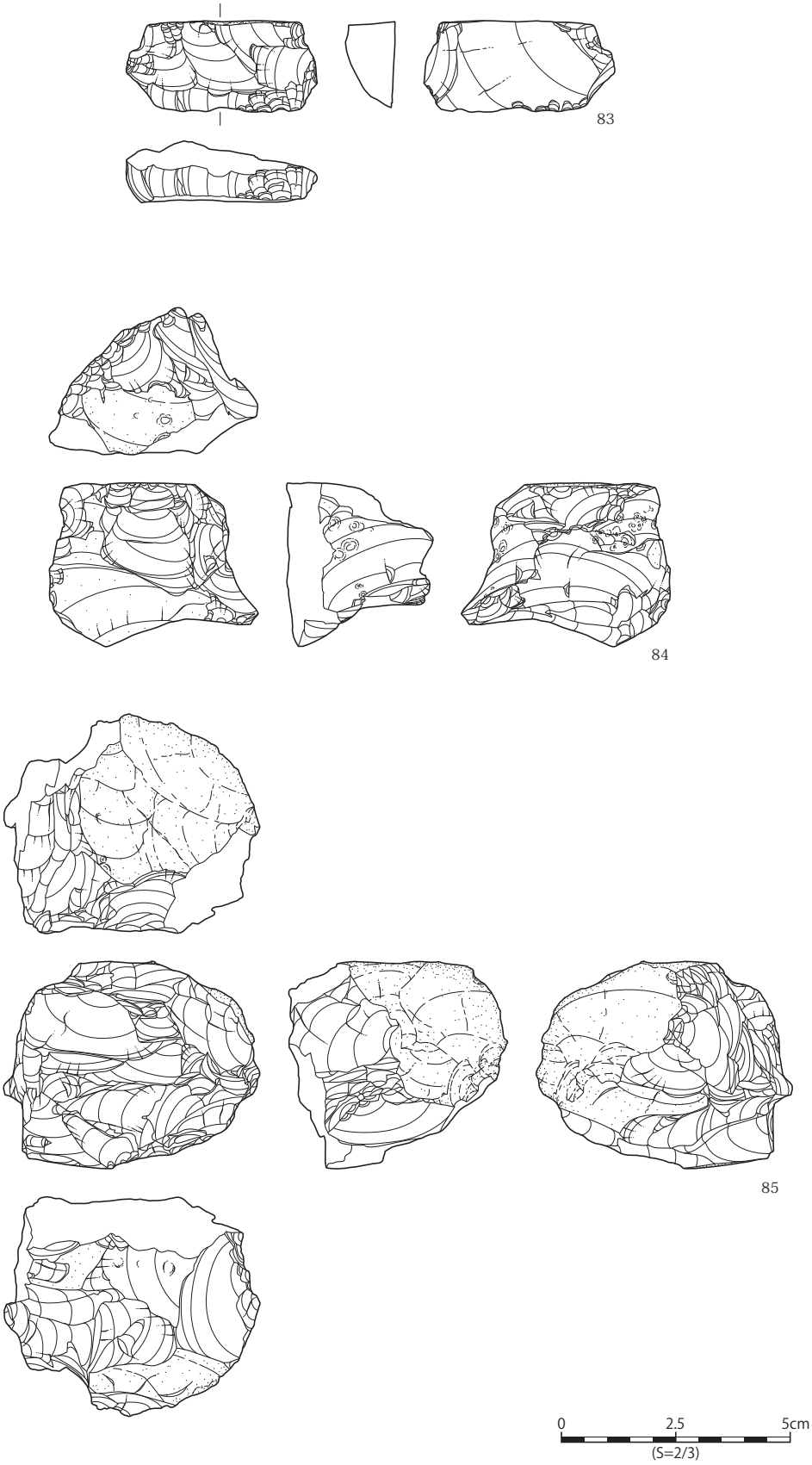
図Ⅲ-3-2-11　第2西遺物集中区西出土石器(3)



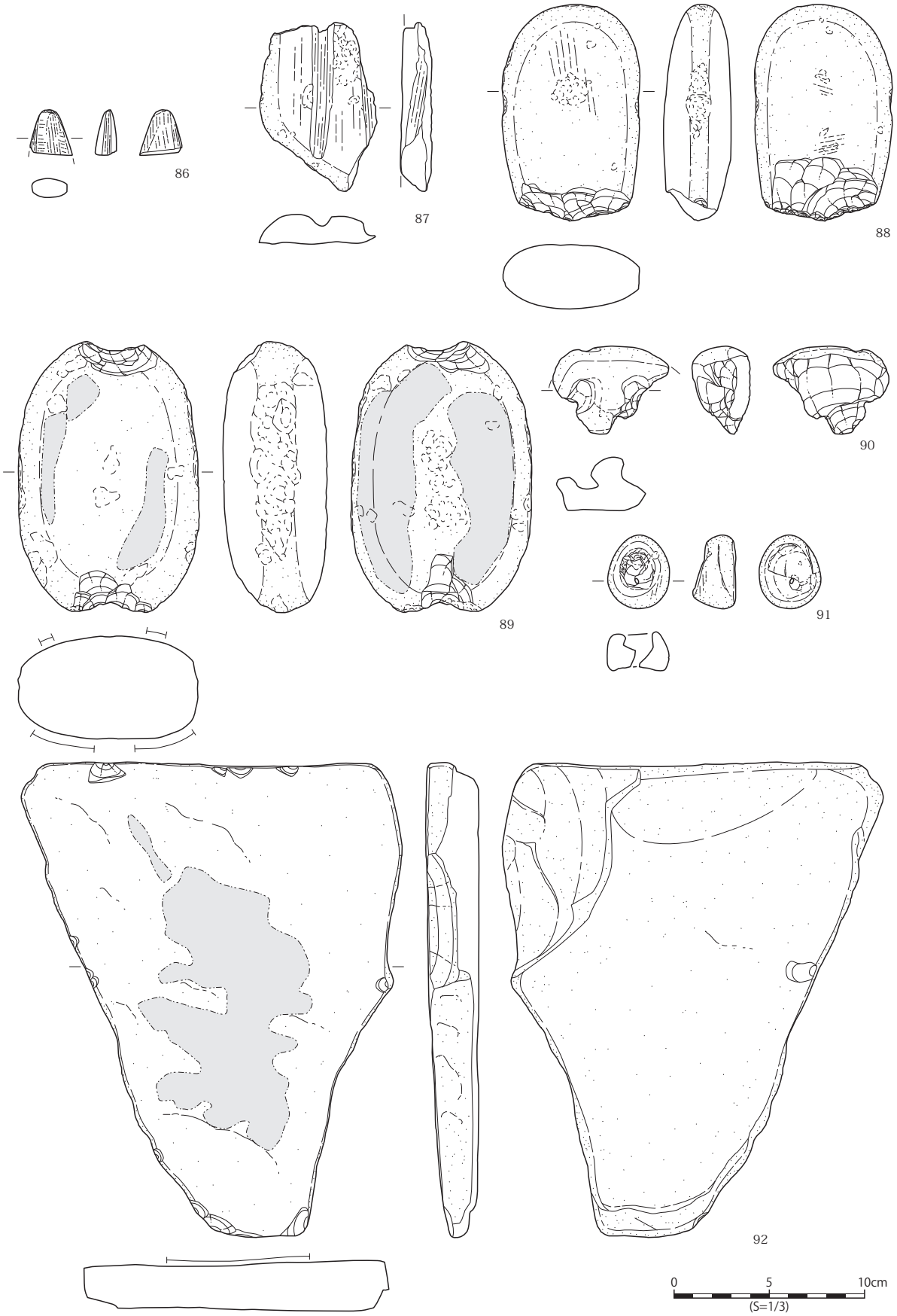
図Ⅲ-3-2-12　第2西遺物集中区出土石器(4)



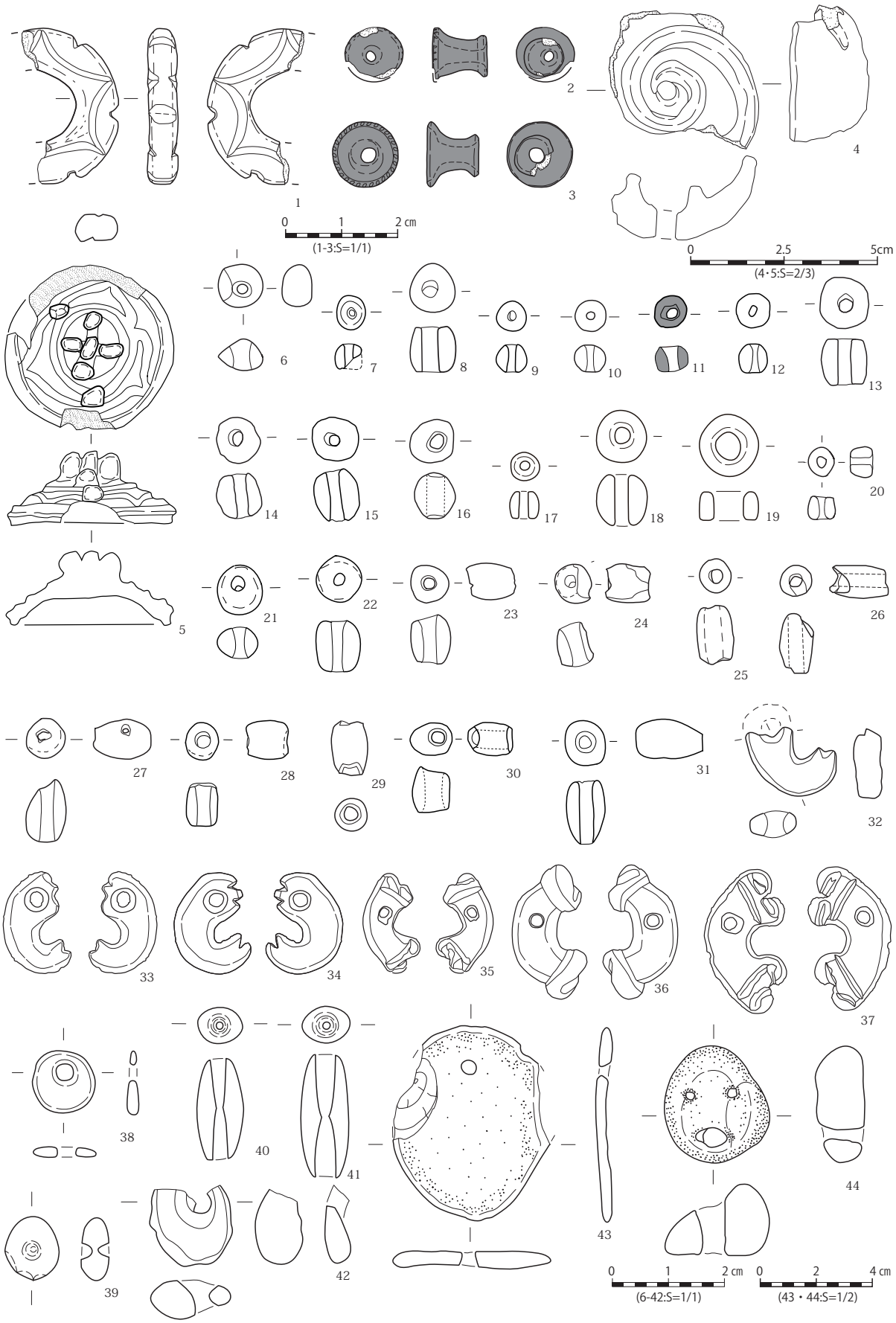
図Ⅲ-3-2-13　第2西遺物集中区出土石器(5)



図Ⅲ-3-2-14　第2西遺物集中区出土石器（6）



図Ⅲ-3-2-15　第2西遺物集中区出土石器(7)



図Ⅲ-3-2-16　第2西遺物集中区出土土製品・石製品

83 ～ 85 は石核である。83･84 は打面が先の剥離作業の打撃方向に対して、ほぼ直交する位置にある。85 は相対する上下両端に打面が設けられ、両設打面から交差するように剥片が剥離される。

86 は磨製石斧の頭部である。87 は玉砥石である。幅 1cm ほどの溝状の研ぎ面がある。88･89 は磨石・敲石類で、表裏面に凹痕と磨耗面、上下側面に敲打痕と剥落を伴う。89 の表裏面には長軸に対し斜め方向の磨耗面が観察でき、石を斜め方向に握っての作業が推定される。90･91 は異形礫で 90 には径 1cm ほどの凹み、91 には貫通孔がある。92 は板状節理のある安山岩を用いた台石である。表面に弱い磨耗面が均一的に広がる。

C. 土製品・土製玉類（図Ⅲ -3-2-16）

土製品･土製玉類は環状土製品、土製耳飾、イモガイ形土製品、蓋形土製品、土製丸玉、土製管玉、土製勾玉、土製垂飾がある。1 は環状土製品で連続弧文を巡らす。2･3 は土製耳飾である。ロート形で貫通孔がある。赤色顔料が塗布される。4 はイモガイ形土製品で、貫通孔を中心に内面に渦状文を施す。5 は小型の蓋形土製品で工字紋に類似する文様が描かれる。6 ～ 22 は土製丸玉である。23 ～ 31 は土製管玉である。23 ～ 31 のようにナツメ玉に近い形が多い。32 ～ 37 は土製勾玉である。両端部に装飾のあるものが多い。38 は土製垂飾で円盤形を呈する。

D. 石製品・石製玉類（図Ⅲ -3-2-16）

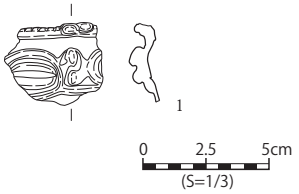
石製品・石製玉類は、管玉・垂飾・有孔石製品がある。39 は垂飾の未成品である。40･41 はヒスイ質の管玉である。42 は楕円形の泥岩に穿孔する。43 は凝灰岩製である。44 は有孔石製品で孔の開いた礫に小さな穴を開けたもので、ちょうど顔のような形になる。

（上條信彦）

E. 土偶（図Ⅲ -3-2-17）

1 は遮光器土偶の頭部で、中空である。目は楕円形の隆帯の中に横位沈線を施すことで、鼻は B 突起で表現している。頭頂部には B 突起と刻目文が施される。

（榊原）



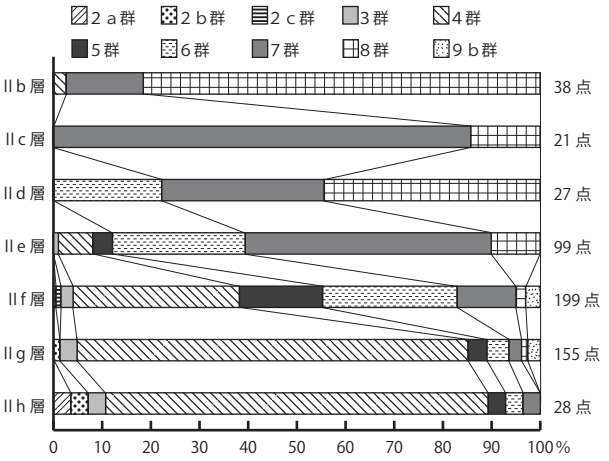
第Ⅲ-3-2-17　第 2 西遺物集中区出土土偶

(2) 第２東遺物集中区

【位置・確認】第２遺物集中区のほぼ中央、標高約９ｍに位置する（図Ⅲ -3-2-1)。X=92 ～ 96,Y=114、X=94 ～ 98,Y=116 の計６グリッドを分析グリッドとして設定した。検出面はⅡｂ層である。【出土遺物】土器、土製品、石器・石製品が出土した。土器では、第 2a 群～第８群土器が出土し、口縁部カウント数は 883 点である。土製品では、土偶、土面、類玉象嵌土製品、耳飾、土玉、蓋形土製品、イモガイ形土製品、円板状土製品、ミニチュア土器が出土している。石器･石製品では、剥片石器（尖頭器・石鏃・石錐・石箆・石匙・スクレイパー・異形石器・ＲＦ・小型石錐)、磨製石斧・擦切具、石核、石棒、石刀、岩版、勾玉、垂飾、棒状石製品などが出土している。【時期】下限を示す時期の土器は第８群土器である。

A. 土器

第２東遺物集中区はグリッドごとで、層位による出土遺物の変化がみられないため、同一層位ごとに遺物を取り上げた。以下層位ごとに土器の特徴を記載する。また、各群の層位ごとの出土状況をグラフで示す（図Ⅲ -3-2-18)。



図Ⅲ-3-2-18　第２東遺物集中区　各群の層位別出土割合グラフ

1）分析グリッド出土土器

①Ⅱｈ層（図Ⅲ -3-2-19）

2a 群の深鉢１点、2b 群の深鉢１点、３群の深鉢１点、４群の深鉢 16 点、鉢３点、注口土器３点、５群の注口１点、６群の鉢１点、３～６群の深鉢 11 点、壺２点、７群の鉢１点、３～８群の壺１点の計 42 点出土した。そのうち図化したのは８点である。

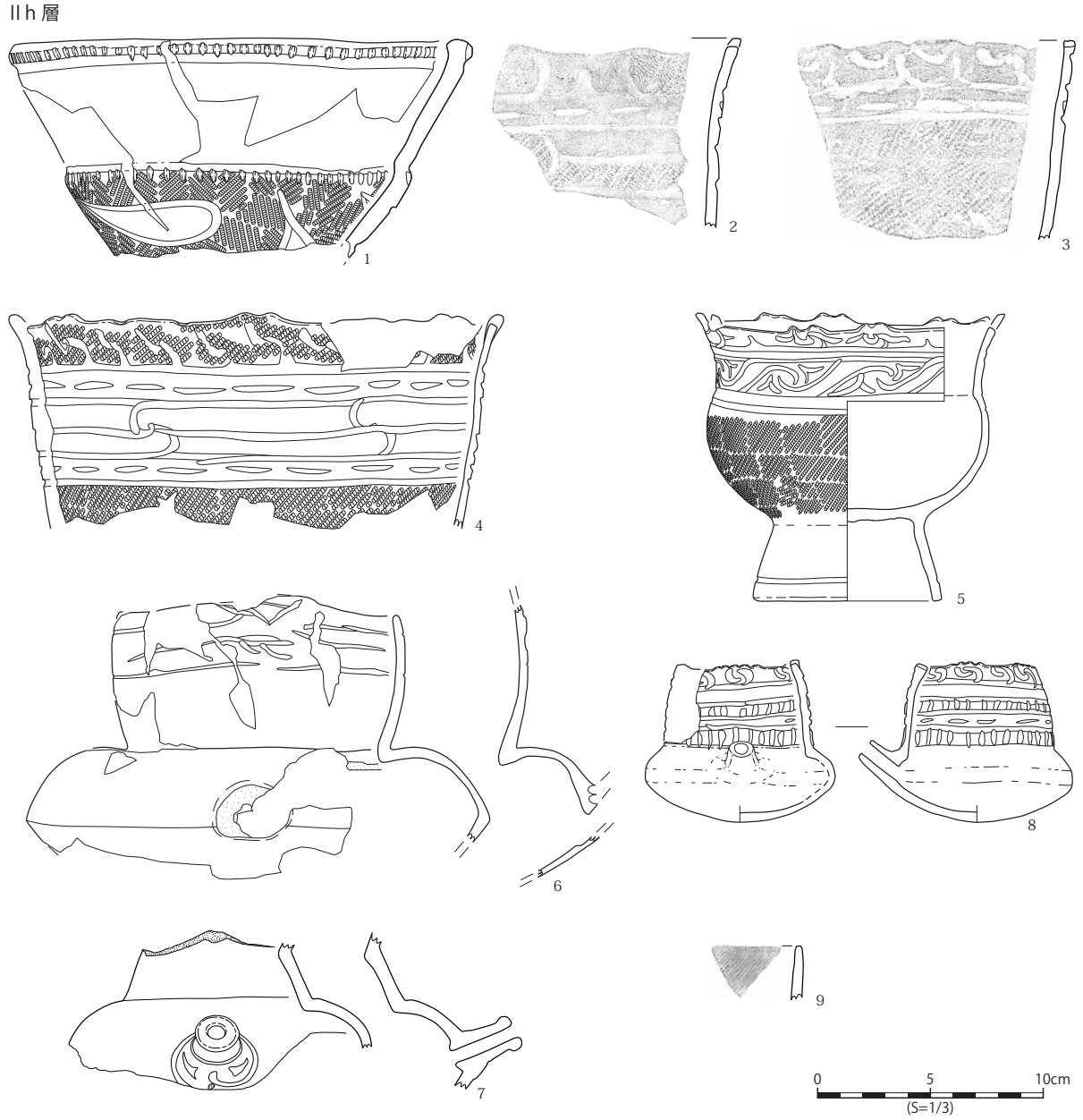
１は、2a 群の深鉢であり、口唇直下と体部上半に刻目文、体部には同一原体の回転方向を変えることにより作り出した羽状縄文が施される。２は３群の深鉢であり、口縁上部に弧状沈線および横長の列点文が施され、体部は入組帯状文が展開する。３は４群の深鉢であり、４は４群の鉢であり、体部上半に横長の列点文に挟まれた入組文が展開する。５は４群の台付鉢であり、口唇部に中間が凹む２つ並んだ突起が四方に配置され、口頸部に入組文が巡る。６・７は４群の注口土器であり、６は口縁部に三叉文および横位沈線が巡る。７は注口部付根を囲むように沈線が巡る。体部は無文である。８は５群の注口土器であり､口縁上部に向かい合った弧状の沈線が巡る。頸部に２段の刻目文が巡る。９は３～６群の粗製深鉢である。

②Ⅱｇ層（図Ⅲ -3-2-20・21）

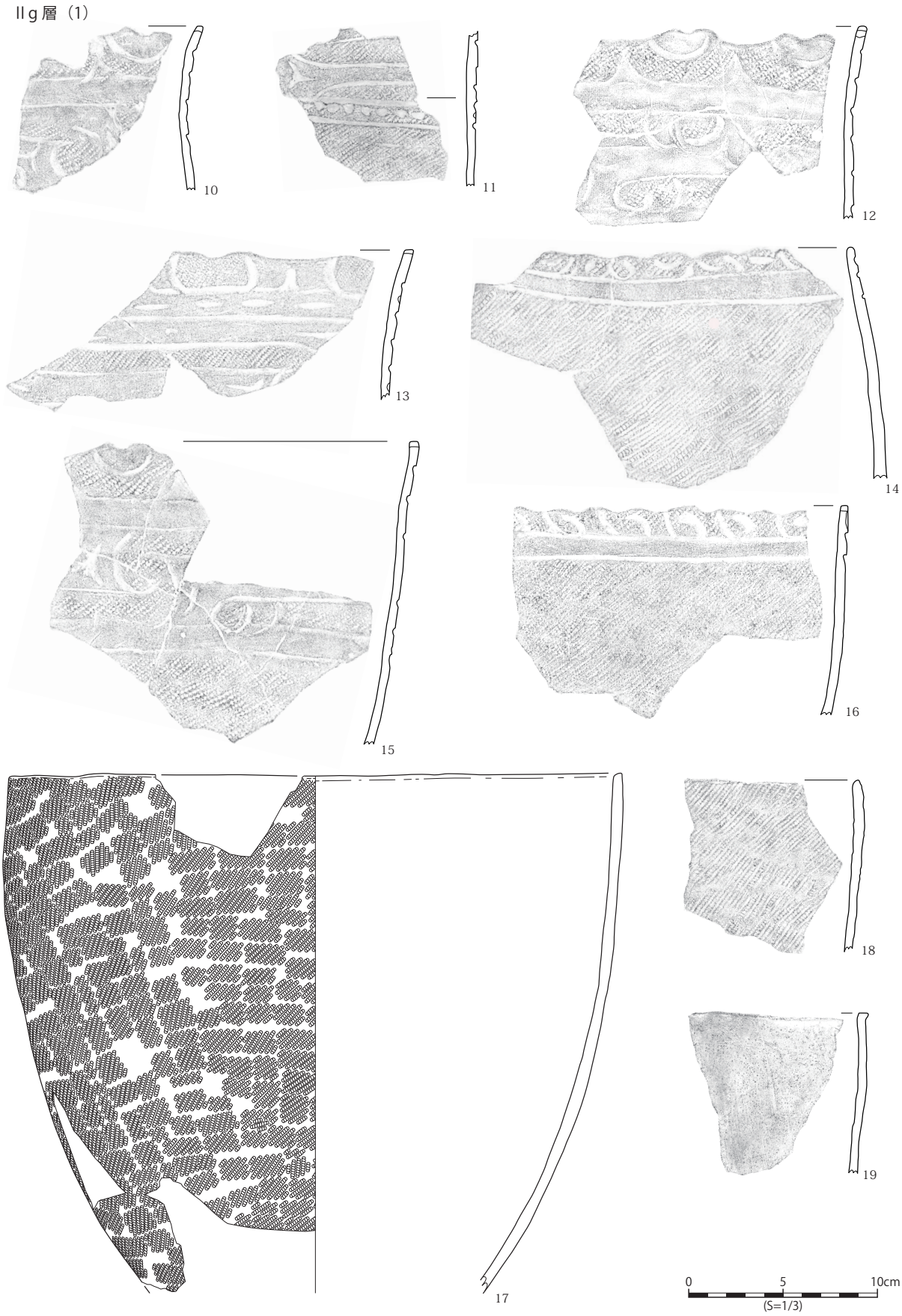
2b 群の深鉢１点、注口土器１点、３群の深鉢４点、鉢１点、注口土器 0.5 点、４群の深鉢 103 点、鉢 11 点、壺１点、注口土器 9.5 点、５群の深鉢２点、鉢３点、注口土器１点、６群の鉢５点、浅鉢･皿２点、３～６群の深鉢 41 点、鉢 33 点、浅鉢･皿１点、壺 52 点、注口土器１点、７群の深鉢１点、浅鉢・皿３点、８群の深鉢２点、３～８群の深鉢３点、鉢４点、壺６点、9b 群の深鉢２点、鉢２点の計 296 点出土した。

そのうち図化したのは 23 点である。10 ～ 13・15 は３群の深鉢であり、10・12・15 は中央が

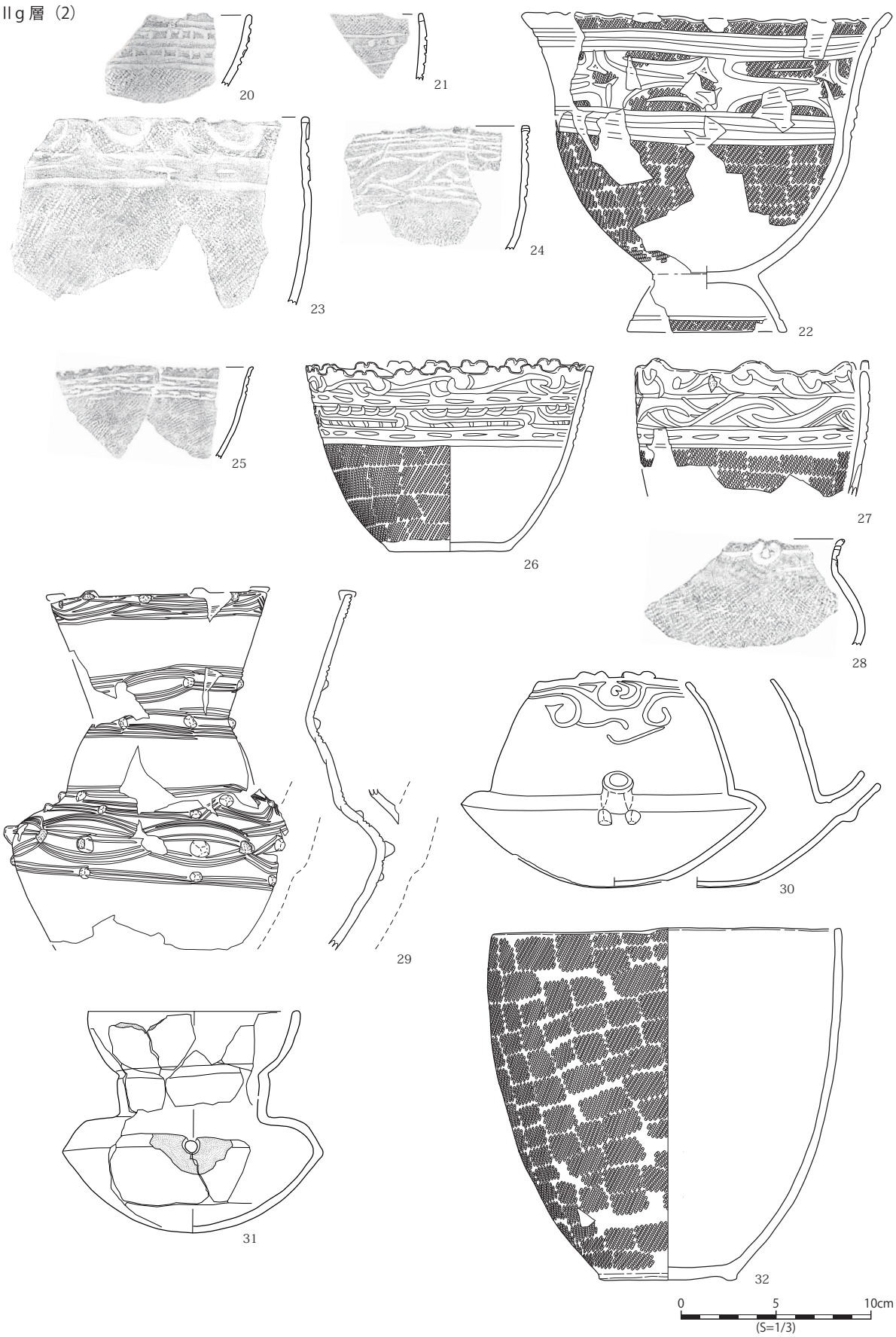
凹む山形突起を有し、突起下に弧状の沈線および帯状文が巡り、体部は入組帯状文が展開する。11は体部に入組帯状文が展開する。12は、3群の深鉢であり、口縁部は弧状の沈線および帯状文が巡り、体部は入組帯状文が展開する。13は、3群の深鉢であり、口縁部に弧状の沈線が施され、横長の列点文と横位沈線が巡る。体部は入組帯状文が展開する。14・16は4群の深鉢であり、波状口縁を呈し口縁上部に弧状の短い沈線が連続して巡り、下部は2条の横位沈線が巡る。17～19は3～6群の粗製深鉢であり、19は無文である。20・21は3～6群の深鉢であり、20は口縁部に刻目文が2条巡る。21は口縁部に横位沈線および列点文が巡る。22は3群の台付鉢であり、口縁上部および体部中央に2条の横位沈線が巡り、沈線間に上下向かい合った入組文と三叉文が連続して巡る。23・24は4群の鉢である。23は口縁部に弧状の沈線が巡り、体部上半は2条の沈線間に横長の列点文が巡る。24は体部上半に入組三叉文が展開する。25は9b群の鉢であり、口縁部に3条の横位



図Ⅲ-3-2-19　第2東遺物集中区・分析グリッド出土土器（1）



図Ⅲ-3-2-20　第２東遺物集中区・分析グリッド出土土器（2）



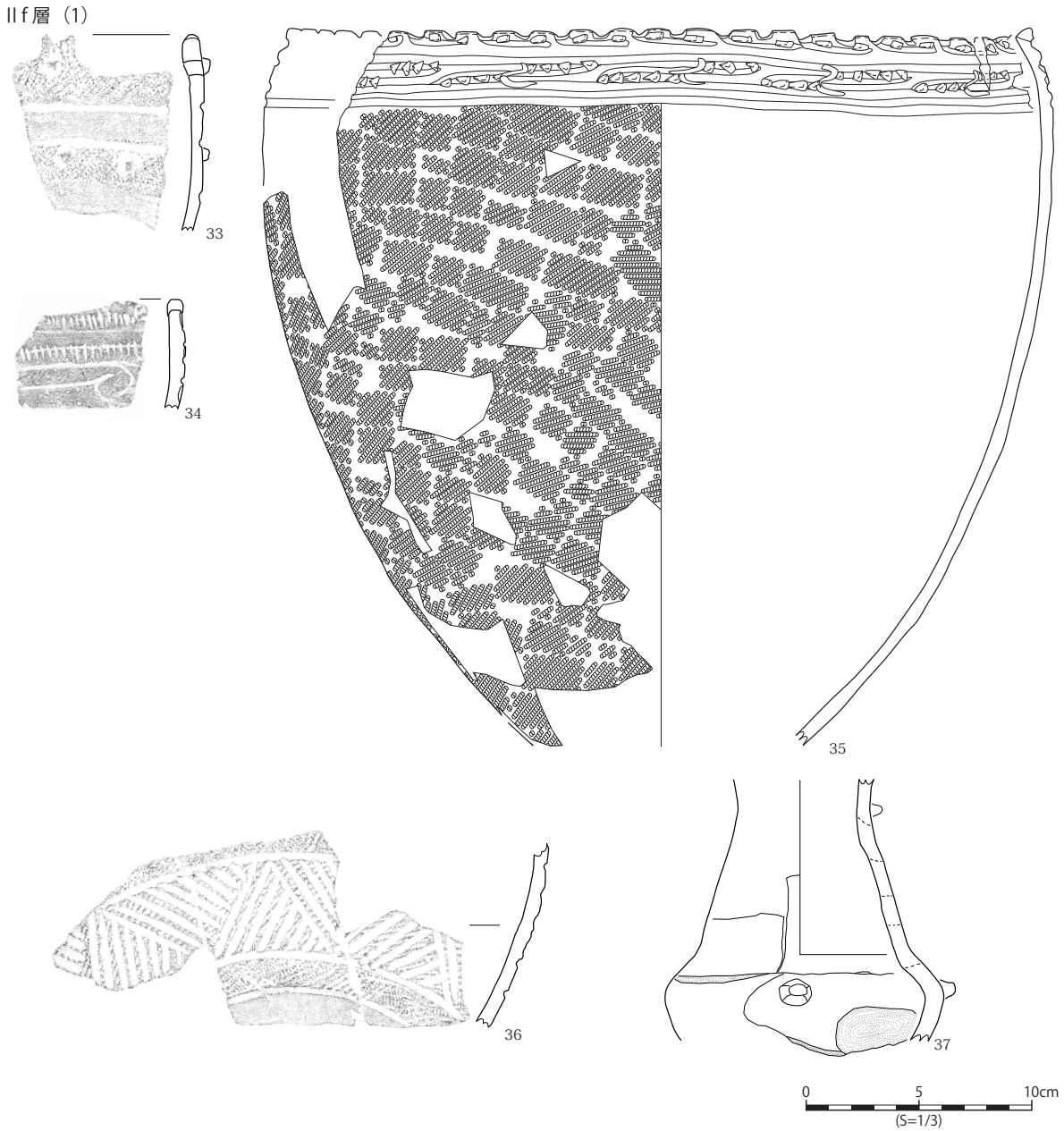
図Ⅲ-3-2-21　第 2 東遺物集中区・分析グリッド出土土器（3）

沈線間に２条の列点文が巡る。26・27 は４群の鉢である。26 は口唇部に中間をならしたＢ突起が連続して施され、口縁部には入組三叉文が巡る。体部上半には２条の横長の列点文が巡り、間に羊歯状文的な沈線文様が展開する。27 は口唇部に山形突起がやや広い間隔で配置され、口縁部には弧状沈線が巡り、体部上半には入組三叉文および横長の列点文が展開する。28 は４群の壺であり、口頸部は小ぶりの突起の直下に魚眼状三叉文が施される。29 は 2b 群の注口土器であり、口縁部は多条沈線が巡り、口頸部中央および体部中央は貼瘤間に多条沈線が巡る。体部中央は連弧状を呈する。30・31 は４群の注口土器であり、30 は口唇部正面に中間が凹む突起を２つ有する。口縁部は弧状沈線が巡る。注口部下方に粘土粒の突起２つを有する。31 は無文である。32 は３～６群の粗製深鉢であり、底部は高台状を呈する。

③Ⅱｆ層（図Ⅲ -3-2-22 ～ 25）

2b 群の深鉢１点、2c 群の深鉢２点、３群の深鉢４点、鉢１点、４群の深鉢 53 点、鉢９点、注口土器６点、５群の深鉢６点、鉢 24 点、浅鉢・皿１点、壺１点、注口土器２点、６群の深鉢５点、鉢 48 点、壺１点、注口土器１点、３～６群の深鉢 75 点、鉢３点、浅鉢・皿１点、壺 23 点、７群の深鉢６点、鉢 10 点、浅鉢・皿６点、壺２点、８群の鉢４点、３～８群の鉢６点、浅鉢・皿４点、壺 18 点、9b 群の鉢６点の計 329 点出土した。そのうち図化したのは 35 点である。

33 は 2b 群の深鉢であり、口唇部は中間に刻みのある山形突起を有し、口縁上部および体部に貼瘤が施され、体部に入組帯状文が展開する。34 は 2c 群の深鉢であり、口唇部は山形突起を有し、口唇直下および口縁部は２条の刻目文が巡る。体部は入組帯状文が展開する。35 は５群の深鉢であり、口縁上部に羊歯状文が巡る。36 は 2a 群の鉢であり、縄文を地文とし、斜行沈線を交互に施す。37 は 2b 群の無文の壺か注口土器であり、口縁上部および体部に貼瘤が施される。38 は 2b 群の注口土器であり、体部上半は帯状文が巡り、体部中央は間に貼瘤が施された多条沈線が巡る。39 は３群の深鉢であり、口唇部は中間が凹む低い山形突起が連続し、口唇直下には半円状沈線が巡る。体部上半には２条の横位沈線間に横長の列点文が巡り、入組帯状文が展開する。40 ～ 43 は４群の深鉢である。40・41 は体部には入組帯状文が展開する。42 は中間が凹む山形突起が広い間隔で配置され、口唇直下に波状沈線が突起の半分の感覚で巡る。体部上半は２条の横位沈線に挟まれた横長の列点文が巡る。43 は口縁部は３条の横位沈線間に弧状沈線と横長の列点文が巡る。44 は 9b 群の深鉢であり、弧線文が施される。45 は６群の鉢であり、口唇直下に突起に沿うノの字状の沈線が巡り、体部上半には２条の横位沈線が巡る。46・47 は 9b 群の鉢であり、口縁部に３条の横位沈線および間に列点文が巡る。48・49 は４群の鉢であり、口縁部に入組三叉文および横長の列点文が施される。50 は 9b 群の鉢であり、体部上半に横Ｓ字文が巡る。51 は４群の鉢であり、口唇部は中間が凹む突起が巡り、体部上半は横長の列点文および入組三叉文が巡る。52 は５群の鉢であり、口縁部に列点文および横位沈線が２条巡る。53 は６群の台付鉢であり、口頸部は簡略化された羊歯状文が巡る。54 は７群の台付鉢であり、口頸部は列点文が巡り、体部上半は雲形文が展開する。55 は３～８群の無文の鉢である。56 は５群の皿であり、口唇部は２つ並んだ中間が凹む突起が配置され、口縁上部は間に列点で区画された多条沈線が巡る。57 は７群の浅鉢であり、口唇部は沈線で区画された突起が連続し、口縁部は横位沈線が巡る。58 は４群の壺であり、体部には魚眼状三叉文が展開する。59 は、６群の壺であり、体部は雲形文が展開し、内外面にベンガラが塗布される。60 は、７群の壺であり、口唇部にＢ突起を有する。61 は 9b 群の壺であり、体部上半に刺突文が巡る。62 は、６群の注口土器で



図Ⅲ-3-2-22　第２東遺物集中区・分析グリッド出土土器（4）

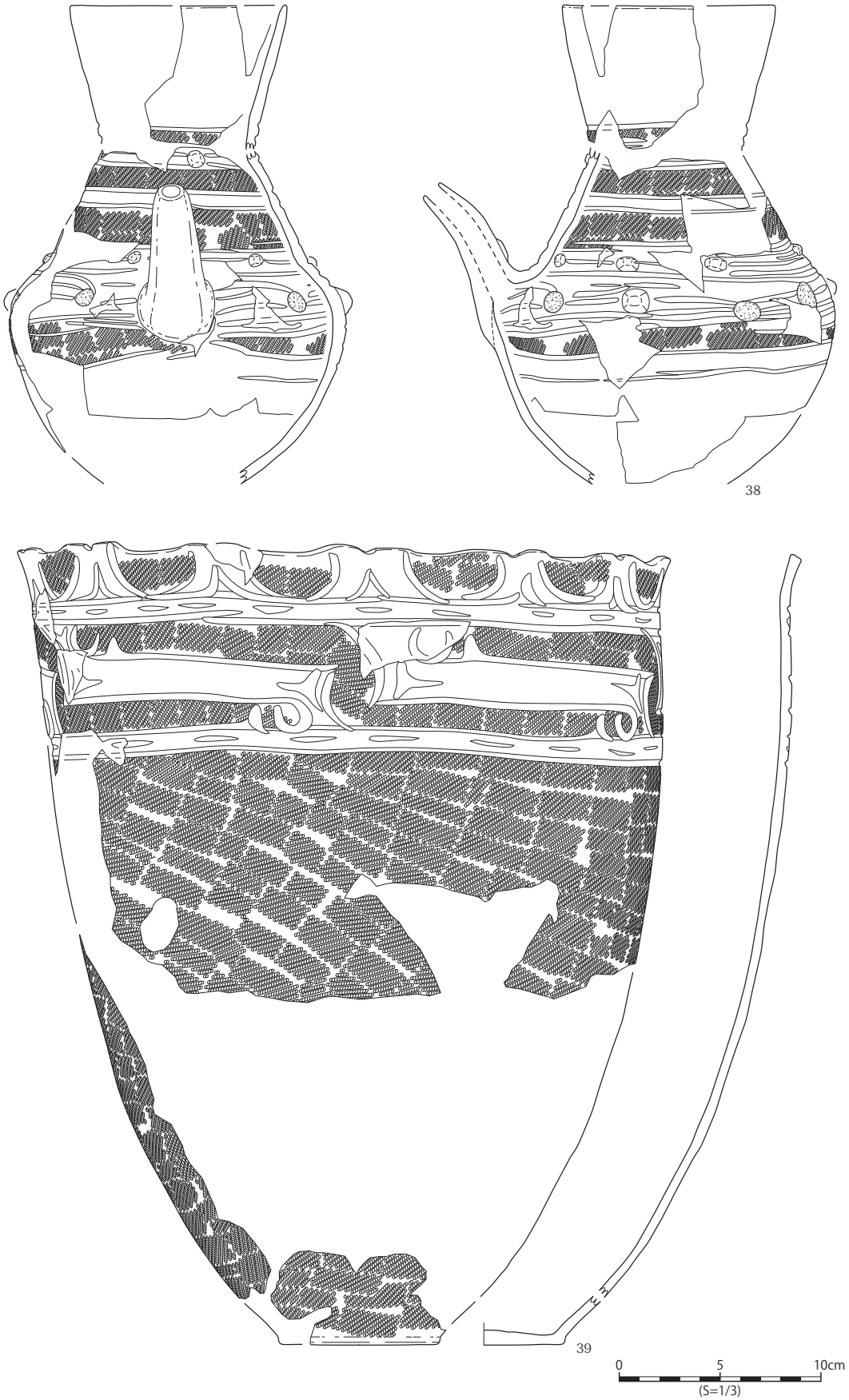
あり、雲形文が体部から底部にかけて展開する。体部の屈折部にはＢ突起が連続する。63 は４群の注口土器であり、口縁部正面に弧状沈線が重なり両側に横位沈線が２条巡る。注口部下方に粘土粒の突起２つを有する。64 は３～６群の深鉢であり、口唇部は中間が凹む突起が２つ並ぶ。底部は低い高台状を呈し、外面は縄文が施される。

④Ⅱｅ層（図Ⅲ -3-2-26）

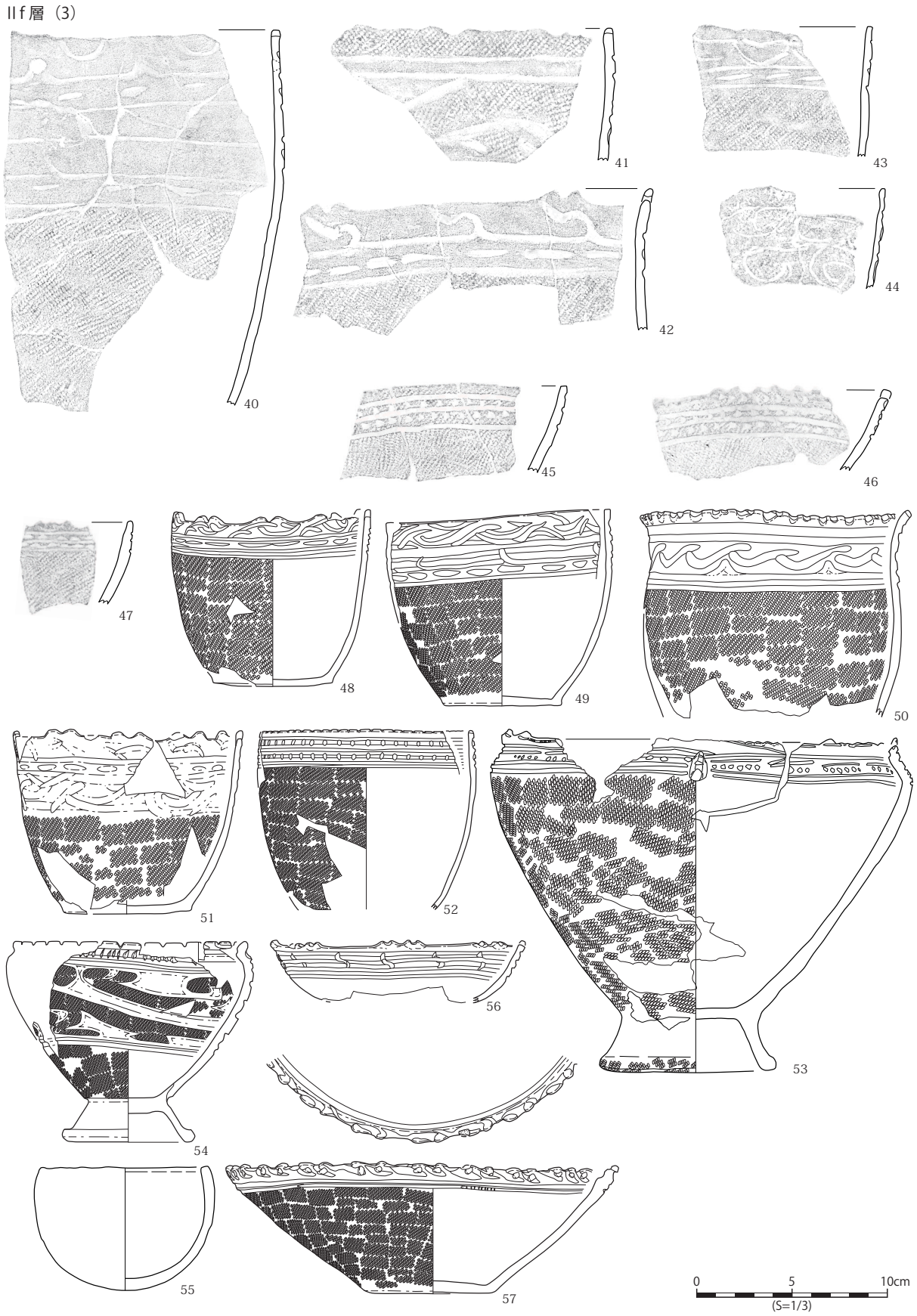
３群の深鉢１点、4 群の深鉢６点、鉢１点、5 群の深鉢２点、鉢２点、6 群の深鉢２点、鉢 24 点、浅鉢・皿１点、３～６群の深鉢 17 点、鉢２点、浅鉢・皿１点、７群の深鉢 22 点、鉢 20 点、浅鉢・皿２点、壺６点、８群の鉢６点、浅鉢・皿１点、壺３点、３～８群の浅鉢・皿３点、壺８点の計 130 点が出土した。そのうち図化したのは６点である。

65 は６群の台付鉢であり、口唇直下に突起に沿うノの字状の沈線が巡り、口頸部は２条の横位沈

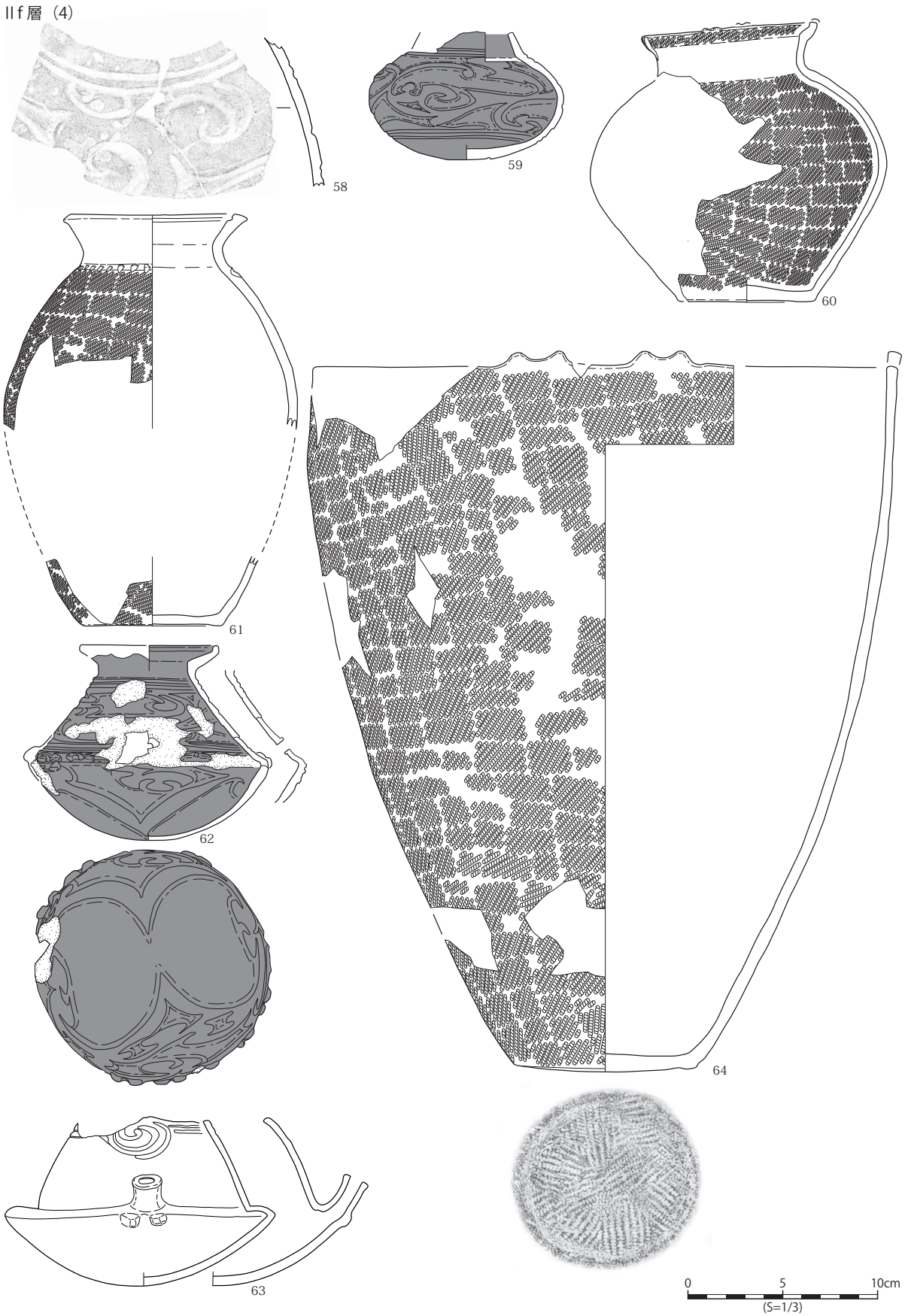
Ⅱf 層（2）



図Ⅲ-3-2-23　第２東遺物集中区・分析グリッド出土土器（5）



図Ⅲ-3-2-24　第２東遺物集中区・分析グリッド出土土器（6）



図Ⅲ-3-2-25　第２東遺物集中区・分析グリッド出土土器（7）

線が巡り、中間に刻みが入る突起が付く。台部は三叉文が施される。66 は 7 群の浅鉢であり、口唇直下に間に二山状の突起を複数有する沈線が巡る。体部は入組んだ C 字文が展開する。67 は 3 群の鉢であり、口縁部に 2 条の平行沈線が施される。68 は 8 群の鉢であり、口唇直下に粘土粒で区切られた結節沈線が巡る。体部上半は大型の突起を有し、体部は流水状工字文のポジ文様が展開する。69 は 7 群の壺であり、口唇直下に B 突起を有する。70 は 7 群の粗製深鉢である。

⑤Ⅱd 層（図Ⅲ -3-2-27）

6 群の深鉢 1 点、鉢 5 点、7 群の深鉢 6 点、鉢 5 点、8 群の深鉢 1 点、鉢 3 点、浅鉢・皿 5 点、壺 3 点、3 ～ 8 群の深鉢 2 点、鉢 1 点、壺 3 点の計 35 点出土した。そのうち図化したのは 5 点である。

71 は 7 群の深鉢であり、口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。72・73 は 7 群の鉢であり、口頸部には 3 条の沈線が巡る。72 は口唇部に中間に刻みの入る突起が 4 単位配置される。73 の体部には羽状縄文が施される。74・75 は 8 群の浅鉢であり、体部には横位沈線および矢羽状沈線が巡る。74 は体部上半に粘土粒で区画した横位沈線が巡る。

⑥Ⅱc 層（図Ⅲ -3-2-27）

・3 ～ 6 群の深鉢 1 点、7 群の深鉢 14 点、鉢 4 点、8 群の壺 3 点、3 ～ 8 群の深鉢 1 点、鉢 1 点、壺 1 点の計 25 点出土した。そのうち図化したのは 1 点である。76 は 7 群の壺であり、体部上半に B 突起を有する横位沈線が巡る。体部には雲形文が展開する。

⑦Ⅱb 層

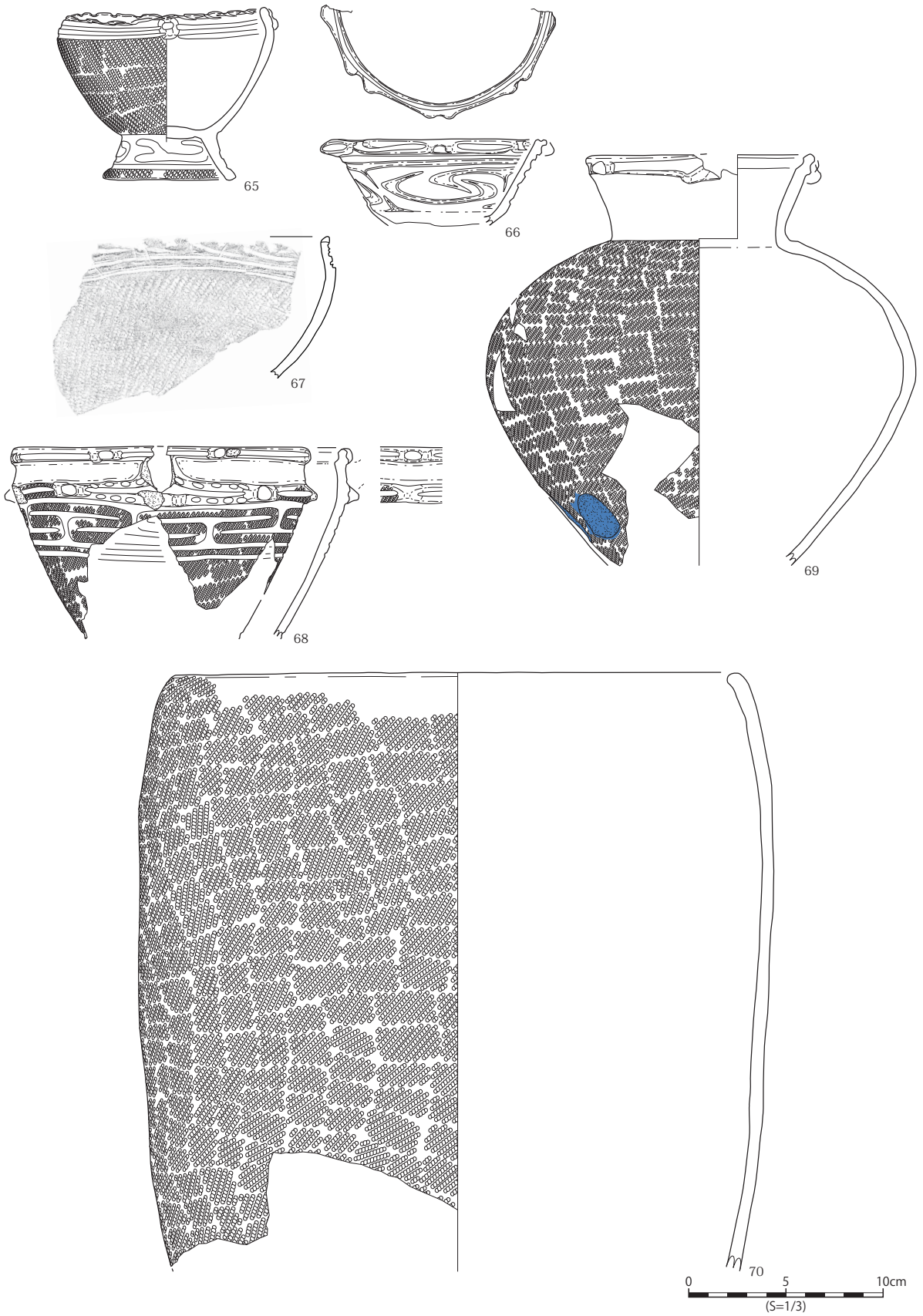
・4 群の深鉢 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 2 点、7 群の深鉢 4 点、8 群の深鉢 2 点、鉢 7 点、浅鉢・皿 4 点、壺 5 点、3 ～ 8 群の壺 1 点の計 26 点出土した。

2）分析グリッド外出土土器（図Ⅲ -3-2-28）

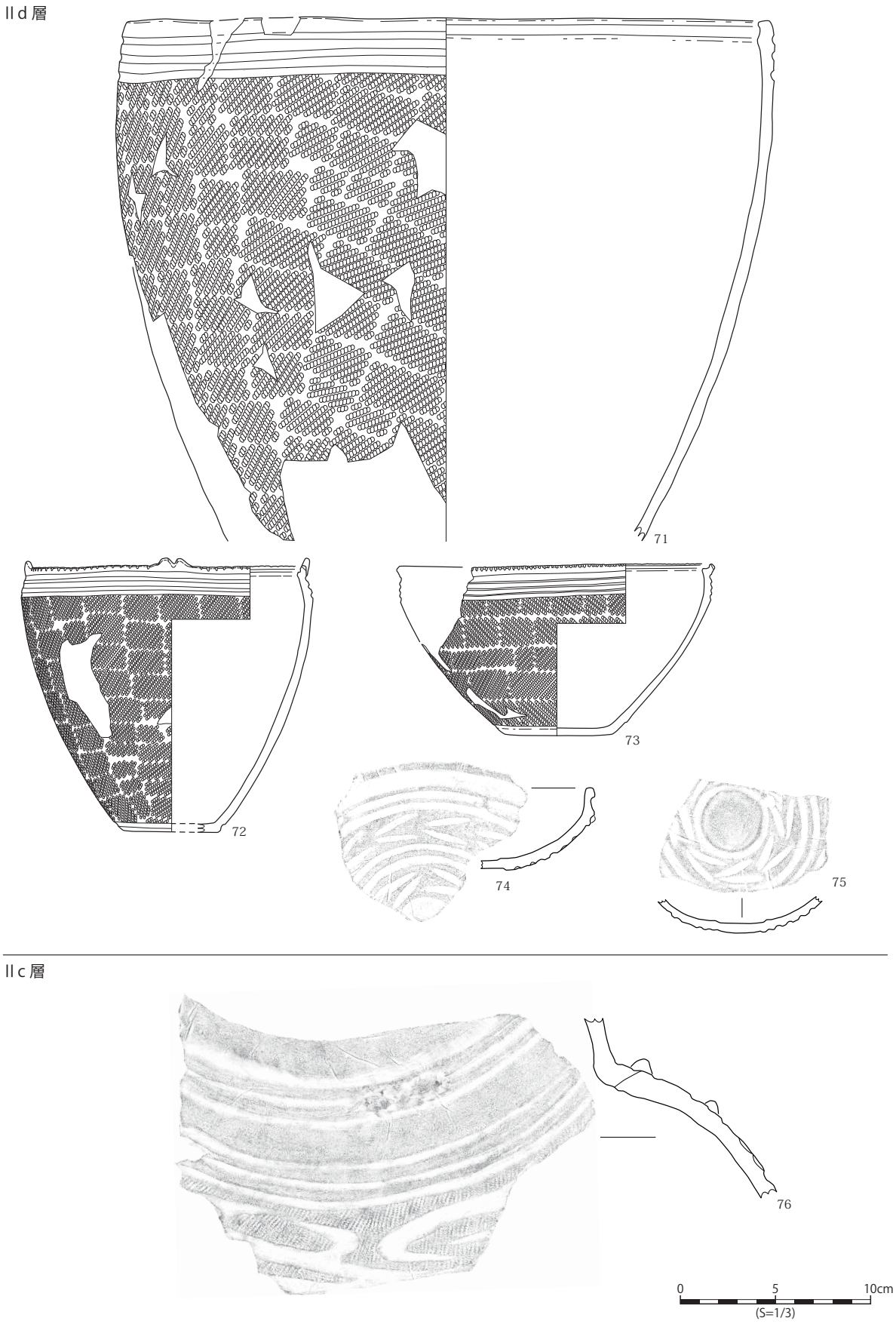
77 は 7 群の深鉢であり、口縁部には 3 条の横位沈線が巡り、体部上半に B 突起を有する。78・79 は 3 群の深鉢であり、78 は口頸部に入組帯状文が展開する。79 は口唇部にやや狭い間隔で間に刻みが 3 つ入る山形突起を有し、口縁上部には突起に沿う三叉文が施され、体部には入組帯状文が展開する。80 は 4 群の深鉢であり、口唇部は中間に凹みのある突起を有し、口縁上部には S 字状の沈線が巡る。体部上半には 2 条の横位沈線間に横長の列点文が 2 段巡る。81 は 8 群の鉢であり、口縁部に中間をならした突起を有する横位沈線が巡り、体部に流水状工字文のポジ文様が展開する。82 は 4 群の皿であり、口唇部に中間が凹む山形突起が 8 単位配置され、口縁上部には下端部が横位沈線に繋がる S 字状文が巡る。体部には横位沈線と横長の列点文が巡る。83 は 7 群の浅鉢であり、口唇部は沈線による刻みの入る突起が 3 つ並ぶ。口縁上部は列点文が巡り、体部に雲形文が展開する。84 は 7 群の浅鉢であり、口頸部に幅広の横位沈線が 2 条巡る。85 は 8 群の浅鉢であり、体部上半に粘土粒による結束を有する横位沈線が巡り、体部は向きの異なる矢羽状沈線が 2 条巡る。86 は 3 ～ 8 群の皿であり、口縁上部に連弧状の沈線が巡る。87 は 6 群の壺であり、内・外面にベンガラが塗布される。口唇部および口唇直下に沈線による区画または刻みの入る突起が連続する。体部には雲形文が展開する。88 は 3 ～ 8 群の粗製壺である。89 は 7 群の壺であり、口唇直下に横位沈線が 1 条巡る。90 は 7 群の片口形土器であり、口唇部に沈線による区画および刻みの入る突起を有する。片口部は体部を透かした形状である。

（江戸）

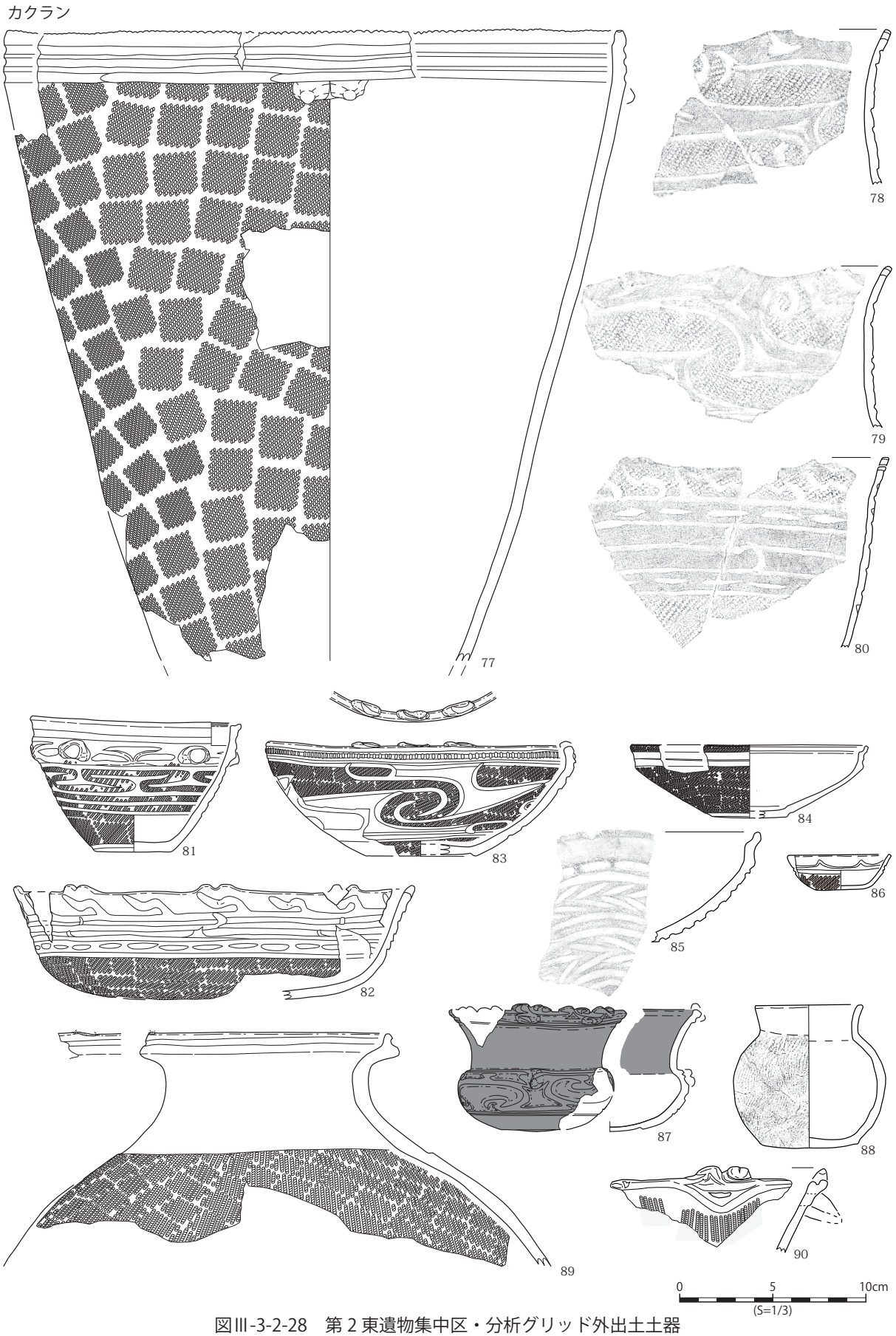
Ⅱe 層



図Ⅲ-3-2-26　第２東遺物集中区・分析グリッド出土土器（8）



図Ⅲ-3-2-27　第 2 東遺物集中区・分析グリッド出土土器（9）



図Ⅲ-3-2-28　第２東遺物集中区・分析グリッド外出土土器

B. 石器・礫（表Ⅲ -3-2-2、図Ⅲ -3-2-29 ～ 32）

10,150 点、155.2kg の石器・礫を検出した。数量は剥片・砕片 7,238 点、搬入礫 2,210 点が多くを占めるものの、他の集中区に比べ、礫石器の割合が高い。剥片石器は尖頭器、石鏃などの定型石器 252 点、スクレイパーなどの不定形石器 140 点である。また、石皿・台石類などの礫石器は 259 点ある。

定型の剥片石器の内訳は尖頭器 22 点、石鏃 181 点、石錐 18 点、石匙 16 点、石箆 15 点で、石鏃が 72％を占める。不定形の剥片石器はスクレイパー 67 点、微細剥離のある剥片 46 点、メノウ製を主とする小型石錐 27 点、小型スクレイパー 18 点である。礫石器は磨石・敲石類 232 点、石皿・台石類 19 点、砥石 8 点である。不定形の剥片石器を除いた定型石器と礫石器にしめる割合をみると磨石・敲石類約 40%、石鏃約 30% で磨石・敲石類のほうが高い。

石器製作に関わる石核・剥片・砕片は、7,259 点で点数全体の 71% を占める。

異形礫は 9 点と少ない。搬入礫は 2,210 点で点数全体の約 20% とその割合が他に比べて低い。

層位別の割合をみると、まとまった数のある上層のⅡ e 層から下層のⅡ g 層にかけて、石鏃、スクレイパー、磨石・敲石類、搬入礫が高くなる。一方下層にかけて尖頭器、石錐、剥片、砕片が低下する。

図Ⅲ -3-2-29-1 ～ 9（以下Ⅲ -3-2-29 省略）は尖頭器である。22 点出土した。分類別の内訳は木葉形が 14 点（2 ～ 6）、菱形が 3 点（7 ～ 9）、山形が 3 点（1）、半月形が 1 点、卜形が 1 点である。

石鏃は出土した 181 点中 9 点図示した（10 ～ 18）。内訳は凸有 b 類 100 点（55％）で、次いで凸有 a 類 13 点（7%）、凸有 f 類 11 点（6％）、凸有 c 類 5 点、凸有 d 類 7 点、円基鏃、未成品各 2 点、凹基無茎鏃・平基有茎鏃各 1 点、分類不明 22 点ある。石材は 181 点中 152 点が頁岩で、メノウ 25 点、黒曜石 3 点、赤鉄鉱 1 点がある。アスファルト付着資料が 11 点ある。

凸有 a 類の石材はメノウ 1 点、頁岩 1 点である。凸有 b 類は 1 点図示した（13）。13 の石材はメノウで、左縁辺と基部周辺にアスファルトが付着する。凸有 c 類は 1 点図示した（14）。凸有 d 類は 2 点図示した（15・16）。凸有 f 類は 10 点中 2 点図示した（17・18）。17 は黒曜石製である。

表Ⅲ -3-2-2　第 2 東遺物集中区出土石器・礫の層位別・種別出土数

	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅱ c	Ⅱ d	Ⅱ e	Ⅱ f	Ⅱ g	その他	計
尖頭器					3	5	5	9	22
石鏃		1	5	5	7	39	52	72	181
石錐					2	5	3	8	18
小型石錐	2		1	1	12	4	3	4	27
石匙					1	6	5	4	16
石箆	1				2	4	3	5	15
スクレイパー		10	1	1	15	15	25		67
微細剥離のある剥片		18				20	8		46
小型スクレイパー				1	10	4		3	18
磨石・敲石類		5			2	7	12	206	232
石皿・台石類					1		2	16	19
砥石					1	1		6	8
石錘									0
磨製石斧								1	1
その他（擦切・扁平石器）						1		1	2
石核	1	1			2	9	5	2	20
メノウ石核				0	1				1
剥片		49	14	1	148	202	221	38	673
小型柱状剥片				13	22	2	2	12	51
砕片		108	243	25	1,065	1,971	2,596	506	6,514
異形礫								9	9
搬入礫		24	6	28	90	303	576	1,183	2,210
計	4	216	270	75	1,384	2,598	3,518	2,085	10,150

19 ～ 30 はメノウ製の小型石錐である。20･24 には粗いつまみ部があるが、他は棒状で先端部が磨耗する。

31 ～ 35 は石匙である。すべて頁岩製で、31･32 は横型、33 は斜形、34･35 は横型である。32 の頚部にはアスファルトが付着する。36 は頁岩製の石箆であり、尖型である。

37 ～ 41 はスクレイパーである。37・40 は縦型剥片の片側縁に刃部を作り出す。38・41 は横型剥片の片側縁と下辺に刃部を作り出す。42 ～ 47 は微細剥離のある剥片である。42 ～ 44 は縦長剥片の側縁に微細剥離が観察される。45･46 は横型剥片の側縁に観察される。47 は黒曜石製で下辺に微細剥離が確認できる。48 はメノウ製の小型スクレイパーで不定形剥片の側縁の一部に微細剥離が観察できる。

49 は頁岩の石核である。相対する上下両端に打面が設けられ、両設打面から交差するように剥片が剥離される。50 は磨製石斧の頭部である。51･52 は擦切具である。

C. 土製品・土製玉類（図Ⅲ -3-2-33）

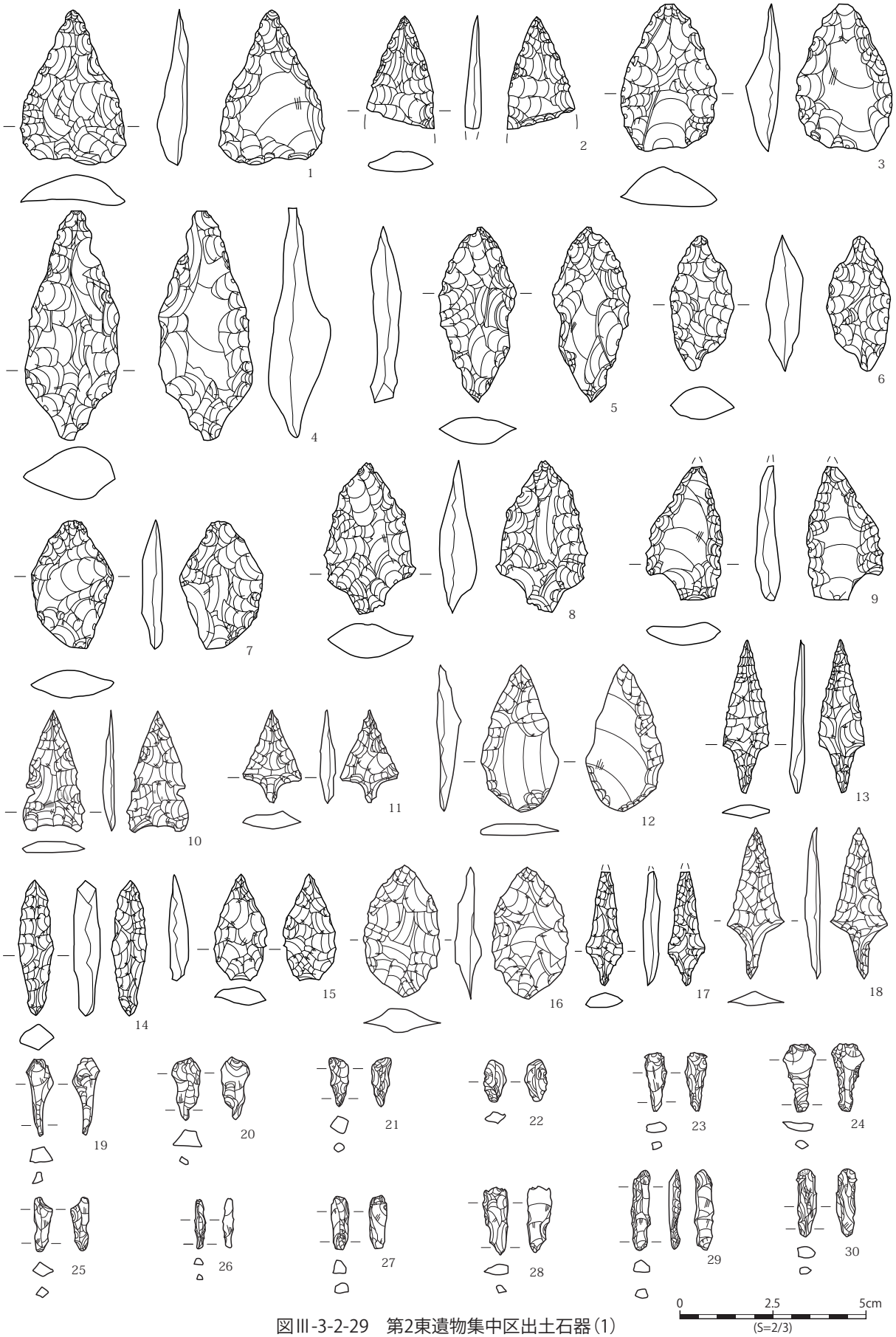
土偶を除く土製品・土製玉類は類玉象嵌土製品、ミニチュア土器、円板状土製品、土製丸玉、土製耳飾、土面の６種がある。

1 は類玉象嵌土製品で端部に複数の突起をつける。2 は筒形の耳飾である。3･4 はミニチュア土器である。3 は浅鉢形、4 は壺形である。5 ～ 15 は円板状土製品である。全て土器片を再利用する。7･8 以外は有孔である。16 は土面で T 字形の眉・鼻である。17・18 は土製丸玉である。

D. 石製品・石製玉類（図Ⅲ -3-2-34）

石製品・石製玉類は異形石器、石棒、石刀、棒状石製品、丸玉、勾玉、垂飾、岩版がある。1･2 は異形石器である。1 は二又に別れた形で、異形石鏃の未成品の可能性がある。2 は抉りを巡らせた放射形である。3 は石刀、4 は石棒の頭部である。4 には「く」の字の沈刻線を巡らす。5 は岩版で中央に三角形の沈刻線がある。6 は棒状石製品で３本の沈刻線を巡らす。7 ～ 11 は石製玉類である。7･8 は丸玉である。7 は面取り後の未成品である。8 は面取りせず穿孔する。9 は垂飾の穿孔途中の未成品である。10･11 は緑色凝灰岩製の勾玉である。

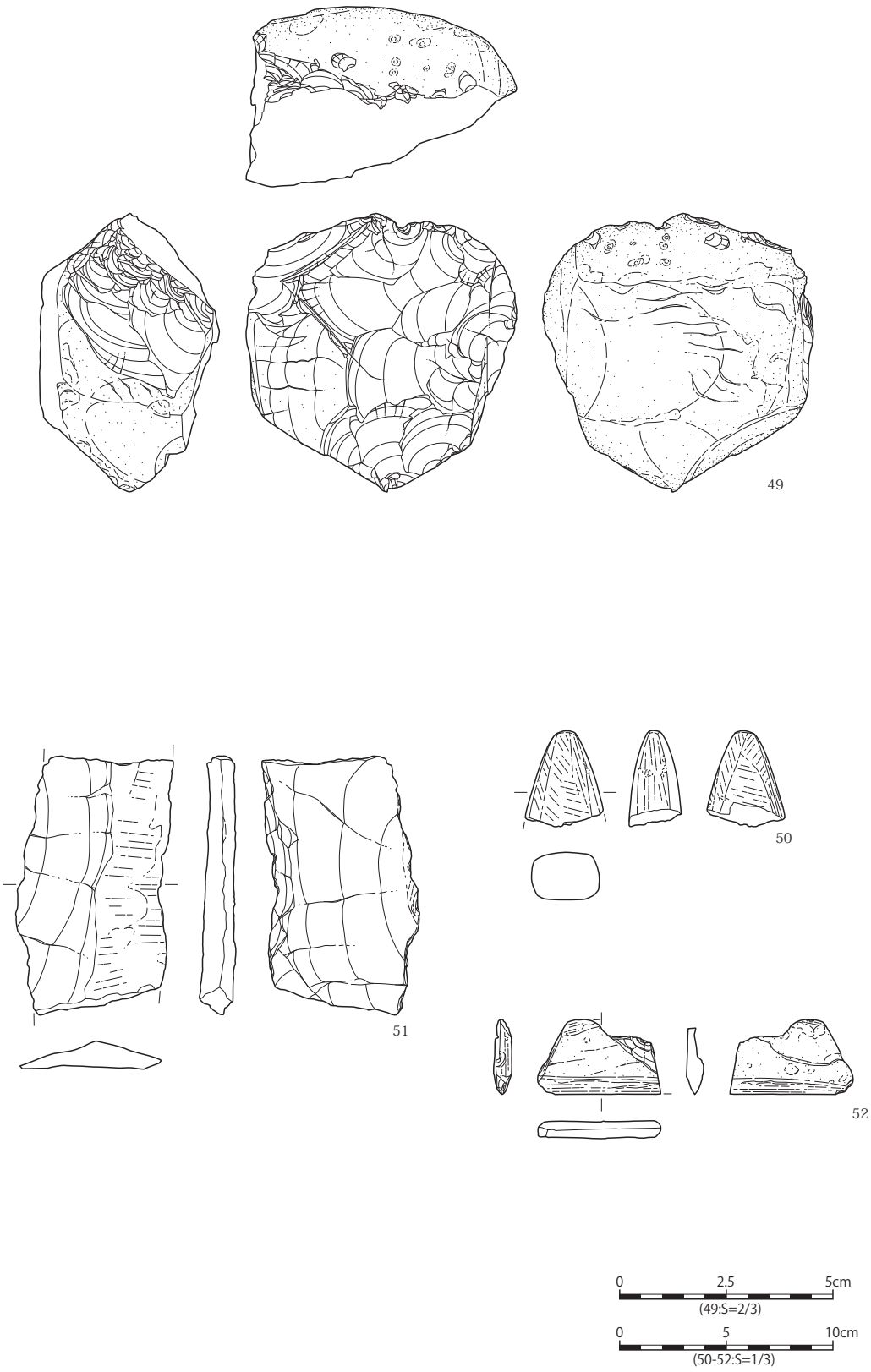
（上條信彦）



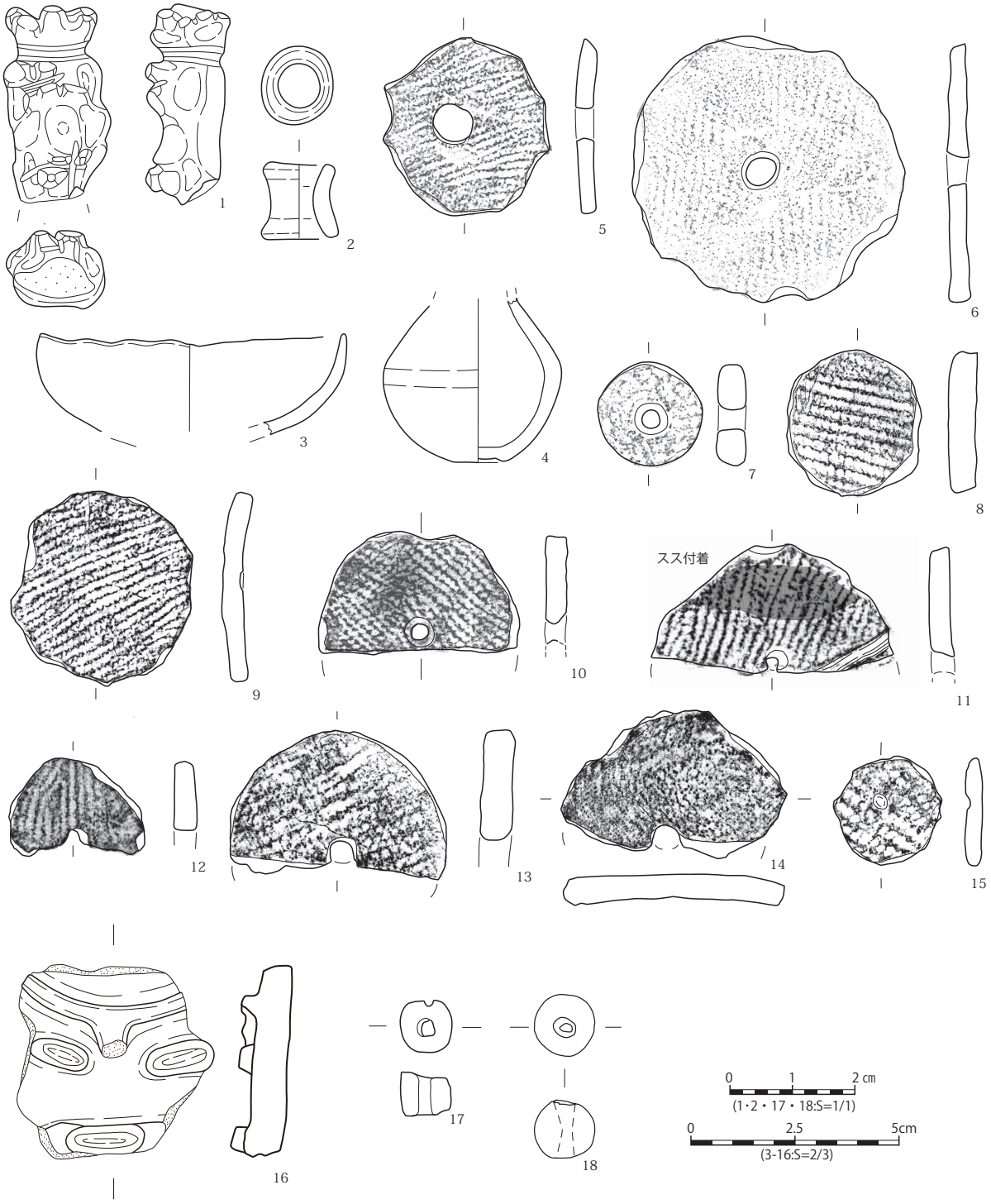
図Ⅲ-3-2-29　第2東遺物集中区出土石器(1)

図Ⅲ-3-2-30　第２東遺物集中区出土石器(2)

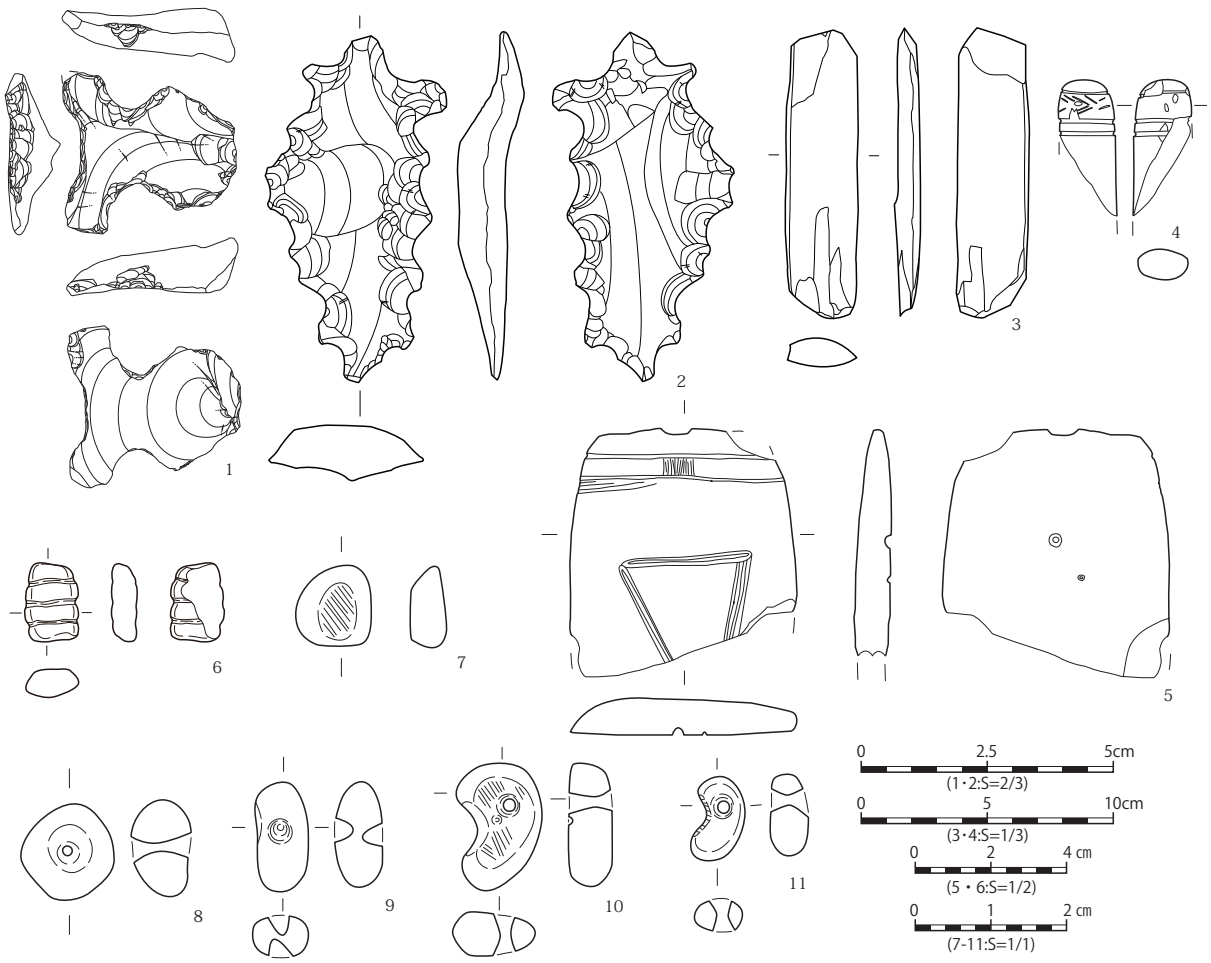
図Ⅲ-3-2-31　第2東遺物集中区出土石器(3)



図Ⅲ-3-2-32　第2東遺物集中区出土石器(4)



図Ⅲ-3-2-33　第2東遺物集中区出土土製品



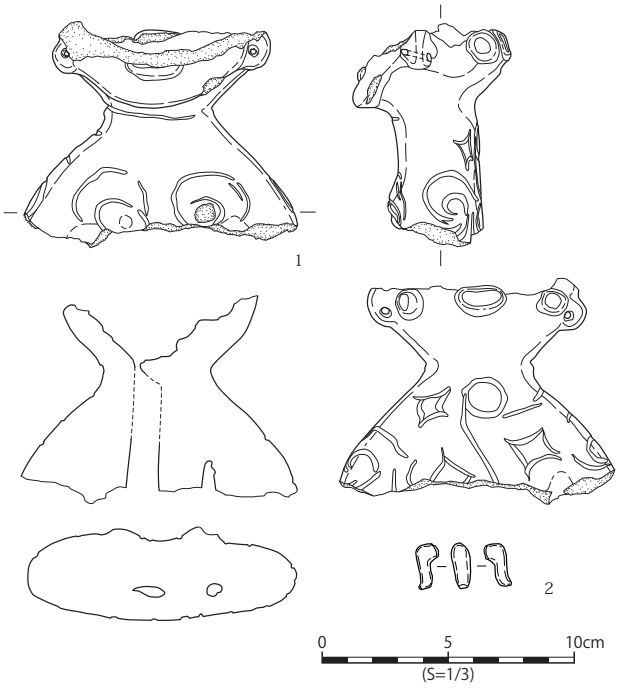
図Ⅲ-3-2-34　第2東遺物集中区出土石製品

E. 土偶（図 -3-2-35）

1 は土偶の頭部下半～胴部片である。頭部は中空部分が認められるものの、胴部は中実である。ただし、胴部には棒状に残る空間があり、頭部に向かって伸びている。両耳には穿孔がある。口は刺突、唇は隆帯によって表現されている。後頭部には貼瘤の端部を凹ませた粘土粒を付けている。胴部には乳房を表現し、背中には弧線による菱形文や円文、肩部には入組み文が沈線で表現されている。

2 は土偶の腕部で、中実である。端部を屈折させ、手首を表現している。

（榊原）

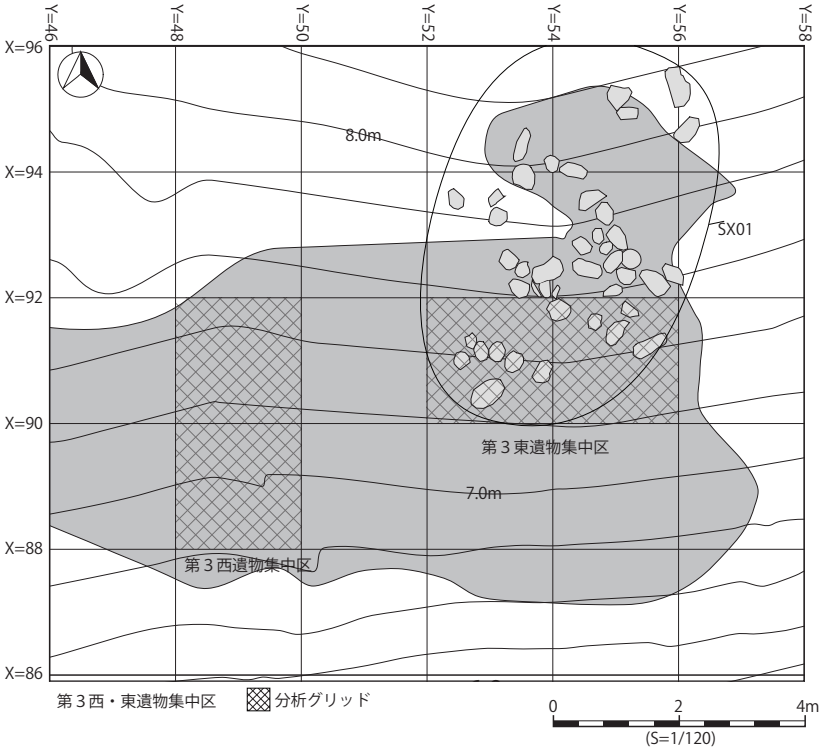


図Ⅲ-3-2-35　第2東遺物集中区出土土偶

3. 第 3 遺物集中区

概要

【位置・確認】遺跡の南西（グリッド X=92 ～ 86,Y=46 ～ 56）標高約 6.5 ～ 7.5 mに位置する（図Ⅲ -3-3-1）。検出面はⅡ a 層が飛砂により消失していたため、Ⅱ b 層上面である。【規模・形状】南北 8 m、東西 10 mの楕円形を呈する。区内では、土坑や柱穴跡、東側に集石遺構 SX01 の重複が確認された。



図Ⅲ-3-3-1　第 3 遺物集中区分析グリッド位置図

（1）第 3 西遺物集中区

【位置・確認】第 3 遺物集中区の西側、標高約 6.5 mに位置する。X=90,Y=50 の計 2 グリッドを分析グリッドとして設定した。検出面はⅡ b 層上面である。【出土遺物】土器、土製品、石器・石製品が出土した。土器では、第 4 群～ 8 群及び第 9b 群土器が出土し、口縁カウント数は 350 点である。土製品では、土偶、耳飾、土製勾玉、土玉、円板状土製品、ミニチュア土器が出土している。石器・石製品では、剥片石器（尖頭器・石鏃・石箆・石匙・スクレイパー・小型石錐）、磨石・敲石類（磨石・敲石・凹＋敲・凹＋敲＋磨）、石皿・台石類（石皿・台石・砥石）、石核、石棒、石刀、C 字形石製品が出土している。【時期】下限を示す時期の土器は第 8 群土器である。

A. 土器

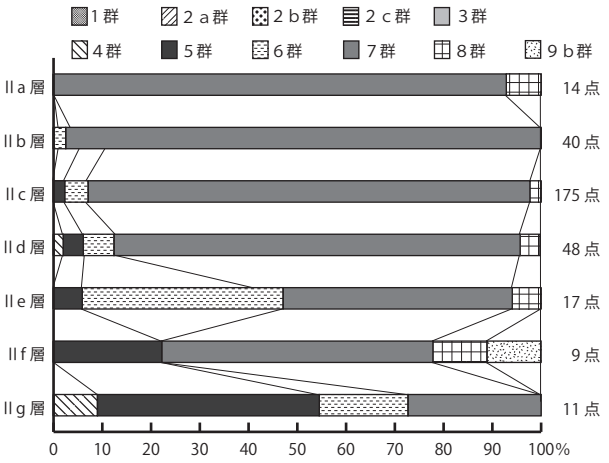
第 3 西遺物集中区は分析グリッドごとに層位の変化が認められなかったため、同一層位ごとに取り上げた。以下層位ごとに土器の特徴を記載する。また、各群の層位ごとの出土状況をグラフで示す（図Ⅲ -3-3-2）。

①Ⅱ g 層

・4 群の深鉢 1 点、5 群の鉢 5 点、6 群の鉢 2 点、7 群の鉢 2 点、壺 1 点、3 ～ 8 群の鉢 6 点の計 17 点出土した。

②Ⅱ f 層（図Ⅲ -3-3-3）

5 群の鉢 2 点、7 群の深鉢 1 点、鉢 3 点、壺



図Ⅲ-3-3-2　第 3 西遺物集中区　各群の層位別出土割合グラフ

1 点（赤彩資料）、8 群の壺 2 点、3 ～ 8 群の深鉢 1 点、9b 群の鉢 1 点の計 11 点出土した。そのうち図化したのは 5 点である。1 は 2b 群の深鉢の波状口縁部であり、口唇部直下および中央に貼瘤が施され、波状に沿うものと横位の帯状文が 1 条ずつ巡る。2 は 9b 群の鉢であり、口縁部に刻目文が巡る。3 は 7 群の台付鉢であり、内外面にベンガラが塗布される。波状口縁を呈し口唇部は横長の列点文が巡る。口唇直下は中間をならした B 突起が連続する。体部には雲形文が展開する。4 は 7 群の壺であり、口頸下部に 4 単位の B 突起を有し、体部上半に 2 条の横位沈線が巡る。外面にベンガラが塗布される。5 は 3 ～ 8 群の粗製深鉢である。

③Ⅱｅ層（図Ⅲ -3-3-3）

5 群の鉢 1 点、6 群の深鉢 1 点、鉢 5 点、浅鉢・皿 1 点（赤彩資料）、3 ～ 6 群の深鉢 4 点、7 群の深鉢 2 点、鉢 3 点、浅鉢・皿 3 点、8 群の深鉢 1 点、3 ～ 8 群の壺 1 点の計 22 点出土した。そのうち図化したのは 1 点である。6 は 7 群の壺であり、外面にベンガラが塗布される。口頸部には中間に刻みの入る B 突起を有し、突起を結ぶ隆帯が施される。体部上半には刻みの入る細い隆帯が 1 条巡る。

④Ⅱｄ層（図Ⅲ -3-3-3）

4 群の鉢 1 点、5 群の鉢 2 点、6 群の深鉢 1 点、鉢 2 点、3 ～ 6 群の深鉢 7 点、7 群の深鉢 23 点、鉢 14 点、浅鉢・皿 1 点、壺 2 点、8 群の鉢 1 点、壺 1 点、3 ～ 8 群の壺 1 点の計 56 点出土した。そのうち図化したのは 1 点である。7 は 7 群の台付鉢であり、口頸部は列点文が 2 条、間に横位沈線が 2 条巡る。体部上半と台部下端には中間に刻みの入る B 突起を有する。

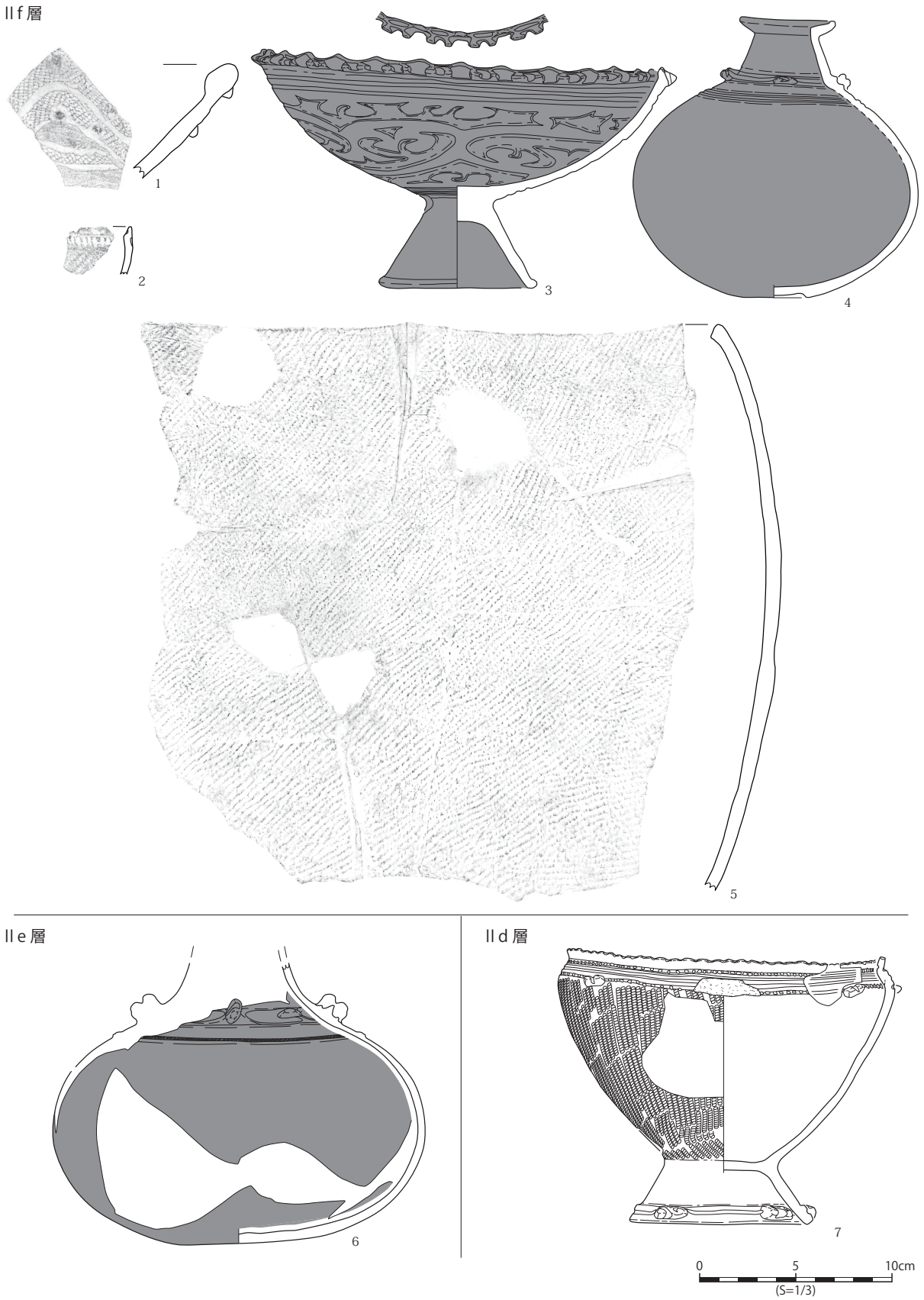
⑤Ⅱｃ層（図Ⅲ -3-3-4・5）

5 群の鉢 4 点、6 群の深鉢 3.5 点、鉢 5 点、3 ～ 6 群の深鉢 11 点、7 群の深鉢 71.5 点、鉢 46 点、浅鉢・皿 14 点、壺 27 点、8 群の深鉢 4 点、3 ～ 8 群の鉢 1 点の計 187 点出土した。そのうち図化したのは 9 点である。8 は 7 群の深鉢であり、口縁部に横位沈線が巡る。9・10 は 6 群の深鉢であり、口唇部に中間が凹む山形突起を有する。9 は口縁部に突起に沿う沈線が 1 条、下に横位沈線が 2 条巡る。10 は口縁部に 1 条の横位沈線が巡る。11 ～ 13 は 7 群の鉢である。11 は口頸部に 3 条の横位沈線が巡る。12 は体部上半に大型の突起を有し、体部は雲形文が展開する。13 は口唇部に先端がすぼまった山形突起と両脇に B 突起を有する。体部上半は横位沈線および列点文が巡り、口唇部の山形突起の下方に中間に刻みの入る大型の突起と両脇に B 突起を有する。14 は 3 ～ 8 群の粗製台付鉢である。15 は 7 群の台付鉢であり、体部上半に大型の突起を有し、雲形文が展開する。16・17 は 7 群の壺であり、体部に連繋入組文が展開する。16 は口唇部は間に沈線が巡る山形突起を有する。17 は体部中央に横位沈線が巡る。

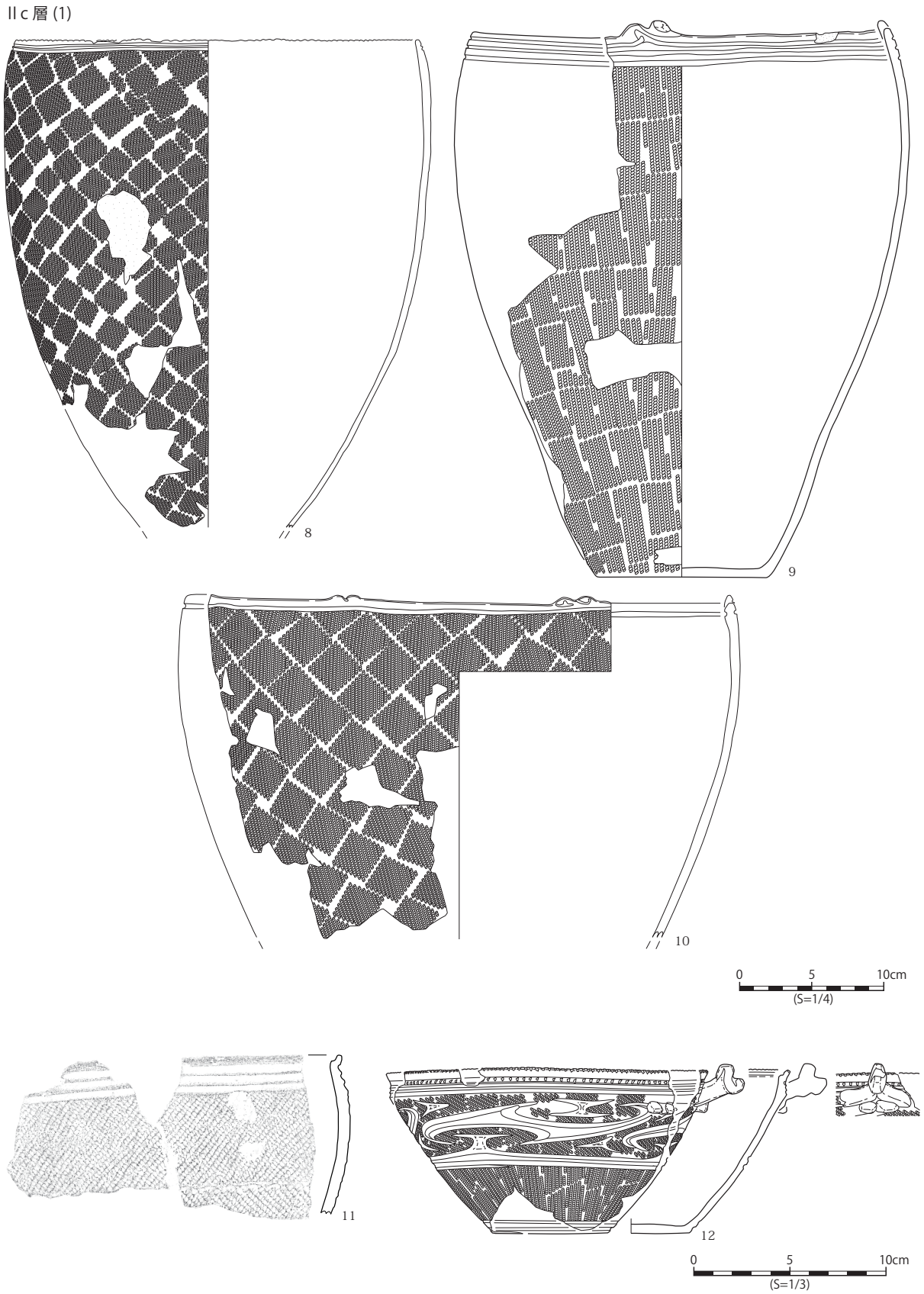
⑥Ⅱｂ層（図Ⅲ -3-3-5）

6 群の深鉢 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 1 点、7 群の深鉢 31 点、鉢 6 点、浅鉢・皿 1 点、壺 1 点の計 41 点出土した。そのうち図化したのは 1 点である。18 は 7 群の壺であり、体部上半に連繋入組文が展開する。

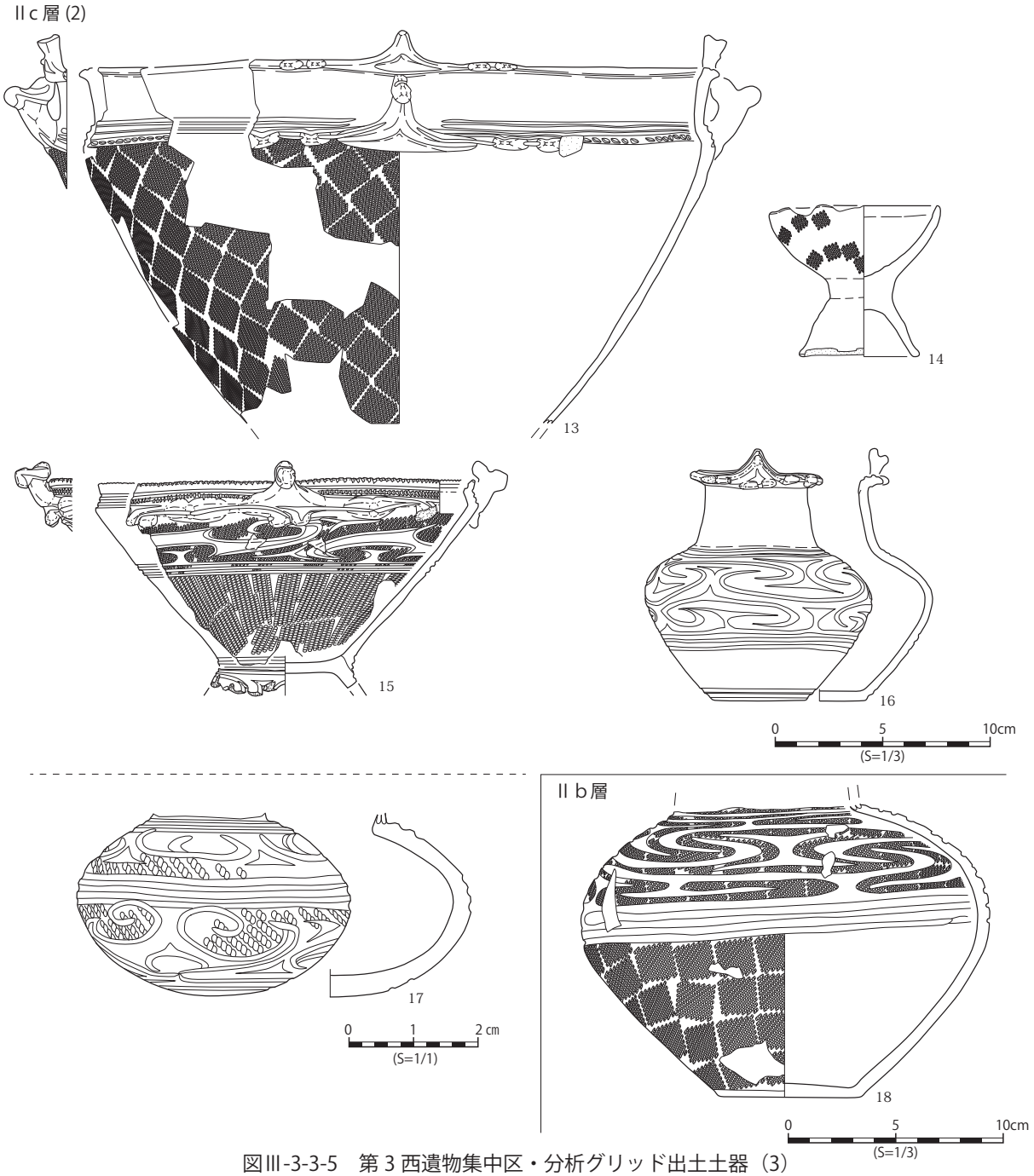
（江戸）



図Ⅲ-3-3-3　第３西遺物集中区・分析グリッド出土土器（1）



図Ⅲ-3-3-4　第３西遺物集中区・分析グリッド出土土器（2）



図Ⅲ-3-3-5　第 3 西遺物集中区・分析グリッド出土土器（3）

B. 石器・礫（表Ⅲ -3-3-1、図Ⅲ -3-3-6 ～ 9）

4,222 点、45.6kg の石器・礫を検出した。数量は剥片・砕片 3,044 点、搬入礫 956 点が多くを占めるものの、他の集中区に比べ、微細剥離のある剥片の割合が高い。剥片石器は尖頭器、石鏃などの定型石器 45 点、スクレイパーなどの不定形石器 118 点である。また、石皿・台石類などの礫石器は 43 点ある。

定型の剥片石器の内訳は尖頭器 7 点、石鏃 26 点、石錐 3 点、石匙 7 点、石箆 2 点で、石鏃が 56 %を占め、他に比べて低い。不定形の剥片石器はスクレイパー 13 点、微細剥離のある剥片 93 点、メノウ製を主とする小型石錐 5 点、小型スクレイパー 7 点である。礫石器は磨石・敲石類 36 点、石

皿・台石類３点、砥石４点である。不定形の剥片石器を除いた定型石器と礫石器にしめる割合をみると磨石・敲石類約 40%、石鏃約 30% で磨石・敲石類のほうが高い。

石器製作に関わる石核・剥片・砕片は、3,058 点で点数全体の 72% を占める。

異形礫は２点と少ない。搬入礫は 956 点で点数全体の約 20% とその割合が他に比べて低い。

層位別の割合をみると、まとまった数のある上層のⅡａ層から下層のⅡｇ層にかけて、微細剥離のある剥片が高くなる。一方下層にかけて剥片が低下する。他の石器は有意な変化は認められなかった。

表Ⅲ -3-3-1　第３西遺物集中区出土石器・礫の層位別・種別出土数

	Ⅱａ	Ⅱｂ	Ⅱｃ	Ⅱｄ	Ⅱｅ	Ⅱｆ	Ⅱｇ	その他	計
尖頭器			4	2		1			7
石鏃	2	3	12	2	3	1	3		26
石錐	1	1	1						3
小型石錐	3	1	1						5
石匙	2		2	2	1				7
石箆	1					1			2
スクレイパー	7	1	3	2					13
微細剥離のある剥片	20	8	6	23	13	7	8	8	93
小型スクレイパー	4		1	2					7
磨石・敲石類	3	3	17	8	1	3	1		36
石皿・台石類			2			1			3
砥石			3	1					4
石錘									0
磨製石斧						1			1
その他（擦切・扁平石器）									0
石核	3	1	6	2	2				14
メノウ石核									0
剥片	47	126	43	59	20	13	3		311
小型柱状剥片		1		2					3
砕片	263	237	1,309	409	172	249	91		2,730
異形礫			1						1
搬入礫	116	133	253	156	154	62	51	31	956
計	472	515	1,664	670	366	339	157	39	4,222

図Ⅲ -3-3-6-1 ～３（以下図Ⅲ -3-3-6 は省略）は尖頭器である。７点出土した。分類別の内訳は半月形１点（1）、木葉形６点（2・3）である。

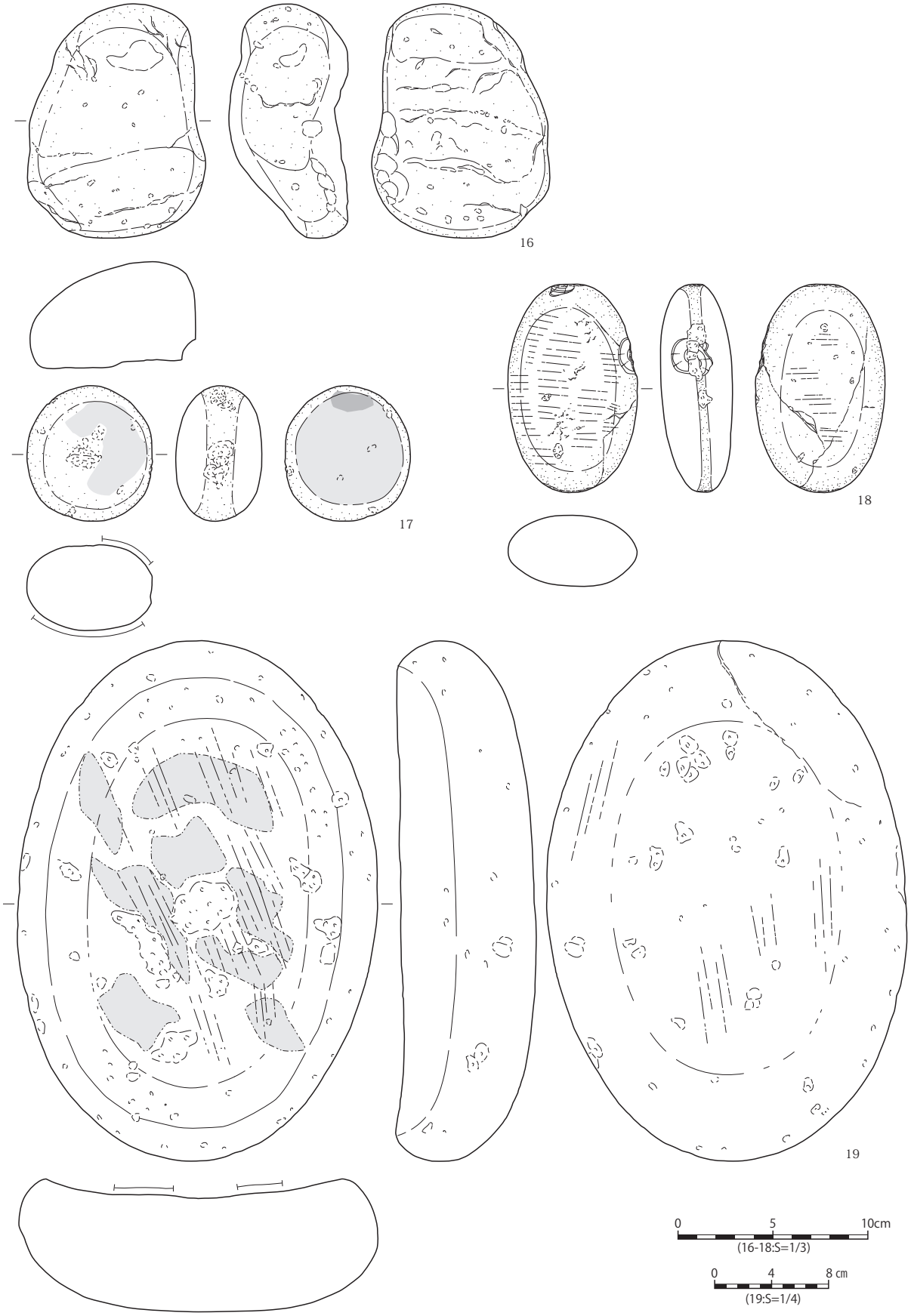
4･5 は石鏃である。石鏃は 26 点出土し、２点図示した。内訳は、凸有ｂ類 18 点（69％）、凸有ｄ類２点、凸有ｃ類・凸有ｆ類各１点ある。石材はメノウ４点のほかは頁岩である。アスファルトの付着が１点ある。4 は凸有ｂ類、5 は凸有ｄ類である。

6 は棒状のメノウ製小型石錐である。7 は台形の石箆である。8 ～ 12 は石匙で 8･9 は縦型、10 は横型、11･12 は斜型である。8･9 の側縁は外湾刃と直刃で構成される。13 ～ 15 はスクレイパーである。13･14 は横型剥片、15 は縦型剥片が用いられる。13 は下辺、14 は上下辺、15 は片側縁に刃部が作られる。

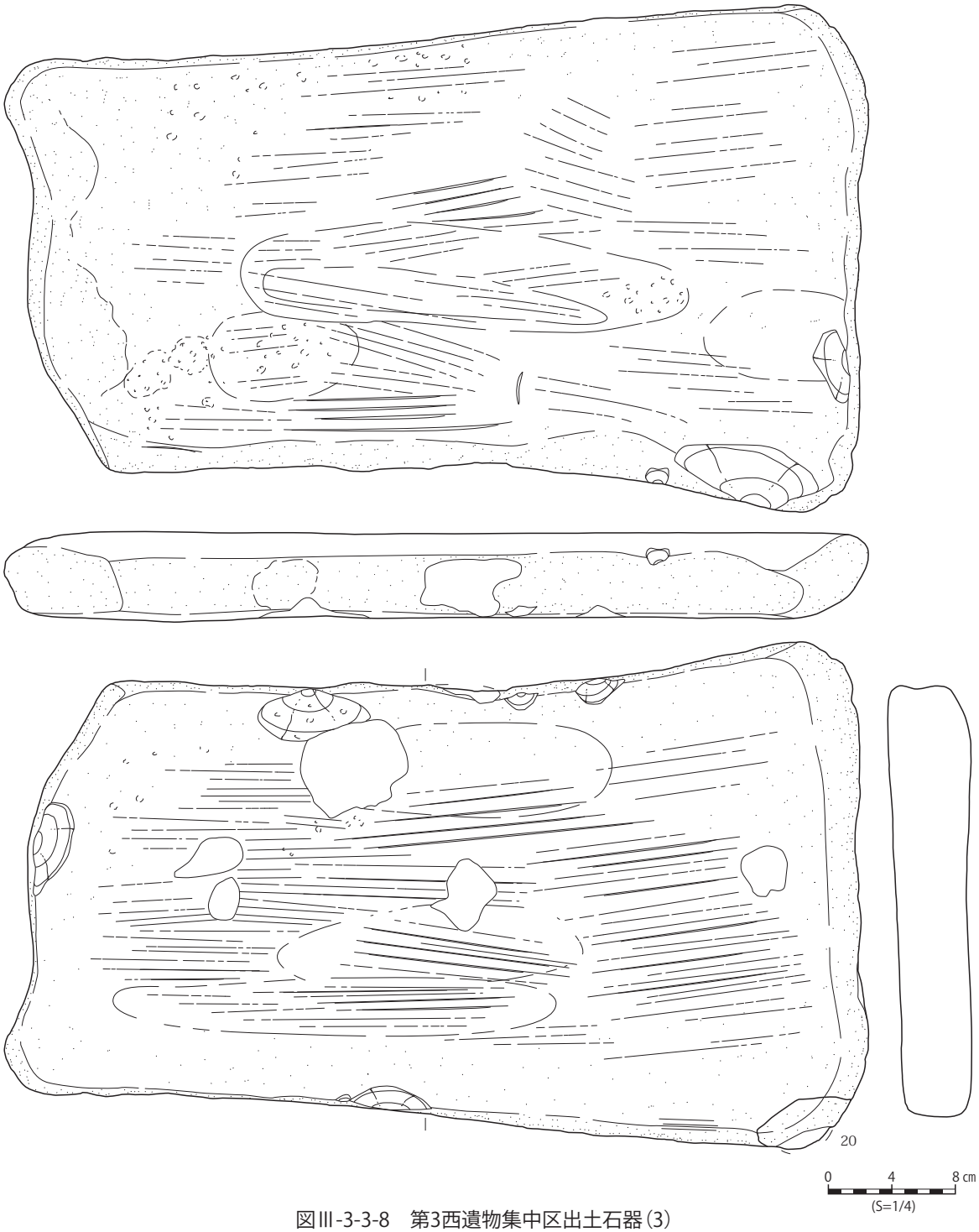
16 ～ 18 は磨石・敲石類である。16 には表面に凹痕、側面に敲打面がある。17 は磨石で表裏面に磨耗面が観察される。18 は表裏面に凹痕と磨耗痕、上下側面に敲打痕がある。磨耗面は長軸に対し横方向の線状痕が確認できる。19 は石皿である。敲打により凹部を作り出す。使用痕は弱く、使用頻度が少なかったとみられる。石皿の中央に縦 15cm 横 10cm ほどの範囲に磨耗痕が広がる。

20・21 は大型の砥石である。重さ 10kg 以上ある。表裏面に、幅 6cm ほどの帯状の研ぎ面が複数観察できる。また縦方向の線状痕が多数観察できる。21 は使用により中央に孔が開いている。幅

図Ⅲ-3-3-6　第3西遺物集中区出土石器(1)



図Ⅲ-3-3-7　第3西遺物集中区出土石器（2）

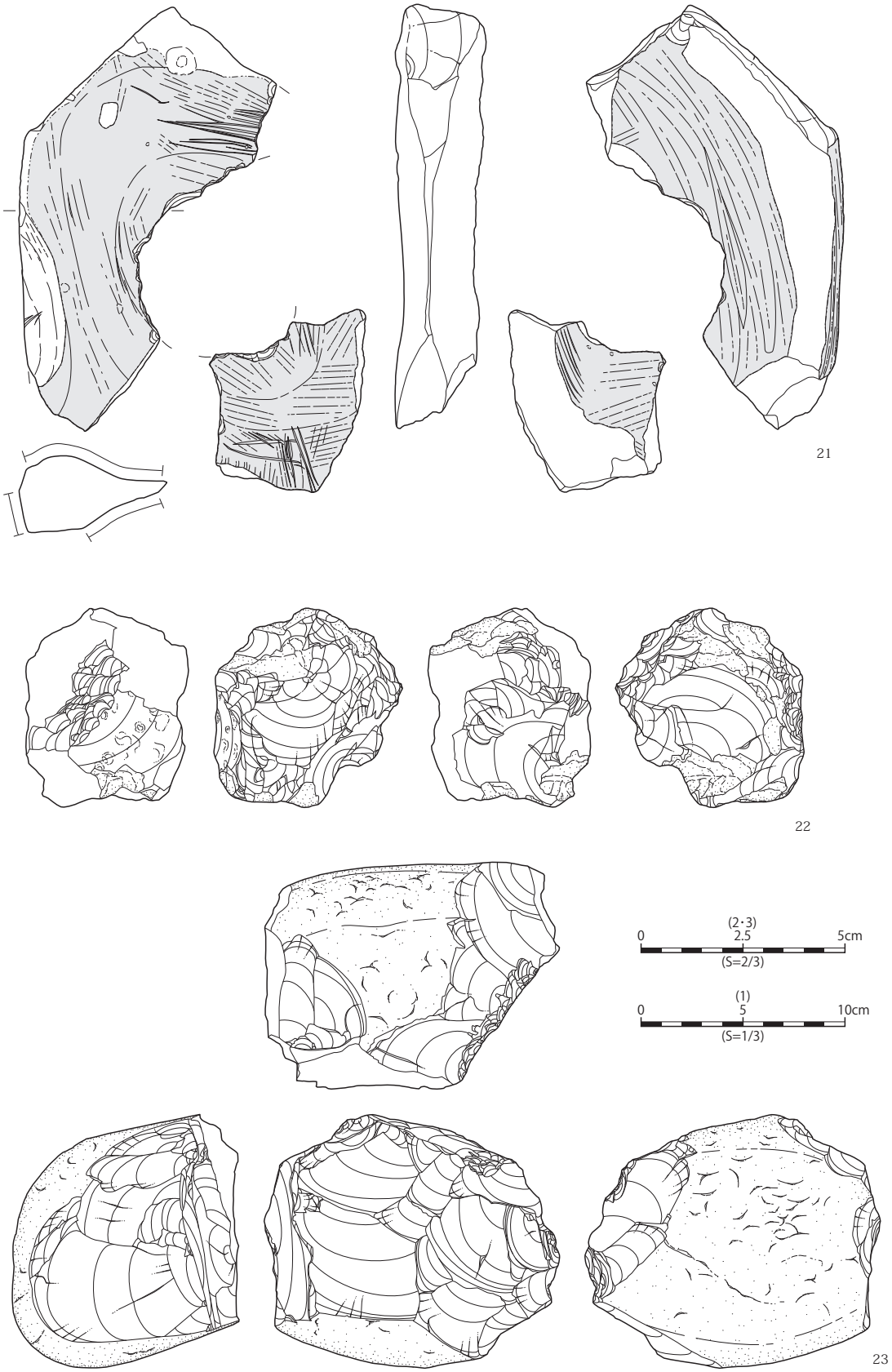


図Ⅲ-3-3-8　第3西遺物集中区出土石器(3)

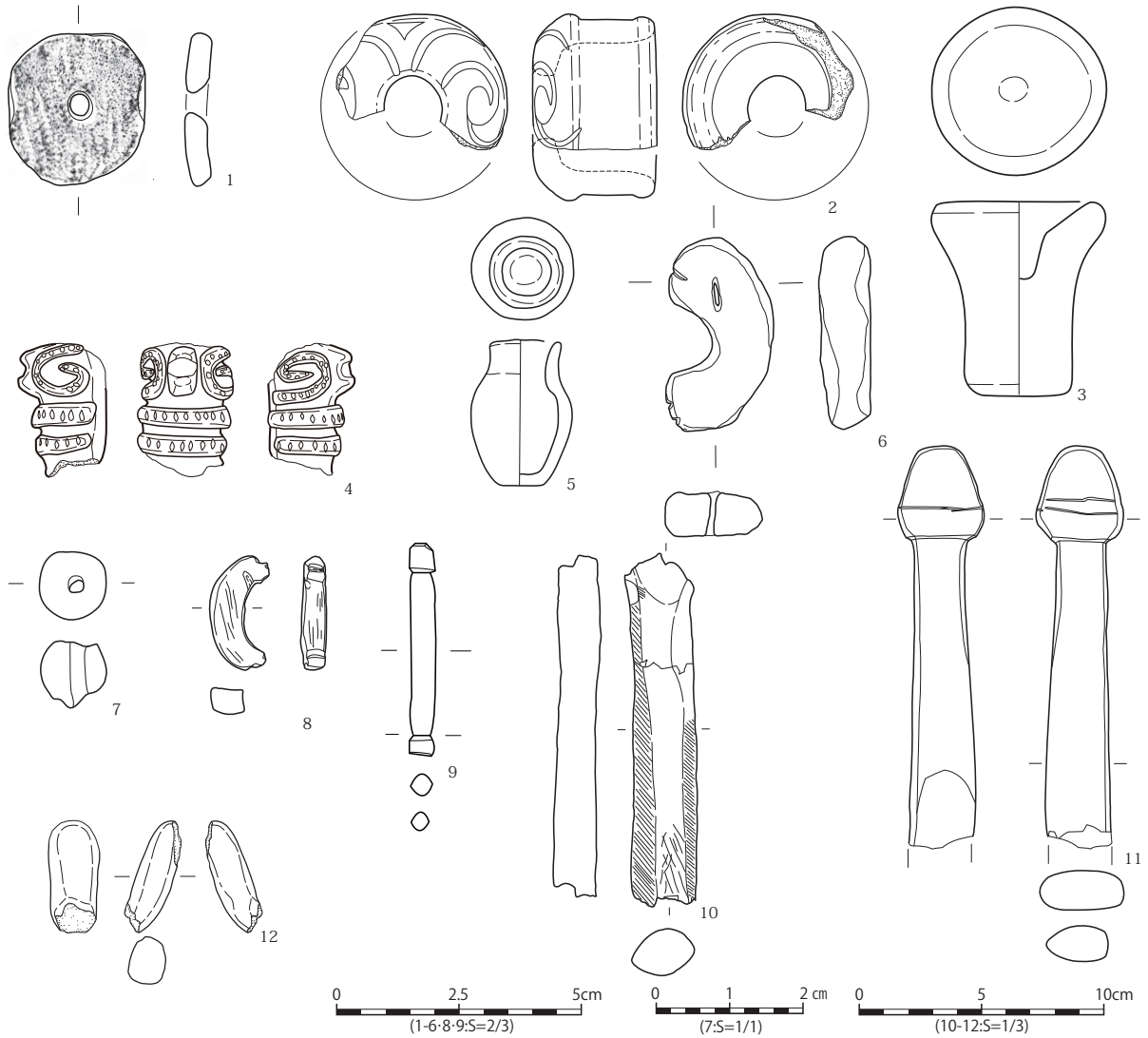
9cm ほどの研ぎ面が表裏の中央に確認できる。22･23 は石核である。22 は相対する上下両端に打面が設けられ、両設打面から交差するように剥片が剥離される。23 は打面が先の剥離作業の打撃方向に対して、ほぼ直交する位置にある。

C. 土製品・土製玉類（図Ⅲ -3-3-10）

土製品・土製玉類は円板状土製品、土製耳飾、類玉象嵌土製品、ミニチュア土器、土製丸玉、土製勾玉の 6 種がある。1 は有孔の円板状土製品である。土器片を利用する。2･3 は土製耳飾である。2



図Ⅲ-3-3-9　第3西遺物集中区出土石器（3）



図Ⅲ-3-3-10　第3西遺物集中区出土土製品・石製品・土偶

は径 2.5cm のⅥ 2 類である。三叉文と渦巻文を配置する。3 は径 1.5cm の小型品でⅣ a1 類に属す。赤色顔料が塗布される。4 は類玉象嵌土製品で端部に B 突起と隆帯による渦巻文が配される。5 は壺形のミニチュア土器である。内面にベンガラが付着しており、ベンガラ保管用の容器であったことが分かる。6 は土製勾玉である。上下端部に刻みを入れる。7 は土製丸玉である。

D. 石製品（図Ⅲ -3-3-10）

石製品は C 字状石製品、石棒、石剣、石刀の 4 種がある。8 は C 字状石製品で板状礫を研磨して作られる。上下端部に刻みがあり、勾玉に類似する。9 は長さ 4cm の粘板岩製の小型石棒である。両頭型である。10 は石剣である。11 は石刀の柄部である。山形の頭部に表面に 2 本、裏面に 1 本の沈刻線を入れる。

（上條信彦）

E. 土偶（図Ⅲ -3-3-10）

12 は土偶の脚部とみられ、両端が欠損している。

（榊原）

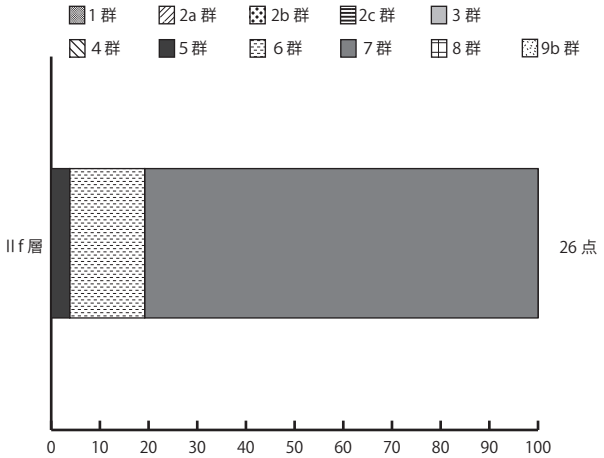
（２）第３東遺物集中区

【位置・確認】第３遺物集中区の北東、標高約７ｍに位置する（図Ⅲ -3-3-1）。X=92,Y=54 ～ 56 の計２グリッドを分析グリッドとして設定した。検出面はⅡｆ層である。【出土遺物】土器、土偶、石器が出土した。土器では、第５群～第７群土器が出土し、の口縁カウント数は 30 点である。土製品では、土偶が出土している。石器では、剥片石器（尖頭器・石鏃・石錐・石匙・スクレイパー）、礫石器（磨石・敲石類・砥石）が出土した。【時期】下限を示す時期の土器は第７群土器である。

A. 土器

集石遺構 SX01 と重複関係にあるため、SX01 と重複部分にあるⅡｅ層までの出土遺物は、「第３章２節４　集石遺構」を参照されたい。

ここではⅡｆ層および分析グリッド外出土の土器について記載する。また、各群の層位ごとの出土状況をグラフで示す（図Ⅲ -3- ３-11）。



図Ⅲ-3-3-11　第３東遺物集中区　各群の層位別出土割合グラフ

1）分析グリッド

①Ⅱｆ層（図Ⅲ -3-3-12）

・５群の壺１点、６群の深鉢２点、鉢２点、３～６群の深鉢４点、７群の深鉢 12 点、鉢７点、浅鉢・皿１点、壺１点の計 30 点出土した。そのうち図化したのは３点である。１は７群の鉢であり、口頸部に弧状沈線が巡る。体部には羽状縄文が施される。２・３は７群の鉢である。２は体部上半に簡略化された羊歯状文が施され、大型の突起を有する。３は体部上半に間に B 突起を有する横位沈線が巡る。

2）分析グリッド外

②Ⅱｆ層（図Ⅲ -3-3-12）

・４群の深鉢１点、７群の壺１点（赤彩資料）、３～８群の深鉢１点の計３点図化した。４は 2a 群の深鉢であり、磨消縄文が施される。５は７群の壺あり、体部に雲形文が展開する。６は３～８群の粗製深鉢である。

③Ⅱｄ層（図Ⅲ -3-3-12）

・７群の壺１点（赤彩資料）を図化した。７は７群の壺であり、体部中央に横位沈線が巡り、上下に雲形文が展開する。

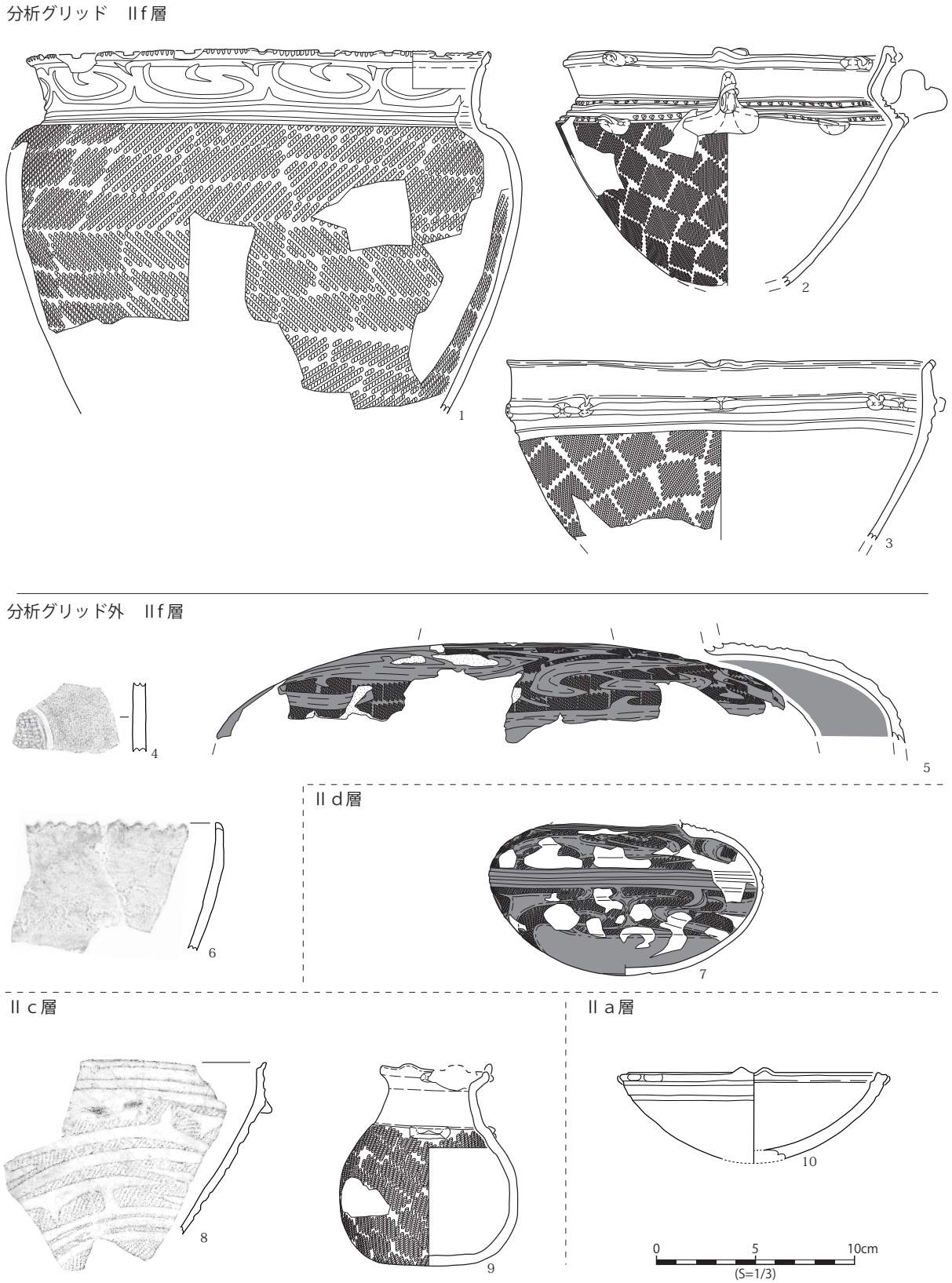
④Ⅱｃ層（図Ⅲ -3-3-12）

・7 群の鉢１点、3 ～８群の壺１点の計２点図化した。8 は７群の鉢であり、体部上半に B 突起を有し、体部に雲形文が施される。9 は７群の壺であり、口唇部に山形突起と体部上半に B 突起を有する。

⑤Ⅱａ層（図Ⅲ -3-3-12）

・７群の浅鉢１点を図化した。10 は７群の浅鉢であり、口唇部に山形突起、口唇直下に B 突起を有する。

（江戸）



図Ⅲ-3-3-12　第 3 東遺物集中区・分析グリッド／分析グリッド外出土土器

B. 石器（表Ⅲ -3-3-2、図Ⅲ -3-3-13）

2,140 点、46.3kg の石器・礫を検出した。SX01 の下層に当たる。数量は剥片・砕片 1,094 点、搬入礫 956 点が多くを占める。剥片石器は尖頭器、石鏃などの定型石器 43 点、スクレイパーなどの不定形石器 30 点である。また、磨石・敲石類などの礫石器は 6 点ある。

定型の剥片石器の内訳は尖頭器 6 点、石鏃 32 点、石錐 2 点、石匙 3 点で、石鏃が 74％と高い点は、同じく石鏃が多かった SX01 の下層からの連続性を示す。不定形の剥片石器は微細剥離のある剥片 22 点、メノウ製を主とする小型石錐 3 点、小型スクレイパー 5 点と少ない。礫石器も磨石・敲石類 5 点、砥石 1 点と少ない。不定形の剥片石器を除いた定型石器と礫石器にしめる割合をみると石鏃約 65% とかなり高い。

石器製作に関わる石核・剥片・砕片は、1,100 点で点数全体の 52% を占めるものの、他に比べてやや低い。

異形礫はほとんどなく、搬入礫は 956 点で点数全体の 40% 程度である。

層位別の割合をみると、主体層であるⅡｅ層とⅡｆ層にまとまるため、有意な変化は認められない。上層の SX01 と比べると、異形礫と搬入礫がかなり少ない。

表Ⅲ -3-3-2　第 3 東遺物集中区出土石器・礫の層位別・種別出土数表

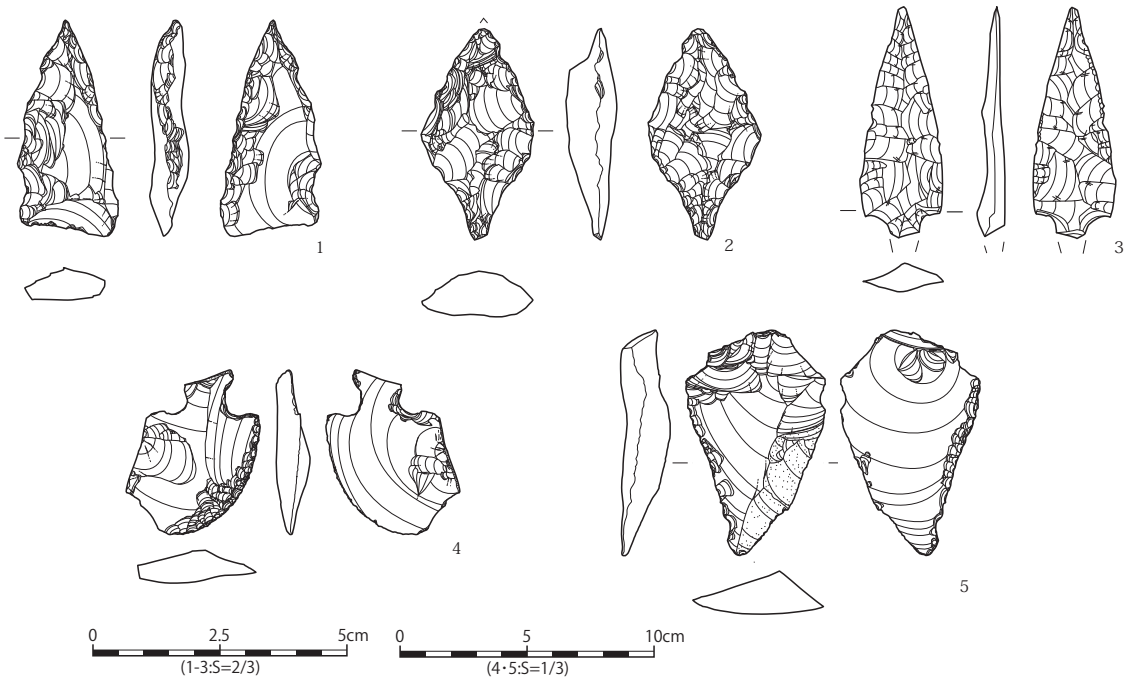
	Ⅱａ	Ⅱｂ	Ⅱｃ	Ⅱｄ	Ⅱｅ	Ⅱｆ	Ⅱｇ	その他	計
尖頭器			1	1	1	2	1		6
石鏃	2	1	7		7	13	1	1	32
石錐						2			2
小型石錐			3						3
石匙					2	1			3
石箆									0
スクレイパー									0
微細剥離のある剥片						22			22
小型スクレイパー						5			5
磨石・敲石類						5			5
石皿・台石類									0
砥石						1			1
石錘									0
磨製石斧									0
その他（擦切・扁平石器）									0
石核						6			6
メノウ石核									0
剥片					152	72			224
小型柱状剥片	5								5
砕片					572	298			870
異形礫									0
搬入礫	469	216	16	116	102	12	3	22	956
計	476	217	27	117	836	439	5	23	2,140

図Ⅲ 3-3-13-1･2（以下Ⅲ -3-3-13 は省略）は尖頭器である。6 点出土した。分類別の内訳は木葉形 1 点、山形 2 点（1）、菱形が 3 点（2）である。

石鏃は 32 点出土した。内訳は凸有ａ類 1 点（3％）、凸有ｂ類 26 点（81％）、凸有ｄ類・凹基無茎各 1 点（3％）、凸有ｆ類・分類不明各 2 点（6％）である。石材は、32 点中頁岩が 28 点、メノウ 4 点である。アスファルト付着が 3 点ある。

3 は凸有ｂ類である。石材は頁岩で、基部の一部が欠損している。裏面右側縁に微細剥離がある。

4 は斜型の石匙である。5 はスクレイパーで縦型剥片の片側縁に刃部を作り出す。

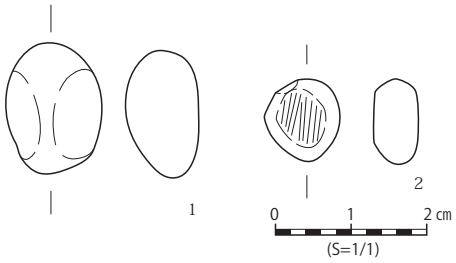


図Ⅲ-3-3-13　第3東遺物集中区出土石器

C. 石製玉類（図Ⅲ -3-3-14）

石製玉類２点を図示した。１は緑色凝灰岩の玉素材である。２は表裏面が平坦に研磨された段階である。

（上條信彦）

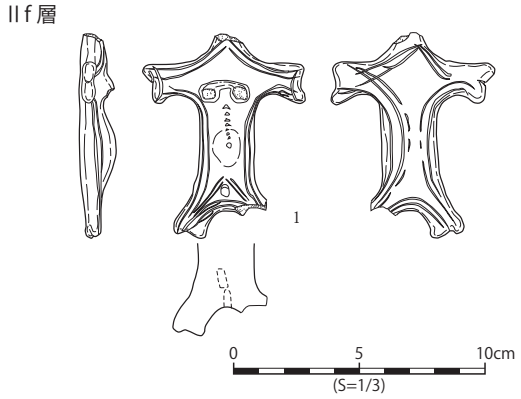


図Ⅲ-3-3-14　第3東遺物集中区出土石製品

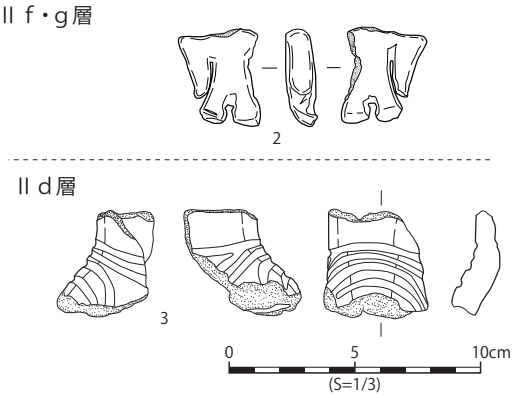
D. 土偶（図Ⅲ -3-3-15・16）

１はＸ字土偶で頭部と左脚が欠損している。四肢は二股に分かれる。体の側縁を二条の沈線文で区画する。乳房・腹部は大きく膨らみを持たせている。正中線を刺突列で表現している。なお、股下と腹部下に穿孔がみられる。２は無文の中実土偶であり、両足首を屈折させている。３は中空土偶の体部で腰に沈線を施す

（榊原）



図Ⅲ-3-3-15　第３東遺物集中区分析グリッド出土土偶



図Ⅲ-3-3-16　第３遺物集中区分析グリッド外出土土偶

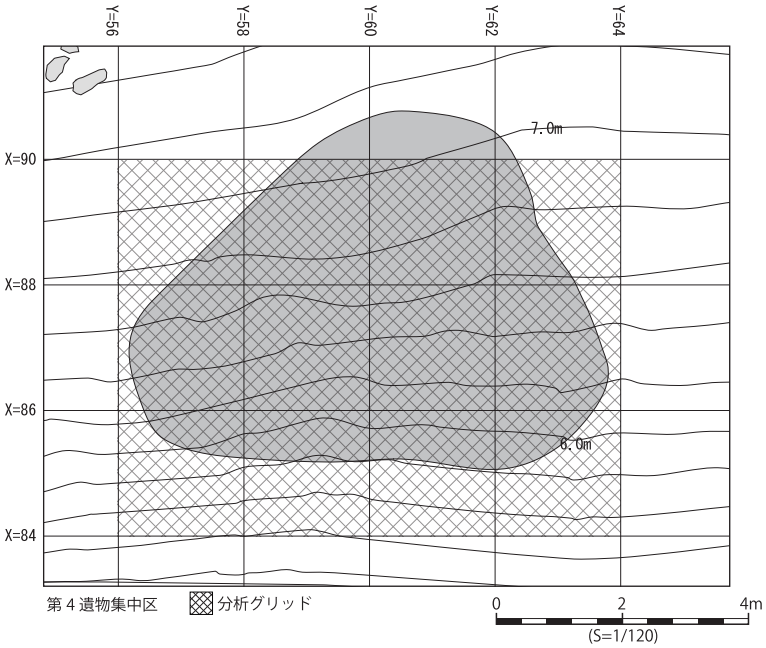
4. 第４遺物集中区

概要

【位置・確認】遺跡の南西（グリッド X=90 ～ 84,Y=54 ～ 64）標高約６～７ｍに位置する（図Ⅲ-3-4-1）。X=86 ～ 90,Y=58 ～ 64 の計 12 グリッドを分析グリッドとして設定した。検出面はⅡａ層である。

【規模・形状】南北６ｍ、東西 10 ｍの隅丸三角形状を呈する。区内では、Ⅱｆ層より柱穴跡が確認された。

【出土遺物】土器、土製品、石器・石製品が出土した。土器では、第 2b 群～第 9b 群土器が出土し、口縁部カウント数は 1.443 点である。土製品では、土偶、土面、耳飾、土製垂飾、棒状土製品、円板状土製品、ミニチュア土器などが出土している。石器・石製品では、剥片石器（尖頭器・石鏃・石錐・石箆・石匙・スクレイパー・楔形石器・RF・小形石錐）、磨製石斧、磨石・敲石類、石皿・台石類、砥石、石核、石棒、石冠、管玉、垂飾、環状石製品、勾玉、異形礫が出土している。



図Ⅲ-3-4-1　第４遺物集中区分析グリッド位置図

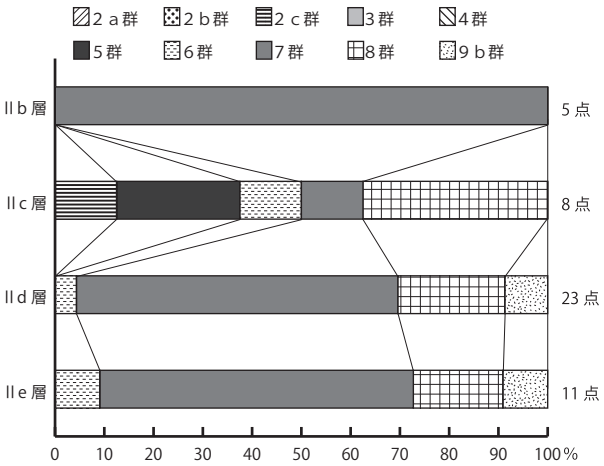
【時期】第７群・８群土器の良好な層位資料が得られた。下限を示す時期の土器は第８群土器（北海道系の第９群は除く）である。第４遺物集中区では、第１遺物集中区と同様同一層位として取り上げたと考えられた遺物が、グリッド間で異なる様相を呈しているため、各グリッドで層位ごとの土器の特徴を記載する。また、各群の層位ごとの出土状況をグラフで示す。

A. 土器

①グリッド X=86,Y=58（図Ⅲ -3-4-2・9）

・Ⅱｅ層　６群の鉢１点､7 群の深鉢３点､鉢３点、浅鉢・皿１点、８群の深鉢２点、9b 群の深鉢１点の計 11 点出土した。そのうち図化したのは１点である。１は 9b 群の深鉢であり、口唇直下に刺突文が巡る。

・Ⅱｄ層　６群の鉢１点、７群の深鉢 11 点、鉢３点、浅鉢･皿１点、８群の鉢３点、壺２点、9b 群の浅鉢・皿２点の計 23 点出土した。そのうち図化したのは２点である。２は７群の深鉢であり、口頸部に多条沈線が巡る。３は 9b 群の浅鉢であり、口唇部に中間が凹む突起を有し、



図Ⅲ-3-4-2　第４遺物集中区　X=86, Y=58
各群の層位別出土割合グラフ

体部は格子状の沈線が巡る。

・Ⅱｃ層　２ｃ群の深鉢１点、５群の深鉢１点、鉢１点、６群の鉢１点、３～６群の深鉢１点、７群の鉢１点、８群の深鉢１点、鉢１点、浅鉢・皿１点、３～８群の壺１点の計 10 点出土した。

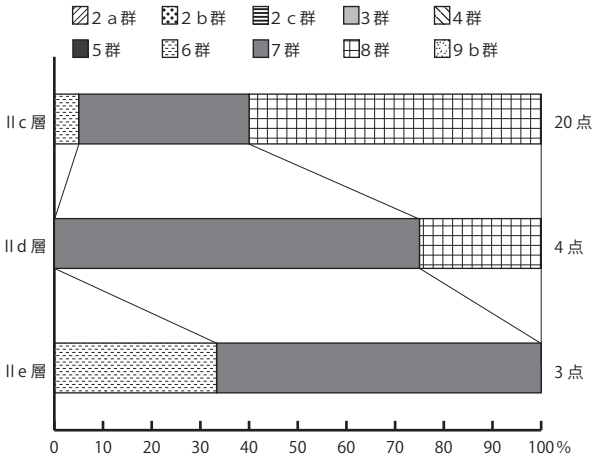
・Ⅱｂ層　３～６群の深鉢１点、７群の深鉢３点、鉢２点、３～８群の壺１点の計７点出土した。

②グリッド X=86, Y Y=60（図Ⅲ -3-4-3）

・Ⅱｅ層　７群の鉢１点、８群の深鉢１点、壺１点の計３点出土した。

・Ⅱｄ層　７群の深鉢１点、鉢２点、８群の壺１点の計４点出土した。

・Ⅱｃ層　６群の鉢１点、３～６群の深鉢１点、７群の深鉢７点、８群の深鉢１点、鉢４点、浅鉢・皿６点、壺１点、３～８群の壺１点の計 22 点出土した。

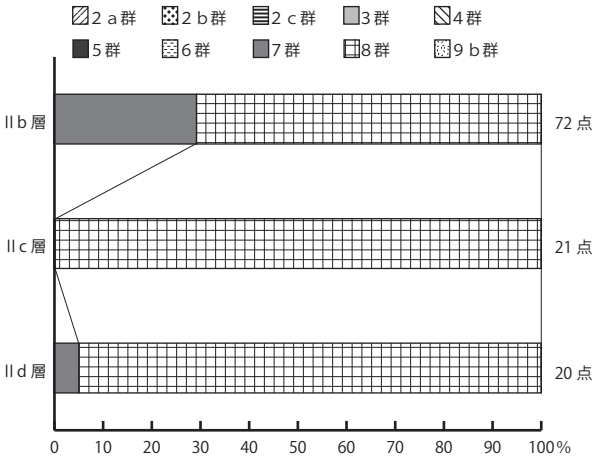


図Ⅲ-3-4-3　第４遺物集中区　X=86,Y=60
各群の層位別出土割合グラフ

③グリッド X=86,Y=62（図Ⅲ -3-4-4・9・10）

・Ⅱｄ層　７群の浅鉢・皿１点、８群の深鉢３点、鉢５点、浅鉢・皿 10 点、壺１点の計 20 点出土した。そのうち図化したのは２点である。4・5 は８群の台付鉢であり、体部上半は粘土粒で区切られた結節沈線が巡る。

・Ⅱｃ層　３～６群の深鉢１点、８群の深鉢 14 点、鉢６点、浅鉢・皿１点の計 22 点出土した。そのうち図化したのは３点である。6・7 は８群の深鉢であり、6 は体部上半に間に粘土粒で区切られた結節沈線が巡る。7 は口縁部に３条の横位沈線が巡る。8 は８群の鉢であり、口唇部に間が凹むＢ突起を有し、体部上半に粘土粒で区切られた結節沈線が巡る。



図Ⅲ-3-4-4　第４遺物集中区　X=86,Y=62
各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱｂ層　７群の深鉢 20 点、鉢１点、８群の深鉢 26 点、鉢 12 点、浅鉢・皿６点、壺７点、３～８群の壺２点の計 74 点出土した。そのうち図化したのは４点である。9 は８群の深鉢であり、口縁部に３条の平行沈線が巡る。10 ～ 12 は８群の壺であり、10 は口唇直下に突起を有する。11 は無文である。12 は口頸部に１条の横位沈線が巡り、沈線に沿ってベンガラによる帯状の彩文が施される。

④グリッド X=86,Y=64（図Ⅲ -3-4-5・10・11）

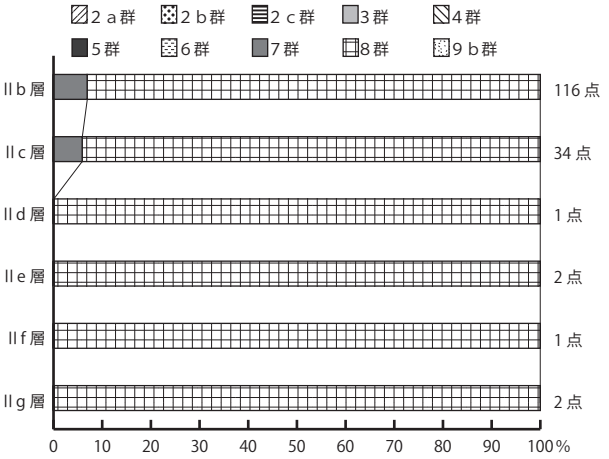
・Ⅱｆ層　８群の深鉢１点が出土した。

・Ⅱｅ層　８群の深鉢１点、浅鉢・皿１点の計２点出土した。

・Ⅱｄ層　８群の鉢１点が出土し、図化した。13 は８群の鉢であり、口唇部に間が凹むＢ突起を有し、体部上半に粘土粒で区切られた結節沈線が巡り、工字文が施される。

・Ⅱｃ層　７群の深鉢１点、鉢１点、８群の深鉢 15 点、鉢９点、浅鉢・皿３点、壺５点の計 34 点出土した。そのうち図化したのは１点である。14 は８群の壺であり、口唇部に匹字文、体部には連繋入組文が展開する。

・Ⅱｂ層　３～６群の深鉢３点、７群の深鉢２点、鉢６点、８群の深鉢 68 点、鉢 16 点、浅鉢・皿 14 点、壺 10 点の計 119 点出土した。そのうち図化したのは７点である。15 ～ 17 は８群の台付鉢であり、体部から台部にかけ間に粘土粒で区切られた結節沈線および流水状工字文が巡る。16 は口唇部に中間が凹むＢ突起を有し、内・外面にベンガラが施される。18 ～ 21 は、８群の壺であり、18・21 は体部上半に連繋入組文が展開する。19 は無文である。20 は口唇直下に間に粘土粒で区切られた結節沈線が巡り、体部上半に間に突起を有する数条の横位沈線が巡る。

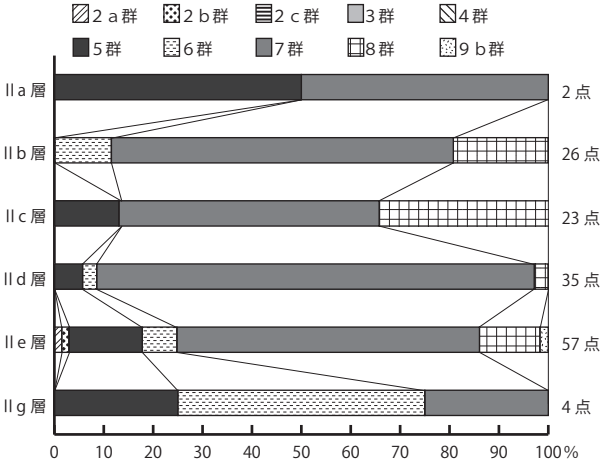


図Ⅲ-3-4-5　第４遺物集中区　X=86,Y=64
各群の層位別出土割合グラフ

⑤ グリッド X=88,Y=58（図Ⅲ-3-4-6・11・12）

・Ⅱｇ層　５群の深鉢１点、６群の鉢２点、７群の鉢１点の計４点出土した。

・Ⅱｅ層　2a 群の深鉢１点、2b 群の深鉢１点、５群の鉢９点、６群の鉢３点、浅鉢・皿１点、３～６群の深鉢４点、７群の深鉢 14 点、鉢 15 点、浅鉢・皿３点、壺３点、８群の深鉢３点、鉢１点、浅鉢・皿３点、３～８群の鉢２点、9b 群の深鉢１点の計 64 点出土した。そのうち図化したのは４点である。22 は７群の深鉢であり、口唇部に間を沈線で区画された突起を有し、口唇直下にＢ突起と列点文が巡る。口頸部には列点文と横位沈線が交互に巡る。23 は 2a 群の深鉢の波状口縁部であり、内・外面に三角状の沈線と沈線に直行する刻目が施される。24 は７群の台付鉢であり、口唇部に間を沈線で区画された突起を有し、口頸部には横位沈線と列点文が巡る。25 は７群の壺であり、体部には連繋入組文が展開する。



図Ⅲ-3-4-6　第４遺物集中区　X=88,Y=58
各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱｄ層　2b 群の壺１点、５群の深鉢１点、鉢１点、６群の鉢１点、７群の深鉢 17 点、鉢 11 点、浅鉢・皿３点、８群の浅鉢・皿１点、３～８群の壺６点の 42 点出土した。そのうち図化したのは２点である。26 は７群の鉢であり、口頸部に列点文と横位沈線が巡る。27 は７群の浅鉢であり、体部に雲形文が展開する。

・Ⅱｃ層　５群の深鉢１点、鉢２点、３～６群の深鉢４点、鉢５点、７群の深鉢 11 点、浅鉢・皿１点、８群の深鉢２点、鉢２点、浅鉢・皿２点、壺２点、３～８群の深鉢２点、壺２点の計 36 点出土した。そのうち図化したのは３点である。28・29 は８群の深鉢であり、28 は体部上半に間に粘土で区切

られた結節沈線および流水状工字文が巡る。29 は口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。30 は、7 群の深鉢であり、口頸部に列点文と平行沈線が巡る。

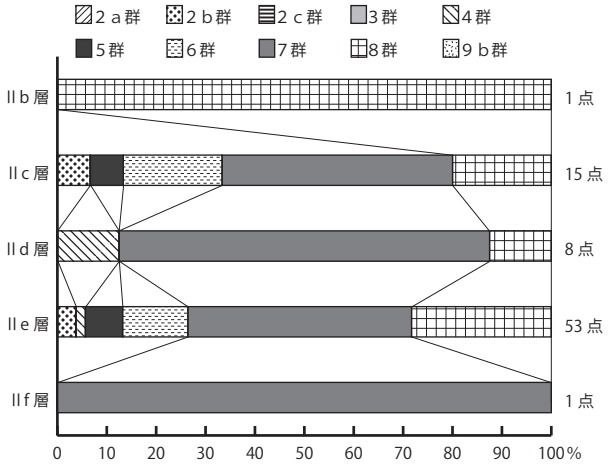
・Ⅱｂ層　6 群の鉢 3 点、3 ～ 6 群の深鉢 1 点、7 群の深鉢 9 点、鉢 5 点、浅鉢・皿 1 点、壺 3 点、8 群の深鉢 3 点、鉢 2 点の計 27 点出土した。

・Ⅱａ層　5 群の深鉢 1 点、7 群の壺 1 点の計 2 点出土した。

⑥グリッド X =88,Y=60（図Ⅲ -3-4-7・12・13）

・Ⅱｆ層　7 群の深鉢 1 点が出土した。

・Ⅱｅ層　2b 群の深鉢 2 点、4 群の深鉢 1 点、5 群の鉢 4 点、6 群の鉢 7 点、3 ～ 6 群の深鉢 5 点、注口土器 2 点、7 群の深鉢 16 点、鉢 6 点、浅鉢・皿 2 点、8 群の深鉢 1 点、鉢 3 点、浅鉢・皿 5 点、壺 6 点、3 ～ 8 群の鉢 1 点、浅鉢・皿 1 点、壺 1 点の計 63 点出土した。そのうち図化したのは 4 点である。31 は 8 群の台付鉢であり、口唇部は二山状の突起を有し、体部上半は粘土粒で区切られた結節沈線と工字文が巡る。32 は 7 群の無文の浅鉢であり、内部に漆塊を有する。底部は四脚を有する。33 は 8 群、34 は 7 群の壺であり、33 は無文である。34 は体部に雲形文が展開する。



図Ⅲ-3-4-7　第 4 遺物集中区　X=88,Y=60
各群の層位別出土割合グラフ

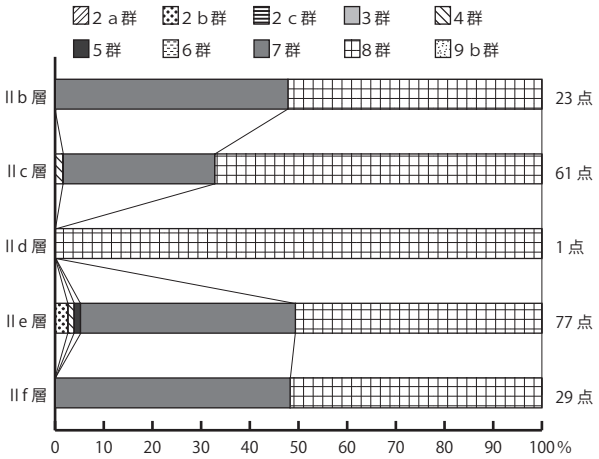
・Ⅱｄ層　4 群の深鉢 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 1 点、7 群の深鉢 3 点、鉢 2 点、浅鉢・皿 1 点、8 群の浅鉢・皿 1 点、3 ～ 8 群の壺 2 点の計 11 点出土した。

・Ⅱｃ層　2b 群の深鉢 1 点、5 群の鉢 1 点、6 群の鉢 3 点、3 ～ 6 群の深鉢 3 点、7 群の深鉢 3 点、鉢 1 点、壺 3 点、8 群の深鉢 1 点、浅鉢・皿 2 点の計 18 点が出土した。そのうち図化したのは 1 点である。35 は 8 群の深鉢であり、体部上半に凸字工字文が施される。

・Ⅱｂ層　8 群の深鉢 1 点が出土した。

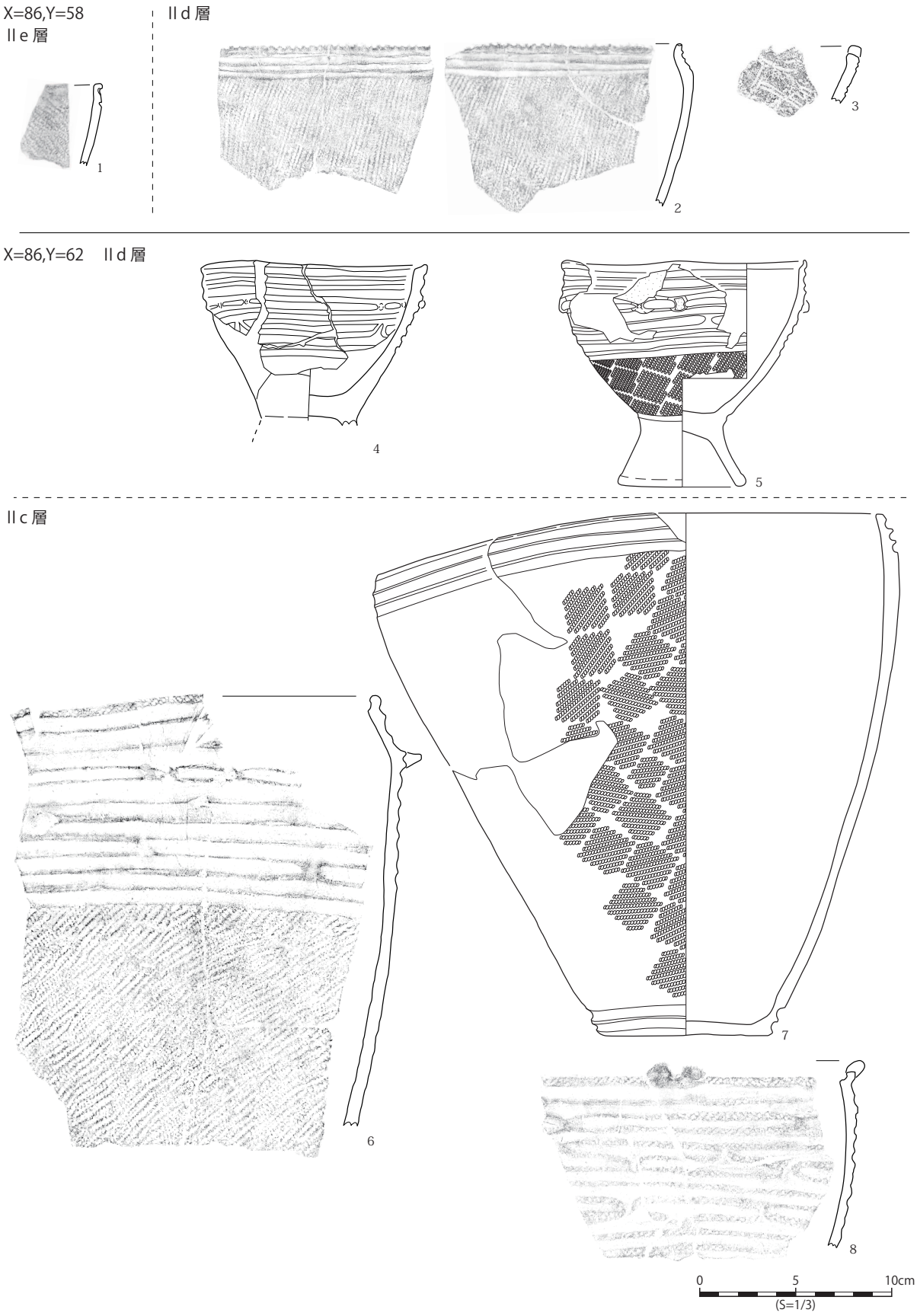
⑦グリッド X=88,Y=62（図Ⅲ -3-4-8・13・17）

・Ⅱｆ層　3 ～ 6 群の深鉢 2 点、7 群の深鉢 5 点、鉢 7 点、浅鉢・皿 2 点、8 群の深鉢 8 点、鉢 4 点、浅鉢・皿 2 点、壺 1 点、3 ～ 8 群の壺 1 点の計 32 点出土した。そのうち図化したのは 4 点である。36 は 8 群の深鉢であり、口縁部に 3 条の平行沈線が巡る。37 は 8 群の台付鉢であり、体部上半は粘土粒で区切られた結節沈線および流水工字文が巡る。38・39 は 8 群の壺であり、38 は体部にネガ文様の流水状工字文が巡る。39 は無文である。

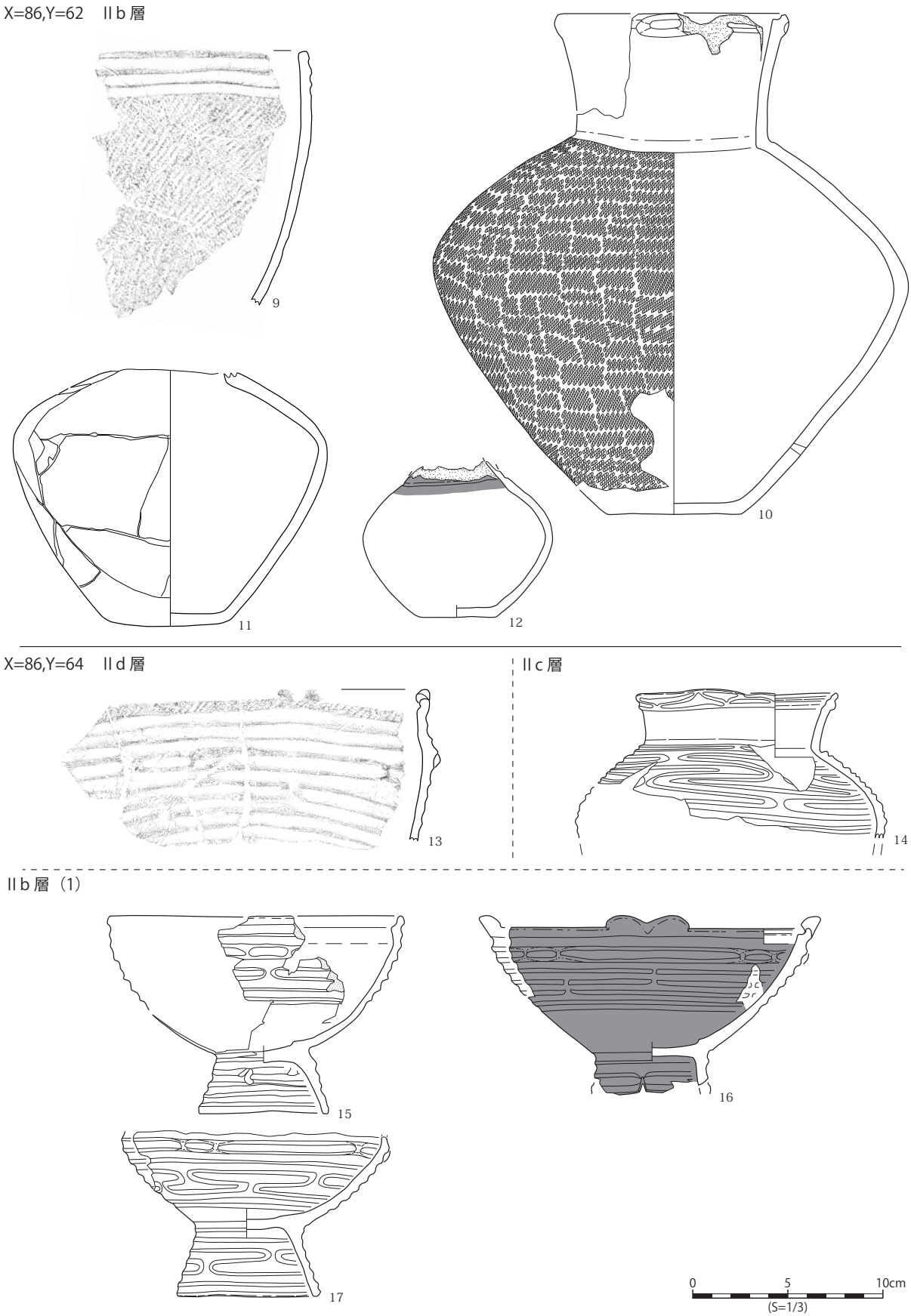


図Ⅲ-3-4-8　第 4 遺物集中区　X=88,Y=62
各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱｅ層　2b 群の深鉢 2 点、4 群の深鉢 1 点、5 群の鉢 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 4 点、7 群の深



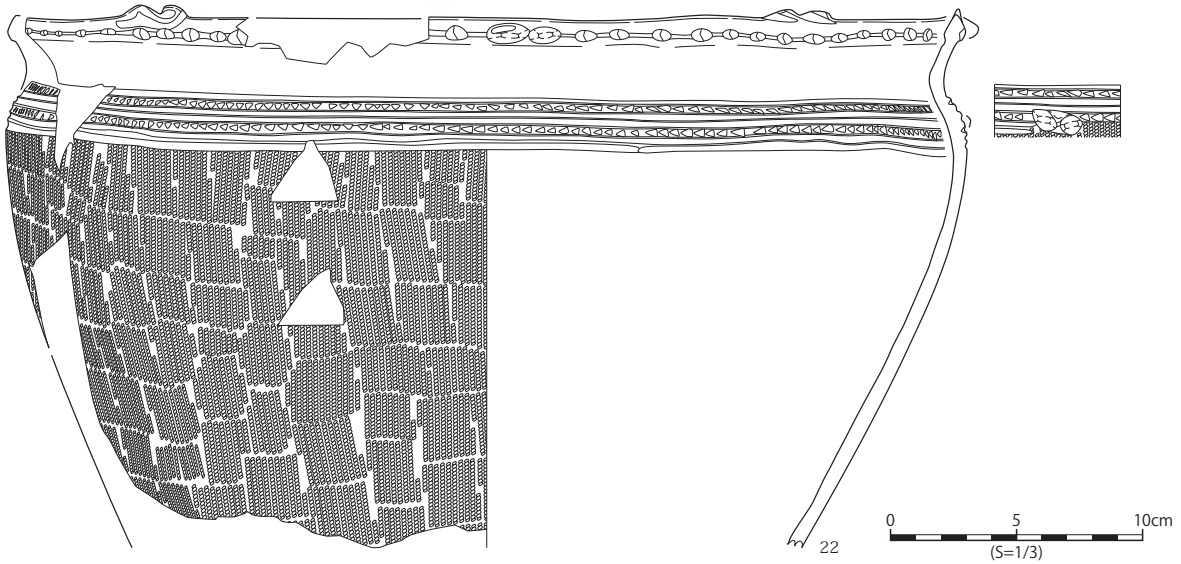
図Ⅲ-3-4-9　第４遺物集中区・分析グリッド出土土器（1）



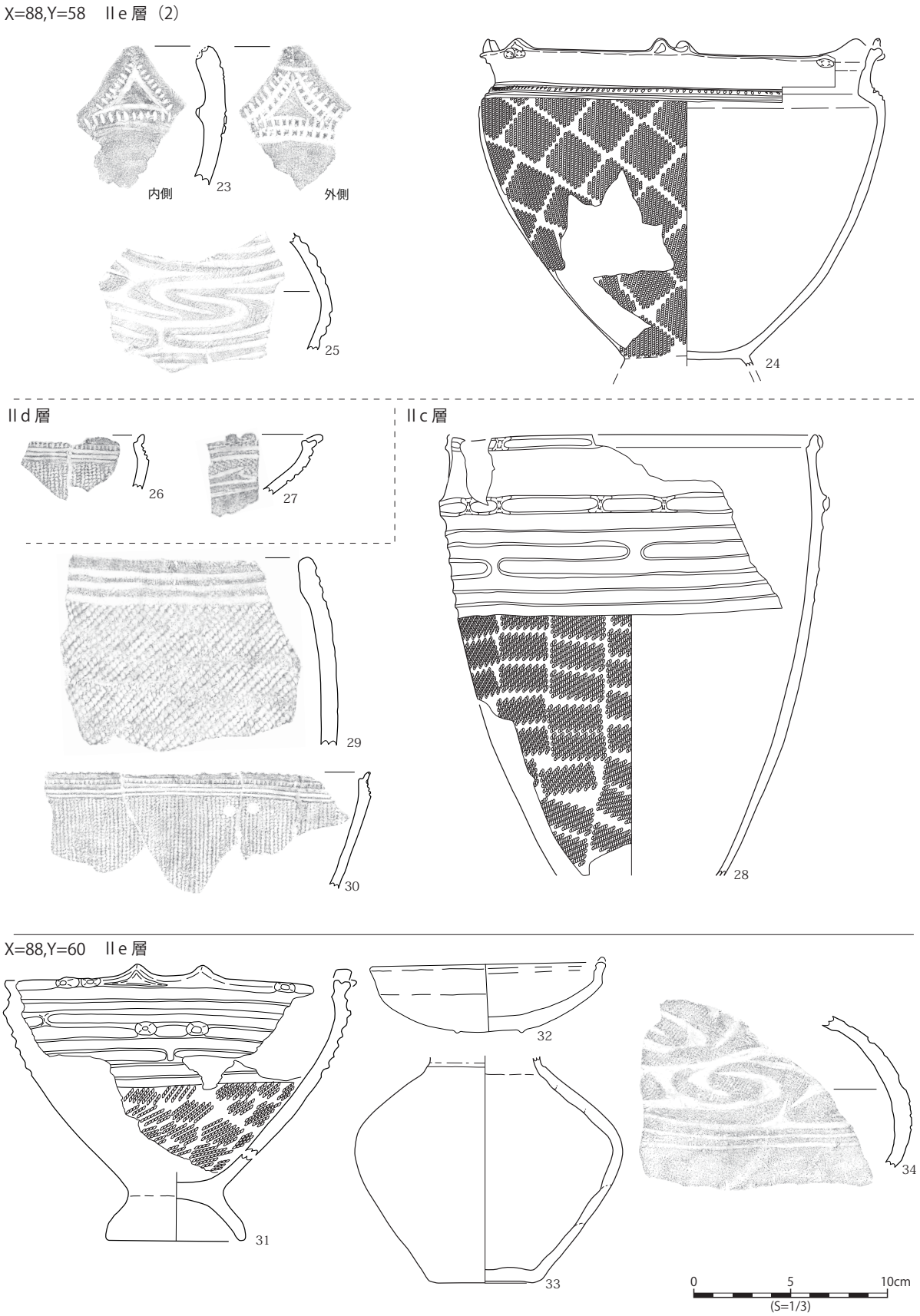
図Ⅲ-3-4-10　第 4 遺物集中区・分析グリッド出土土器（2）

X=86,Y=64　Ⅱb 層（2）

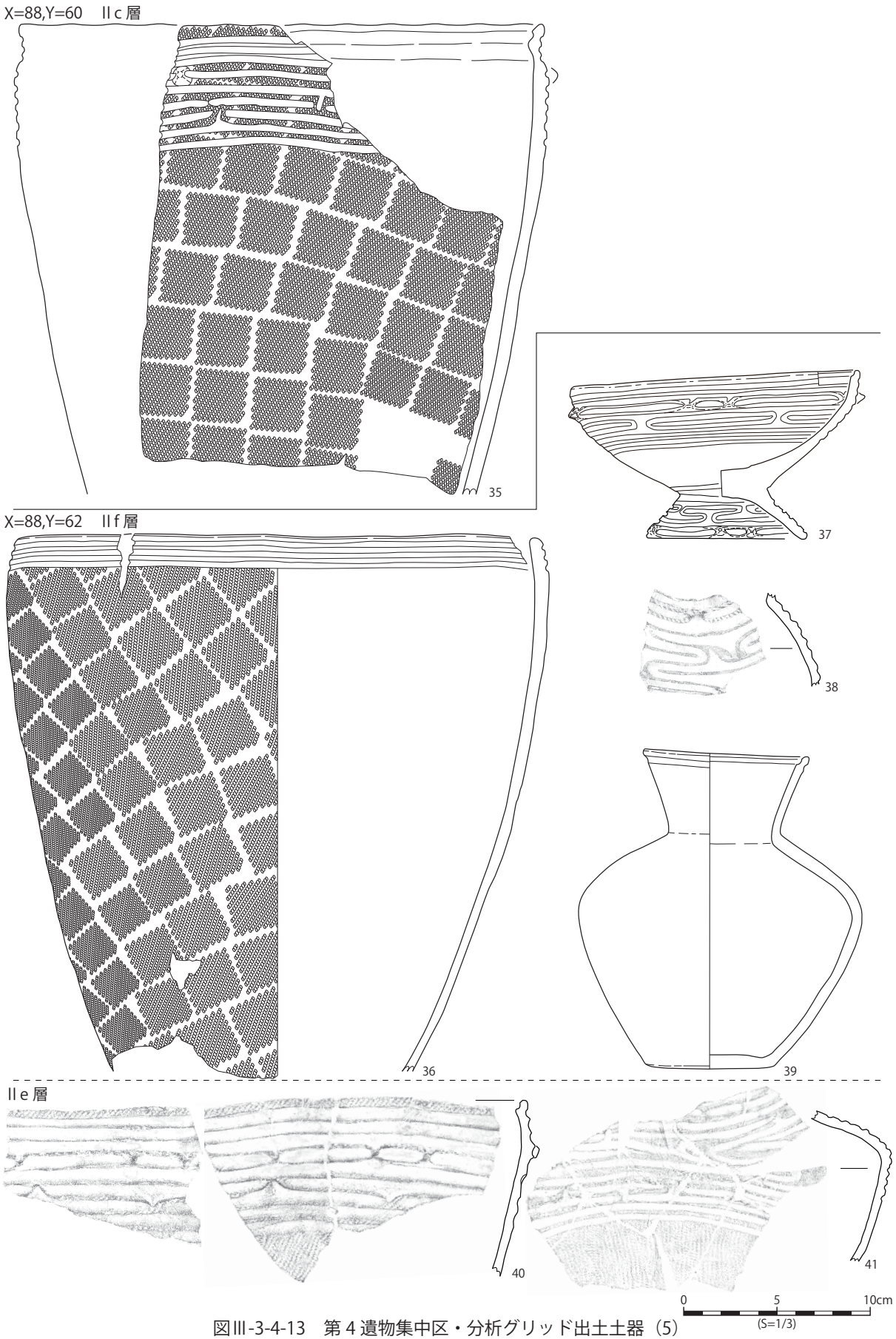
X=88,Y=58　Ⅱe 層（1）



図Ⅲ-3-4-11　第４遺物集中区・分析グリッド出土土器（3）



図Ⅲ-3-4-12　第 4 遺物集中区・分析グリッド出土土器（4）



図Ⅲ-3-4-13　第４遺物集中区・分析グリッド出土土器（5）

鉢 14 点、鉢 12 点、浅鉢・皿 2 点、壺 6 点、8 群の深鉢 10 点、鉢 22 点、浅鉢・皿 7 点の計 81 点出土した。そのうち図化したのは 2 点である。40 は 8 群の深鉢であり、体部上半に粘土で区切られた結節沈線と凸字工字文が巡る。41 は 8 群の壺であり、体部には連繋入組文が展開する。

・Ⅱｄ層　8 群の浅鉢・皿 1 点が出土した。

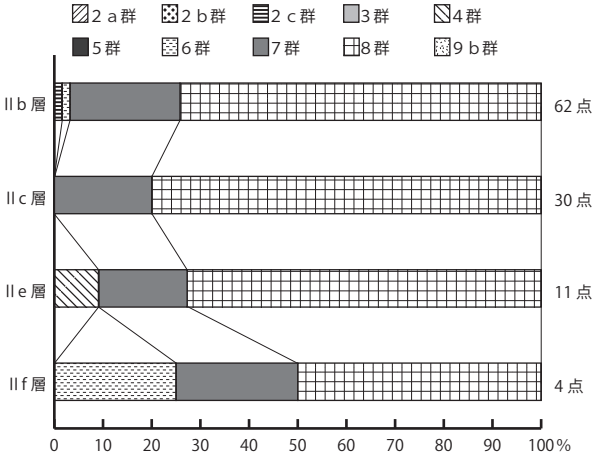
・Ⅱｃ層　4 群の浅鉢・皿 1 点、7 群の深鉢 15 点、鉢 3 点、壺 1 点、8 群の深鉢 10 点、鉢 14 点、浅鉢・皿 11 点、壺 6 点、3 ～ 8 群の深鉢 1 点、鉢 1 点の計 63 点出土した。そのうち図化したのは 6 点である。42 は 8 群の深鉢であり、体部上半は粘土粒で区切られた結節沈線と工字文が施される。43・44 は 8 群の鉢であり、43 は体部上半に粘土粒で区切られた結節沈線が巡る。44 は口唇直下に刻みが連続し、口頸部に B 突起を有する。45 は 8 群の浅鉢であり、口唇部に間が凹む B 突起を有し、口唇直下および体部上半に列点文が巡る。46 は 7 群、47 は 8 群の壺であり、46 は体部に連繋入組文が展開する。47 は無文である。

・Ⅱｂ層　3 ～ 6 群の深鉢 1 点、7 群の深鉢 6 点、鉢 5 点、8 群の深鉢 3 点、鉢 5 点、浅鉢・皿 3 点、壺 1 点、3 ～ 8 群の浅鉢・皿 1 点、壺 1 点の計 26 点出土した。そのうち図化したのは 4 点である。48 は 8 群の深鉢であり、口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。49 は 8 群の台付鉢であり、口唇部に鋭角の二山状の突起を有し、体部上半は間に粘土粒の結束をもつ平行沈線が巡る。台部は弧状の透かしが施される。50・51 は 8 群の鉢であり、体部に粘土粒で区切られた結節沈線と工字文が巡る。

⑧グリッド X=88,Y=64（図Ⅲ -3-4-14・18 ～ 20）

・Ⅱｆ層　6 群の鉢 1 点、7 群の深鉢 1 点、8 群の鉢 2 点の計 4 点出土した。

・Ⅱｅ層　4 群の浅鉢・皿 1 点、7 群の鉢 2 点、8 群の深鉢 5 点、鉢 2 点、浅鉢・皿 1 点、3 ～ 8 群の深鉢 1 点、壺 1 点の計 13 点出土した。そのうち図化したのは 1 点である。52 は 8 群の台付鉢であり、体部に粘土粒で区切られた結節沈線と凸字工字文が巡る。



図Ⅲ-3-4-14　第 4 遺物集中区　X=88, Y=64
各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱｃ層　3 ～ 6 群の深鉢 5 点、7 群の深鉢 5 点、鉢 1 点、8 群の深鉢 12 点、鉢 9 点、浅鉢・皿 1 点、壺 2 点、3 ～ 8 群の深鉢 2 点、壺 1 点の計 38 点出土した。そのうち図化したのは 7 点である。53・54 は 8 群の深鉢であり、53 は体部上半に粘土粒で区切られた結節沈線と工字文が施される。54 は口縁部に 3 条の横位沈線が巡る。55 ～ 57 は 8 群の鉢であり、55・56 は体部に流水状工字文が巡る。57 は無文である。58 は 8 群の台付浅鉢であり、内・外面にベンガラが塗布される。口唇部は間が凹む B 突起を有し、体部上半および台部は流水状工字文が巡る。59 は 8 群の台付鉢であり、口唇部は頂部が凹む突起が 4 単位配置され、間に小ぶりの突起をもつ沈線が巡る。体部上半には粘土粒で区切られた結節沈線と工字文が巡る。台部には横位沈線が巡る。

・Ⅱｂ層　2 ｃ群の鉢 1 点、6 群の深鉢 1 点、7 群の深鉢 14 点、8 群の深鉢 18 点、鉢 12 点、浅鉢・皿 12 点、壺 4 点、3 ～ 8 群の深鉢 3 点、浅鉢・皿 1 点、壺 1 点の計 67 点出土した。そのうち図化したのは 6 点である。60・61・65 は 8 群の深鉢である。60・61 は口縁部に 3 条の横位沈線が

巡り、体部には縦位の条痕文が施される。65 は粗製深鉢である。62 は 8 群の鉢であり、体部上半に粘土粒で区切られた結節沈線が巡る。63 は、8 群の台付鉢形土器であり、外部にベンガラが塗布される。口唇部に中間が凹む突起を有し、体部は間に粘土粒で区切られた結節沈線と流水状工字文が巡る。64 は 8 群の壺であり、口縁部および体部に流水状工字文が巡る。

⑨グリッドＸ＝88，Ｙ＝66（図Ⅲ-3-4-15）

・Ⅱｃ層　3～6 群の深鉢 2 点､7 群の深鉢 3 点、8 群の深鉢 1 点、鉢 2 点、浅鉢・皿 2 点の計 10 点出土した。

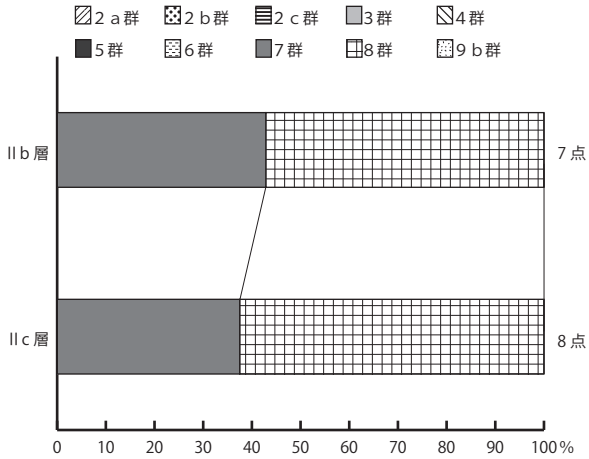
・Ⅱｂ層　7 群の深鉢 2 点、鉢 1 点、8 群の深鉢 1 点、鉢 3 点、壺 1 点の計 8 点出土した。

⑪グリッドＸ＝90，Ｙ＝58（図Ⅲ-3-4-16・21・22）

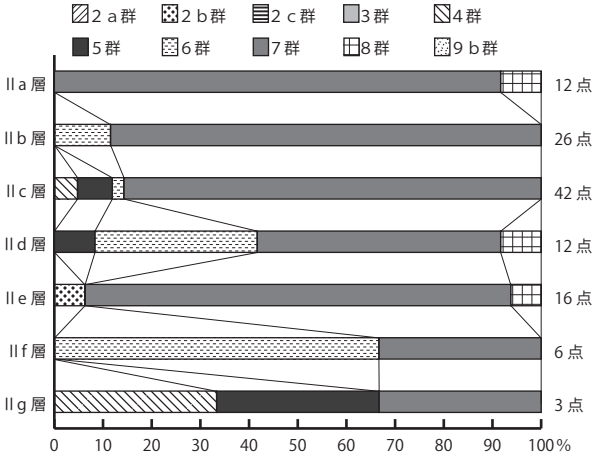
・Ⅱｇ層　4 群の深鉢 1 点、5 群の鉢 1 点、7 群の鉢 1 点の計 3 点出土した。

・Ⅱｆ層　3～6 群の深鉢 1 点、鉢 1 点、6 群の深鉢 1 点、鉢 3 点、7 群の深鉢 1 点、鉢 1 点の計 8 点出土した。そのうち図化したのは 1 点である。66 は 3～8 群の台付鉢であり、下端に 2 条の横位沈線が巡る。

・Ⅱｅ層　2b 群の深鉢 1 点、3～6 群の深鉢 1 点、7 群の深鉢 12 点、鉢 1 点、浅鉢・皿 1 点、8 群の鉢 1 点、3～8 群の深鉢 2 点、鉢 1 点、壺 1 点の計 21 点出土した。そのうち図化したのは 3 点である。67 は 2b 群の深鉢であり、口唇直下に貼瘤が連続し、その下に帯状文が施される。68 は 8 群の鉢であり、口頸部に眼鏡状隆帯、体部には工字文が施される。69 は 7 群の鉢であり、口唇部に中間が凹み外面に三叉状の彫去が施された突起を有し、口縁部に列点文と横位沈線が施される。



図Ⅲ-3-4-15　第４遺物集中区　Ｘ=88,Ｙ=66
各群の層位別出土割合グラフ

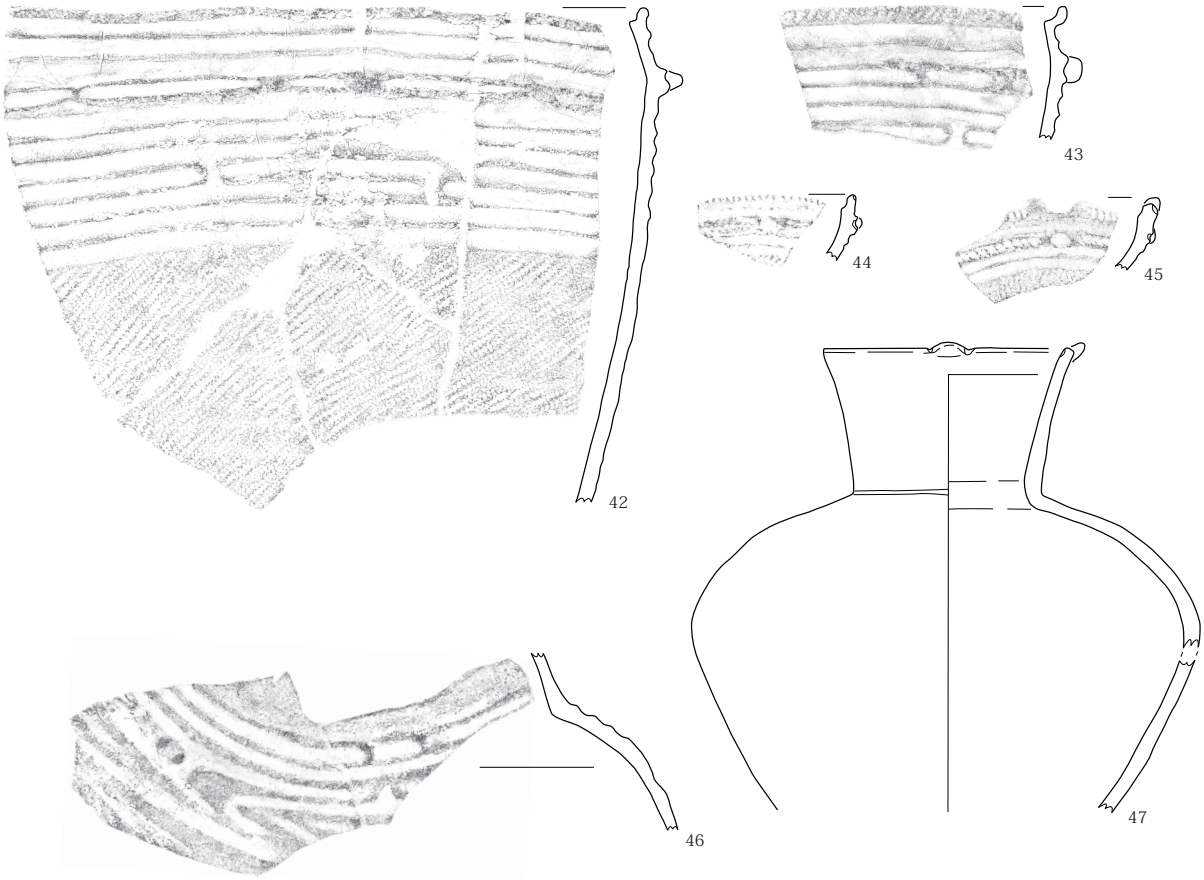


図Ⅲ-3-4-16　第４遺物集中区　Ｘ=90,Ｙ=58
各群の層位別出土割合グラフ

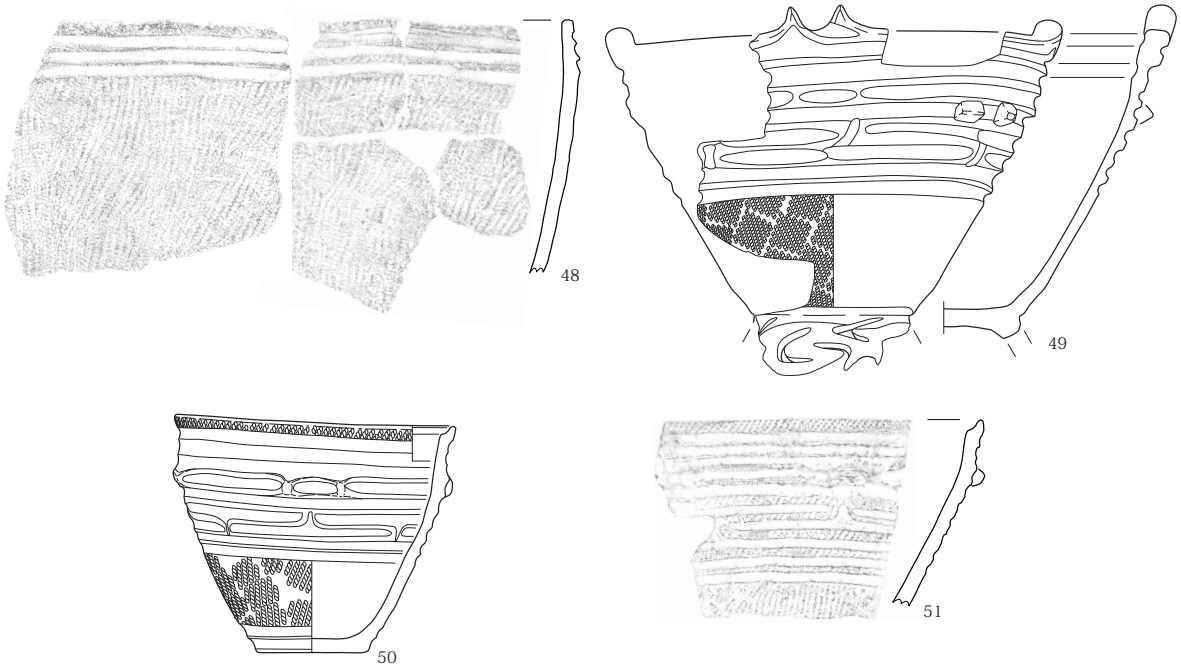
・Ⅱｄ層　5 群の鉢 1 点、6 群の鉢 4 点、7 群の深鉢 3 点、鉢 3 点、8 群の鉢 1 点、壺 2 点の計 14 点出土した。そのうち図化したのは 4 点である。70 は 7 群の鉢であり、口頸部に列点文および横位沈線が巡る。71・72 は 8 群の鉢であり、体部上半に眼鏡状隆帯と流水状工字文が施される。73 は 8 群の壺であり、肩部に鋸歯状の凸字隆帯が巡り、隆帯上には刻目が入り交点に B 突起を有する。

・Ⅱｃ層　4 群の深鉢 1 点､注口土器 1 点､5 群の深鉢 2 点､鉢 1 点､6 群の鉢 1 点､7 群の深鉢 5 点、鉢 23 点､浅鉢･皿 1 点､壺 7 点､3～8 群の深鉢 4 点､浅鉢･皿 1 点（赤彩資料）の計 47 点出土した。そのうち図化したのは 6 点である。74～76 は 7 群の鉢であり、74 は口唇部に中間を沈線で区画された突起を有する。75・76 は、口頸部に列点文と横位沈線が巡る。77 は 7 群の皿であり、口唇部に突起および列点文が、体部には雲形文が巡る。78 は 7 群の台付鉢であり、口唇直下にノの字状の

X=88,Y=62　Ⅱc 層

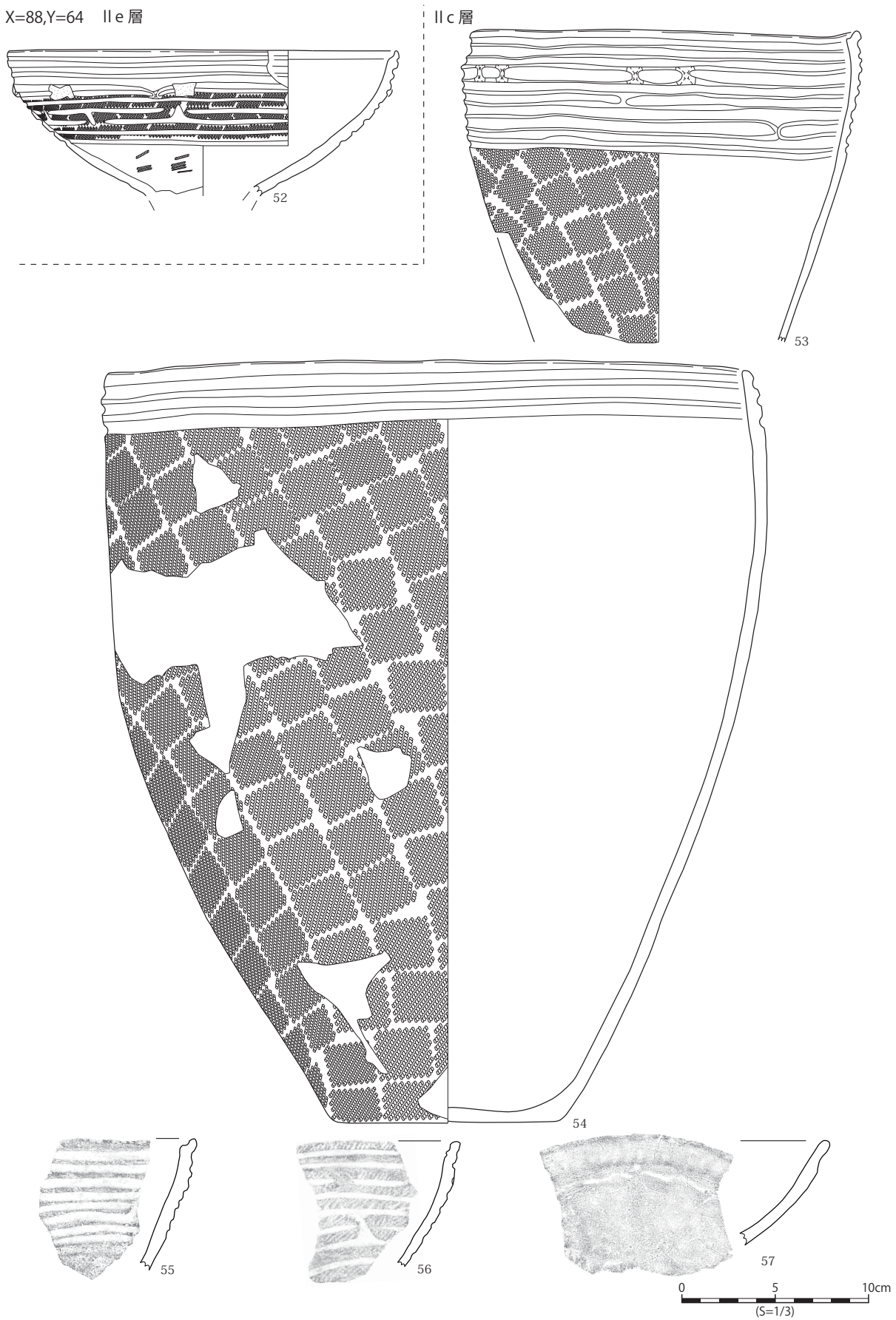


Ⅱb 層

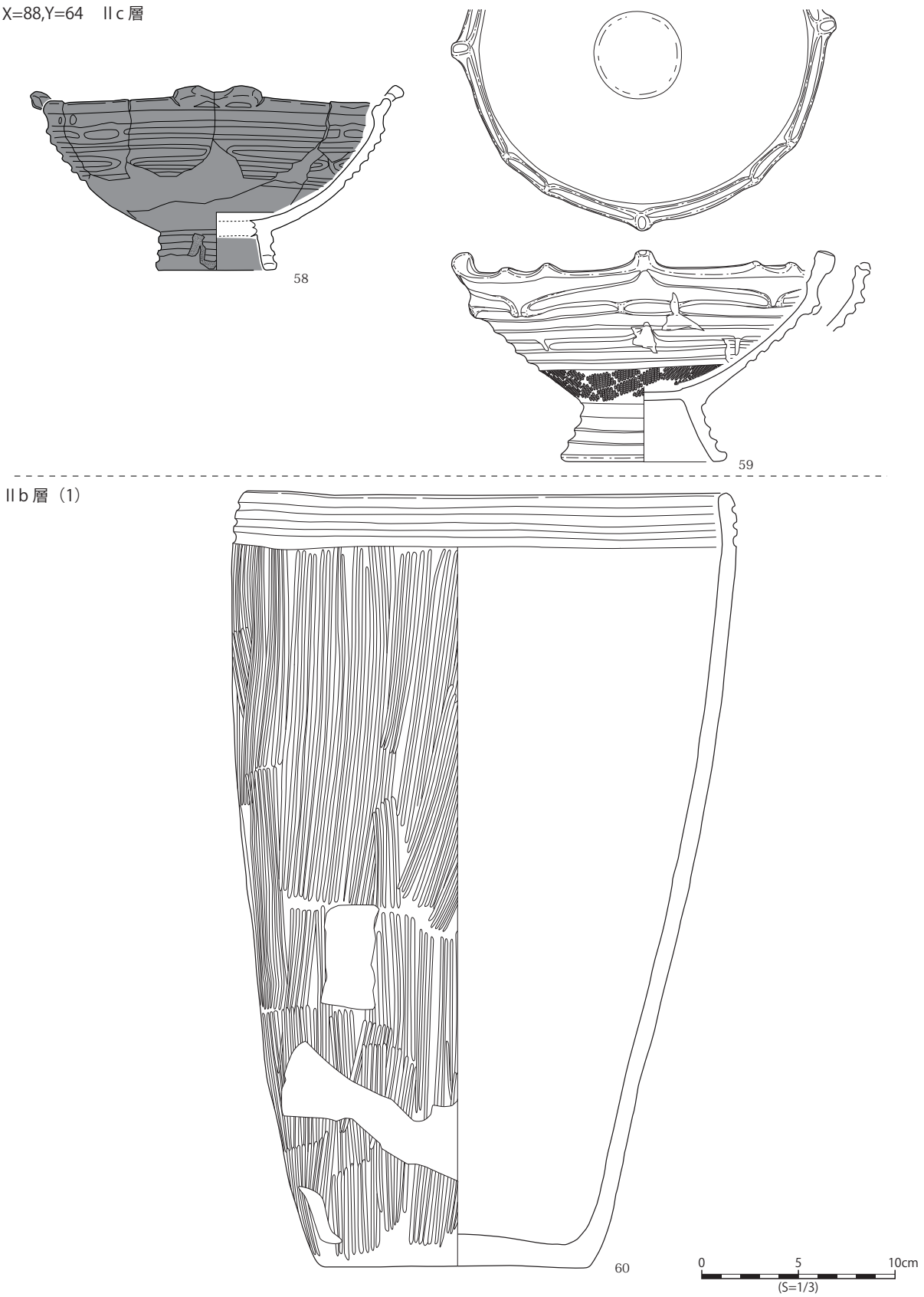


0　5　10cm
(S=1/3)

図Ⅲ-3-4-17　第 4 遺物集中区・分析グリッド出土土器（6）

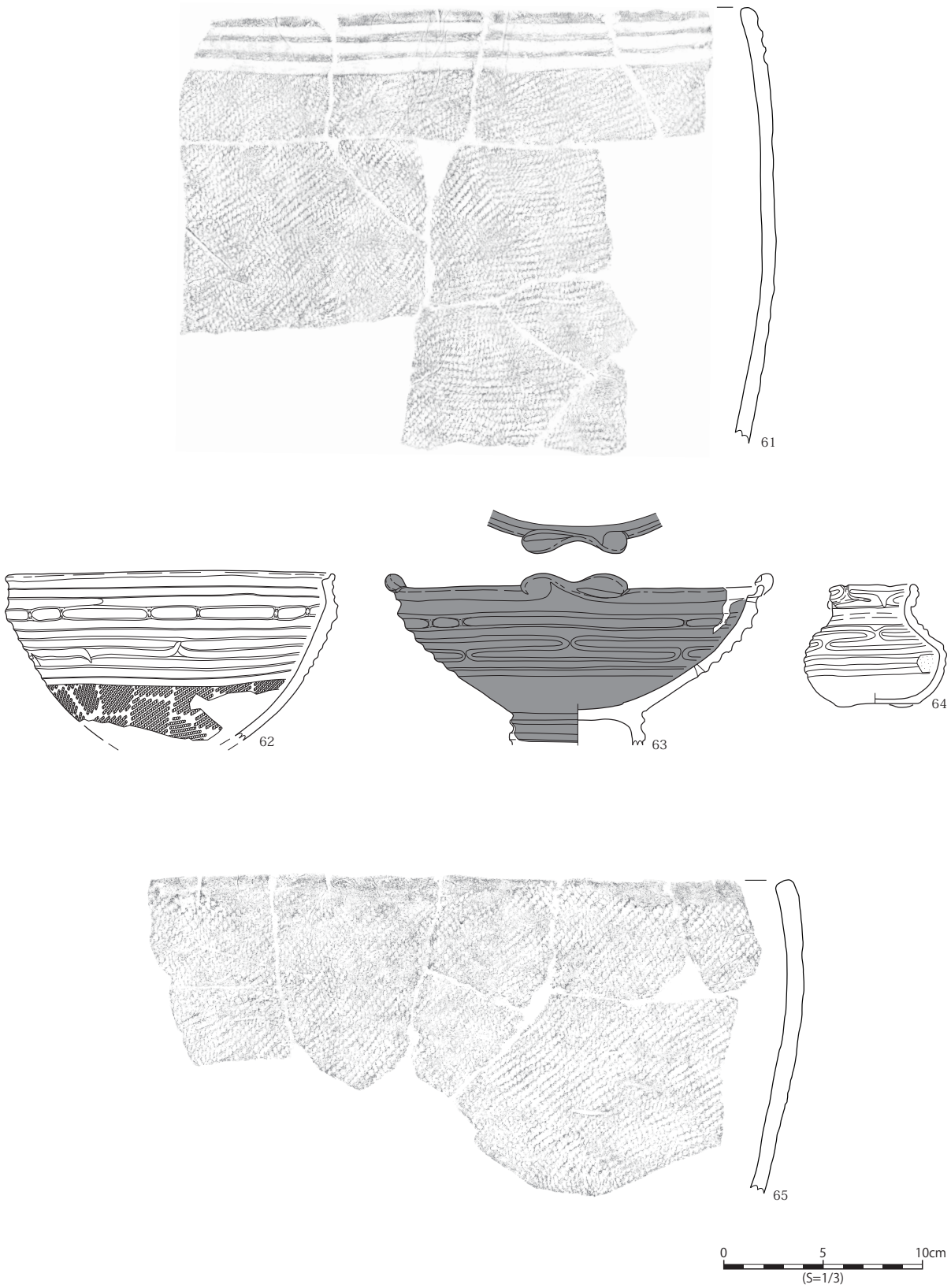


図Ⅲ-3-4-18　第４遺物集中区・分析グリッド出土土器（7）

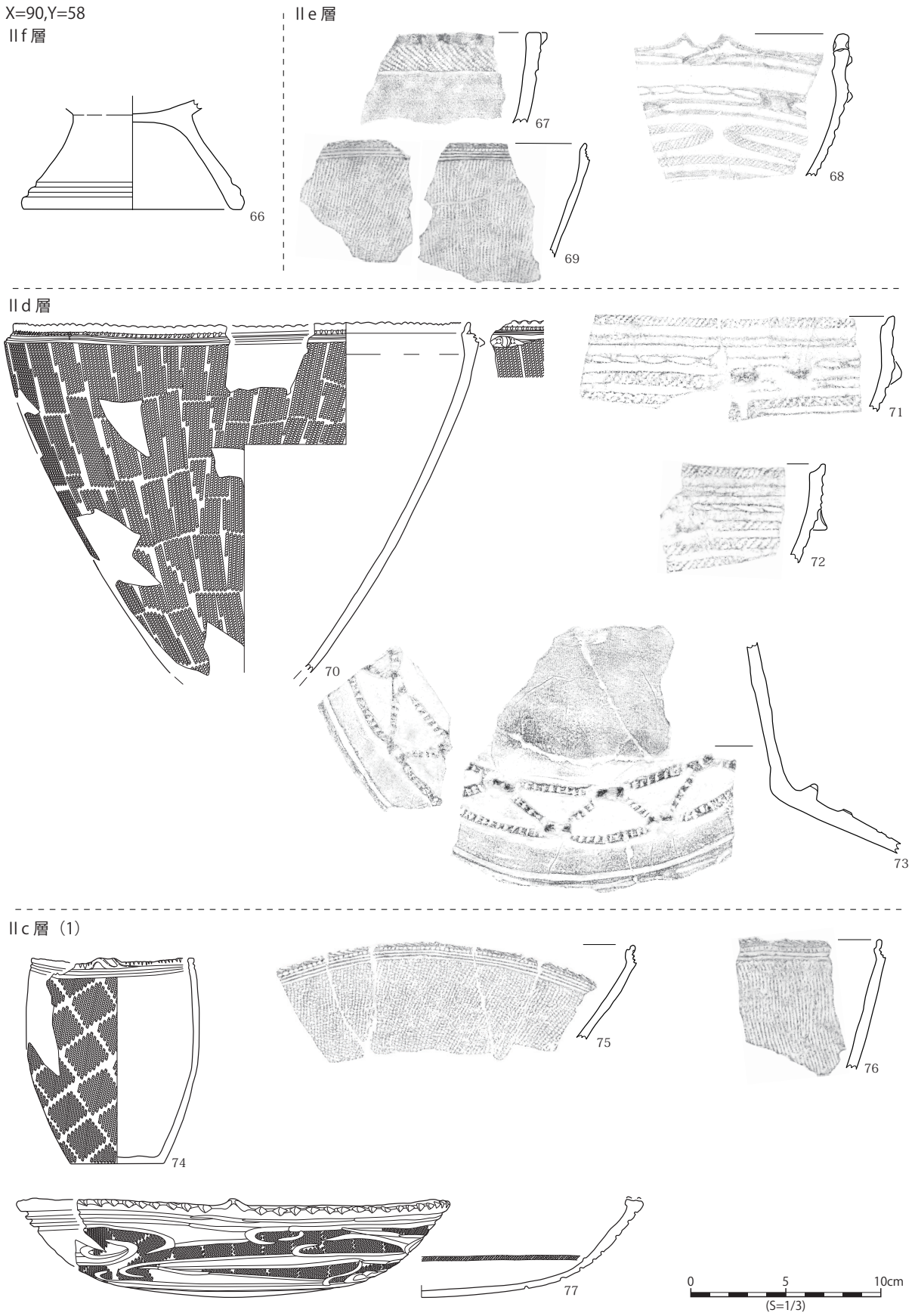


図Ⅲ-3-4-19　第 4 遺物集中区・分析グリッド出土土器（8）

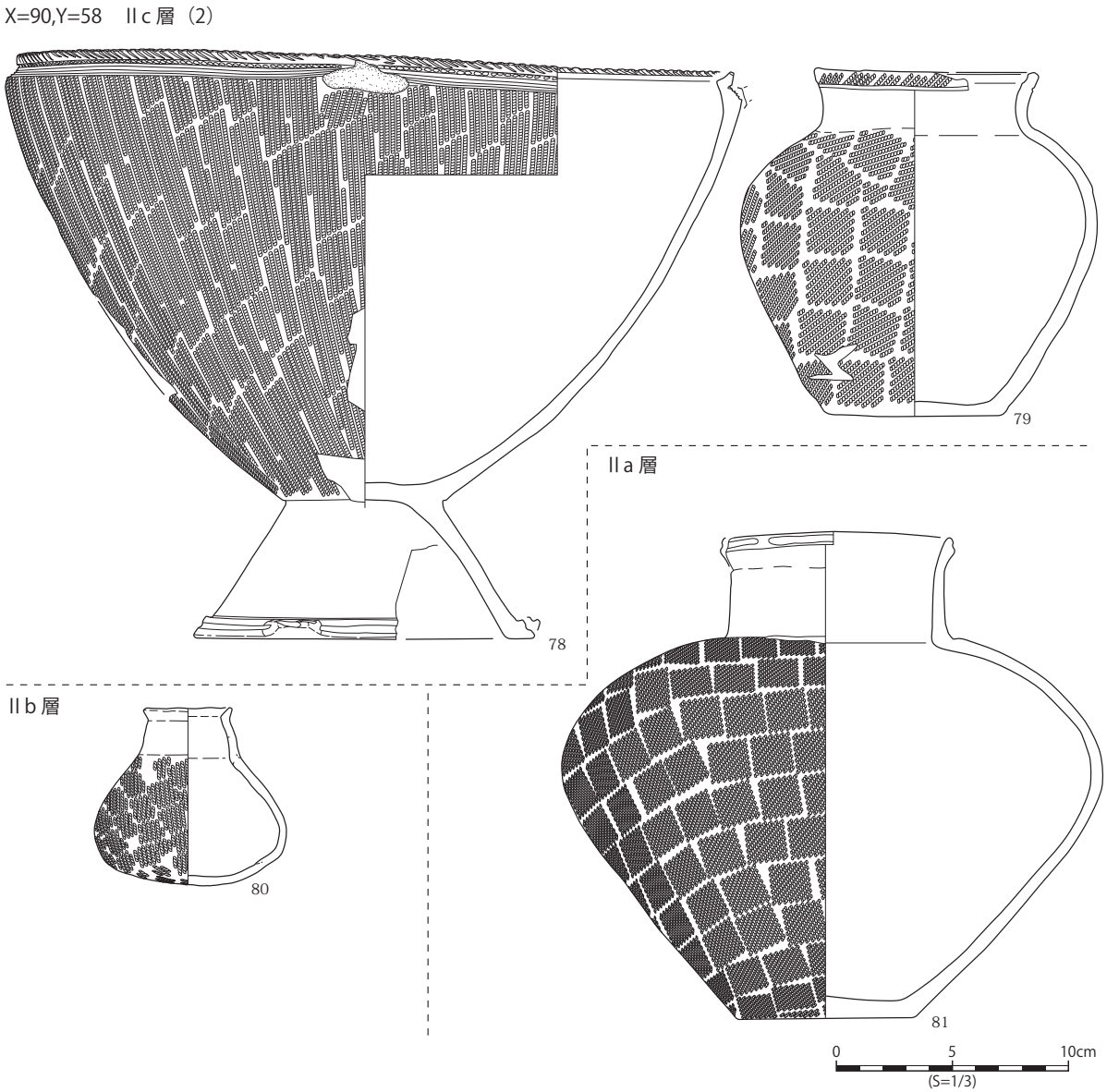
X=88,Y=64　Ⅱb 層（2）



図Ⅲ-3-4-20　第４遺物集中区・分析グリッド出土土器（9）



図Ⅲ-3-4-21　第 4 遺物集中区・分析グリッド出土土器（10）



図Ⅲ-3-4-22　第４遺物集中区・分析グリッド出土土器（11）

沈線が連続し、口頸部は列点文と横位沈線が巡る。台部下端は横位沈線間にＢ突起を有する。79 は７群の粗製壺である。

・Ⅱｂ層　６群の深鉢１点、鉢２点、７群の深鉢５点、鉢４点、浅鉢・皿７点、壺７点、３～８群の深鉢１点、壺１点の計 28 点出土した。そのうち図化したのは１点である。80 は７群の粗製壺である。

・Ⅱａ層　７群の深鉢３点、鉢２点、浅鉢・皿１点、壺５点、８群の浅鉢・皿１点の計 12 点出土した。そのうち図化したのは１点である。81 は７群の壺であり、口縁部に横位沈線が巡る。

⑪グリッドＸ＝90，Ｙ＝60（図Ⅲ-3-4-23・26）

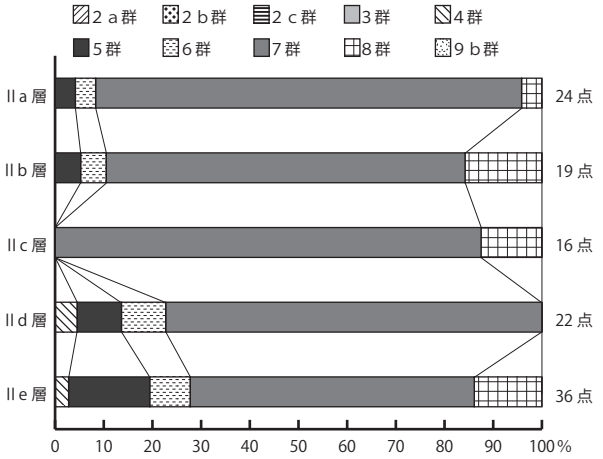
・Ⅱｅ層　４群の鉢１点、５群の深鉢２点、鉢４点、６群の鉢３点、７群の深鉢 14 点、鉢３点、浅鉢・皿１点、壺３点、８群の深鉢１点、浅鉢・皿４点、３～８群の深鉢５点、壺１点の計 42 点出土した。そのうち図化したのは１点である。82 は４群の鉢であり、口唇部に装飾的な突起を有する。

・Ⅱｄ層　４群の深鉢１点、５群の深鉢２点、６群の鉢２点、３～６群の鉢１点、７群の深鉢８点、

鉢６点、浅鉢・皿１点、壺２点、３～８群の壺１点の計 24 点出土した。

・Ⅱｃ層　７群の深鉢８点、鉢４点、壺２点、８群の深鉢１点、浅鉢・皿１点（赤彩資料）の計 16 点出土した。

・Ⅱｂ層　５群の鉢１点、６群の鉢１点、３～６群の深鉢３点、７群の深鉢５点、鉢５点、壺４点、８群の深鉢１点、鉢２点、３～８群の深鉢１点、鉢３点の計 26 点出土した。そのうち図化したのは２点である。83 は８群の鉢であり、口唇部に大型の突起を有し、体部は流水状工字文が巡る。84 は、３～８群の粗製深鉢である。



図Ⅲ-3-4-23　第４遺物集中区　X=90,Y=60
各群の層位別出土割合グラフ

・Ⅱａ層　５群の鉢１点、６群の鉢１点、７群の深鉢 10 点、鉢７点、浅鉢・皿１点、壺３点、８群の浅鉢・皿１点、３～８群の鉢１点の計 25 点出土した。

⑫グリッドX＝90，Y＝62（図Ⅲ-3-4-24・26）

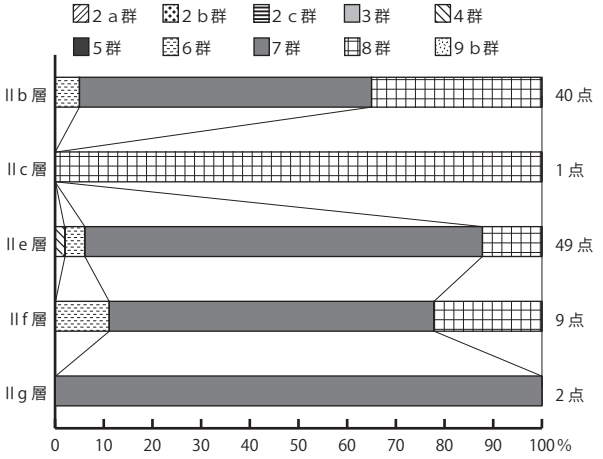
・Ⅱｇ層　７群の鉢２点が出土した。

・Ⅱｆ層　６群の浅鉢・皿１点、７群の深鉢２点、鉢３点、壺１点、８群の鉢１点、浅鉢・皿１点（赤彩資料）、３～８群の深鉢１点の計 10 点出土した。

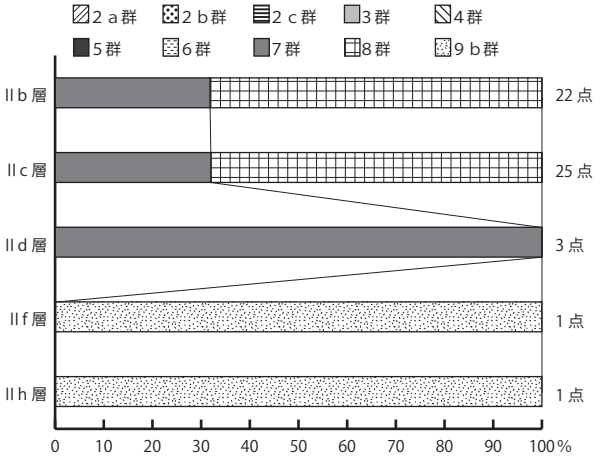
・Ⅱｅ層　４群の深鉢１点、６群の鉢２点、７群の深鉢 23 点、鉢 11 点、浅鉢・皿１点、壺５点、８群の深鉢２点、鉢３点、壺１点の計 49 点出土した。

・Ⅱｃ層　８群の鉢１点（赤彩資料）を図化した。85 は８群の台付鉢であり、外面にベンガラが塗布される。体部上半は粘土粒で区切られた結節沈線が巡り、体部と台部に流水状工字文が巡る。

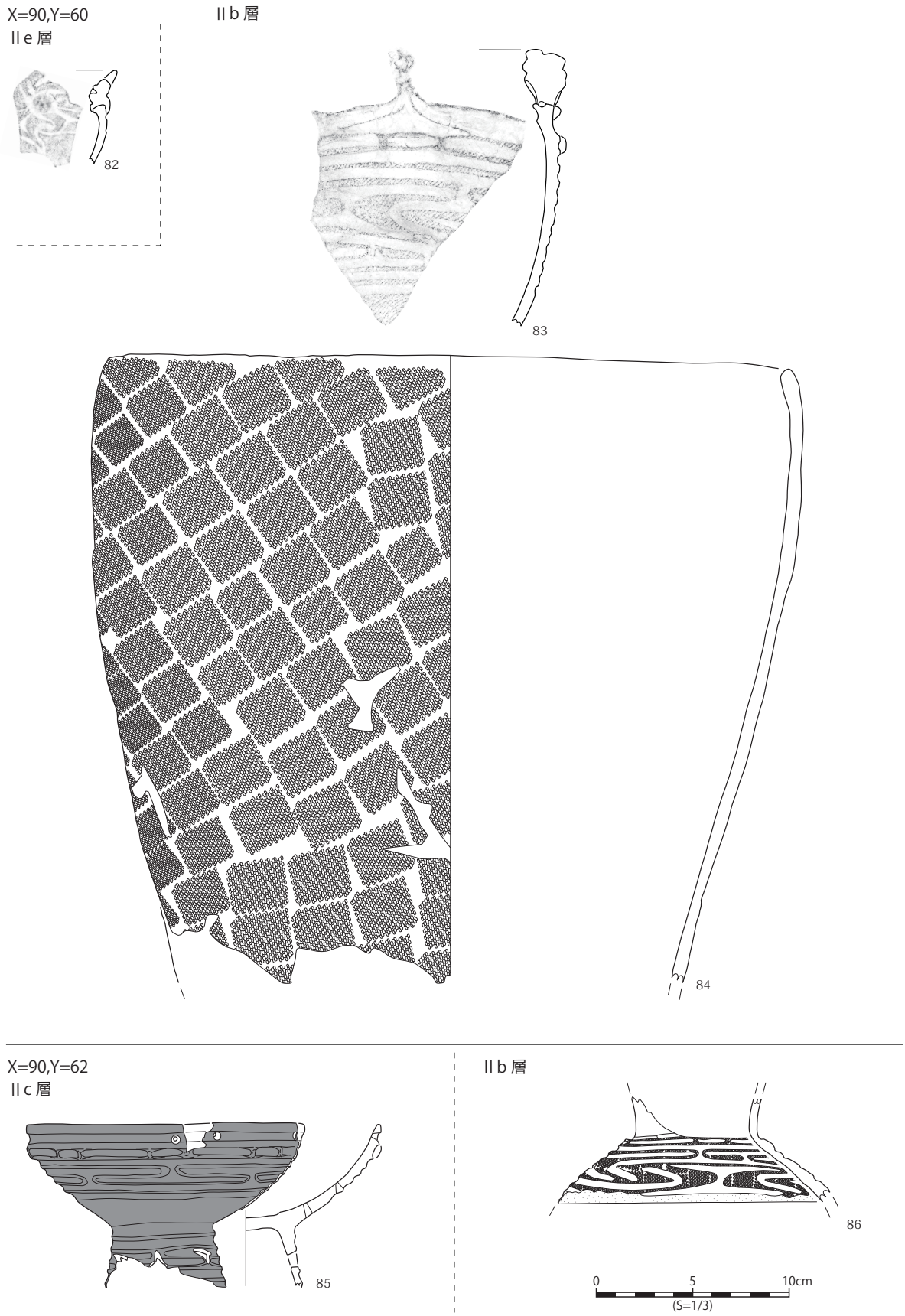
・Ⅱｂ層　６群の鉢１点、浅鉢・皿１点、７群の深鉢 14 点、鉢８点、浅鉢・皿１点、壺１点（赤彩資料）、８群の深鉢７点、浅鉢・皿７点（全点赤彩資料）、３～８群の壺４点の計 44 点出土した。そのうち図化したのは１点である。86 は７群の壺であり、体部には連繋入組文が展開する。



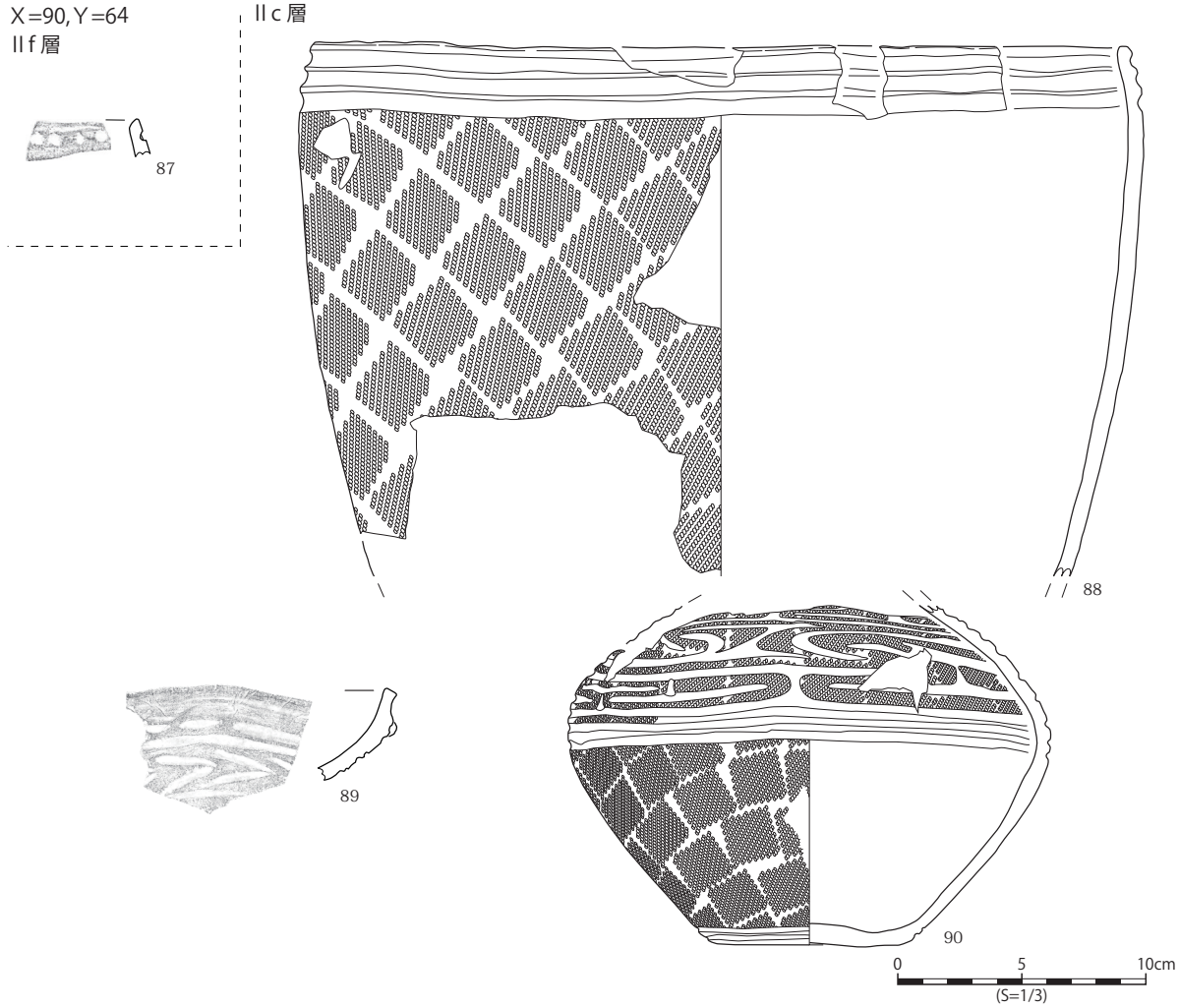
図Ⅲ-3-4-24　第４遺物集中区　X=90,Y62
各群の層位別出土割合グラフ



図Ⅲ-3-4-25　第４遺物集中区　X=90,Y=64
各群の層位別出土割合グラフ



図Ⅲ-3-4-26　第４遺物集中区・分析グリッド出土土器（12）



図Ⅲ-3-4-27　第４遺物集中区・分析グリッド出土土器（13）

⑬グリッド X=90.Y=64（図Ⅲ -3-4-25・27）

・Ⅱｈ層　9b 群の鉢１点が出土した。

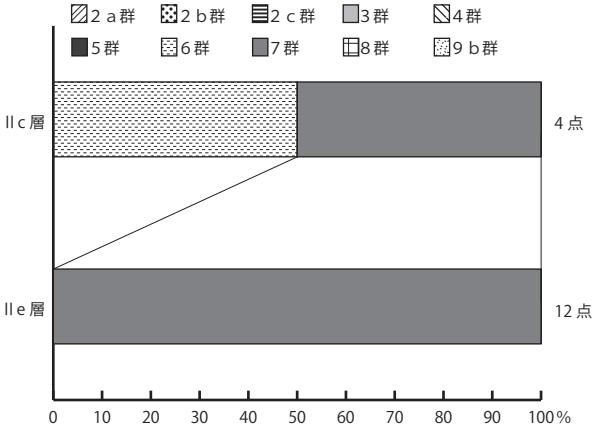
・Ⅱｆ層　9b 群の鉢１点を図化した。87 は 9b 群の鉢であり、口縁部に刺突文が巡る。

・Ⅱｄ層　７群の深鉢３点が出土した。

・Ⅱｃ層　７群の深鉢７点、壺１点、８群の深鉢５点、鉢６点、浅鉢・皿６点、３～８群の深鉢

３点、鉢２点の計 30 点出土した。そのうち図化したのは３点である。88 は８群の深鉢であり、口縁部に横位沈線が巡る。89 は７群の鉢であり、体部に矢羽状沈線が巡る。90 は７群の壺であり、体部上半には連繋入組文が展開する。

・Ⅱｂ層　７群の深鉢５点、鉢２点、８群の深鉢 11 点、浅鉢･皿３点（赤彩資料２点含む）、



図Ⅲ-3-4-28　第４遺物集中区　X=90,Y=66
各群の層位別出土割合グラフ

壺１点、３～８群の深鉢２点の計 24 点出土した。

⑭グリッドＸ＝90，Ｙ＝66（図Ⅲ -3-4-28）

・Ⅱｅ層　７群の深鉢７点、鉢１点、浅鉢・皿１点、壺３点の計 12 点出土した。

・Ⅱｃ層　６群の鉢１点、浅鉢・皿１点、７群の深鉢２点の計４点出土した。

（江戸）

B. 石器・礫（表Ⅲ -3-4-1、図Ⅲ -3-4-29 ～ 35）

25,613 点、240.9kg の石器・礫を検出した。単位面積当たりの数量は最も多い。剥片・砕片 22,437 点、搬入礫 2,449 点が多くを占める。剥片石器は尖頭器、石鏃などの定型石器 134 点、スクレイパーなどの不定形石器 314 点である。また、石皿・台石類などの礫石器は 203 点であり、礫石器のほうが定型の剥片石器よりも多い。

定型の剥片石器の内訳は尖頭器 12 点、石鏃 91 点、石錐 19 点、石匙６点で、石鏃が 67％を占める。不定形の剥片石器はスクレイパー 100 点、微細剥離のある剥片 46 点、メノウ製を主とする小型石錐 39 点、小型スクレイパー 129 点であり、微細剥離のある剥片が多い集中区が多いのに対し、スクレイパー、小型石錐、小型スクレイパーが多いという特徴がある。礫石器は石皿・台石類 18 点、磨石・敲石類 183 点、砥石２点と磨石・敲石類が多い。不定形の剥片石器を除いた定型石器と礫石器にしめる割合をみると磨石・敲石類が約 54% とかなり高い。

石器製作に関わる石核・剥片・砕片は、22,506 点で点数全体の 89% を占め、かなり高い。

異形礫は２点のみである。搬入礫は 2,449 点で点数全体の 10% 程度にとどまる。

層位別にみると、Ⅱａ層～Ⅱｇ層の７つの層うち、Ⅱａ層～Ⅱｃ層の数が多い。数にまとまりのあるⅡａ層からⅡｅ層の各器種の割合をみると、Ⅱｂ・Ⅱｃ層で小型石錐、小型スクレイパー、剥片、小型柱状剥片が高い一方、Ⅱｄ・Ⅱｅ層で石鏃、磨石・敲石類が高い。

表Ⅲ -3-4-1　第４遺物集中区出土石器・礫の層位別・種別出土数表

	Ⅱａ	Ⅱｂ	Ⅱｃ	Ⅱｄ	Ⅱｅ	Ⅱｆ	Ⅱｇ	その他	計
尖頭器	3	5	2	1	1				12
石鏃	24	28	16	8	12		1	2	91
石錐	5	6	5	1	2				19
小型石錐	5	14	15	3	2				39
石匙		3	2	1					6
石篦	3	2	2						7
スクレイパー	7	42	35		14			2	100
微細剥離のある剥片	14	25	3		4				46
小型スクレイパー	16	67	39	2	4		1		129
磨石・敲石類	41	36	58	19	21		3	5	183
石皿・台石類	2	2	8	1	1			4	18
砥石		1			1				2
石錘									0
磨製石斧		2			2				4
その他（擦切・扁平石器）									0
石核	12	34	17	3	3				69
メノウ石核									0
剥片	411	547	394	187	82	2	13	59	1,695
小型柱状剥片	2	71	16	3	3				95
砕片	5,521	5,732	4,953	2,402	1,454	43	114	428	20,647
異形礫			2						2
搬入礫	748	808	404	214	166	11	20	78	2,449
計	6,814	7,425	5,971	2,845	1,772	56	152	578	25,613

1 ～ 7 は尖頭器である。12 点出土した。分類別の内訳は木葉形 8 点（1 ～ 3）、菱形 1 点（7）、山形 1 点（6）、半月形 2 点（4・5）である。

8 ～ 16 は石鏃である。91 点出土した。内訳は凸有 b 類 56 点（62％）、凸有 a 類・凸有 f 類各 6 点、凸有 c 類 4 点、凸有 d 類・凹基無茎鏃・円基鏃・平基有茎鏃・未成品各 1 点、分類不明 14 点がある。石材は 91 点中頁岩 83 点、メノウ 7 点、黒曜石 1 点である。アスファルト付着資料は 10 点ある。

凸有 a 類は 1 点図示した（9）。凸有 b 類は 3 点図示した（10 ～ 12）。10 の石材はメノウである。11 の基部にアスファルトが付着する。凸有 c 類は 1 点図示した（15）。凸有 d 類は 1 点図示した（16）。頁岩製で、縦長の楕円形である。凸有 f 類は 2 点図示した（13・14）。13 の右側縁が鋸歯縁である。14 の両面基部にアスファルトが付着する。凹基無茎鏃は 1 点ある（8）。刃縁にも抉りがある異形鏃である。表面左側と裏面基部の抉り部分にアスファルトが付着する。円基鏃はメノウで、平基有茎鏃は頁岩である。

17 ～ 34 はメノウ製の小型石錐である。18 ～ 20 は粗いつまみ部があるが、その他は棒状で先端が磨耗する。

35 ～ 37 は石匙で 35 は斜型、36･37 は縦型である。いずれも刃部の平面形は外湾する。38 ～ 41 は石箆である。41 は数少ないメノウ製である。台形が多い。42 ～ 45 はスクレイパーである。42･43・45 は縦型剥片の片側縁に刃部をつくる。44 は横型剥片の下辺に刃部を作り出す。46 は片側縁に微細剥離のある縦型剥片である。

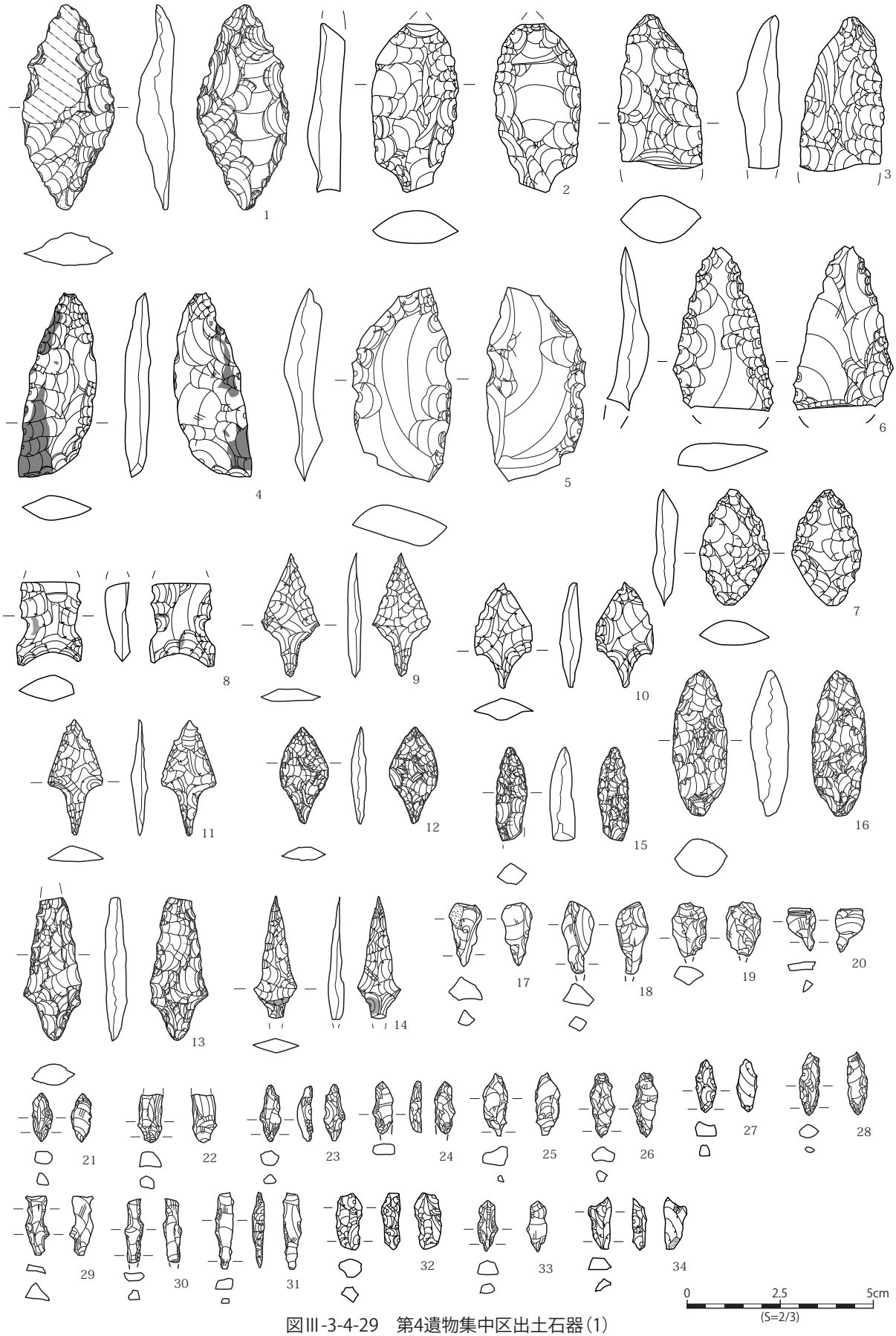
47 ～ 54 はメノウ製の小型スクレイパーである。49･54 が三角形のほかは、短冊形の縦型剥片の両側縁に微細剥離が観察される。

55 ～ 62 は石核である。うち 60･61 はクサビ形石核である。60 は黒曜石、61 はメノウである。55・58 は打面が先の剥離作業の打撃方向に対して、ほぼ直交する位置にある。56･57・62 は打面を 1 箇所に設定し、ほぼ垂直に近い打角で、同一方向の打撃を加えて剥片を連続的に剥離する。

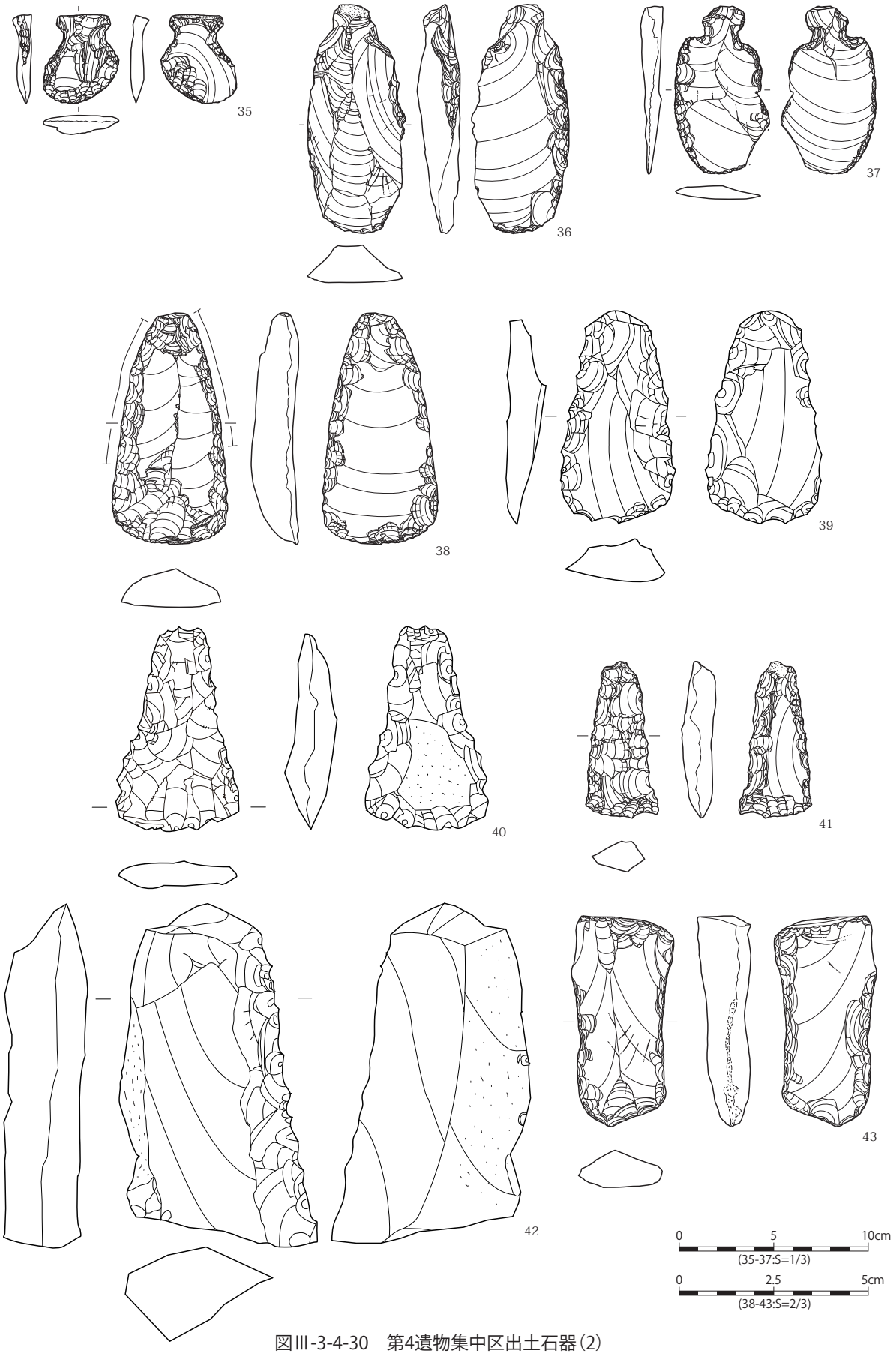
63 ～ 66 は磨製石斧である。全て定角式で側面に擦切痕を残す。67 ～ 71･73 は磨石･敲石類である。67 は側面に裏面に磨耗面、敲打痕と剥落が観察される。68 は磨類で表裏面に長軸に対し横方向の線状痕が確認できる。69 は棒状の敲石である。70・71･73 は表裏面に線状の凹痕、側面に線状の敲打痕が確認でき、両極打撃に用いられた敲石と推定される。

72 は台石で中央に線状の敲打痕が集中する。これは 70・71･73 の敲石と同じ使用痕であり、両者が上下セットになるとみられる。74 は砥石である。75 は大型の台石である。表面には 5 × 8cm の磨耗痕の集中部が確認できる。裏面には凹痕が複数ある。

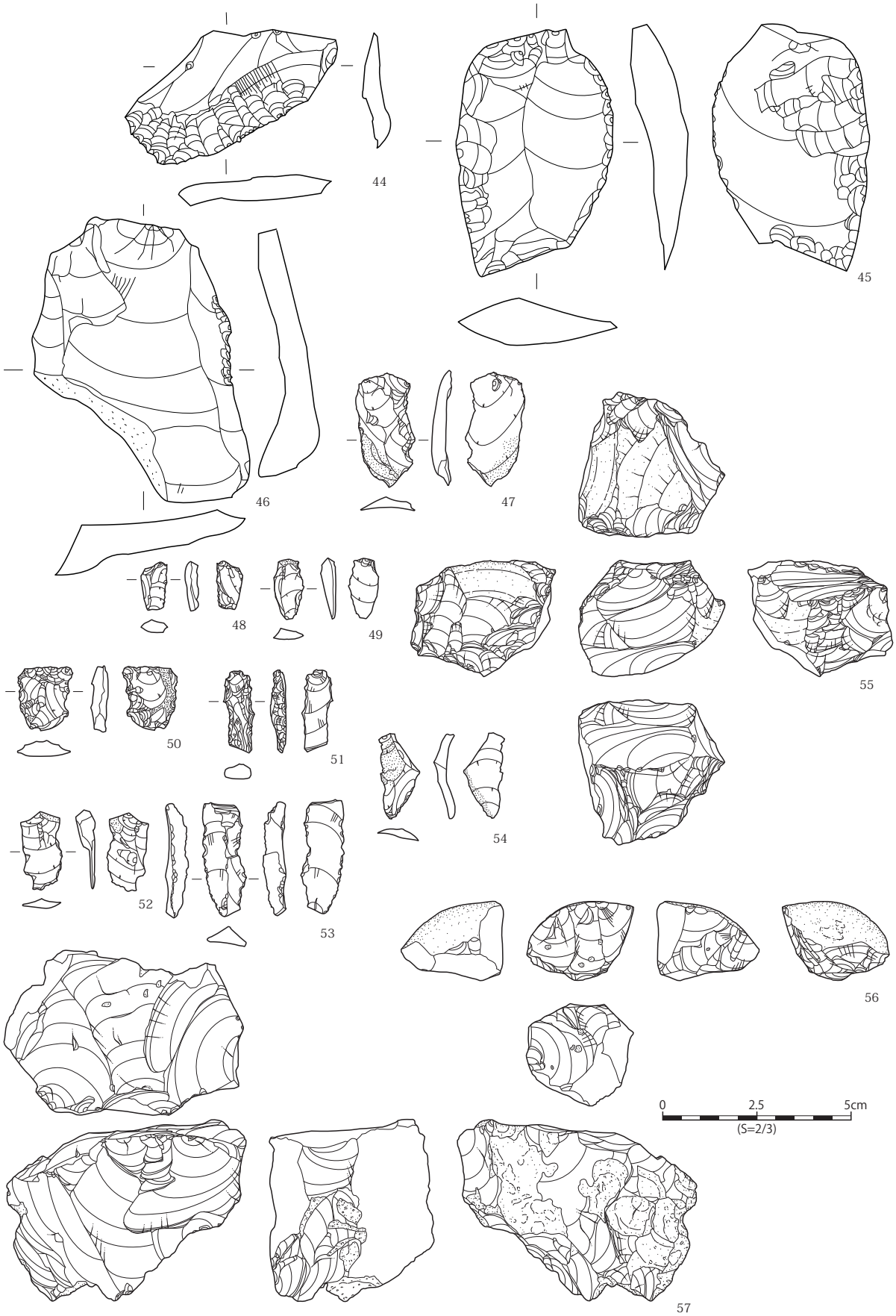
（上條信彦）



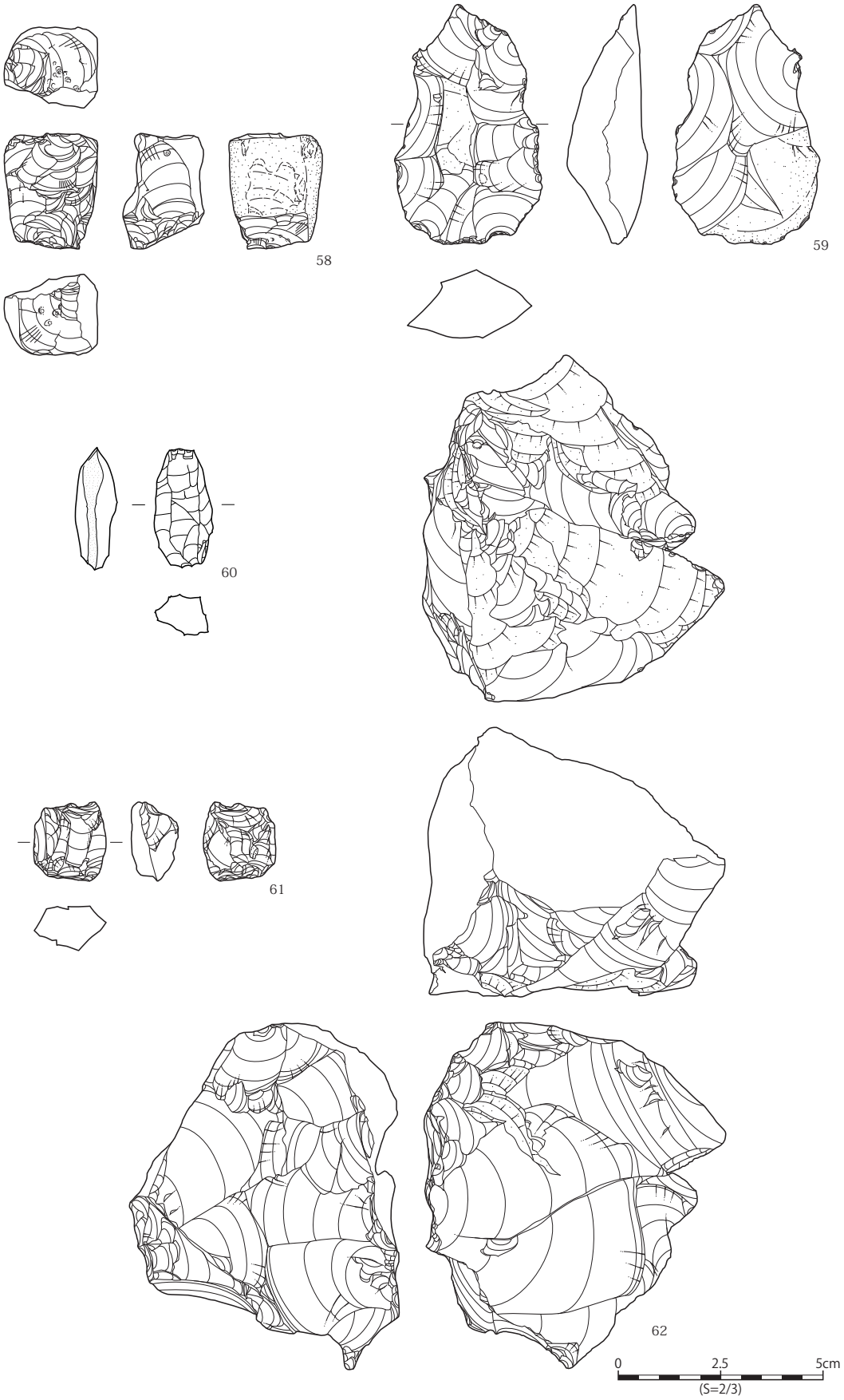
図Ⅲ-3-4-29　第4遺物集中区出土石器(1)



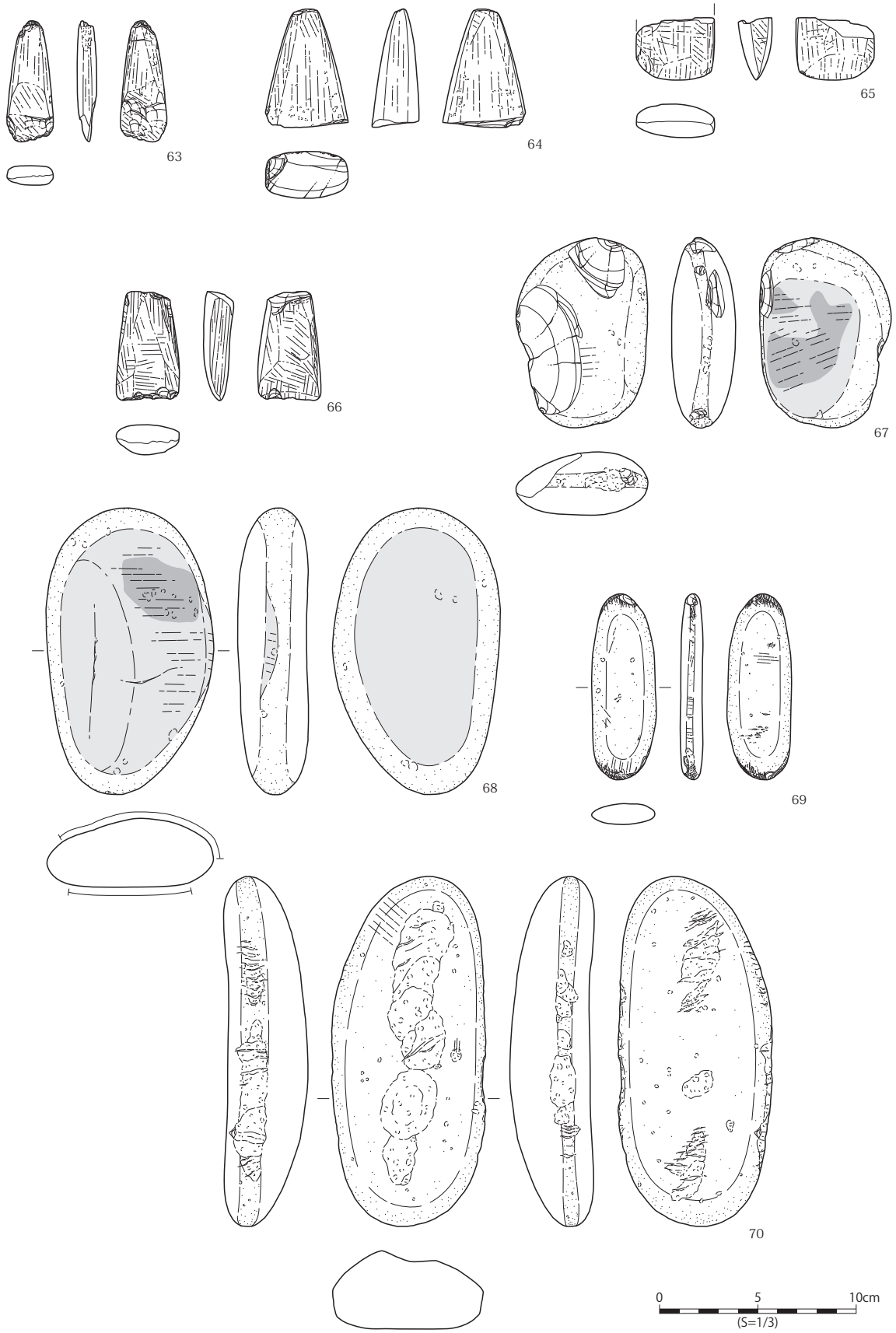
図Ⅲ-3-4-30　第4遺物集中区出土石器(2)



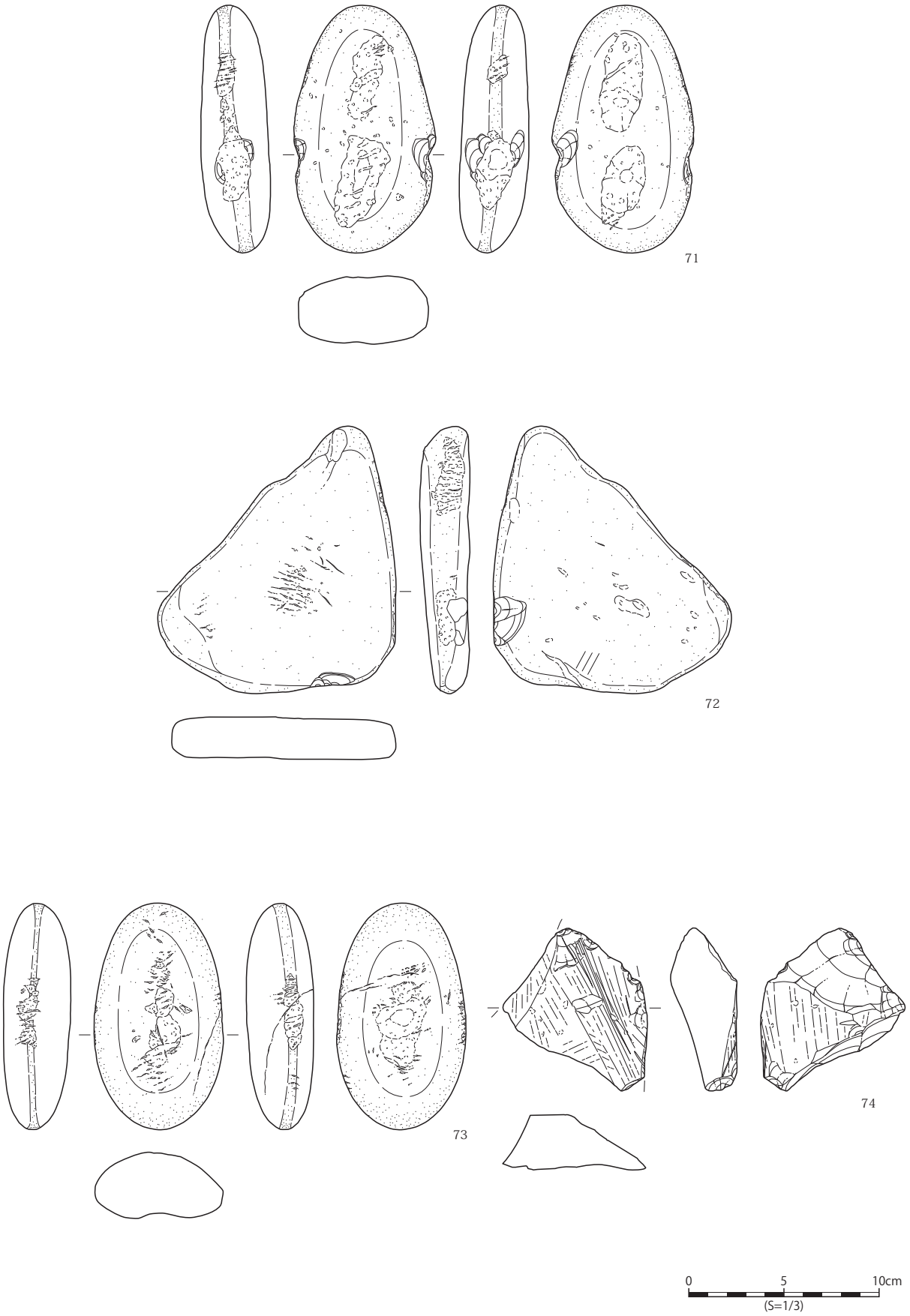
図Ⅲ-3-4-31　第4遺物集中区出土石器(3)



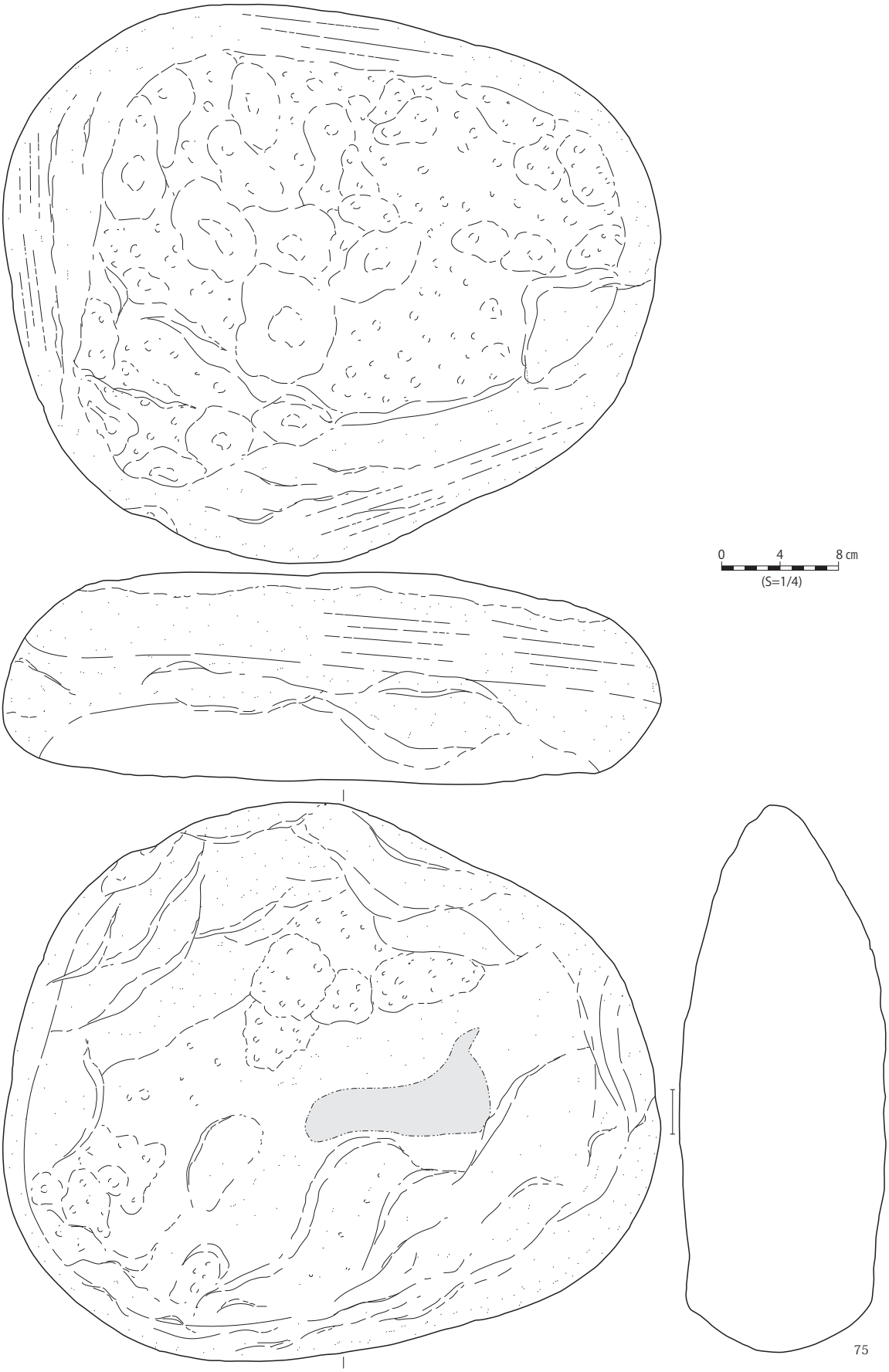
図Ⅲ-3-4-32　第4遺物集中区出土石器(4)



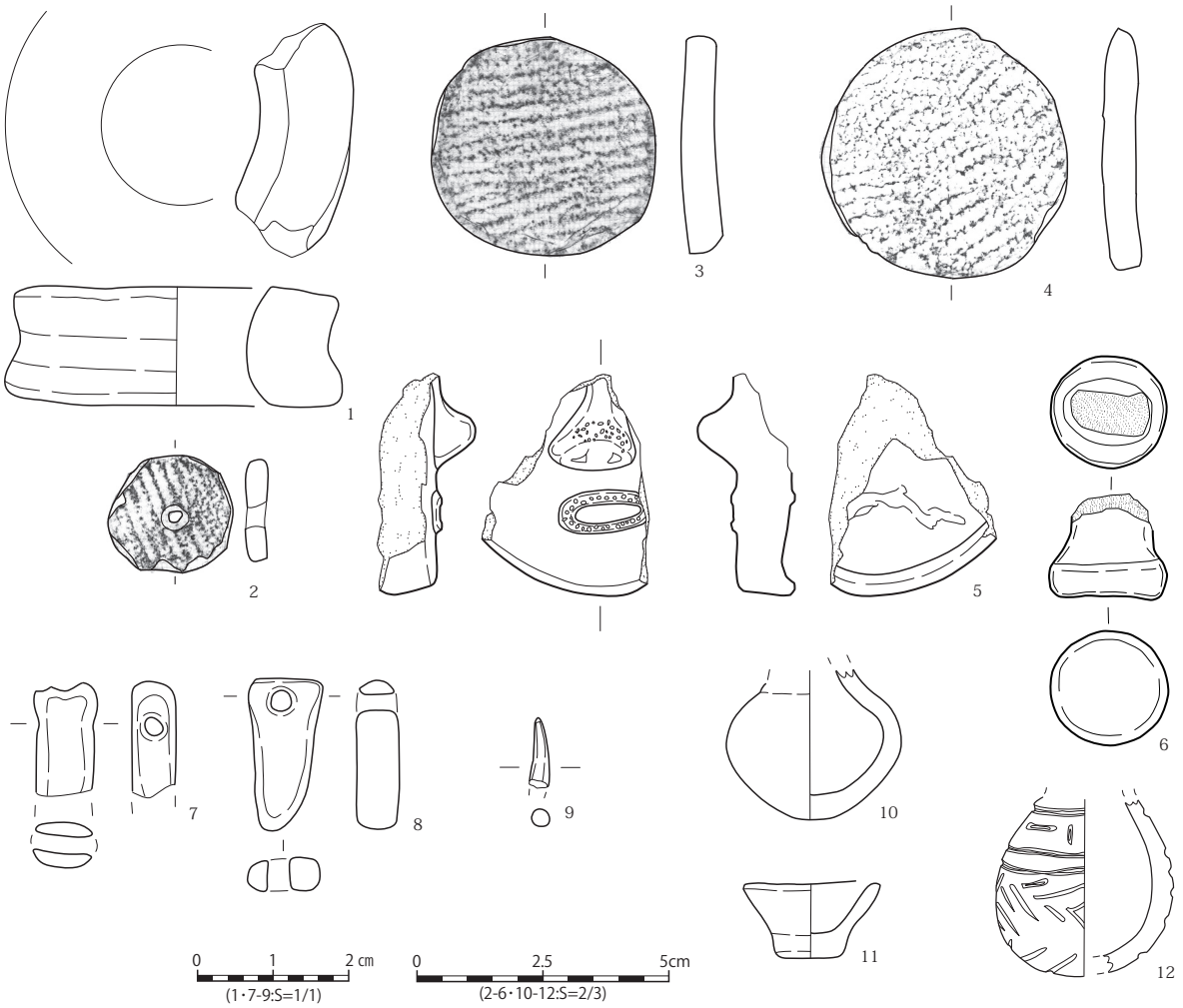
図Ⅲ-3-4-33　第4遺物集中区出土石器(5)



図Ⅲ-3-4-34　第4遺物集中区出土石器(6)



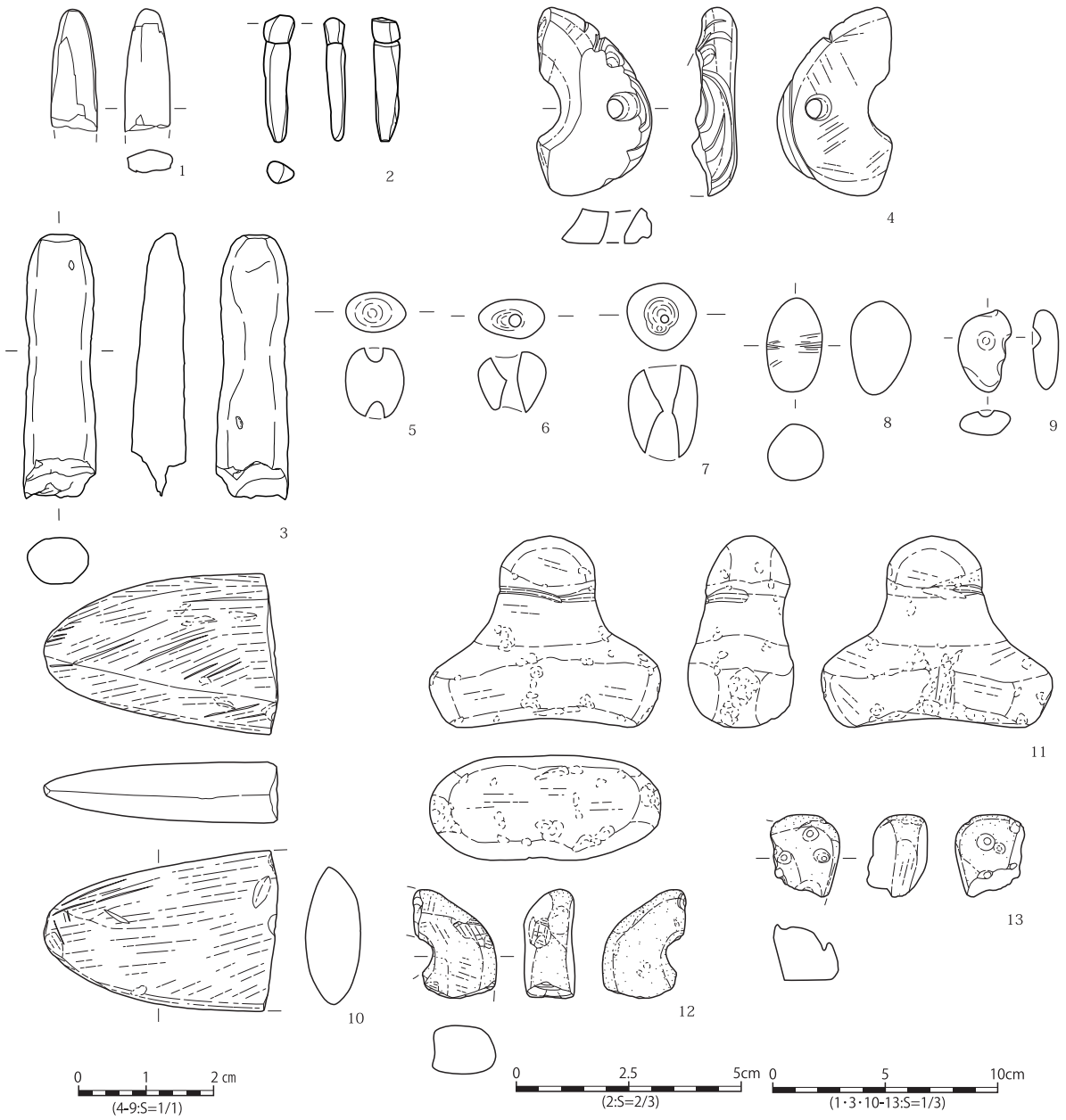
図Ⅲ-3-4-35　第4遺物集中区出土石器(7)



図Ⅲ-3-4-36　第4遺物集中区出土土製品

C. 土製品・土製玉類（図Ⅲ -3-4-36）

土製品・土製玉類は土製耳飾、土製垂飾、円板状土製品、土面、ミニチュア土器、棒状土製品、不明土製品の 7 種がある。1 は土製耳飾である。環状で復元径 5㎝ほどになる大型品である。7・8 は土製垂飾で、いずれも棒状を呈す。7 は側面に穿孔される。2 ～ 4 は円板状土製品である。すべて土器片を利用しており、2 には穿孔がある。5 は土面で鼻と口の部分が残る。双方とも刺突文があり、晩期後半の特徴をもつ。6 は不明土製品で破断面にアスファルトが付着する。土偶の脚部の可能性がある。9 は角形の棒状土製品である。10 ～ 12 はミニチュア土器である。10・12 は壺形、11 は鉢形である。10 の頸部には大洞 C2 式に特徴的な段がある。12 は 3 本の沈線が巡り、体部には「く」の字の連続文が施される。



図Ⅲ-3-4-37　第4遺物集中区出土石製品

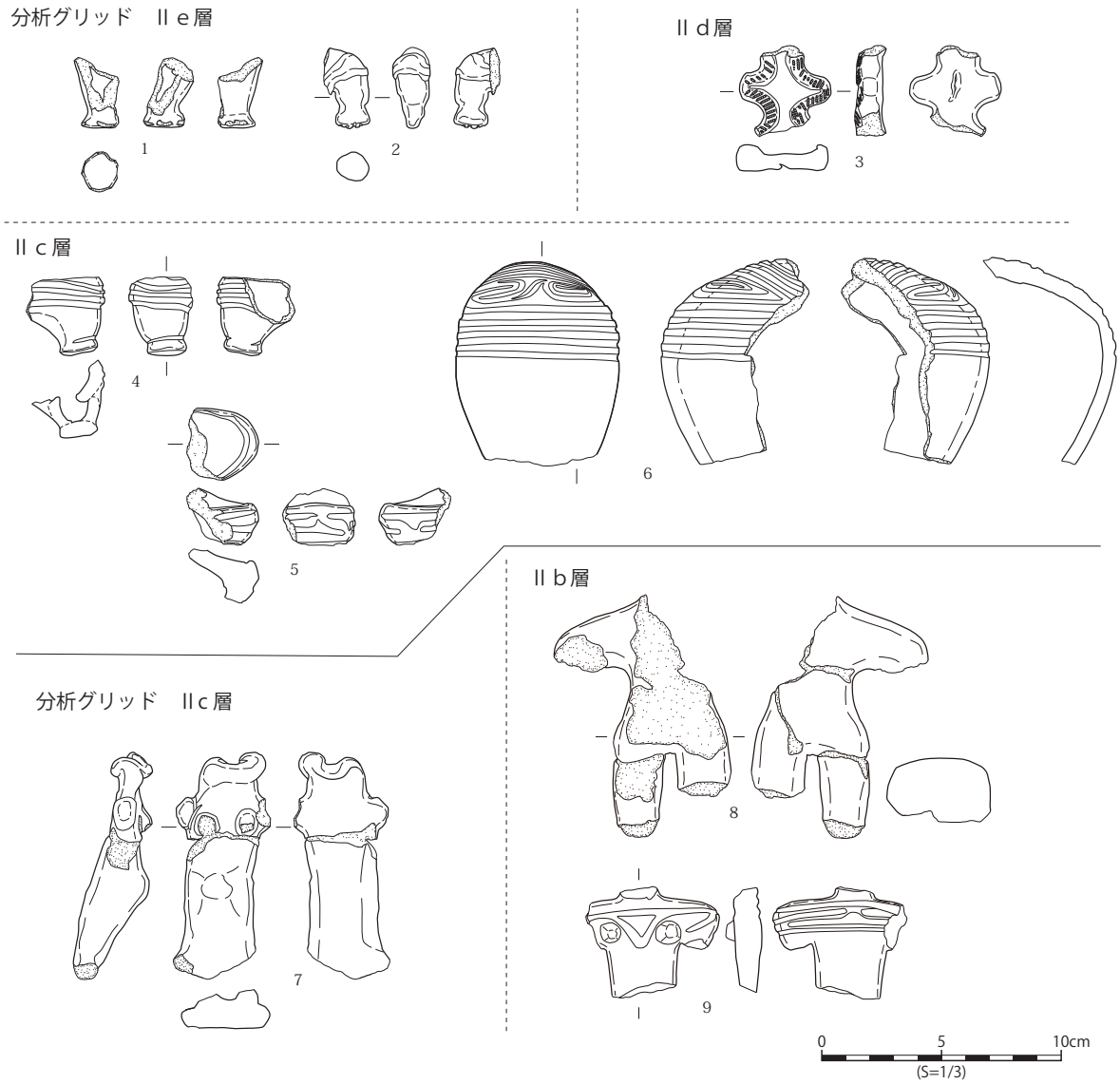
D. 石製品・石製玉類（図Ⅲ -3-4-37）

石製品･石製玉類は、石棒、石冠、環状石製品、石製勾玉、石製管玉、垂飾、異形礫の７種類がある。１～３は石棒である。２は長さ 3㎝の小型石棒である。４は環状石製品である。穿孔を中心に刻線がみられる。５～７は管玉で、断面長楕円形のナツメ玉に近い。８は未穿孔の玉で中央に傷が巡る。９は垂飾で側面に抉りがある。10・11 は石冠である。10 は全面が研磨された三角柱状の石冠である。11 は半円形の頭部がつく。12・13 は異形礫である。12 は有孔礫、13 は表面に多数の小孔のある凸凹礫である。

（上條信彦）

E. 土偶（図Ⅲ -3-4-38）

１は土偶の脚部で、中空である。２は土偶の左腕部と思われる。手の指先は沈線で表現している。



図Ⅲ-3-4-38　第4遺物集中区出土土偶

3は土偶の頭部とみられるが、かなり抽象的な表現である。ＬＲ縄文を施した隆帯が弧状に縁を巡り、そのうち部を菱形に表現している。4は土偶の脚部で、中空である。沈線が平行に巡る。5は土偶の胴部で、張りだしを持つ腰部分である。沈線による工字文が施されている。

6は土偶の脚部分で、中空である。割れ口にアスファルトが付着している。外面には平行沈線や入組文が施されている。

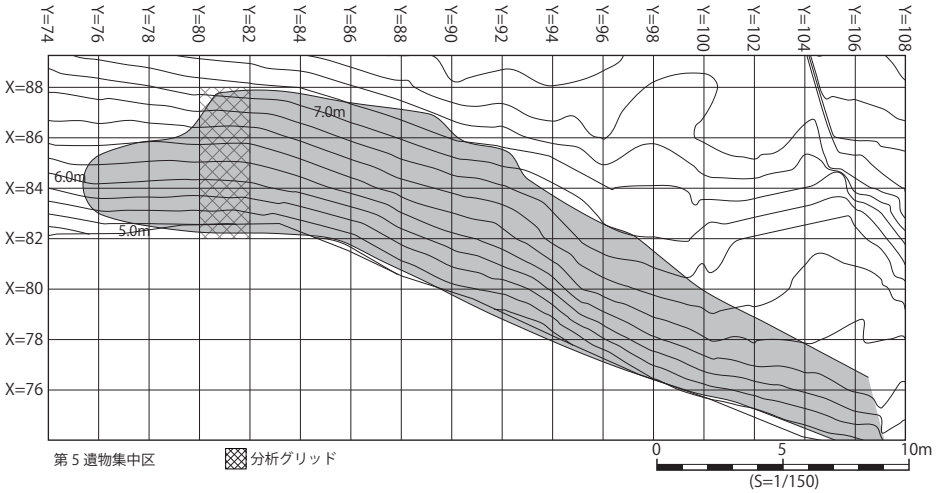
7は四肢が欠損した中実土偶である。頭部には２つの角状にのびる突起が付く。乳房・腹部は大きく膨らみを持たせている。文様は特に認められない。8は4破片を接合した中実土偶である。文様は特に認められない。9は土偶で、頭部と両腕、胴部下半が欠損している。乳房は貼瘤によって膨らみを持たせている。背中には沈線による工字文が施されている。

（榊原）

5. 第５遺物集中区

概要

【位置・確認】遺跡の南側（グリッド X=74 ～ 88，Y=76 ～ 108）標高約 5.5 ～ 7 mに位置する（図Ⅲ -3-5-1）。X=84 ～ 88,Y=82 の計 3 グリッドを分析グリッドとして設定した。検出面はⅡ a 層である。



図Ⅲ-3-5-1　第５遺物集中区分析グリッド位置図

【規模・形状】南北 12 m、東西 30 mの細長い楕円形を呈する。区内では、東西方向に連なった柱穴群が確認され、北側には第１遺物集中区から続く道路状遺構が南東にのびる。

【出土遺物】土器、土製品、石器・石製品が出土した。土器では、第 2a 群～第 2c 群土器、第４群～第８群土器が出土し、口縁部カウント数は 198 点である。土製品では、土偶、土版、耳飾、蓋形土製品、環状土製品、筒形土製品、ミニチュア土器が出土している。石器･石製品では、剥片石器（尖頭器・石鏃・石錐・石箆・石匙）、磨石・敲石類、石皿・台石類、砥石、擦切具、石核、石棒、石刀が出土している。

【時期】下限を示す時期の土器は第８群土器である。

A. 土器

第５遺物集中では、グリッドごとで同一層位として取り上げた。以下層位ごとに土器の特徴を記載する。また、各群の層位ごとの出土状況をグラフで示す（図Ⅲ -3-5-2）。

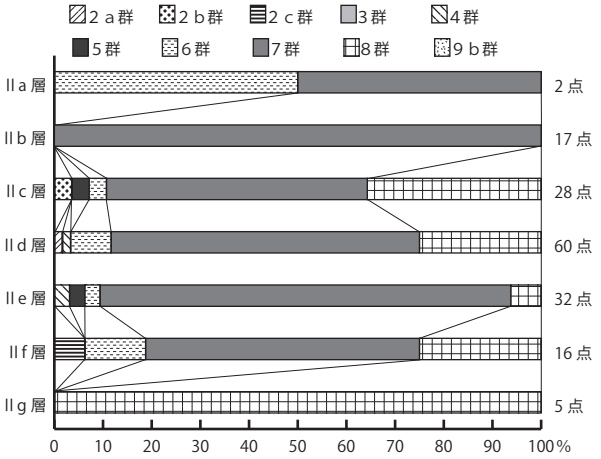
1）分析グリッド

①Ⅱ g 層

８群の深鉢３点、浅鉢・皿２点、３～８群の鉢２点の計６点出土した。

②Ⅱ f 層（図Ⅲ -3-5-3）

2c 群の深鉢１点､6 群の鉢１点､浅鉢･皿１点、３～６群の深鉢１点、７群の深鉢５点、鉢４点、８群の深鉢２点､鉢１点､浅鉢･皿１点(赤彩資料)、３～８群の深鉢１点、鉢１点、壺３点の計 22 点出土した。そのうち図化したのは１点である。



図Ⅲ-3-5-2　第５遺物集中区　各群の層位別出土割合グラフ

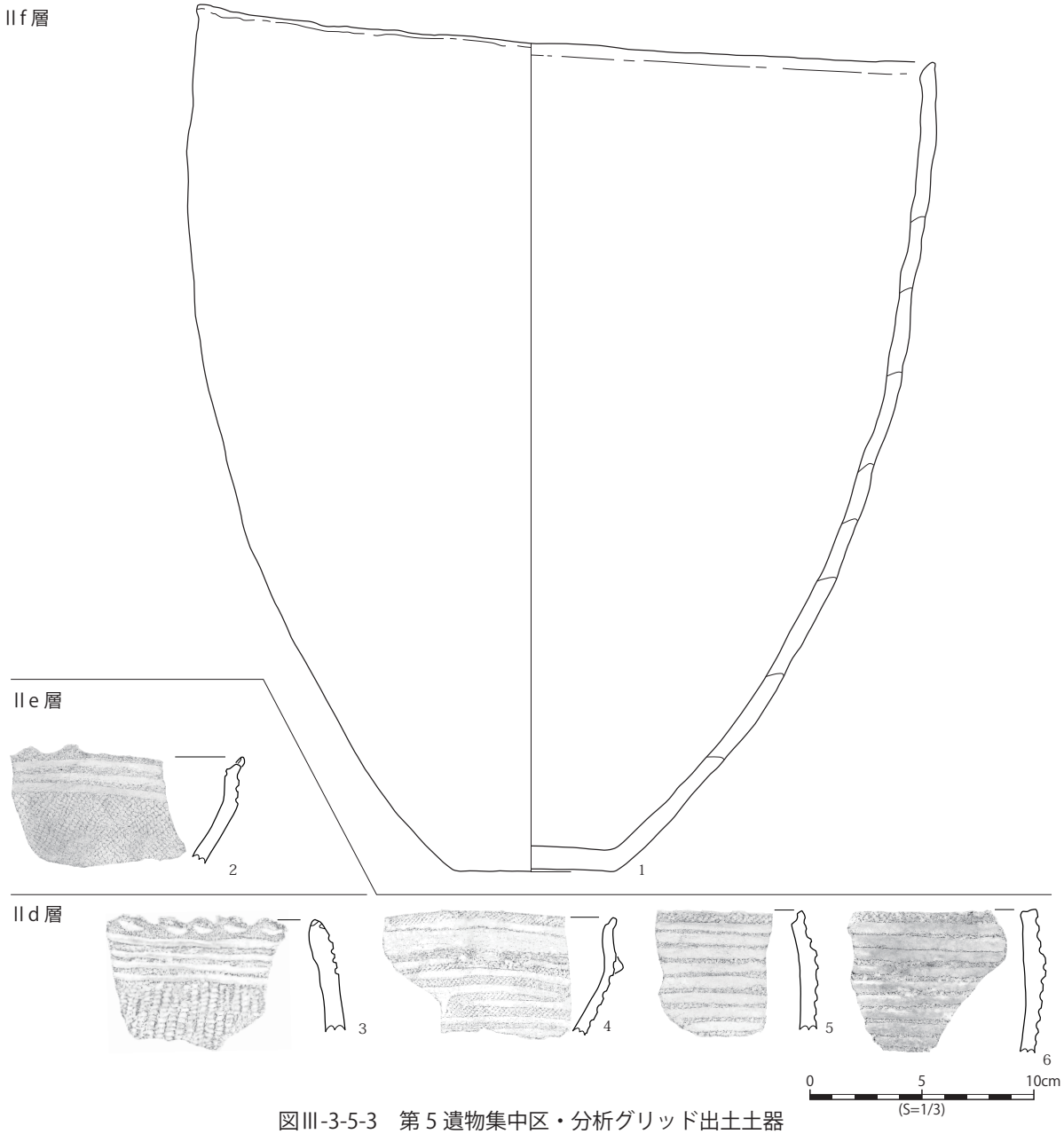
1 は 2c 群の粗製深鉢である。

③Ⅱ e 層（図Ⅲ -3-5-3）

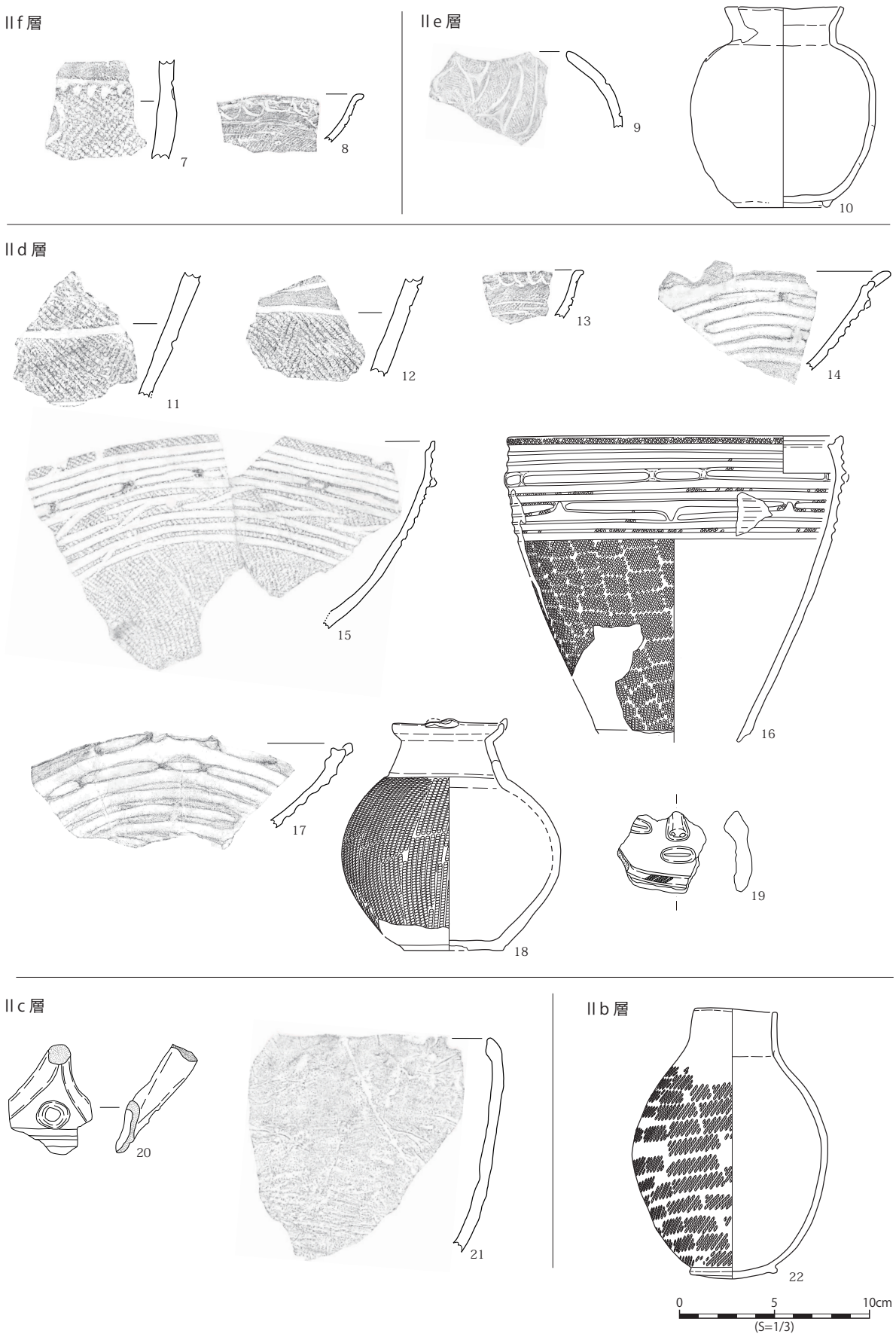
4 群の深鉢 1 点、5 群の鉢 1 点、6 群の鉢 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 2 点、7 群の深鉢 14 点、鉢 9 点、浅鉢・皿 1 点、壺 3 点、8 群の鉢 1 点、浅鉢・皿 1 点、3 ～ 8 群の深鉢 3 点、鉢 3 点の計 40 点出土した。そのうち図化したのは 1 点である。2 は 7 群の鉢であり、口唇部に中間が凹む二山状の突起を有し、口頸部に 3 条の横位沈線が巡る。

④Ⅱ d 層（図Ⅲ -3-5-3）

2a 群の深鉢 1 点、4 群の深鉢 1 点、6 群の鉢 4 点、浅鉢・皿 1 点、3 ～ 6 群の深鉢 4 点、7 群の深鉢 7 点、鉢 26 点、浅鉢・皿 3 点、壺 2 点、8 群の深鉢 5 点、鉢 4 点、浅鉢・皿 5 点（赤彩資料 4 点含む）壺 1 点、3 ～ 8 群の深鉢 10 点、浅鉢・皿 1 点の計 75 点出土した。そのうち図化したのは 4 点である。3 は 7 群の深鉢であり、口唇直下に列点文が巡り、口縁部に多条沈線が巡る。4 は 8



図Ⅲ-3-5-3　第 5 遺物集中区・分析グリッド出土土器



図Ⅲ-3-5-4　第５遺物集中区・分析グリッド外出土土器